九月十五日發行



女學世界

第十巻第十二號
増刊

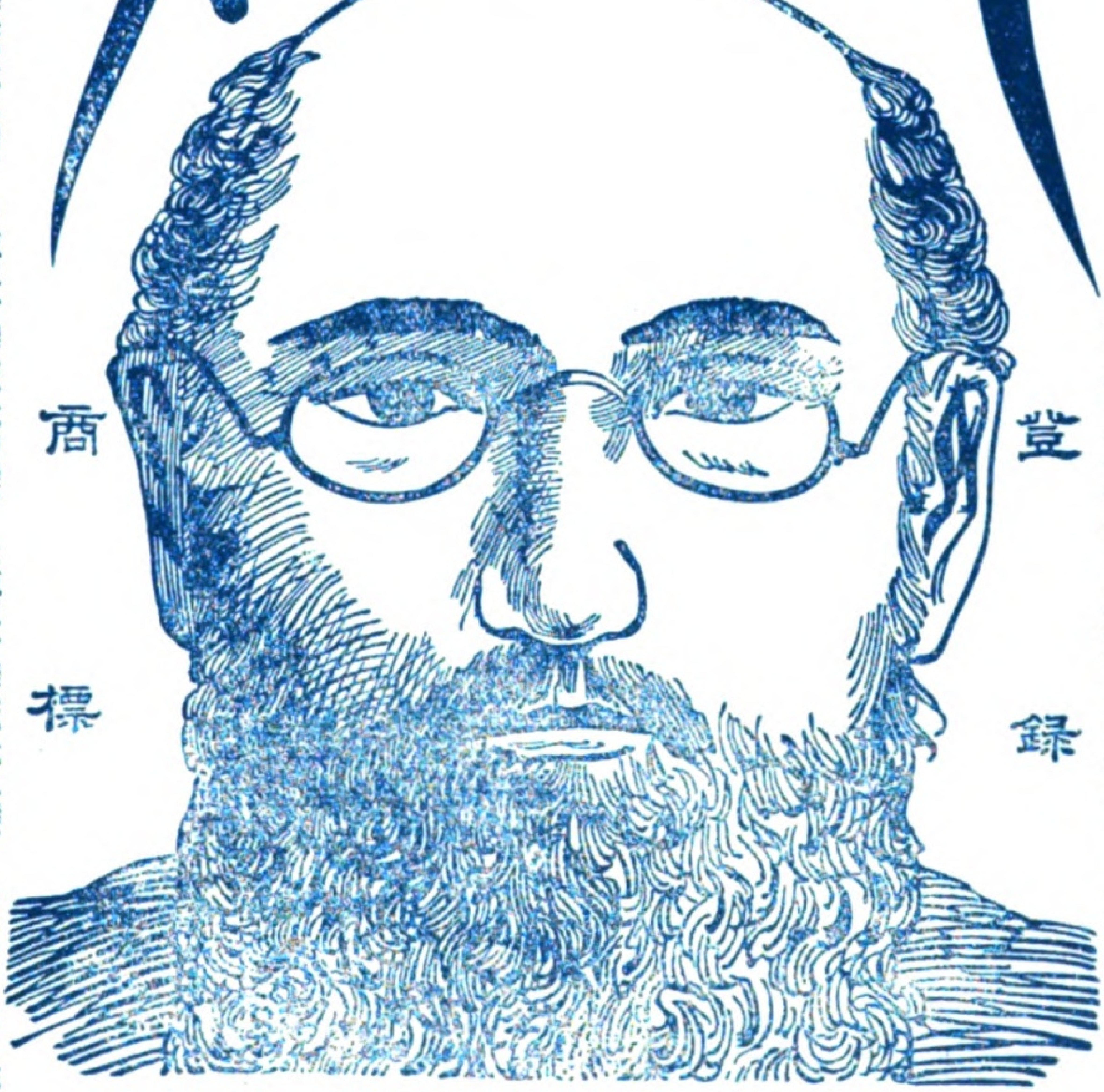
迷信に囚はるる婦人

博文館發行

大學目藥

「小兒の眼病には
小兒用大學目藥を用ひられよ

登錄商標



大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑也世に有觸し賣藥の類に非ず

●定價金十錢（郵稅二錢）　中瓶三十錢（郵稅四錢）　大瓶五十錢（郵稅八錢）　▲各地藥店に在

日本大阪北濱（ヘブリン丸元祖本家）

參天堂藥房

効能の概略

▲はやり目
▲トラホーム目
▲星目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目

其外眼病一切に驚くべき奇効あり

◎又この藥は目力を強くするの確効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし

「流石は日本の三越」なり

何時行つて見ても客は込む、良いものを安く賣つて居るから無理もない譯だ。老若男女、必要なるものは大概備へてある。便利を圖るや至れり竭せり」と、御評判をいたゞきますにつけても、此際更に奮勵これ努め、皆々樣の御好意に御酬ひ申上たく存じて居ります。何卒御引立被下樣、御願申上げます。

地方「御注文の栞」は
御一報次第進呈仕候

越

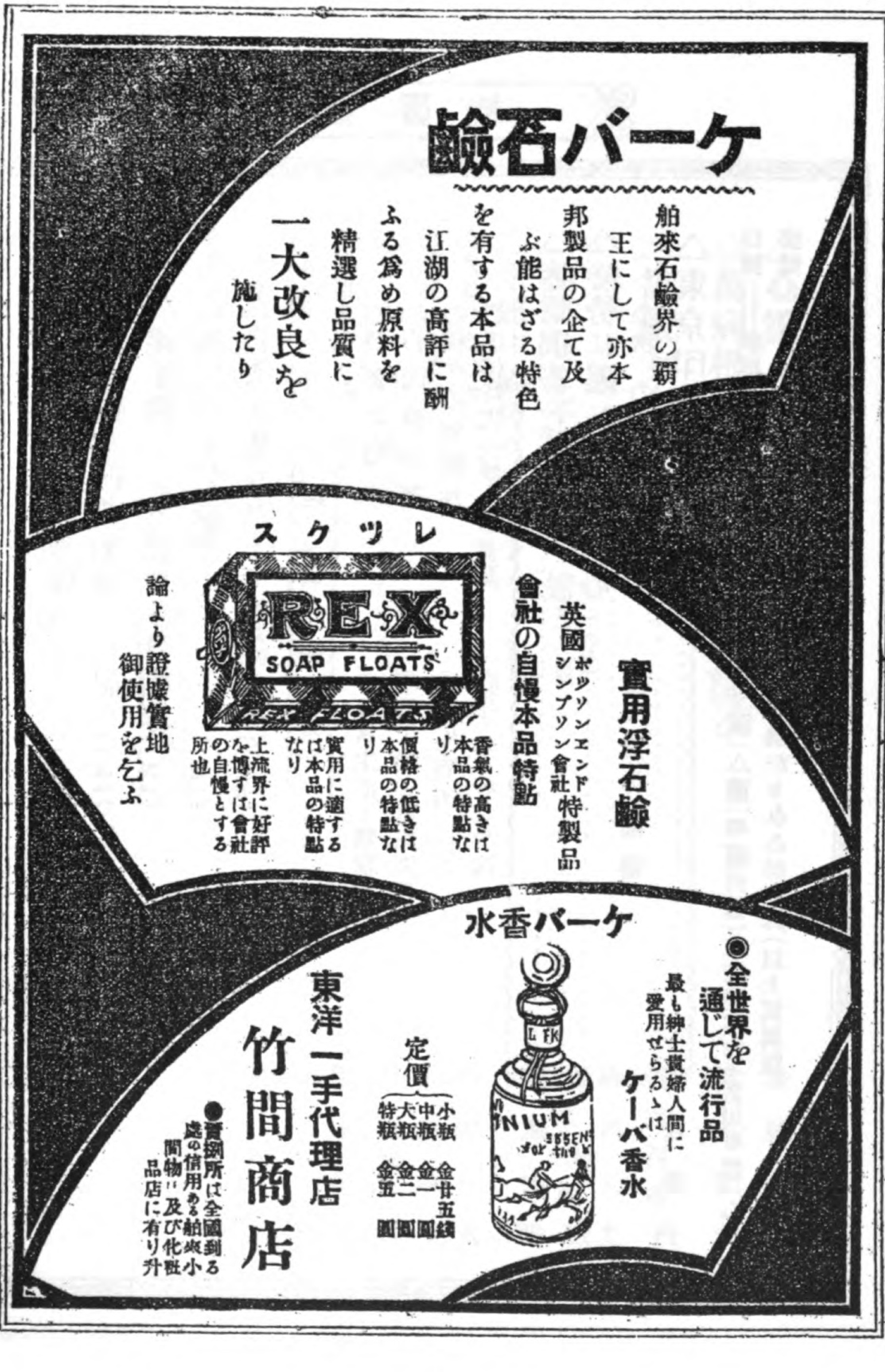
東京駿河町

三越呉服店

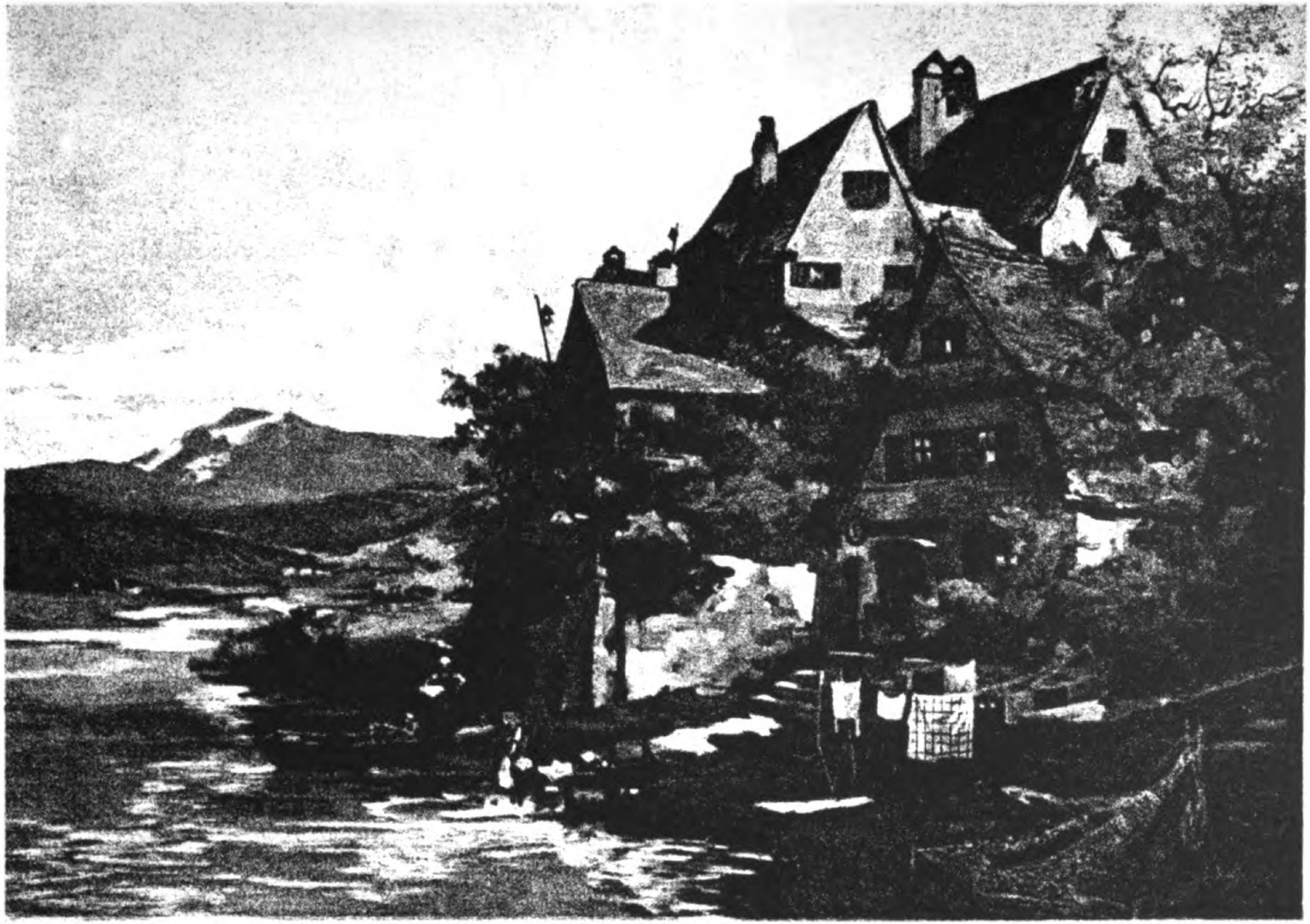
女學世界第拾巻

眞理と俗説

第拾貳號目次


ケーバー石鹼
舶來石鹼界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり
レツクス
REX
SOAP FLOATS
REX FLOATS
實用浮石鹼
英國ホツソンエンドシンプソン會社特製品
會社の自慢本品特點
香氣の高きは本品の特點なり
價格の低きは本品の特點なり
實用に適するは本品の特點なり
上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也
論より證據實地御使用を乞ふ
ケーバー香水
●全世界を通じて流行品
最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバ香水
定價
小瓶 金廿五錢
中瓶 金一圓
大瓶 金二圓
特瓶 金五圓
東洋一手代理店
竹間商店
●賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物及び化粧品店に有り升

秋晴



田中製版所三色版

理想的美髪化粧料新輸入品



透明煉香油　一本三十五錢　送料八錢

レコードロースポメード

レコードは香氣最も高評にして旬日を保ち悪臭を除き垢及び特に恐るべき脱毛を防ぎ如何なる縮毛くせ毛も一度使用せば意の如く自由に爲し毛髪を自然に黒くし艶麗なる光澤を増す故にコスメチック其他香油に優る特點を有す殊に冬季は完全なる化粧料の一となり顔手足等凡て皮膚のあれに用て最も妙なり在來の煉香油クリーム等と相違し使用心地よき絶品なり

化粧品雑貨輸出入商　後藤商店

東京日本橋區馬喰町四丁目廿二番地

暫く品切の處新荷着

英國製パヒューム

香水紙

一袋六枚入十五錢

送料三袋迄　二錢

紙入、莨入、書籍、簞笥の引出し等へ其一枚を入れ或は外出の際帶ポッケット、帽子の裏へ挟まれよ數月の間は香氣を保ち自然他人に悪感を抱かしむる患なく瓶入香水に比し經濟にして高評なり

家庭用美顔術器具原料一式

（説明書送料貳錢



衛生美顔術

一回料金五十錢

ライラック水　一瓶五十錢

理容白粉　一瓶五十錢

マッサージ石鹸　六十錢

理容館本部

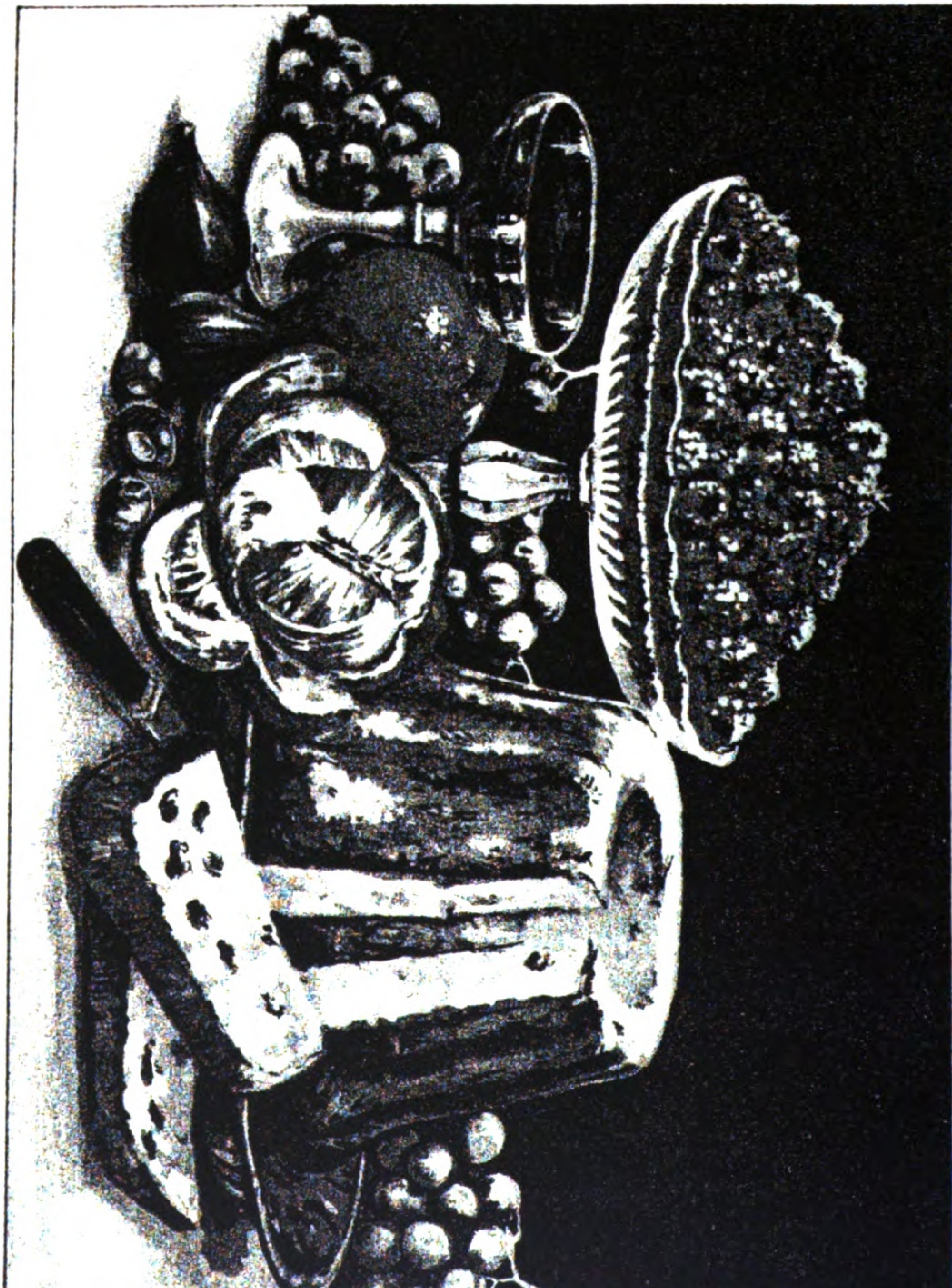
東京市京橋區竹川町十二●電話新橋三八〇四

女(いの一)

(いの二)


秋季は最も善き髪油を撰ぶべき時なり
美髪料として最も進歩せる
薫司香油
くんしこふゆふ
定價壹壜 金壹圓 金五十銭 金三十銭
全國到ル處ニ特約販賣店アリ
NSHI.PE
美髪料
薫司香油
東京浅草駒形
百助商店製

女(いの四)



珍羞

夢二畫集旅の卷忽四版



夏の卷 五版 定價五拾錢 送料八錢

奔放自在にして型式を超越したる無聲詩は新しき感興のもとに描かれこれに添ふるに短詩餘首を加へたりその書法と内容の近代的なるは更めてこゝに喋々を要せざるべし

旅の卷 四版 定價七拾錢 送料六錢

都會へ都會へと憧れ憬れて私は東京へ出た何の望もあてもなかつたたゞ都會へゆけば樂しいのだと思つて居た海のあなたへ―南洋へ何のあてもなくたゞ南洋のあの酷烈な日に照されて血のよふな果實を食ひに行きたい：：附錄には富士登山の日記を添へたり

春の卷 六版 定價五拾錢 送料八錢

花の卷 四版 定價四拾錢 送料四錢

秋の卷 近刊

發行所 洛陽堂 東京麴町二ノ二 振替東京二〇九一四

（その一）

時事新報は常に品位を重じて不健全なる分子を許さず輕佻なる現代の新聞紙中確に家庭最良の讀物たるを保證す

新聞紙は偉大なる感化力を有す

清潔なる家庭には必ず清潔なる新聞紙を要す

時事新報には毎號家庭欄あり育兒、衞生、化粧、料理、園藝等に關し趣味と實益に富る記事を滿載す。小說亦好評嘖々たり

發行所　東京　時事新報社

△大阪時事新報は時事新報の分身にして關西の新聞界に一大異彩を放つ　(朝夕二刊)

化粧香水

ブラチナ



八方美人の香水！

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能さい持つて居ないが此のブラチナ香水は

◉ハンカチーフに一二滴たらして持てば終日香氣を保ち

◉微温湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ

◉顔を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し

◉頭髪に塗抹すれば毛髪を養ひ香氣馥郁香油の代用をするのみならず髪のくせを直し赤毛白髪を防ぎます

故に人は本品を「八方美人香水」と云ふは尤なる次第である

定價壹瓶三十錢▼郵劵代用一割増遞送無料

東京日本橋横山町一丁目

發賣元 近江屋 **天野源七**

電話浪花八六三番 振替口座五九三三番

於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醬油

HIGETA SHOYU

THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN

ヒゲタ印醬油

宮內省御用達

千葉縣 田中玄蕃釀造 銚[illegible]港

女（ろの四）

蟲の音



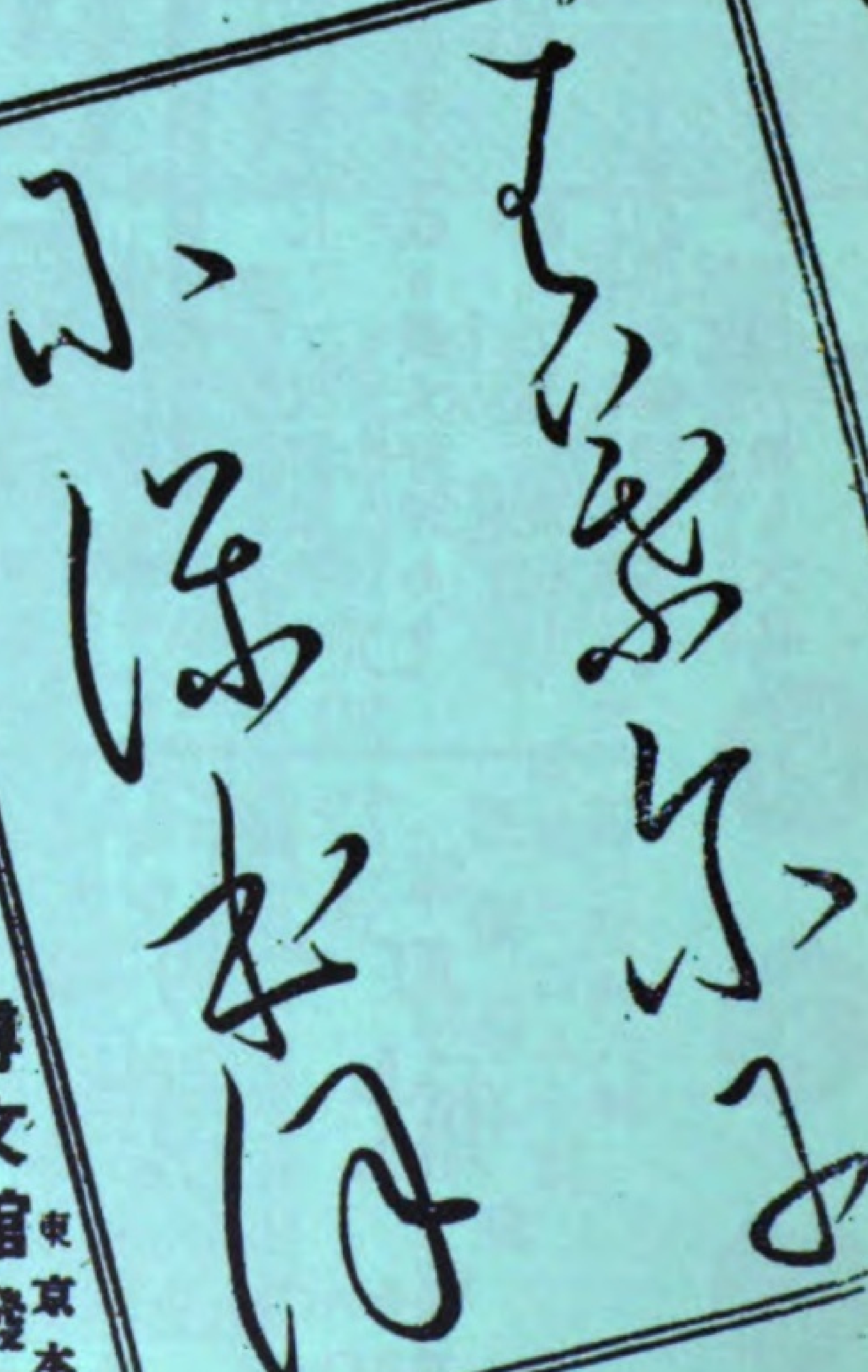
石川玉蹊女史

故新岡久賴君筆

いろは三體帖

半紙判折本　正價四拾錢　郵稅四錢

本書の書體は下の如し現代婦人の手簡詠歌の認め方には斯くの如き書體尤も歡迎せらる。



博文館　東京本町　發行

產科婦人科專門　醫學士　北畠孝夫先生閱

最近

婦人病心得

子宮病　自宅療法

目次（婦人病の總論◉血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◉神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◉しらちながちの病理及其根治法◉月經時の手當月經諸病の療法◉妊娠の原理、受胎すべき場合姙婦の攝生つわりの養生法

發行所へハガキにて申込めば　無代進呈

女の一番つらい病は、子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齡の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◉著者は多年の實驗と最近の學說を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳說せり◉病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

發行所　東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三六〇一番）笹岡省三

女（はの一）

▲都新聞は議論公正にして平易穏健に、報導は機敏にして簡潔周到なり。
▲都新聞の政治上、經濟上の記事は公平にして何等外間の制肘を受けず。
▲都新聞の相場欄は觀察奇警にして且機敏に、少しも他人に役せられず。
▲都新聞の工藝、美術に關する記事は報導評論共に妥當にして且親切也
▲都新聞の雜報は演藝欄、花柳界の消息と共に出色なりとの公評あり。

都新聞

▲都新聞の讀者と記者及相談の相談は讀者の相談對手にして又好讀物也。
▲都新聞は小說。講談は其挿繪と共に當代名家の手に成り最大好評あり。
▲都新聞の紙質精良にして印刷鮮明なり見て心地よく讀んで眞に面白し。
▲都新聞は都鄙の各種の階級を通じて最も多く且十年以上の愛讀者多し。
▲都新聞の廣告は以上の理由に依り種類の如何を問はず其効力最も大也。

發行所

東京市麴町區内幸町

都新聞社

電話
社長室 新橋二〇一八番
事務用 新橋一七五番 四〇六六番
編輯用 新橋六一六番 三一〇八番

(振替貯金口座七五二七番)

エハガキとアルバム

東京小石川
日本葉書會

隆鼻術(はなたかくするほう)

東京市九段下
神田今川小路二丁目十一番地

午後
夜間

和田耳鼻咽喉醫院

ニキビ
そばかす
にて苦悶
者

は藥學界の泰斗
藥學士藤本理先生が半生の心血を注ぎて漸く發見せられたる特種の奇藥
クウルー
を使用して速に苦腦を脱せよ
但し本劑希望者は本劑購求前又は同時に本劑の説明書を要求せられ其特効たるを確信の上使用を乞ふ
◎藥價輕症用五拾錢送料市內四錢地方八錢(滿韓臺灣
卅錢

東京 下谷區東黒門町六番地 長田彌平
振替口座東京七六二九番
電話下谷二一五七番

奥村繁次郎君著

家庭に於ける吉凶百談

全一冊洋裝四六判
紙數三百八十頁
正價四十錢
郵稅四錢

博文館

この書は平素家庭に於けるあらゆる禍福吉凶の原因を詳述したるものにて、文意は何人にも分り易く、一目にして中信中疑の妄説を破り・如何なる迷信家と雖も忽ち迷信の愚なることを感じ教育學及び風俗研究の参考書ともなり、教育家は固よりいづれの家庭に論なく、必ず一讀すべき實用的要書也

女(ばの三)

宮內省御用達

天下一品

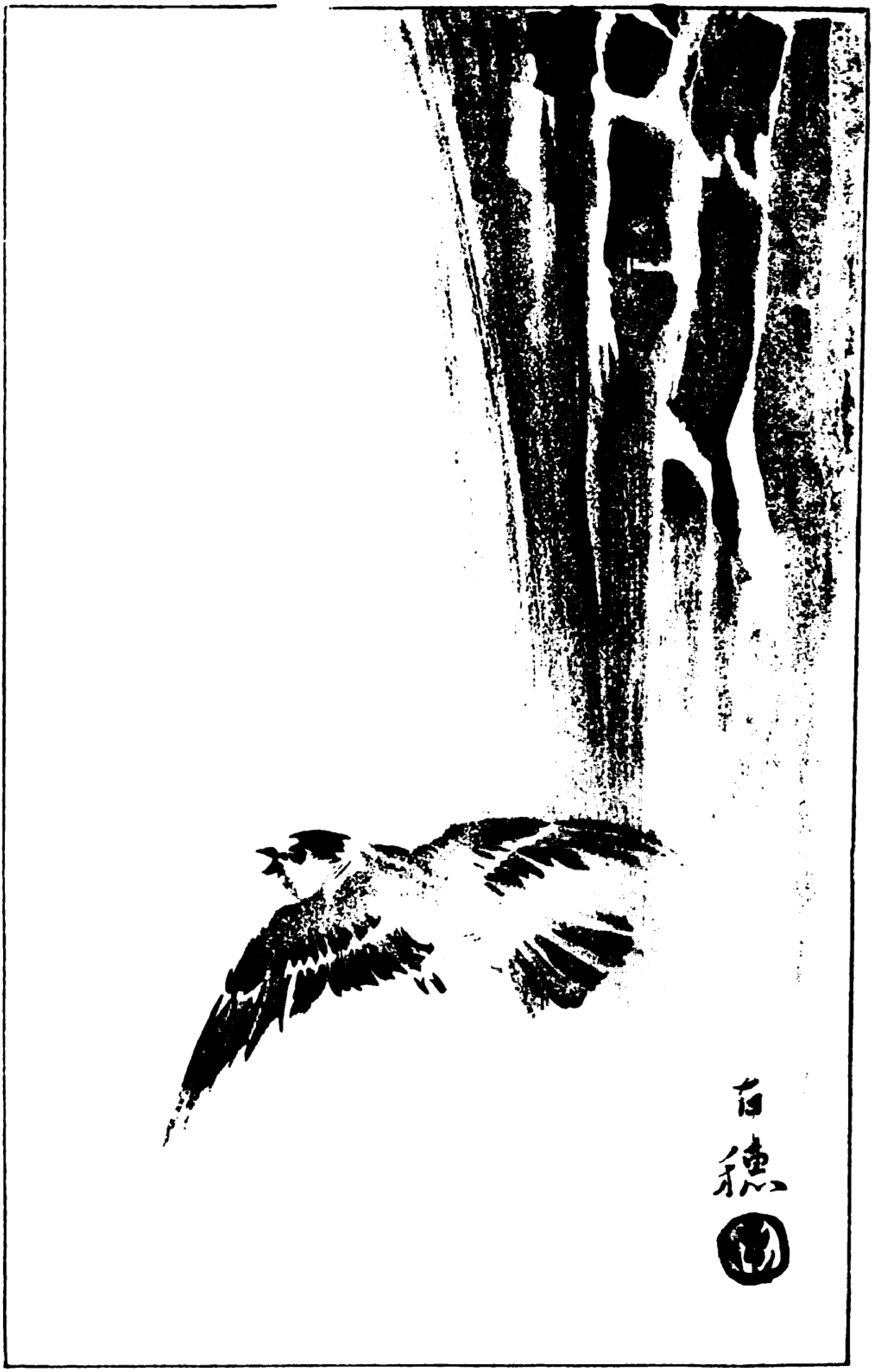
醸造元
千葉縣野田町
茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候



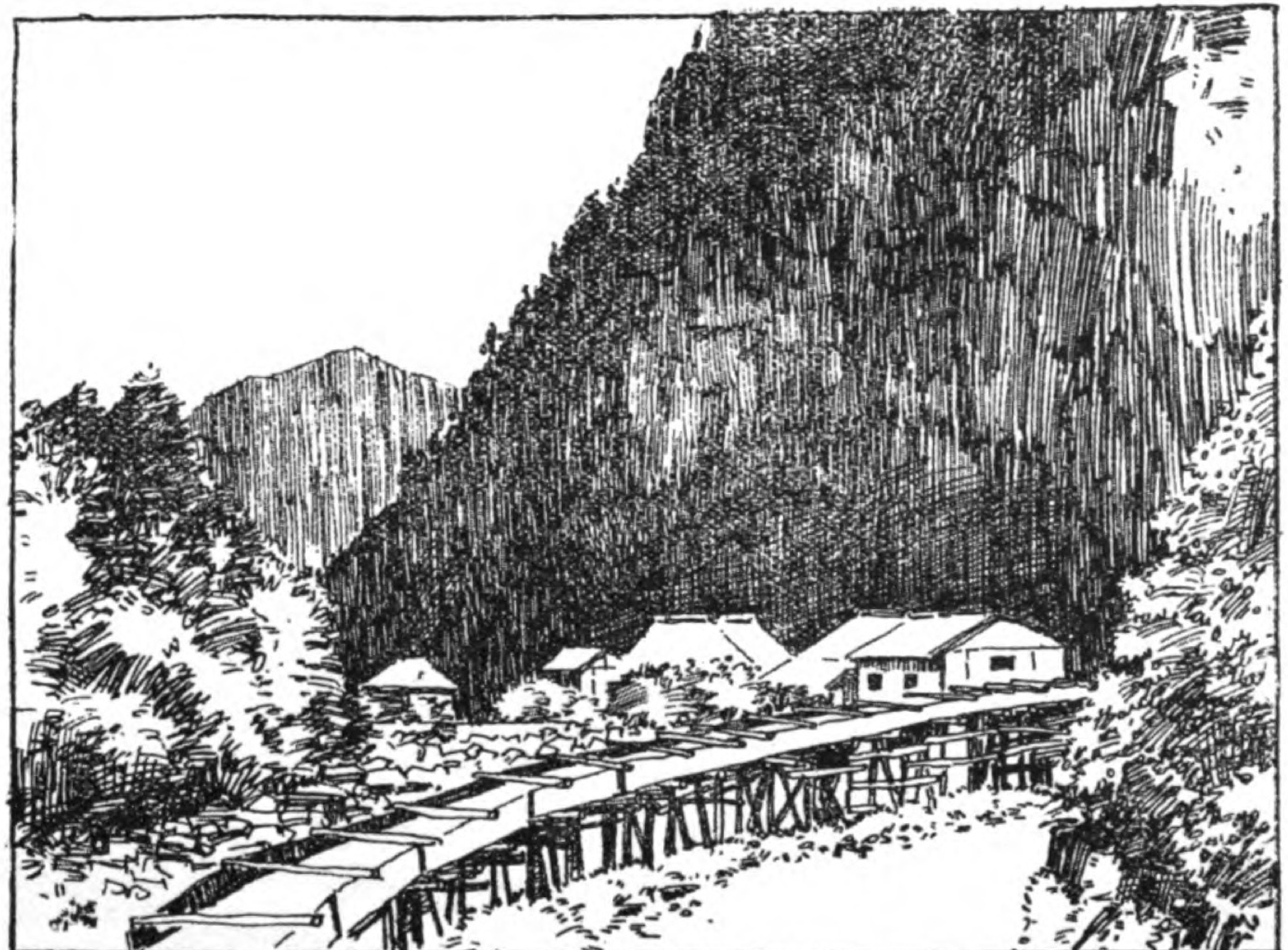
女(はの四)

瀧



平福百穂筆

雌雄巖（安縣名勝）



日常の食餌は人生の死活問題!!!

●萬民必讀要書●

總紙數貳百五拾餘頁假名附

▲發賣元▼ 東京堂書店

醫士 糸左近先生
醫科大學 北川正惇先生 共著

正價金六拾錢 郵送料六錢

全一冊

洋裝三六判美裝

◎新版◎

通俗食餌療法

價は僅かに一錢五厘の大根のうちに高價なるヂヤスターゼは含有す（最廉の消化劑）……本文（自四十二頁 至四十八頁）

此の如くに調理してヂヤスターゼは發生し、然して此の如く混食すれば遂に消滅してその効力を失ふ。

呼吸疾患（肺病）の療法……最も重要なるは食餌療法！……何故？……本文（自一五二頁 至一六五頁）

夫おもひの細君その夫が同病にて醫師も藥匙を投げたる時、細君は食餌療法を實行して數月に重病も癒えて夫は社會に活動し、鉅萬の富を得た。其後細君は不幸他病で夭折、爲めに夫は妻の銅像を建てた本邦の美譚

染織堅牢價格低廉經濟的實用品なり

廣島 ア キ ジ マ

名産 ㋳ 山まゆ織

●御注文は小包郵便代金引換を諾す

見本進呈

廣島市革屋町（電話六八三番）

㋳ 山脇胡三郎

振替貯金口座大阪一一三〇〇番

女（にのこ）

(その二)

正二位伯爵　東久世通禧閣下書　文學士北村忍堂先生閱

米國理學博士　高波武右衛門先生序　古屋鐵石先生著

新刊

學理應用 家庭禁厭術（かていまじなひじゅつ）

迷信にあらず心理哲學の應用です如何に不思議の効能あるかなきか御ためし乞ふ

菊大版壹百拾頁（寫眞版木版挿入）價郵稅共四十四錢

東京芝區宕町の二　精神研究會　電話二一九三番　▲振替東京二三五一

取次賣捌　東京神田表神保町　東京堂

目次

九月以後の讀賣新聞

政治經濟教育美術文藝家庭社交等の報道に關し益精確機敏を期するの外左の諸雄篇を掲げて紙面に光彩を加へんとす

◎小説 **酒客列傳**（目下掲載中の足跡完結の上掲載す）幸田露伴

三年蜚ず鳴ざりし露伴氏新作の如何に人を驚すかを見よ

▲明治 **學界奇談**

學界に於ける奇談珍聞を蒐録せるもの毒の無い愛嬌肩の凝らぬ讀物として面白い事天下無類・新秋の凉榻之を缺く可らず

◎朝鮮 **名士評判記**

膨脹的日本の今日此傳記無かるべからず經世家も讀め實業家も讀め

壹萬貳千 紀念號發刊

九月廿五日から十月十五日に跨り毎日頁數を增加し朝野名士の書畫文章等を滿載す

▲**舊藩と新人物**

執筆者黒頭巾氏の病氣漸く癒ゆ絢爛の文字再紙上に現れん

◎每週發刊 **日曜附錄**

文藝學術宗教美術工藝等の論議說話を網羅し趣味津々たり雜報以外の新智識を提供して新聞界に一生面を開かんとす

▲**第五面及六面**

◎現代 **美術家評論**

繪畫彫刻鑄金陶磁器七寶漆器等の各大家評論 關如來氏

見本進呈（端書にて申込次第無代進呈） 一ヶ月卅五錢郵税十五錢 三ヶ月郵税共一圓四十五錢 半年二圓八十錢

續き物御希望の方は前に遡りて送呈す

發行所 東京銀座 **讀賣新聞社**（振替口座六壹貳番）

女（にの三）



最上醤油
元祖
開業貳百六拾六年
千葉縣銚子港
宮内省御用達
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番
振替口座五〇二一番
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞牌受領

花嫁百姿





令孃かゞみ

（1）牛込　小田川光子　（2）小石川　五代安子　（3）下谷　藤田まさ子　（中央）四谷　森本たに子















（1）下谷　木村清子

（2）小石川　國松佐代子

（3）麹町　藤本文子

十年努力之結晶

類題俳句大全

今井柏浦君撰
中村不折君揮書

本書は元祿前後より天明を通じて寛政、文化を越え、明治の今日に及べる、古今三百年間に亘れる諸名家の作品中より、編者が謹嚴眞摯なる撰擇の下に成れる彪然たる**大册上下二卷**。**類題約四千、句數四萬**、而も周匝精覈、一句と雖も苟もせず、其粹を拔き英を摘んで殆ど餘瀝なく、眞に之れ我が俳壇に於る**一大偉觀**たり。俳句研究者唯一の津梁たるは論なく、彼の保守を宗とする人、革新を旨とする人、必ず繙かざる可からず。洵に本書の如きは、片々駄作の多き間に於て異彩を放つ**大出版**と稱するも、敢て批議を挾むものなからむ。

上卷　新年、春、夏
下卷　秋、冬、附俳文

類別

時候	人事	雜	祝賀
天文	動物	名所	哀悼
地理	植物	送別	戀

上卷：正價八拾五錢　郵税拾錢
下卷：九月出版

上下二卷
洋裝中判　裝幀優雅
上卷紙數約九百頁

東京本町　博文館

（ほの一七）

毎日電報

朝鮮併合紀念大附錄

◀十月一日發行▶

▲座右缺く可らざる大附錄

〔大判色彩石版刷〕

朝鮮新地圖

朝鮮併合の紀念として來る十月一日を以て朝鮮新地圖を發行し月極め讀者全部に進呈すべし本社の調査が如何に正確にして周密を極むるかは敢て玆に贅せず論より證據請ふ本品に見よ

本圖は製版の巧妙、用紙の精良、印刷の鮮麗等に最も意を用ひたれば保存に適するその上に最新の精査に成れるを以て近時の朝鮮を知らんと欲する者には必らず座右一本の備へを缺く可らず

▲月極め讀者に殘らず進呈▼

女(ほの三)

◀郵送は送料とも三ヶ月前金一圓▶

(發行所) 東京丸の内 振貯口座五八四二番 毎日電報社

名家の令孃



右圖醫學博士保利眞造氏令孃春子

左圖工學博士渡邊嘉一氏令孃久江子

令嬢鑑



右圖、宮田みつ子（銀座玉屋商店主宮田氏令嬢）
中圖、物集芳子（文學博士物集高見氏令嬢）
左圖　一宮すみ子（芝高輪紳商一宮氏令嬢）

最近調査 女子東京遊學案內

森鷗外君 巖谷小波君 坪谷水哉君序 今井翠巖君著

◉附錄 東京實測明細地圖

全一冊洋裝四六判美本
紙數……約七百餘頁
各學校寫眞版十五頁挿入
正價五拾八錢郵稅拾錢

女子遊學の好指針

近時女子教育の勃興と共に、各種の女學校年を逐って其數を増し現今都下のみにても實に百を以て算するに至れり然り而して從來地方の女子が是等の學校に遊學する案內として刊行したるもの甚だ多きも、而も此種の編作は概ね粗漏杜撰に各學校の規則を拔萃配列したるが如きものに過ぎず甚だしきに至りては、數年前既に廢滅せるものをも其儘記載し却て遊學者を惑はしむるの恐あり概して遊學者の良指針たり、好伴侶たるべきもののなかりしは、著者の夙に遺憾とせし處なり、是に於て本書は此缺陷を補はん爲めに、普く都下各學校に亘りて其最近の組織、學則、校風等を詳細に調査し、凡ての遊學に關する事項の細大漏さず左の各項に區別說示せり、されば女子が將來志望する學校撰擇の上に好指針たるは勿論亦教育界の一斑を窺ふことを得べければ各學校の經營上絶好の良參考書なり。乞ふ一本を備へよ。

▶本書目次◀

同 君著 ◉最近調査 男子東京遊學案內

洋裝四六判美本 紙數六百二十頁
定價 五拾八錢 郵稅拾錢

增訂再版四十三年九月現在

▼附錄…………東京實測明細地圖

東京日本橋本町三丁目 **博文館** 振替口座東京二四〇番

中央新聞

中央新聞は政友會の機關新聞にして政界の機微を知らんと欲するものは是非本紙の機敏正確なる記事を讀まざるべからず

中央新聞の經濟實業界記事は最も豐富にして能く公平に其實狀を穿ち實業家の指針盤にして最も適當の侶伴たることを其責任とせり

中央新聞の三面は最も平易に趣味多く殊に婦人に關する報道に重きを置きて家庭には一日も缺くべからざる面白き記事に富めり

中央新聞は東洋唯一の五色印刷輪轉機を有し燦爛たる美觀に讀者に快感を與ふることは他新聞の到底企て及ばざる所なり

市內專屬販賣所

京橋日本橋專屬販賣所　京橋區五郎兵衞町十七
神田下谷專屬販賣所　神田區金澤町廿一
深川本所專屬販賣所　本所區松井町三丁目（彌勒寺橋際）
淺草專屬販賣所　淺草區諏訪町廿九（蓬萊橋東横手）
小石川牛込專屬販賣所　小石川區音羽町七丁目七

本紙定價

一部壹錢五厘、一ヶ月前金三十五錢、三ヶ月同一圓、半ヶ年同一圓九十錢、一ヶ年同三圓六十錢、地方遞送料一ヶ月金八錢加

本紙廣告料

中央五號活字十八字詰一回一行金六十錢、〃場所指定一行に付金十錢増

市內專屬販賣所

本鄉專屬販賣所　本鄉區本鄉二丁目十九
芝麻布專屬販賣所　麻布區飯倉五丁目（赤羽橋際）
四谷新宿專屬販賣所　四谷區荒木町十六
赤坂專屬販賣所　赤坂區青山三丁目廿五

發行所　京橋區山城町　合資會社中央新聞社

電話番號　編輯用（長距離）新橋百七十九番、二千二十三番
業務用……新橋二千二百五十八番
廣告用……新橋百八十九番

振替貯金口座二〇〇一〇番

當代衣裳くらべ（2）



淺草　青地氏令嬢

大阪割烹學校紀念會



故國木田獨歩君著

獨歩全集

▽製本……出來△

全二冊

洋裝菊判總洋布
特製函入美本
紙數各八百有餘頁

正價各金貳圓
小包料各十六錢

獨歩の作品は文壇覺醒の第一聲なりき。眞實にして熱誠なる内容はもとより言はず、その形式に於ても、その描寫に於ても、優に時流に超越せるは世既にこれを知れり。蓋し明治文壇に於て稀に見るの天才にして、其作品時に激越にして悲憤、時に閑雅にして瀟洒、或は清雋なるあり、或は奇峭なるあり、千態萬狀、眞に人をして人生活畫圖の眼前に迫り來れるを覺えしめずんばあらず。今、獨歩全集一卷成る座右の友として敢てこれを大方の諸君に薦む。

前編目次

後編目次

東京日本橋本町三丁目　**博文館**　振替口座東京二四〇番

(その一)

英語世界 第四卷拾壹號 增刊

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ

リーダーの研究

九月十五日發行

洋裝菊判 帕來紙 六十八頁

口繪寫眞版挿入

正價金拾錢

郵稅金壹錢

寄稿家氏名（ABC順）

秋山正議　深澤由次郎　細川文五郎　茨木清次郎　今井信之　井上十吉　伊藤彌門　上條辰藏　神崎保太郎　片山義行　勝俣詮太郎　喜安璉太郎　岸本能武太　岸本謙次郎　增田藤之助

宮井安吉　村井知至　長井氏晸　奈倉次郎　南日恒太郎　佐伯好郎　鹽谷榮　清水起正　武信由太郎　戸川秋骨　山崎貞　高橋五郎　高橋一知　高島拾太　其他數氏

●語學研究上、最も强固の基礎を築くは讀本類の攻究に如かず、而もリーダー研究の聲、徒らに高くして未だ其實の擧らざるは一に研究の法を得ざるに因る●本書はリーダー研究の方針、方法●リーダーとイデオム●リーダーと作文●リーダーと會話●リーダーと文法●リーダーと英詩●リーダーと聖書●リーダーと語彙等の相關的攻究法を幾多の實例に依りて詳述し●更にリーダー中の難句解●リーダーの利用と運用法●內外リーダーの評判記等を錄す●加ふるに現代の英學者の學生時代に精讀せしリーダーの研鑽法を以てし●讀本類の新研究を鼓吹せんとす

▼大懸賞＝英文筆蹟判讀▲

（その二）

▷東京　博文館　本町◁

女（その三）

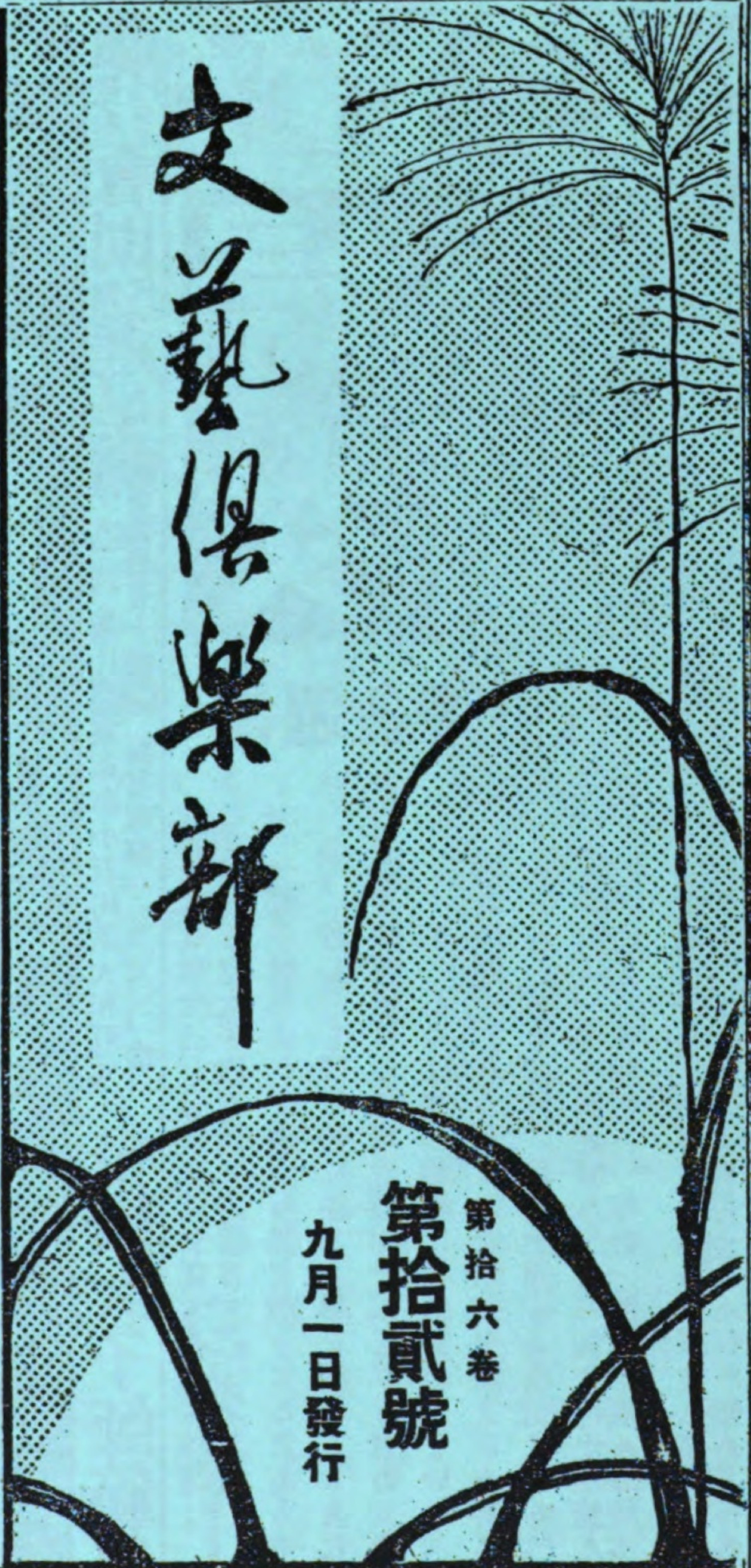
菊判三百二十頁

口繪（精巧木版數十度刷錦繪、及婉麗なる三色版寫眞版數頁）

正價廿五錢

郵稅二錢五厘

殘暑の炎威僅かに衰へ、衣袂を拂ふ朝夕の風は漸く冷氣を帶び來りぬ時候變りには疫病多し此際豫防の頓服劑なかるべからず、本誌九月號に於て、之を江湖に捧ぐ、即ち卷頭には**饗庭篁村氏が『油蟬』**なる作物を載す、この蟬一たび啼かんか、讀者はその妙音に醉はされて、座ろに無我の境に入るべく**眞にこれ疫魔を攘ふ最屈竟の良劑たり**、次に**前田曙山氏の『紅粉櫻』田口掬汀氏が**喜劇**『豫備大尉』**を揭ぐ共に見逃す可からざる逸品なり、尚ほ前號より新たに揭げ始めたる新講談は、**讀者の大喝采を博しつゝあり**、次號には斯界の重鎭**西尾鱗慶子**が得意の快辯を振うて**鼠小僧次郞吉**の傳を讀む、いかにその面白きかは想像するに餘あらん**雜錄以下百花園**はまた**天下**に冠たり矣



東京本町　博文館

（その四）

令嬢かゞみ



（右）京橋 渡邊貞子、京橋 山口芳子（左）麹町 松本茂子、麹町 三浦あい子（中央）麻布 三原綾子

姉　　妹





右圖佛國大使館參事官安達峯一郎氏長令孃功子同次令孃萬里子
左圖實業家園田實德氏令孃鶴子同梅子

第壹卷 數版以下重ぬ

名家小

明治の世、新文學ありてより、僅に未だ三十餘星霜を閱すに過ぎずと雖も、其間思想の起伏、文運の變遷一にして足らず、大家相踵ぎて出で、雄編傑作また少しとせず。或は艶麗に、或は崇高に、或は平淡に或は怪奇に、皆な競うて其特色を發揮し、春花の爛熳、秋草の溫雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を盡し粹を極む。まことに一代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄編傑作また時ありて散逸。本館此處に思ふところあり、名家小說文庫を發刊し、毎卷千頁の大冊子となし、諸大家の集中苟も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉には明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

裝釘……洋裝菊判總

露伴叢書

前編目次

後編目次

前編（九百七十餘頁）正價金貳圓 小包料拾貳錢

後編（九百九十餘頁）正價金貳圓 小包料拾貳錢

澁柿叢書

本編目次

全一冊（紙數壹千餘頁）正價金貳圓 小包料拾貳錢

東京本町 博文館發行

說文庫

（クロース特製紙函入）

柳浪叢書

前編目次（▼おもかげ橋▼昇降場▼骨ぬすみ▼姿▼今戸心中▼隅田の夜路▼罪の闇▼變目傳▼都の夢▼狂言娘▼畜生腹▼重づま▼貯金玉▼花ぐるひ▼幼時

後編目次（▼非國民▼松原饅頭▼猷猷俗多▼黒蜴蜓▼兄の煩悶▼七騎落▼紫被布▼二人やもめ▼女夫心中▼八幡の狂女▼親ごゝろ▼そまる糸▼座敷牢▼中川心中▼淺瀬の波

前編（紙數壹千餘頁）正價金貳圓　小包料拾貳錢

後編（紙數壹千餘頁）正價金貳圓　小包料拾貳錢

花袋叢書

本編目次（▼名張少女▼女教師▼島の心中▼老犬婿▼新築の家▼春の別墅▼畫家の日記（アルフォンス・ドオデエ）▼令妹▼浪花節の名手▼蝸牛の花▼一糸の髪▼初戀の人▼無韋（モウクス・メーテルリンク）▼不盧の出來事（フランソア・コッペエ）▼二人▼山小屋▼憶梅記▼思ふどち▼澤山鍋谷▼老僧▼小桃源▼みやま嵐▼小劇▼孤山

全一册（紙數壹千餘頁）

正價金貳圓　小包料拾貳錢

水蔭叢書

本編目次（▼女房殺し▼新潮來曲▼旅役者▼林間の高塔▼湖心の誓▼紫海苔▼地底の人▼軒下の家▼蛇▼水棲記▼別荘守▼紙子くらべ▼つぎ紙子▼石地藏▼濁流▼海上の鐵漏▼惡道路▼花井お梅

全一册（紙數壹千餘頁）

正價金貳圓　小包料拾貳錢

（續刊）……▽小波叢書　▽秋聲叢書　▽鏡花叢書

（二の三）

日本最古の新聞として光榮ある歴史を有し教育ある社會に多くの讀者を有す

東京毎日新聞

政治經濟財政に關する諸問題に就ては穩健なる主義を持し正確なる報道を怠らず

毎月五日には清新なる家庭の讀ものとして理想的家庭雜誌新家庭（定價七錢）を月極讀者に無代配布す

▲本紙定價一枚一錢一ヶ月二十錢外に郵税十五錢

▲三ヶ月前金郵税共金一圓郵券代用一割增

東京麴町區丸の内

東京毎日新聞社

電話 本局二〇八六（編輯）本局二〇七八（同）本局一七九〇（事務）

編輯事務兩局を通じ一千九百の社員は夜と晝との區別なく活動して休止せず

夕刊 朝刊 報知新聞

七臺の輪轉機は午後四時より翌午前四時迄轟々輪轉の聲を絶たず發行部數實に四拾貳萬部を超ゆ廣告機關として拔群の偉功を奏するは多言を要せず

▲定價一部一錢五厘一ヶ月卅五錢郵税十五錢夕朝刊卅八錢郵税卅錢▲ヶ月分拂の者に限り郵税共一圓廿錢（ヶ朝刊割引無）郵券代用一割增

東京丸の内

報知社

電話

本局長 二六八八 / 本局長 二〇三五 編輯局
濱花 六六 兜町出張所
本局特長 三三六 販賣部
本局長 六〇八 廣告部

本局 二二一一 代理部長
本局 一二〇九 安信所長
東長 三四三 大阪支局長
長 一四三 名古屋支局

一七六六 京都支局
五七 靜岡支局
一五三 横濱支局
三三 横須賀支局



四

女學世界

第拾巻第拾貳號

迷信に囚はれたる婦人

心靈上の不可思議な現象

心象會の實驗の成績

松村介石

近頃、千里眼の婦人を初めとし、色々不可思議なものが現はれますが、此の種の現象は從來とても少なくはないので、松村介石先生や福來博士其他數十名の人人が相寄つて心象會といふのを設け、斯かる神秘的の現象に就て實地の研究をして居られると聞きましたから、或日松村先生を大森向町の御宅に訪ねて、會の景況をも聞き、又面白い實驗をも拜見しました。此の會では何でも不思議な業をする者を雇つて來て、一々行らせて見るのですが、結果は大によいさうです。先づ其の御話から紹介致しませう。（婦人記者）

△世間の不思議は大概は虚誕

世間には山師が多くて、かういふ不思議な事もするあゝいふ事もすると大きな口を利いて居ても、大抵は虚誕だから、會から頼みに往つても容易に來て呉れはしないが、其の中には又ほんとうに能きるのがあつて實際不思議な事をやつて見せます。先づ催眠術などは會員中にもできる者があるし、又他から頼んで來ても行つて見ましたが、これは孰れも好結果でした。催眠中に熱くもない物をこれは火だと言つて腕に當てるとびつくりして飛び上つて、瞬く間に其の部分が赤くなつてむく／＼と腫れてくる、かと思ふと、最う癒つたといへば、又直ちに引いてゆく、と言つたやうに誠に奇妙な事ができるのです。虚のやうな話だけれども、これは事實で、心靈作用の如何に恐ろしい力を有つてゐるかゞ分ます。

△腕に針を刺す

又麻布邊に居る婦人で腕に針を刺しても痛くないといふ者があつたから、これも雇つて來てやらせて見ま

したが、やはり見事にできました。縫針をすく〳〵と幾本でも刺すのです。それで痕もつかなければ、少しも痛くないと言つてゐる。其婦人の夫といふのは米國に長く居て催眠術なども習つたものだといふから、或はそれらに原因するのかも知れません。そして尚ほ不思議な事はそれを見て居た子供等が、己れも〳〵と眞似をしてやはり同じ事をやるやうになつたことです聞けば、神田邊へ行けば、縁日などに大道でもやつてゐるといふことですが、心に決して痛くないものだと信じてやれば、誰れにでもできるのだと見えます。

△火渡の術と天眼通

御嶽教などでやる火渡り術もやりました。行者は男女数名で、會員の庭園でやつたのですが、其光景をいふと、周圍にずつと〳〵繩を張り、中央に横一間縦二間半位の處に松薪を積み並べ、二時間許り經文を唱へる間にそれを燃して、火焔が熄んだところで、それを崩して靈砂を撒いて其の上を渡つたのです。けれども、之れを見た一同からは、之れならば不思議ではない、消炭にして渡るのだなど〻惡口が出るし、又會員の中にも、自分の見たのは現に火の燃えてゐる中を通つたなどいふ者があつて、餘り滿足ではないやうでした。

それから天眼通、これは餘程成績のよい方でした。紙に何でも勝手な文句を書いて渡すと、それを握つて額に當て、暫く念じて居つて言ひ當てるのですが、七回試驗して五回迄當りました。手品のやうに種も何もあるのではなく、たゞ心靈作用でそれが分るのだから不思議なのです。

△テーブルターニング

やつて見たのはまだ〳〵あります。彼のテーブルターニング即ち机廻しなども見事にできました。四脚の机ではできなかつたが、三脚のもので結果を得ました。たゞ其の上に兩手を置く丈で机は室内をぐる〳〵廻つて歩くので、これも隨分不思議なものです。或は手で机を推すのだらうといふ人もあるが、實際推すのでは

ないから、學者先生達も驚いて居りました。がこんなのはまだ〳〵やさしい方で、西洋でやつてゐるのは、机が踊り出して、遂には手を離れて天井迄も上つてゆくのです。

△熱湯探りは失敗

熱湯を探ぐるといふ者があつたから、これも呼んでやらせて見たが、これは失敗でした。其他巫女の神寄せなどもやらせました。これは好成績で、暫く念じて後、こちらから何か聞くと、大抵の事は當てました。今奥様は何をして居られるかと問ふたら、お湯へ這入つて居られるといふから、行つて見ると、果してさうであつたし天氣の豫言も當り、其他手紙が來るといふ事も、來客があるといふ事も總べて當りました。

△小間板の不思議な能力

小間板、などは大に結果のよい方です。これはハート形の小板に三本の足が附いたもので、その一本の足を鉛筆にして、上へ靜かに手を置いてゐると、それが足を動かして文字や繪を書くのです。又何かそれに尋ねると遠方の事でも未來の事でも何でも文字で書いてちやんと答へるのです。

婦人か子供がやると能く書くやうです。何か紛失物がある時に之れに尋ねると、やはりちやんと敎へて呉れます。無論時々間違ふ事はある。

私の知人のお孃さんはよく之を弄ぶのだけれども、其の父は少しも之を信じなかつた。然るに或日父がそれを試みやうと思つて、蟇口の中へ一品を入れて、之れは何だとお孃さんに聞いて見たら、お孃さんは之を小間板に問ふと、「ハサミ」と出たので、開いて見たら果して鋏であつたのです。又其の隣家で、子供が歸宅が遲いから母がひどく心配して、其消息をお孃さんの小間板に問ふと、「今キネオラマを見て居る、一時間經てば歸る」と出たが、果して其通りであつたが不思議で

はありませんか。かういふ事實はいくらもあります。

又別の知人の夫人が或時指環を紛失させたので、小間板に聞いて見ると、「平常使用せぬ簞笥の中に在り」と出た。そこで方々捜して見るけれども、どうも見當らないから又尋ねたら、「簞笥の奥の方に在り」と書いたが、實際其處にあつたといふ事實もあります。

△突然和歌を詠み始む

經驗によれば、最初は靜かな室で三十分間乃至一時間位も手を置いて念じて居らねば書かないやうだけれども、段々慣れて來れば、手を置くと直ぐ書くやうになります。板は銀座の警醒社にありますから、やつて御覽なさい。色々の名の者がそれに現はれて來て不可思議極まる事實を示すのです。私の家の女中も之をやるので、板が動き出す時に、「あなたは誰方ですか」といふとよく「ゑみ子」と書く。「お年は幾つですか」と尋ねると「十四」と書く。「何處からおいでゝすか」と聞くと、「天國から」と答へる。そして此の「ゑみ子」さんが出てくるとよく和歌を書くが、それが又實にうまいのです。

此女中は相當に教育のある者ではあるが、まだ和歌を習ふた事はありません。それが或時家內が旅行先から歸宅する事になつて居るから、一つ歸宅時間を知らうと思つて、女中を呼んで小間板に向はせました。すると思はぬ事を書き始めて一首の和歌となりました。其歌はこんなのです。

誰もみな心をよせし花よりも
　今宵の月をまさるとや見む

そこで之れは何だらうと、噂して居ると、直ぐに「日本教會を祝して」と書きそへました。之れは小間板が翌日催す私の教會のクリスマスを祝したのです。

△いよ／＼出でゝいよ／＼妙

又或時會員の藤田といふ人が私の爲に一首願ひますと言ふと、

古は深山に咲ける藤の花

今は都の匂ひなりけり

と書きました。其時孤兒院を經營してゐる五十嵐といふ人が、側から私にもといふと、

人の身を我身にかへて救ふ君
殘るほまれは後の代までも

と書きました。

又宅へ友人が二三人集まつて愉快に遊んで居た時にこんな歌を詠みました。

千鳥さへ友よびかわし遊ぶなり
などてか人の一人あそばむ

それは不思議なのです。

又或時某夫人が北海道から移つて好い春を迎へましたと言つて訪ねて來られた時に、

人知らぬ北の海より上り來て
のどけき春を迎ふうれしさ

と書きました。其時恰度弟の松村松年夫婦が來會はせて居て、これは妙だ私等の爲にも一首をといふと、

めでたくも都の春に松の年
八千代かけたる糸の丈まで

とやりました。夫人は糸子といふので、夫婦の名を歌に詠みこんだのです。

又村井知至君は心象會に付ては元來懷疑家の一人ですが、一つ我が心を詠んで見よと求めたところが、

山川の高さ深さは限りあり
君の心は何にたとへむ

と走らせましたので折から來られた福來友吉氏の夫人に此の事を話すと、一兩日經てから福來氏から、自分の爲に一首詠んで與れ、と求められたので、

神よりの來りし福を友々に
傳ふる今日ぞあひの吉日

とよんで、福來友吉といふ四字を歌の中へ入れました。

此の外猶數十首の歌を詠みましたが、不思議な事は第一前にも申した通り女中はちつとも和歌を習はないで之を詠むこと、次に小間板に手を置くや否や直ちに書きはじめて少しも思考の時間を取らぬこと、それから歌は立派ではなからうけれども非常に達者にすら

すらと詠むことです。で色々解釋を試みても見ますが如何なる學者博士も、たゞ之れは妙であるといつて舌を卷くばかりです。

△記者親しく實驗を見る

兎に角態々の御訪ねですから、只今女中を呼んでやらせてお目に掛けませう。――

松村先生は斯く言はれて女中をお呼びになりました女中が出てくると奥樣もおいでになりました。奥樣は紙を展べて抑へて居られるお役。女中は其上へ小間板を置いて靜に手でおさへました。「サア何か一首お願ひします」と先生が言はれると、間もなく板はすらすら動き始めた。記者はびつくりしました。――さて鉛筆の歩いた跡をたどつて見ると、

先生の爲に
錦きてはるばる遠き故郷の
父の御墓にまゐる嬉しさ
ゑみ子

「オヤオヤゑみ子さんが出て來たか、そして錦きてはるばる……、ウム成程、……これは私が二三日中に、弟の松年や母と共に、國へお墓詣りに歸る事にしてゐるので、その心持を詠んだのでせう、どうも不思議なものですよ」と先生が言はれました。

「あなたも何か一つ書かせて御覽なさい」とのお勸めによつて、記者の爲にも一首頼みました。すると

ひろき世に文の……………
…………………

と歌の初め丈けを書いて、後はどうしても出ませんでした。ゑみ子さんは、博文館女學世界の文字を、一首の和歌の中にすつかり詠み込まうとしたのでせうが、ちとむづかしかつたものと見えます「それでは何でもよいから」と奥樣が言はれると、今度は長い線をすらすら引き初めました。さて何が書けるだらうと見て居りますと、とうとう見事な花の咲いた蘭ができましたこれも恐らく先生の爲で、こんな花を持つて行つて御墓へあげよといふのかも知れません。

奥様が又、「今度私も皆と一緒に國へ歸つたらよいか何うか」とお尋ねになると、

親しき友達とよく遊び後お働きなさい

と巧者な事を書いたので、一座大笑ひでした。

「如何です、世にはかういふ事實があるのです。驚くではありませんか。何うして之れができるかはまだ私には分りません。けれども兎に角斯かる心靈的の今日の科學では解釋のできない不思議な事實があるといふことは認めて貰はねばならないのです」と先生は言はれました。

歐米邊では以上の事實の外に、樂器に手を附けないで鳴らすとか、幽靈を出すとかと不思議な事實が頻々として現はれるので、心理學界に一大革命を起してゐるとか申しますが、恐しい世の中になつたものでございます。

△寅の日の婚禮　關西地方では寅の日に婚禮をせぬ風習がある、これは何んな譯かといふのに、寅は千里を行つて千里かへるといふ古諺に基いたものである。然らば寅の年に婚禮は到底出來ぬわけではないか。

萬病根治の神傳剃刀療法

覆面記者

△神々しき心教の大本山

府下淀橋町に、「心教々會、參拜隨意」の看板を揭げた一寸した一構がある。これぞ萬病根治の剃刀療法を行ふといふので近頃有名な心教々主大敎正森破凡の立籠つてゐる大本山である。普通の家なれど、内に入ると厳めしい神棚も造られ、注連飾、神樂太鼓など宜しくあつて、神殿的の光景が十分香ふてゐる。紫色の茶袍を着けた短軀長髮の一人は、聞かずとも破凡其の人と知れた。見ると四五人の門弟らしいのが、多くの新らしい蓙と檜笠に一々「心敎正道軍」の文字を太筆もて墨黒々と記してゐる。其の傍に一人の老翁が、二間ばかりのかんれいしやを展べて、「無料施術、萬病根治の神傳剃刀療法、病患に惱める者は來れ！　云々」と得

重な手を振つてゐる。丁度大洪水の最中であつたので今や此の蓙を着、此の笠を被り、此の大旗を押し立てて、將に水難被害地へ大擧して救助に赴かうとする所である。

△即座に効験が現はれる

破凡大敎正曰く、「正道軍といふのは我が心敎を傳道する機關です。仕事をする都合上總べて之を軍隊組織にしてゐるので、剃刀療法を以つて諸種の病氣を癒す傍ら布敎をするといふことにしてゐるのです。昨日も上野で三ケ所に陣取つて、あそこに收容されてゐる水難被害者中の病氣を起した者三百幾十名かに施術しました。多くは頭痛、眩暈、疝氣、或は子供の腸胃を害してゐるものですが、大抵其の場で癒るので、皆な大喜ひでした。餘程の重體となれば一度位の施術では癒らぬけれども、それでも即座に効験が現はれて、非常に氣持がよくなります。」

と聞いた丈けではまだ何が何だかわからない。

△眞の人間に歸る道

先づ心敎に就ての說を聞かんといへば、大敎正は襟を正して語り出した。

「我が心敎は神儒佛の各敎の長所を採つて創めたもので、總て之を心に歸着せしめてゐるのです。喜怒哀樂の情は總て心より起る。故に心を正しくすれば、何等の不安なく、何等の心配もなくなつて、安心立命は得られと思ふのです。孟子は人の性は善なりと言つてゐる。又他の人は性は惡なりと言つてゐる。けれども私は性は善でもなく、惡でもなく、性は正なりと說いて居るのです。天性は極めて正しい天眞爛漫なものであるけれども、敎育の力、其の人の境遇等によつて色々に變つて行くのだと思ふのです。故に心を正しくするといふ事は眞の人間に歸るのです。世の中には煩悶してゐる者が非常に多いが、これは皆な各々弱點があつて、心を正しくすることが出來ないのです。故に一心一向に信仰して神と同化するやうに力めなければ

ならないのです。」

△吾心即心のお題目

如何なる神かと問ふ。曰く、

「抑々世界の創始をいへば、太古宇宙混沌たる所へポーツと或物が出來た。これが即ち天御中主大神、高皇産靈神、神皇産靈神の三柱の神樣です。これは日本のみの神でなくして、世界を創造した神樣です。そして一體にして三神、三神にして一體、即ち三位一體の神で、基督教の說く所と一致して居る。それが分れて天となり、地となり、陰陽を生じて、こゝに世界が出來たのです。故に私は萬有神教を主張してゐる。即ち、客觀的に言へば萬物皆な神である、主觀的にいへば自己の心それ自身が神であると說くのです。從つて私の方では、異宗の南無阿彌陀佛、日蓮宗の南無妙法蓮華經等の題目に代へて「吾心即神」といふことを唱へさせます。神はやはり基督教と同じく博愛全能の神で居らせられます。で我が心は肉體を借りてゐるから如何とも能きません、どうか今日只今眞心を御引取り願ふ、吾心即心、と言つて祈るのですが、此の中には千萬無量の意味が含まれて居ります。」

△將來を達觀する法

禪の方で禪定に入るといふのを、此の方では心定に入ると言つてゐる。信仰をこめて所謂無念無想の境に入らしむるので、それに就ての說が又面白い。

「心定に入つて無念無想になると、非常に靈妙不可思議な作用が現はれて、過去、現在、未來の事が手に取るやうに明かに見えてくる。古來の巫女の神下し、或は催眠術などに就ては色々說もあるが、私は之を神學的に說いてゐるのです。然るに世間の人は私を賣卜者か何ぞのやうに思つてゐるのか、折々身の上判斷をして呉れと言つて來る者がある。さういふのは、自分で自分の事を判斷できない位なら舌でも嚙み切つて死んでしまへと先づ一喝を食はせてやります。そんな事を判斷するのに何も人を煩はすには及びません。腦を冷靜

にして無念無想の境に入れば、獨りでそれは出來るのです。』

と大敦正なかく〳〵の氣焔を吐く。

△破凡一流の身の上判斷

『けれども身の上判斷は私は出來ないとは言はない。それには又夫々破凡哲學がある。それは時候と人間の生死の關係から研究したもので、それに依つて人の性質、人物、運命などを說くのです。人は滿潮にならねば生れず、又干潮にならなければ死ぬるものではない。之れによつて見ても時候と人間の關係の深い事が分るのですが、さて人の性質運命等を見るには何うするかといふと、先づ生れた年、月、日などを調べ、それから懷胎の日を調べます。醫者の方では懷胎の日は生れた日の前二百六十五日乃至二百八十五日の間としてゐるが、私は二百六十二日乃至二百六十五日の間として居る。で假りに九月何日かに生れた者ならば、其の懷胎の日は前年の十二月何日かになるが、それが分ると其の月其の日の季候其の他の事情を考へて見ます。今十二月は如何なる月かといふと、季候は身を切るやうに寒く、太陽はどんよりとして光薄く、一體に陰鬱で勢ひがない。又世間の人の有樣はといふと、一般に靜まり返つて、春の物見遊山に樂を取る頃のやうに活氣がない。買物をするにしても、成るべくは年が明けてからといふ方針を採る。身に着けてゐる衣服にしても、三四月頃太陽のあでやかに輝く時少しの汚れも目に着くのに反して、餘りそれが目立たぬから、汚ないのを着て縮こまつてゐる。そこで斯ういふ時に生れた者は、先づ吝嗇でなければ那邊か思想に缺點がある、算盤高く思慮は非常に强くて失敗は少ないが、大事を取り過ぎて爲し得る事業も爲し得ないで了ふ。腦は緻密であるが、如何なる場合にも躊躇して思ふ事を自由に發表しない、といふ天稟性を備へてゐるのです。それに懷胎の日や生れた日なども參考してやはり同じ筆鋒でゆくと、大概其の人の性質などが知れて來る。そして判斷をして與れと言つて來た日の季候、事情、

其他頼みに來た動機等を調べ、それで得た結果と前の性質とを照し合せて考へて見ると、此の病氣は斯うであるとか、或は今は此のやうな境遇にあるが將來は斯うなるといふ風にちやんと判斷が出來るのです。これは百發百中で、最う五年間も試めしてゐるが、未だ誤つた事がありません。」

頗る名說を拜聽した。

△剃刀療法を見る

恰度此時に、腰が痛んで伸びにくいといふ者に弟子が剃刀療法を行ふといふことだつたから、之を見た。患者は三十餘りの男。行ふ弟子は五十餘りの男である。患者が兩肩を脱いで其處へ俯向き加減に坐わると、弟子は左手に一本の縫針を持ち、右手に剃刀を持つて、脊部の中央からやゝ下の邊り一面へ先づ針の尖を斜に當てゝはそれを剃刀の刄の横面で輕く打つ。之を手早く連續してやるから、剃刀と針との相觸れる音、又剃刀の横面の身體に當つてペタ／＼いふ音が細かく剃んで忙はしく聞える。患者に聞くと、針のチク／＼當るのがなか／＼強く應へるといふが、赤兒さへも泣かずに行らせるといふから、痛いものではないらしい。痕も何にも殘らない。

之を約三十分間も行つたのだが、後で患者は靜かに伸びて見て、大變氣持がよいと言つた。弟子は向き直つて、病に依つて行ふ場所の違ふ事や、重き病氣には針を二本或は三本使ふ事、又一週間或はやゝもすると二週間も掛かるものゝある事を色々と說いた。

「此の療法は婦人の病氣では子宮病、ヒステリーなどによい、又男女に限らず脚氣には不思議な効能があつて恰んど癒らぬといふものはない。」

と又候大敎正の氣焔が高まつて來た。且曰く、

「總て病氣は鬱血から來る。それを散らして仕舞へば必ず癒るのである。彼の催眠術でさへ癒るのに、そこへ鋭利な剃刀を當てるのだから、血は忽ち散らされて癒らなければならない譯です。」

△一粒萬倍の功德

それにしても此の剃刀療法と所謂心敎なるものと何の因緣があるか、可笑しなものだと思つて聞いて見ると、

「それは何にも關係はない。此の療法はたゞ我が心敎を擴める手段に過ぎないのです。元來私は今は神道に屬してゐるが、これは私の素志ではない。たゞ獨立の宗敎を打立てるには、二千以上の敎師と十萬以上の信徒が無ければならない事になつてゐるから、それの出來るのを待つてゐるので、傍ら此の療法を天下に施して信徒を作つてゐるのです。布敎！　これが眞とうの目的で、病を癒して自身の利益を計らうといふ考は毛頭ない。私の身は全然神に捧げてあるから、皆な無料で施してやるのです。此の目的の爲には祈禱禁厭で病氣を癒すやうな事もすれば、其他何でもやつてゐる。そして一方では一切衆生の爲めを思ふて私自身は蕎麥粉を食つて生活してゐる。之れは佛敎の方で一粒萬倍の功德といつて高僧などの行る事で、自分の食はない一粒の米でも、それが地下に植ゑられて米を生じ〳〵すると、その爲に幾萬の人が助けられるか知れないのです。此の樣なみじめな生活をしてゐるが、其の代りに私を世界人類の最長者にして下さい、そして人類の敎主にして下さい、と其のみ絕えず祈つて居ります。」

あゝ、剃刀療法が大變な事になつてしまつた。

さらば剃刀で病氣の癒るのは何故か。

「まあ催眠術などゝ似たものでせうよ」と答は甚だ以つて振はない。

此の心敎に於ては靈魂の不滅を說き、又無論未來をも說く。それは我々の心が正しくない時には色々煩悶するが、然らざる時には身神は何時も欣々然として幸福である、と同じく、現世に於て善を行へは、來世に於て必ず其の人は幸福であるといふのである。

以上の記事の中には眞理もあらう、非眞理もあらう。又明かなる論理上の矛盾もあらう。其の判斷は諸姉に任せて茲にはたゞ見聞を其の儘に書いて置く。

不具者の原因

盲啞學校に收容せられて居る憐むべき生徒の不具者となつた原因をしらべて見ると親たるものゝ注意すべき事が頗る多い。まづ

◎第一は盲生これは化膿性眼膜炎が最も多く、此れに次ぐのが彼の所謂疳である、一寸考へると疳を起す小兒が失明する等は聊か不思議の樣に思はれるけれども、此れが非常に失明の原因となつて居る、其の次は生來の盲目と生後父母の遺毒に依つて失明した者が可なり多い樣である。殊に現今の如く一般道德が頽廢して來る樣では、此の後此の憐むべき失明者は益々多きを加へるであらう。次は麻疹と內障と角膜炎とで、最も少數なのがトラホームと外障である。又此の外に其の原因の不明なるものも隨分あるが要するに以上の各項が最も恐るべき原因となつて居る而して此等不具者が失盲した年齡を調べて見ると普通三歲より十歲前後まで、十歲を越してからの失明者は餘程稀れである。

◎第二は啞生これは生來の失盲者が大多數を占めて、次には腦膜炎、打撲等で、耳漏、遺毒、其の他の病氣は比較的原因をなして居ない樣であるが、此等生徒の失盲年齡を調べて見ると盲生よりはズッと下で、最年長者が七歲で普通の者は一歲より三歲迄で殊に三歲が最も多數である。

◎第三、親の罪、大略以上の如き原因に依りて可憐なる盲啞者は天地自然の恩澤にも浴し得ない者となつたのであるが、其の原因を醸した根本は一に兩親の不注意に胚胎して居るのである、何んとなれば盲者となつた原因の各疾病は殆んど注意次第で未發に防ぎ得るもののみである、假りに一旦犯されたとしても、其の當初に於いては容易に治療し得べき疾病である、殊に遺毒に至つては兩親の不道德が直ちに可憐なる子女に酬ひ來たつたもので、其の罪決して輕くはない、啞に於ても同樣兩親の注意如何に依りて未發に防ぎ得る原因は多數である。殊に我國現時の育兒法が餘りに等閑に附せられて居る結果、未だ危險も何も自覺し得ない子供の行動監督が不十分で、失盲の大原因ともなつて居る、轉倒に伴ふ打撲の如きは茶飯事として閑却せられて居るが、此れは非常に社會人類の爲め遺憾とする所である。

◎第四、從兄妹の結婚　更に一步を進めて此等不具者の兩親關係を調べて見ると驚くべし、生來の啞者は其の多數が從兄妹の結婚に起因して居る、而かも此は單に啞者に於てゞある其の他低能者に於けると同樣に從兄妹の結婚は多大の影響をなして居る、我國の法律に於ては公然許されて居るけれども社會人道の上よりして十分取締るべき結婚であると同時に各自大いに戒むすべき事である。



迷信打破　御殿女中の面影

飯田ゆり子

エ、さうですとも信仰は大切ですよ、信なき人は砂の上に建てた家の樣なものだと云てあります。人格の基礎となり運命を左右するものは信仰です。信仰など云ふものは愚夫愚婦に要あるもので忽にも敎育ある人間の耳傾くべきものでないと云ふ人もありますが此れは机上の空論で實際はどうして〳〵。殊に弱い婦人などにはこれなくてはと思ひます。人生は行路の如しと古人の云ひました通り時には深山幽谷を過ぎ或は千尋深き荒海を航して道に迷つたり、難船したり、思ひもよらぬ困難に遇ふ事があります。老子の所謂禍は福の伏する所、福は禍の倚る所、人間萬事塞翁が馬で、男女の別なく貴賤の差なく、書生であらうが、奥樣であらうが、すべて世にある者は皆困難もあります、失望も來ます、生計の上に事業の上に、將た交際の上に云ふに云へない苦勢が出來て參ります、かういふ時に亂れた心を整へ勞苦に堪へる力を與へ、指南車、原動力となつて勵まして與れるものは獨り信仰の力でありませう。自信の強い人が成功するといふのは是れだらうと思ひます。何を信ずるかつてですか。無論キリストをと申します。然し何を信じても所謂三昧に入ればよいのではありますまいか。私がこんな事を云ひますと異端だなどゝ排斥されるかも知れませんが。分け昇る道はどちらからしても目的たる眞如の月さへ見る事が出來たらいゝぢやありませんか。迷信だと仰有るんですか。いづれさうならうぢやありませんか。ロボルドソンでしたつけ「宗敎の眞理はこれを解するに科學の方法を用ひ之を究むるにロジックの三段論法を借り、

少しも遺憾なからしめんと欲せば、嗚呼又何の日か其欲する所に達せん」と云ひました。靈の事は靈感でなくては、理窟づくめでは迚も〳〵彼岸に達する事は出來ないと思ひます、モーゼは道は遠からず、近く汝の心にありと云ひましたし、陽明は個々の人心仲尼ありと申しました、だから何でも自分の一番好いと思ふ者を信じたら、其れに生命が出來る樣になるのでせうよ。
迷信々々と一口に斥けますけれど、何の宗敎を問はず熱心な信者といへば大抵迷信に近くはないでせうか。でも彼等は專心一意敬虔の念を以て至高者？を信じ、實に美しく確い信念を持て居て、他の似非信者と比べ者にならない美點があります。これを善く導けば必ずよい筈ですが、唯指導者の如何に依て種々の弊害が起るのじやないでせうか。又佛敎が迷信の穉蒔をしたといふ事は爭はれない事實で、佛法渡來以降、彼等の方便政略が成功して、上至尊陛下をはじめ奉り、上流の婦人達を甘く囚へて終つたものですから、傳播も速かであつたし、迷信から迷信を產む樣にもなつたのです。然し此の迷信は我國ばかりに在るのではなく、古今東西國の文野の別なく、世界各國に盛に行はれるといふ事で、文明の中心と稱へられるロンドンでさへ十三と云ふ數を忌みて、十三番地を十二番地半と云ひ、十三人のお客をしないと云ふ事です。かう申しますと何だか迷信を鼓吹してる樣に聞えるでせうが、如何いたしまして、決して好いと云ふのじやありません、唯弊害がなくて安心が出來れば其れでもよいと申す迄ですわ。例の「かなはぬ時の神だのみ」的のは感心しませんけれど、それについてかういふ話があります。

△橋の下の水は適藥

私の町に大酒飲の若者がありました。平生は好人物ですのに酒癖がわるく、何時も酒で失敗するので、交際する者もなくなつてしまひました。ところが或人の勸めで遂に禁酒をする事になつて、神樣に三年のお願をかけて半期程は誠に神妙に働いて居りました。すると秋の祭禮の時人の飮むのを見て遂に辛抱が出來なく

なり、酒はいけないがビールならよからう。いや。燒酎は酒でない。と勝手な理窟をつけてあれ是れ飲み始めましたが、一向御罰も當らない。よい氣になつてビールや何かでは物足りない。何卒して変り氣なしの酒を飲みたいものだと思出したのが破滅の基、とう／＼お酒を買て茶碗についだはついだが、生酔本性違はずで、どう／＼心持が悪い。いろ／＼考へた末お箸を上に乘せて、かうして飲めばもう酒ではない。橋の下の水だと、とう／＼皆飲んで仕まつたはよかつたが、酔が醒めるとさあ神様の御罰が恐ろしく氣になり出して、其事ばかり口走つて居ましたが、可憐さうに遂に氣が狂つて或夜川へ陷て死んで仕舞ました。すると可笑しいぢやありませんか、世間ではこんな事を云ふのですよ、橋の下の水だなどゝ神様を僞つたものだから、罰が當つて矢張橋の下の水で死んだんだつてホヽヽホ迷信もこれらはよく出來てるぢやありませんか。



教育が進めば迷信を打破する事は容易ですが、それ

は二世紀も先きでなければ迚も〳〵。三兒の魂百迄と云ふ大切な時に、社會や家庭で碌でもない習慣を作て置いて、僅か五時間や六時間の學校で陶冶出來る物ならもつと〳〵日本はえらい國になつてるでせうよ。近い話があのやかましい暦でさへ、ぬけつ隱れつ農家便寛をかつぎ出して、今に舊暦が改まらない、甚だしきは隣村で居ながら月の齡の計へ違ひからお正月の元日が一日違であつたといふ滑稽もありました。かういふ事は社會、家庭、學校の三者同盟か形成されて、共力一致努力しなければ効果は上るものじやないと思ひます。

△お行水の効能

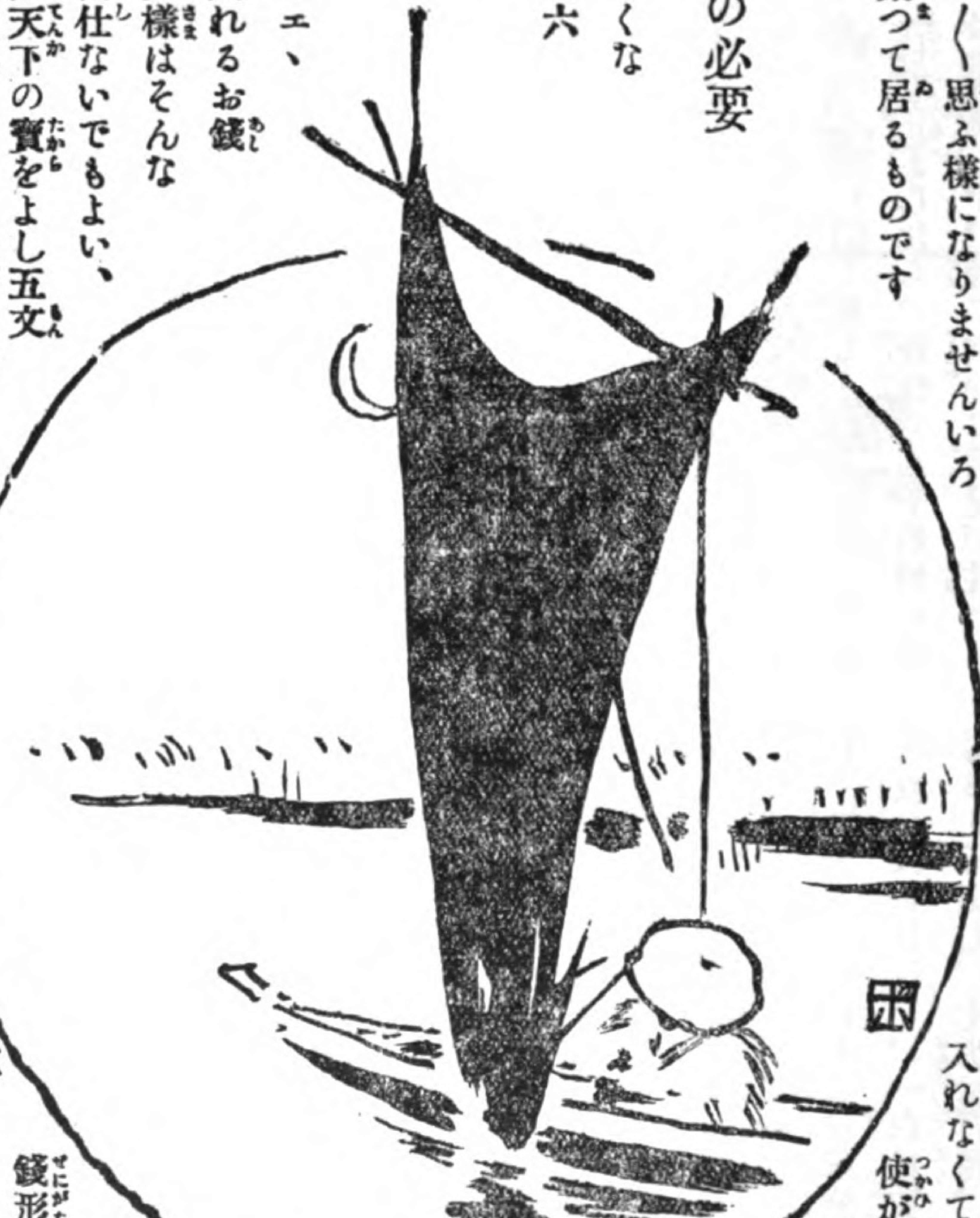
學校の先生のお話に家庭がどうも學校の仕事の邪魔をして困るといふ事から、次の様な事を聞きました。

或組にトラホーム患者があつて漸々ひどくなるのに少しも治療を受けない、度々親に注意をしても一向用ひない。そこで其兒にどうしてるかと聞いて見ると毎日行者様へお詣りしてお行水を頂いてつけて居ますとの事でした。それで先生はいろ〳〵考へた結果、これは證明的に説明してやらなければとても迷夢は晴れないと思つたので、或日硼酸水を瓶に入れてこれは大層よいお行水だから是れで毎日お洗ひと云つて、其兒に持たせて歸らした、其れから二三度も瓶を替てやる間に、少しづゝ効驗が顯はれて、三週目には充血だけはきれいに治りました、無論根治する筈はないが、素人目には全癒した樣に見えたので、親は大層喜んでお禮に來ました。是ばかり待て居た先生は、お行水と云つたのは實は硼酸水であつた事、トラホームの恐ろしい病であること、お行水など無益有害のもの、決して頼むに足らぬ事を懇々說きました。すると親も實驗した上の話とて一言もなく會得して、漸く醫療を受させる事を承知したので、先づ人一人救ひましたが人材養成の急務ある今日、こんなつまらぬ仕事迄學校の手を煩はされては困つた事、家庭の仕事は家庭でして貰はなければとの事でありました。誠に御尤なお話で、よく

氣をつけなければならぬと思ひましたが、しかし家へ入て見るとなか／＼思ふ樣になりませんいろいろの分子が集つて居るものですから……。

△六道錢の必要

先年從兄がなくなりました時にも六道錢の事から大層議論が起つて困つた事がありました、エ、あの棺の中へ入れるお錢の事です。伯父樣はそんなつまらない事は仕ないでもよい、藤綱ぢやないが天下の寶をよし五文でも六文でも土に埋めるなど明治の今日あるべからざる事だと仰有るし、昔氣質の伯母樣や



祖母樣は六道錢がなければ佛が行く所へ行けぬ、是非入れなくてはと仰有る、冥途から使が來たと云ふではなし、先きの事がわかるものかと仰有つたけれども伯父樣をつかまへてあなたは此地に居てあの有名な飴長の話を御存じないか、あんな歴とした證據があるのにと祖母樣が涙こぼして歎かれるので、人々が仲に入り、紙に錢形を捺して其れで漸く事濟になつたもの〻、一時はさわぎでしたよ。新舊思想の衝突これは何處にでも隨分多く

ある事でせう。飴長の事實？　私もつい好奇心かられてお夜伽の間にすつかり調べて見ました。飴長と云ふのは此町の老舗で、大きな飴屋です。ずつと昔の話ださうですが、或日黄昏時一人のみすぼらしい女が、其家へ入つて來て、一文の飴を買て行たさうですが、其翌日も又其翌日も、同じ時に來ては一文づゝの飴を買ふものですから、店員も不思議に思つて其女の歸るのを見えがくれにつけて行きましたら、墓地の入口迄行くと、すつと消えて見えなくなつてしまひましたので、店員は氣味が惡くなつて、早々家に歸つて此由を語り、翌日來るのを待て居ましたけれども、其れきり來なくなりました。ところが此事町中の評判になつて、此れは何でも新佛が心に殘る事があつて迷つて出たのだらうと云ふので、いろ〳〵物好に調べたところ、數日前に死んだ姙婦の人相に似て居るといふので、念のために墓を發掘して見ましたら、豈計らんや姙婦は全く息絶えて居るにも係らず、傍に健かな男兒が生れて居りました。人々はこの奇異に驚きながら、抱き上げて見ると、口中に飴が殘つて居りましたので、又更に憐さ增し、よく〳〵中を探つて見ますと、葬式の時入れて置た六道錢が三文減て居ましたさうです。嬰兒はお寺で預ることになり。成長の後名僧となつて近村の寺に居つたと申す事です。それから六道錢の必要を誰も疑はぬ樣になつたのださうです。

△いろ〳〵のおまじない

迷信の事なら内の祖母樣も隨分でしたよ、御殿に永く居らしたので、お女中氣質の一種變り物、極淡泊なお方ではありましたが、なか〳〵の迷信家で、學校出の母樣は隨分お困りなさつたと聞いて居ます。母が祖母樣のお氣に入りであつたのにも大いに理由がありますのよ祖母樣の九星信仰が母の幸福になつたのですわ。嫁選みの時に五黃は氣強いし、九紫はおしが強くて女にはいけない、一白は波瀾星だし、三碧は後家になると云ふし、七赤は浮薄、六白はけちだ、二黑は陰氣だが經濟家だといふから嫁は是に限るといふて、擇

山の二黒の女の中から選りぬかれたのが即ち母様、むづかしい様でも至極單純な祖母様は是こそ神にも佛にも御意にかなふた嫁だとお信じなさつたので、一にもお貞二にもお貞と、母様でなければ世が明けなかつたのださうで、無論母の注意もよかつたでせうけれど……しかし慣れる迄は隨分でしたでせうよ。先づ朝のお目覺から氣を附けないと一日中御機げんが惡るいのですもの。お手水のお湯を取るのにでも取り方があるので、一杯入れると散ると云てお小言、少ないと朝から



物足りないとおむづかしい、お茶を吸むと茶柱が立つたから延喜がよい、香物三切は身を切るなど丶それはそれはおかつぎなさること、四は死だと云ておきらひ、一つ二つ三つ四に來ると是はかうと仰有るの、ホホ、丶一升二升三升是はかうと五升と數へなさるので、私子供心に不思議に思つて居ました、もう一つ可笑かつたのは從兄の四郎さん、例の忌み言葉がある物ですから、四郎と仰有らないで坊や〳〵と仰有るのよホ、丶、鬚の生えた坊もないもんだと、四郎さん何日

も失つて居らした。又此んな事もありましたよ、朝起きて入らしてお緣先の南天の前に立つて何かぶつ〳〵云て居らつしやるから、又何か御機嫌が惡いのだなと見て居ると、さうでもない樣ですから、後で伺つて見たら、今朝夢見が惡るかつたから南天に不祥を拂つて貰ふ樣に賴んだのさつて仰有るから、如何な夢ですと云ふと下駄を失つた夢だよ、夢の中でも下駄のが一番惡るい、不思議の災難があると云ひますと仰有つた、そして南天は箸にすると物忘れを仕ないし、お箸にすると毒を消す、まことに目出度い物だと仰有るのですもの、可笑しくつてねえ。又私の家には何の禁厭何々除け、といろ〳〵のお札が澤山張つてありましたよ、ェ、皆祖母樣がなさるのです、卯月八日には毎年お供をしてお寺へまゐり、甘茶を頂いて歸り、其甘茶で墨を磨て短冊に「千早振卯月八日は吉日よ、神さけ蟲を征伐ぞする」と書いて緣の柱に倒さに張つて置くのでした。これは惡蟲が來ないと云ふおまじなひ、又「北は黃に南は靑く東白、西紅に染分の山」かう書いて置くと蟻除けになると仰有いました。其外數へきれない程のお札樣で、丸るで七夕樣の樣でしたつけ。七夕樣と云へば五節句は申すに及ばず、年中行事の立派な事思ひ切りはでになさいました。

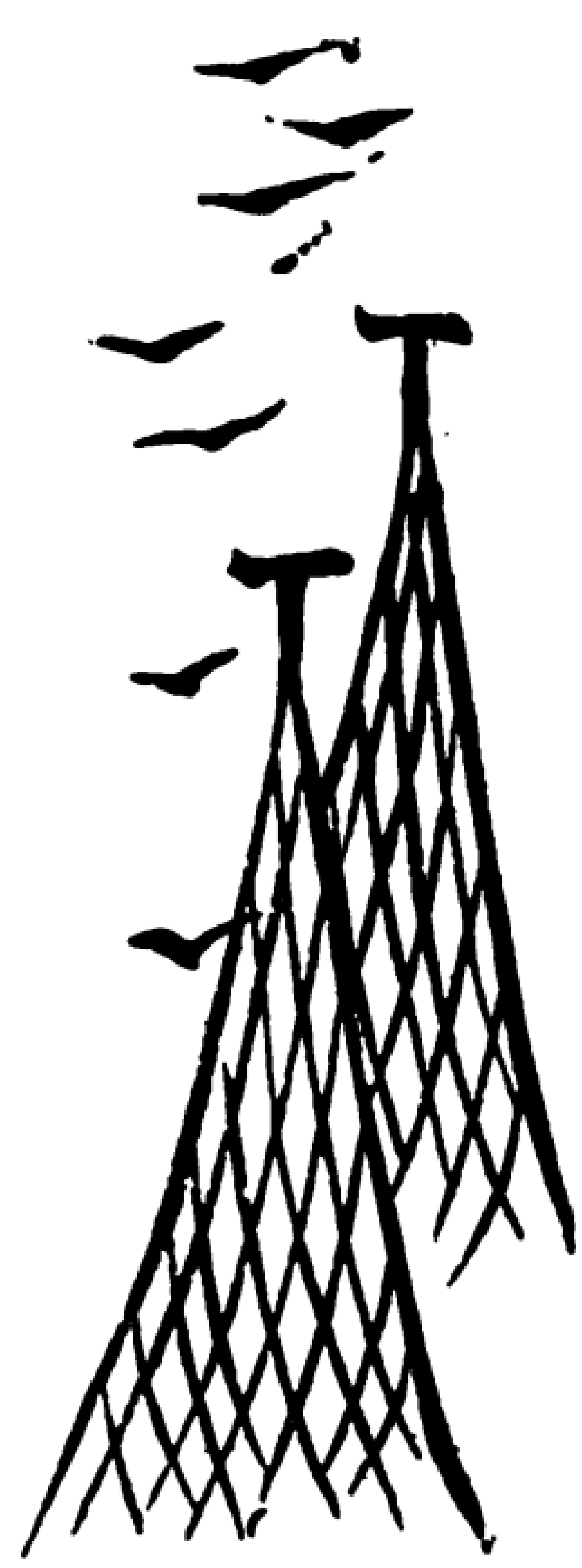
△運命獨りうらなひ

お得意のお話は虎待、私は此のお話を八九度も聞かされました、虎待と云ふのは虎年の虎の日の虎の刻に八疊の間の中央に八寸の鏡を置いて是れを見て居ると暗黑の中に自分の未來の運命が其鏡にうつると云ふ迷信なので、御殿女中の間には大層流行つた物ださうです。お老女の花浦樣は裲を着て高蒔繪のお膳に坐つて居らつしやる處だつたが、此方は一生御奉公なされた。松枝樣はみそこし提げて通る所だつたが、不義が顯はれてお暇となり、遂に味噌漉提げる樣に落ぶれた。又もう一人はお盃が見えたと云ふので大層氣にして居らしたが、一生安樂に過されたので、虎待もあんまり當にならぬなど云つてたが、お葬式の日に何處からか盃

が飛んで來て棺に被さつたとやら。是んなによく當るのだからお前も一度うつして御覽。昔しの女は手に覺が有る物だから、虎の剝だらうが暗黑だらうが、何とも思つてやしなかつた。少しも恐ろしい事はないよ、見て御覽〳〵と、恐ろしいから仕ない樣に仰有るのよ、私は馬鹿らしいから仕ないので……それはもう僅か一時間位で自分の運命が解るものなら、例令どんな苦しい事でも恐しい事でも仕ますわ、そして上吉ならそれでよし、不吉な樣なら其覺悟して其れこそ一生獨身生活の安全法をとりますわ、明日の事さへ計られない生存競爭の烈しい今日、こんな便利な法はないのですもの。しかしそれは昔の話で、今では誰樣かのお話のブラツクプリンス位で笑はれるのが落ですもの、しかし信仰の力と云ふ物は恐ろしい物で、祖母樣はかう云ふ風に神も佛も木も草も皆な御自分の味方とお信じなさる物ですから、非常に樂天主義で長生なさいました。だつて南天でさへ不祥を拂ふと云ふのですもの、他は推して知るべしです。無窓國師の仙人の畫贊に「仙人は不養生せず、腹立てず、物ほしがらず、それで長生、又壁書に長壽せんと思はゞ嘘を云ふ可らず嘘は心を遣ひて少しの事にも心氣勞せり。人は心氣さへ勞せねば長壽疑ひなし」とあります。長生の基は何にもかも至高者に任せて安心する。これですのね。迷信も祖母樣の樣なのなら上乘ですわね此れも順境のお陰でせうけれど。

△迷信打破

▲劇場寄席等の棚に居ざる事　下は空氣が惡いから上に登ると客氣にはやつて棚へ登り、よい氣になつて居るもの多し、それはとんだ誤りにて常の二階とは違ひ、斯る場所の二階の空氣こそ最も不潔なものなり、何となれば燈火、喫煙、又は呼氣より發する炭酸瓦斯はみな上に登れば、上の空氣は下より一層不潔なればなり、劇場等の土間にて頭痛を病まざる人の二階に登りてこれを覺ゆるはその證據なり。



忌子の死

綾浪女史

まあ厭、迷信なんて二十世紀の新婦人にあつて堪るもんですか、秦の始皇や漢の武帝は金丹をねらせたり、仙人とか云ふ恐ろしげなものを尋ねさせたつて云ひますが、それは何千年か昔のこと、殊にチヤンコロぢやありませんか、何？其時分は辮髪ぢやなかつたつて仰有るの？まあ何でもいゝわ。はア我大日本帝國にだつてね、羅生門の鬼だの陰陽師だの物怪だのつて隨分可笑しな事が御座いました。そりやね今も幾分かは殘つてませうけれど、それは天保の梅干婆様ばかり、と云ひ度い處ですけど、さう云ふ本家本元の私迄矢張り幾分左右せられてるんです、何誰？クス〳〵笑つてらつしやるのは。よ御座んすよ、たんとお笑ひ遊せ。前にあんまり口幅つたい事許り申上げたから罪亡しに申上げませうね。私が小さい時お婆様に連れられてよく巫女に參つたものなんです、朝鮮なんかでは宮中に迄すばらしい勢力を持つてるさうですが、日本の片田舍邊のはまあ天保時代の名殘とでも申しませうかね、むさいものですよ。其癖お客様は大分あるのです。多く盲目のお婆さんでね、大きな年代付の梓弓を机――是も古色掬すべしの方よ――にのつつけて座つて居ます。お客様は其前へ行つて缺けたお茶碗に水を一杯注いで心の中に誰々にと念じるのです、すると巫女は襟を正してピン〳〵〳〵と弓の弦をならします、光線の餘り通らぬ室で此音を聞かされると妙に氣が沈んで幽冥界に通ずる樣な氣がして聞いてたものでした。暫らくすると巫女は聲高らかに、さも勿體らしく語り出します、お婆様は熱心に色々巫女と話して居ますが遂には涙ぐ

むで泣いて歸るのが常でしたわ。行くのは多く彼岸の中日でしたが此日には佛樣が、みんな呼び出されるのを唯一の樂しみとして待つてるのだとお婆樣が云ひました。今では無論實際に悉く信しはしませんが亡き人と語る唯一の道であると思ふと何より懷しう存じますわ、中には占と同じ樣に紛失物や事の吉凶等聞いてる人達もありました。祖母が亡くなつてから一度行き度いと思ひましたが何ですか參れませんのよ、迷信家だなんて云はれるのが矢張り辛いんですもの。お婆樣は私を一番可愛がつて具れたのでよくお寺や八卦のお伴を仰せ付かりました。面白いものよ筮竹をガラ〳〵ならして二三本取つて見て、何とか云ひますのね、易を書いた石を一寸返して仔細らしく朝鮮鬚を一度撫でまはして云ひますのね、其癖八卦身の上知らずつて申しますから可笑しいぢやありませんか。まあ皆樣、當るも八卦當らぬも八卦ですから、さうお笑ひ遊さずと一度位行つて御覽遊せ、御參考の爲になる事は承合ひ。私だつても八卦なんか信じやしませんけど、幼い時聞いた事は深く印象に刻まれて到底破れないんですよ夜、爪を切ると親の臨終にあへないつて是も祖母に聞かされた事ですが私はまだ此を犯した事は御座いませんのよ、だつて若しか眞實でしたら大變ですもの、嘘言ッと一言の下に斥ける勇氣は私は持つて居ないのよ泣眞似をすると親に早く別れるなんて云ひますが私の從妹がね、さうでしたよく泣眞似をする人でしたの、もう兩親に別れて淋しい辛い月日を送つてるのです。偶然かも知れないと思ひますが、胸の何處かで打消す聲が聞えて漸々前の聲は弱くなつて了ひます。

一體私は祖母の感化を受けたんでせう、迷信强いので何時も笑はれますの。何時かもね、馬鈴薯と落花生と一緒に食べたら死ぬつて聞きましたから早速理科の先生に伺つて見ました。先生滿面に笑をおたゝへ遊して「保證します、決して死にませんから幾らでもお上りなさい」と仰有るでせう、でもまだ信じきれない私の顏色をお讀みになつて「ぢや馬鈴薯と落花生とを御馳走して下さい、私が食べてお目にかけます」と大笑

ひなさいました。併し何うもね、新教育を受けたお蔭か、修業の足らない故でせうか、まだ彼のお藥師樣の腐れ水で眼を洗つたり、人骨の黒燒を食べたり、あんな恐ろしい事はとても〳〵生々世々經ねば出來ませんわねえ。

世の中つて眞實に不思議なもんですのね、私、眞理なんて當にならないもんだと思つてよ、今の眞理が百年後には迷信になつて了ふかも知れませんもの、天の岩戸時代の眞理と現今二十世紀の眞理とはすつかり變つてるでせう？どうして〳〵此廣大無邊な宇宙がさう安々と人間に分つてたまらないわね、おや〳〵私とした事が御免遊せよ、分りもしない癖に生意氣極る事許り申上げてね。眞理なんて小利口な事を云ふよりも深く神に盲從して其指揮の下に一生を送つた方が安全よあら、飛んだ世渡り上手めいてゝね、是でもまだ世の中を見た事のない小娘ですのよ。あれ、小娘と何とやらは油斷が出來ないなんて仰有る方は何誰？餘りだわそれでね、藤村操の流を汲んだ人が時々出て華嚴や淺間に飛び込んで宇宙の大、神の威、人間の弱微な事を世人に知らせるのも强ち無用ぢやないんでせうね。熊本の千里眼夫人や伊太利のユーザピア娘やは世界の學者は了解に苦んでるでせう？神は時々あんな惡戲をなさつて迷信だ、眞理だつて偉がつてる人間をお驚かしになるんだらうと思ひますわ、一體眞理なんて言葉が癪に障るわ、婦人は迷信が深いつてけなす方もありますが、さう云ふ方に限つて皮層許り見てらつしやるんですよ。蚊の涙程もない愚にも付かぬ事を定律、法則なんて騷いでる所謂學者をね、神は何と見てらつしやるんでせう？耶蘇の奇蹟は基督教の體面に關する等と主張する人がありますけれど世界の大聖の行爲について我等凡庸人が云々する事が出來るでせうか、餘り馬鹿らしいぢや御座いませんの、水を葡萄酒にしたつて何だつて自由自在ですわ。弘法大師だつたさうですわね。今の人間は學問をして却つて馬鹿になつたつて、何誰か仰有つたのを聞きました、實際の事だと思ひます。

ハレー彗星が出た時にや米國や伊太利の文明の本國

でさへ色々の蠻行を演じたと云ふぢやありませんか。けれ共私は動きませんでしたのよ、ですから餘り私の事を迷信家だなんてお笑ひ下さらない樣にとお斷り申すのです。

ハレー彗星で可笑しい事があつてよ。仲善しの淑子さん――此方も大分私に似てより痛いの――がね、ハレー彗星が出たからきつと日米戰爭があるかも知れないわ、あるとすれば今迄の先例によつても四十七八年に違ひないからね、鶴さん、それ迄結婚なんかしない方が得よつて仰有るんでせう、流石の私も貴女にや叶ないつて笑つたのです、あら私、と



うとう素破拔いちやつてね、怖い〳〵、淑子樣にお目玉を頂戴するわ。取消し〳〵。

もたつた一つ、そつとお話しませうね。試驗の終つた次の日でした。何だか浮かぬ顏して「鶴さん、私、又笑はれるかも知れないけれど氣にかゝつて仕方がないのよ、昨日の歸りに○○神社でお鬮を引いて見たの。あら眞實く戲談にして見たんですわ、そしたら凶なんでせう、別に信じると云ふんぢやないけれど矢張り氣持が惡くつてね、もう〳〵お鬮なんか引きやしませんわ」つて。其時にや私が大いに學者ぶつて說いたんです。お母樣

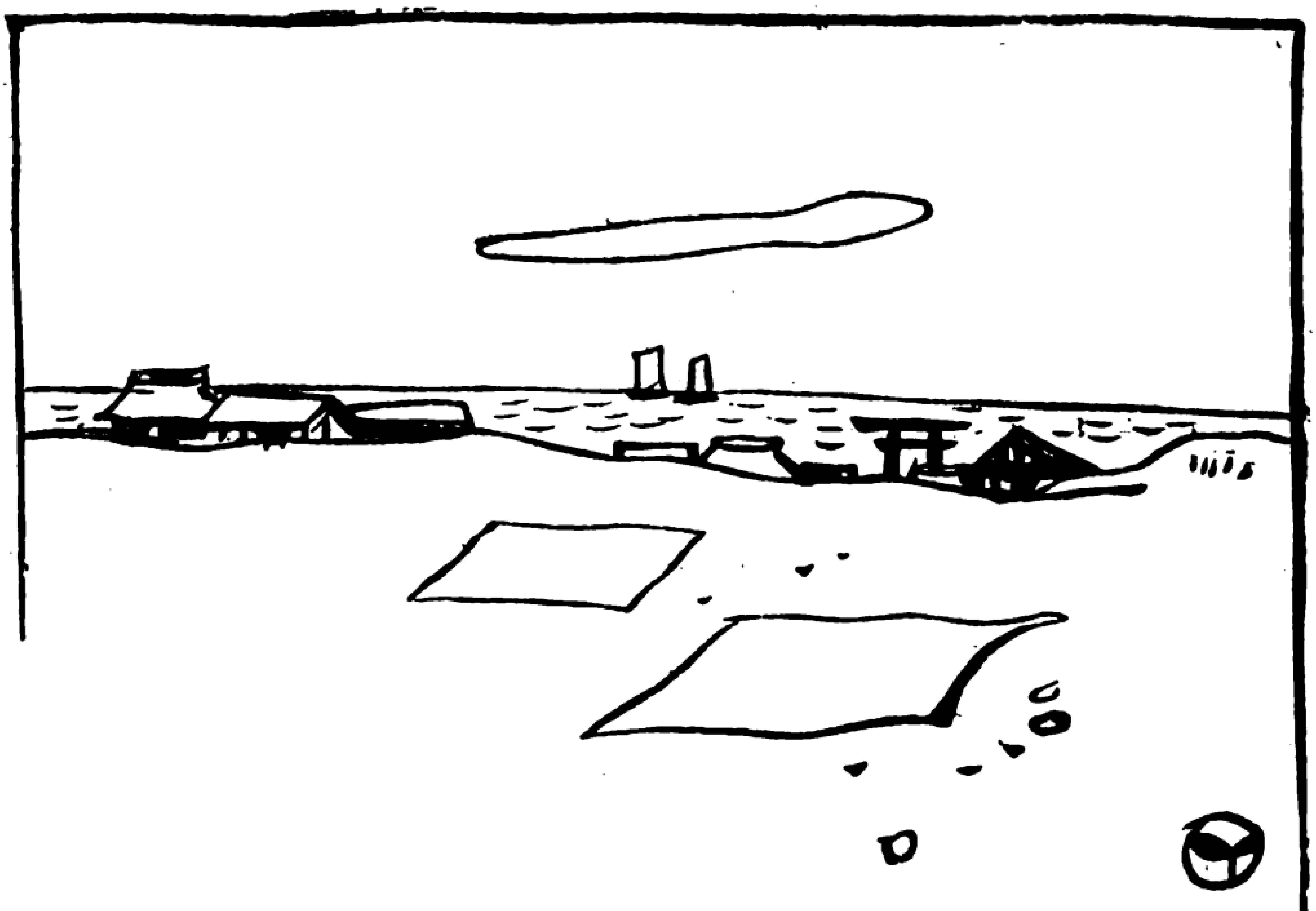
が又迷信家でいらつしやるのでお休暇が濟んで學校に來る時なんか今日は日が惡いつて中々お出しにならないんですつて、又さう云ふ時に限つてきつと面白くない事があるつて仰有いました。それで淑子さんも此頃は大いに覺つて一日位は遲れていらつしやる事もありますの。表面は病氣或は用事と云ふ事にして……だけど眞相を知つてる者は此私だけなのよ。

こんな譯で級中でも淑子さんは迷信の親玉、私は副將軍と云ふ格でしたの。何もね、印度人見たいにガンヂス川の川浪澎湃たる中に水垢離を取つて獰惡な鰐の口にパクリやられるほどお出目度くないんですが、何しろ若い血の漲つて居る女學生達で、何でも古い事とさへ云へば是も非もなく打破してやる事を任としてるんですから一寸した事でも天地の引つくり返へつた樣な騷ぎをしてね、やれ迷信家だの、正一位さんだのと祭り上げるんだか冷笑すのか分らないわ。漢學者の令孃小田さんなんぞ私等を劉基の柑だつてのよ、「上は玉質にして金色、中は乾きて敗絮の如し」なんて隨分だわね、「流石は漢學者のお孃樣黄霧が何うの熒惑星が何うのつて仰有らぬ樣に遊せ」つて私、云つてやりましたわ。失敬な、誰が腦を敗絮になんかするもんですか。

田村先生はね、「木村さん――淑子さんの姓――の知己はお怪物と鶴子さんですね」なんて國語の時仰有つて大笑ひしたのですが、淑子さんは眞實にお怪物がお好きなの、アラビアンナイトや新アラビヤンナイトや其他昔のお怪物物語等が愛讀書でね、級會や何ぞのお話もきつとお怪物に極つてるのよ。そのお話の甘い事、手眞似身振りで、誰だつてお腹の皮をよらない人はありやしませんわ、園遊だつて何だつて三舍を避ける程よ。テニスのボールが外れて窓を破つたり、お辨當が引つくり返つたりすると「ほうら淑子さん、何の前徴？占つて頂戴な、まさか試驗延期の談判が不調に終るんぢやありますまいね」なんて來ますのよ。流石の迷信家も面喰つて了ひますわ。

淑子さん？え〻此間海軍中尉と御結婚なすつて、それはそれは美しい家庭を作てらつしやいます。　日米戰

最後まで結婚せぬ人も母樣のお勸めには遂々甲をぬいで。「淑子さんの良人はね、きつと正子の鐘を首尾ようおつきになつたのよ」とは次枝さんのお話、併せて海軍では一月一日午前零時五分の打初めの鐘を誰にも知られぬ間に首尾ようついた人は其果報として將來絕世の美人を妻にする事が出來ると云ふ傳說があると說明して下さいました。嬉しい、いゝ事を聞いた、此次のお手紙に冷かして上げませうホ、四十七八年まで結婚しない人が然かも軍人になんて餘り撞着してるわ、一つ食言を責めてやらう、良人が御覽に



なつたら何んなにお笑ひなさるか知れないのね、だけど少し位素破拔いても。實際淑子さんは美人なのよ、お怪物の知己なんて虛言の樣ですわ、小田さんの所謂玉質にして金色、ではない白皙で脣の優しい微笑を含んだ眼の可愛い人次枝さんは淑子さんの眉は小說的だと云つた。眞實に校中の花だつたのよ、終始私と一緒に步きますが往來の人は、みんな妙な變挺な顏して見て行くから癪に障つてたまらない。何故つて雪に墨ですもの、一方は餘計に美しく見えるし私は一層はえないんでせう、なんぼ私、面の皮が厚くつて

も女ですもの、恥しいわね。でもいゝ事よ、來世は其お埋合せに小町より末弘さんより、もつと〳〵美しい世界一品の特許を得て來るから……其時になつて妬いたつて駄目よ。あら幾ら美しくつても臀肉を食べたり人骨の黒燒を食べたりしちや駄目だつて仰有るの？さうね、まさか、もそつと迷信深くなつてもそんな事はしない積り。

靈魂は不滅ですもの、よしや肉體は腐れたとて無に歸したとて何ともありませんわ。化學でだつて質量不變の定律があります。僅か五十年或はもつと短いかも知れません、朝に生れて夕に死する、かげろうの果敢ない命……此世におさらばをしたが最後、七彩美しい虹のふつと跡なく消える樣なものならば實に無意味極るものね。それで巫女に聞いても死人の靈が出て來るぢや御座いませんか、何新聞でしたか忘れましたけれど、こんな事が書いてあつたのを見ました、拔書がありますからお目にかけませうね。

「上略　ステッド氏には忌子さんと云ふお友達がありました。生前から其人はステッド氏に四つの約束をして居ました。

一つは若し私が死んだら妾に出來ますれば、貴君のお手を借りて手紙を書きませう。

二つには貴君のお友達の中、一人か二人の眼の前に現れませう――日本ならば化けると云ふのだが化けると云ふ程凄くはないのです。

三つは此世て寫眞を撮りませう。

四つは貴君のお友達の又其お友達の手を通して貴君へお手紙を差上げませう。

處が其後、其忌子さんは死りました、さてお話は是からです。

或日私（ステッド氏）自身は机によりかゝつて居りましたが、何か書き度い樣な氣持になつて來たので筆を取り上げると誰かゞ私の手を取つて居る樣な氣が致します。思ひ出すと何うしても生前忌子さんが私の手を取つて何か書いた感じ其儘でした。

それから忌子さんは約束通に私の友達の眼前に現れ

ました、一人は婦人で一人は男子の友達でありました。或日お客を招いて宴酣なる頃スーッと友達の傍を通る者があるので何とか聲をかけ様としてる中に消えて了つたと云ふ事です、尤もそれが友達の外には誰にも見えなかつたと云ふ事でした。次に他の一人の友達が眞晝中或街を歩いて居ると少し離れて忌子の姿が見えて少し許り歩いたかと思ふ間に消えて了つたさうで、それが他人と間違ふ事も出來ぬ程、生前の通りであつたさうでした。

忌子が死んでから私は十二度も其寫眞を見ました。それが忌子其儘で只何處か死人と云ふ相が全體に現はれて居ました此事は最後に廻して直ぐ第四の約束を如何に果せしたかをお話し致しませう。

　忌子さんが死ぬ前にした約束の第四番目は貴君のお友達の又其お友達の手をかりて貴君へお手紙を差上げませう。尤も眞に私の手紙である事を證



明する爲に殊更丸の中へ十の字を書いて置きませう、日本ならば薩摩樣の紋といふ所ですが毛唐流に丸の中へ加へ算の印を書きませうと云ひました。

忌子さんが死んでから七ケ月經つたが何處からもそれらしい手紙も來ませんでした、私は一日千秋の思で待ち設けて居ました、凄さうで凄くないお怪物ですから誰でもこんな手紙は受取つて見たいでせう、もう私は此望を斷たうと思つて居ると或日の事、友達の訪問を受けました。

「ステッド君！」と云つたなり、友は眞靑な顏をして突立つて居るから

「どうしたんだい、君の顏はまるで死んだの見たいぢやないか」

「どうもかうもない、不思議な事が出來た、まあ是を見てくれ、譯は後で話すから」と云ふので投り出した紙片を見ると

「ウイリアムに云つて下さい、何うか私の生前の過は思つて下さるなと。私はそれが爲苦うて〳〵たまりませぬ」とかう云ふのでした。（前に申しませなんだがステッド氏はウイアリム、ステッドと申すのです）

けれ共私は驚きませんでした、友は其譯を知らないものですから頻りと怖がつて居ました。そして友が云ふには「先程自分の友人の某が來て一緒に晝飯をやつて居ると、思はず友人が紙へ書き付けたのが之であつて友人はこんな事を書く考が少しもなかつたのだ」と話しました。それも其筈でせう、私は其友人を知りませんから大方先方でも私を知る事はありますまいし殊に「ウイリアムに云ふて下さい」等と云ふ處は何うしても忌子さんが中間者の手を借りて手紙をよこすと云つた約束をふんだのだと思はずには居られませんでした猶それに其手紙には二人の間に取結ばれた暗號の印である薩摩樣の紋形が附いて居ります上は一點の疑を挿む餘地はありません。私は其場に居ませんでしたが友は私と忌子さんとの約束は全く知りませんでした。

是で忌子さんは四の約束を果しました。最後に寫眞の事を申添へますが此寫眞に附いて居る寫眞師の名が

ロンドンとあり乍らさう云ふ家は一軒もないと云ふのが不思議、又三つ取つて何れも同じであるのが不思議です。無論、寫眞師は忌子の事なぞと知つて居て、一儲けしやうとしたのでも何でもありません。實は私は十五年來、死人と交通の出來るものだと云ふ説を抱いて居るものであります、けれども實驗主義の世の中ですから何事も實驗せねば人が信じて呉れません。それ故家人の中誰かゝ死んだらば此説を發表しやうと思つて居ました處が去年の十二月に私の大切な〳〵子息が三十三と云ふ年で此の世を去りました。私は子息を殊の外愛し子息も私を愛して呉れましたので此死は非常に痛う御座いました。けれ共私は毎週子息から手紙を受取りました、それも私の手をかりて書くと云ふ樣なのでは未だそれ程不思議とも思はないでせうが、私の極くの疎遠の人の手を借りて手紙を書いて私の處へ屆けますので死んでから十二ケ月にもなりますが一向に死んだと云ふ感は起りません云々」

ね、是でも虚言だと仰有つて？

讀心術

◎人と相對して談話をするのに常に頭を低く垂れ、顏を傾け、又要もなき言葉に笑を含みて對話する人がある、斯る人は其心術鄙陋なるか、又は邪曲の性ある表相である。

◎人と對話するとき眼を閉ぢて物いふ人あり、又眼を開きても觀るでもなく、遙か遠方に眼睛を乖らして物言ふ人あり、斯るは皆人の氣を計るの心あつて胸の外腹中に一癖ある人である。

◎人と對話するに全く必要もなく價値もないことを饒舌するものがある、斯は淺慮者の表相である、又必要あるのに述べないのは心に不解であるのか又はこれを秘するの必要あるかであるが正直樸朴の人にはない事である。

◎音聲の清朗なのは聰明の性であるけれども男子にあつて婦人の如き音聲をするものは却つて小人である。言語の早口で秩序のないのは頭腦の鈍い證據である、即ち智の缺けた表相である。

◎眼に一種の光があつて、ぎろ〳〵と物を睨む樣なのは心性のよろしからぬ證據である、即ち物を見るに額越しに見る樣なのは邪心あるを表する、又物を見るに瞳の位置が眼の中心にある人は正直且つ善良の人である。

始終心に不安を抱く婦人

伊東紀美子

春子さん私に迷信を去れと仰るの？そりや御無理ですわ。運命の神様に見放された私共は此迷信丈が何よりの慰安ですもの。之を捨てゝしまつたなら私の前途は丸つきり暗ですの。どうしてそんな氣になつたかつて、それは何も御存じない方には狂氣の樣にもおかしくも思はれませうね。けれど私だつて明治の人間ですもの皆樣のやうに順境に暮らせて行けたなら何でこんな六十過ぎたお婆さんの樣な考へになりませう。まあ一通り私の履歴を聞いて頂戴な。

△結　婚

ほんとに思ひ出してもぞつとしますわ。丁度十八年ばかり前ですからね、まだ／＼女子教育なんていふ聲さへ聞えなかつた時代でせう、それをやつと昔風の兩親を納得させて而も田舎で數の少ない女學校に通はせて貰つて居つたのですよ、所が其頃郷里で名聲のあつた倉田樣つていふ方がねいつの間にか私を御覧になつて是非伜の嫁にほしいと仰しやるのでせう、エ、良人は早く父母に別れて此叔父に世話になつたのです、十六の私何で結婚なんて考が御座いませう、只もう皆樣と御一緒に學校に行たいばかり。それにあなた其方が手をかへ品をかへ兩親におせまりなすつてね、そりや教育も大切でせうが伊東とても大尉の地位で下女もあれば馬丁もある。習ひたければ來てからでも教へるからと仰しやるのでせう、そこへ以て母方のお祖母樣が又中々早婚論者なので十六つていへば私もお嫁にいつた年だなんていふものですから。とう／＼無理に退學させられて當家へやられましたの、此時斗りは私なせまつと醜婦に生れなかつたらうとほと／＼悔ました。あら春さん笑つてるの、いやな人、けれどね私今でも學校を卒業出來なかつたのは殘念でなりませんのよ。なせかつて、それはあなた實力があつても卒業生でな

ければ人が見とめてくれませんもの。全くですよ。併し東京へ行て見れば其頃の軍人つて今の方のやうに藝者遊びをするといふぢやなし尤も人にもよりませうが良人は丸でお人形か妹か子供か何だか別らない位に可愛がつてくれますしね。良人のお友達でも私が小さいものですから皆様よつてたかつて妹のやうに愛してくれましたの。私奥様つていはれるのが極りが惡くていやですからお客樣があつても臺所の隅にかくれて居るのですよ、するとお友達の方がオイ伊東君なぜ奥様をかくすのだ早く見せ給へ。出さなけりや僕等捜索するぞなんて仰つてね、とう〳〵臺所に迄入つていらして恥かしがる私を軽々と座敷の眞ん中へ抱いて來たりなんかなさるのですもの。私兩方の袂を顔にあてゝ疊にへばりついてますのよ、散歩の時でも私の姿が見えないと君妻君はどうした早く連れて來給へなんてね、ほんとに軍人つて見かけによらない柔しい者だと思ひましたわ。其内にもうすつかりなれてしまつて良人と二人で下宿へおちやまに出掛たりする樣になりましたの。そうなると全く氣楽でしてね。學年試驗の苦しみはなし忠實な年のとつた女中は何もかもやつてくれるし田舍と違つて見るもの聞くもの珍らしいづくめでせう。まあこんな事ならもつと早く來ればよかつたと思ひましたの、ほんとに人間つて勝手な者ですわね。近頃の花嫁様のやうにホネームンだの、新婚日記だのつてそんなものは殘しちやいませんが現に角人様に羨まれたマダムの一人なのですよ。間もなく姙娠して千代子を生み又其翌年に潔を生んではや二人の母になりました所へあの日清戰争でせう。十八の私は此幼兒共をかかへて良人の出征を送らねばならぬ境遇になつたのです。併し此時は既にもう二ケ年もたつて軍隊の事もほぼ別り自分の責任といふ事も考へてましたので。假令夫が御國の爲に名譽の戰死を遂げられたとて取亂したりなんかはすまい。二人迄形見の愛兒を授けられてあるのだからと立派に夫をたゝせました。

　けれど見送なんていけないものでしてね。澤山な兵士の家族も來て居るのですから。假初にも中隊長の妻

決して女々しい振舞をしてはならぬと堅く決心して居りましても。あゝ事によつたら之が此世の見納めになるのぢやないかしらなんと思ひますとね、あの皆様が萬歳つていつて下さるお聲までも私の腸をかきむしられるやうな氣持がして涙を出すまいと唇をかみしめて居つた其つらさ。無情の汽車は幾多の勇士を滿載して刻一刻に遠ざかります。あゝあの烟の下にと一同顔の見えなくなる迄見て居りましたが此時私は何となしに蟲が知らせるとでもいふのでせうか又迷信つて仰しやるかもしれませんが既に良人が戰死でもされたかのやうな感じがしましたの。すると果して三ヶ月の後には位碑となつて歸つて來たのです。



△夫の戰死

此一言で私は百年を契つた夫の死をさへ悲しむ事も出來ないのです一方には御覧なさい無心の幼兒は二人乍ら父の死去をも知らぬ顔にニッコと笑つてるぢやありませんか此時の私の胸中春さんどうぞお察し下さいまし。同窓の友は今漸う學校を卒業して之から良配を求めやうとして居る時に私は既に幼

児をかゝへた未亡人となつてしまつたのです。

里の両親は子供はこちらでよく世話をするからと申してくれましたけれど、良人も早くから孤児になつて辛苦した談を聞いてましたし、僅か三ヶ年とは申せ普通の人が終生も及ばぬ夫の愛を荷つた身が、假令どんな所に嫁つたとてあれ丈の相互の愛情が再び出られるものでもありませんし、殊に二人の忘れ形見をまで授けられてあるのですから、年は十八にもせよ、私は再縁なんて思ひもよりませぬ。伊東には少しばかり財産もありましたのでどうか夫の名誉を傷けないやうに二人の子供を立派に育てませうと決心しました。それはねあなた両親が揃つて居つてさへ思ふ様にならない勝ですもの、況して母親一人で人様に笑はれない位にと思へば中々一通りや二通りの苦勞ぢやありませんよ。殊にかけがへのない子ですもの。一寸學校の歸りが遅くつても若しや途中で怪我でもしたのではないかしら、少し食事が進まないと。どこか惡るくなる兆ぢやないかしら。又あまり進み過ぎると胃をこわさないかしら少し机に長く座つて居ると腦を痛めやせんかとそれはもう四六時中只二人の子供の事ばかりを考へて暮らしました。幸ひ両人とも極丈夫で學校の成績もいつも甲ばかり。此分ならば父の遺志を次ぐ事も出來やう。早く少尉にさへなつてくれたならとそれは〳〵引のばすやうにね。將來ばかりを光明にたのんで居つたのです。十幾年といふ長い間には悲しい事や残念な事は數しれぬ程も御座いました。招魂祭などの席へ出ましても昔夫の部下であつた方の奥様が今は上長官の夫人となつて立派に御化粧して列席して居られます。ばかりでなく私のひがみかもしれませんが何やつとこ大尉の未亡人がといふやうな態度で以て接しられた方さへも御座いました。けれど私の夫は尉官でこそあれ立派に軍人の本分を盡したのだと自ら慰さめて歸りました。又或時子供が風を引いて病院につれて行きました所。はからずも同窓のある方とひよつこり御目にかゝつたのです。それはねもう月と鼈程の相違。まあどう見ても親子位は慥ですわね。そんなおなりで。きみ子

さんあなたあれからまだお一人なのつて仰しやるのですもの。私ほんとに腹が立ちましたわ。名譽の戰死者の妻が再婚するのが普通とでも考へて入らつしやるのでせうかね。エ、誰かつて仰るのそらあのいつも氣どりやつていはれた花子さんよ。

まあこういふ事は數限りもありませんが。兎に角子供さへ早く成長してくれたならばとそれ斗りを樂しみにして居つたのですよ。それにまあどうでせう。神樣のお怒りにふれる樣な事はしないつもだのに、どうして



私逹にばかりこう不幸が重なるのでせうか。忘れもしませぬ昨年の十一月の十五日でした。此日斗りは忘れようたつて中々生涯片時も忘れやしませぬ。至て丈夫な長男が學校から歸つて母樣只今つて御本をそこにばつたりところげるぢやありませんか、潔ちやんどうしたのつていひますと何だか變に頭が痛くて苦しいのです「學校でどうかしたのぢやなくつて「エエ今日ね擊劍の時に頭をひどくぶたれたの「まあつて私は驚くまい事か早速醫師よ藥よとさわぎましたが終

にだめ。翌日は冷たいなきがらとなつて亡父の傍に葬らねばならぬ佛となつてしまつたのです。嗚呼々々、何といふ無情な世の中でせう。

それからは姉の千代子ばかりを杖とも柱とも思ふて幸うすい生涯を送つて居ますが此頃はまたどうしたものか兎角健康が勝れぬがちで私はもう一度此子にも別れゆかれるのぢやないかしらなんて思ひますと。もう身も世もあられずたまらなくなるのです。だから人様は迷信だとかお笑ひになつても私はどうか惡事災難をのがれるやうに此頃は毎日氏神様へお參りをします人様はいゝと仰つて下さる事で別に害にならない事は念の爲にやつても見ます。お大師様の日にはお大師様へ。お地藏様の日にはお地藏様へおまゐりをしてどうか私の身はどうなつても。千代子丈丈夫に成長しますようにつて只それ斗りをいのるのです。

△神經作用か

そりや得意の時代とか。壯健の方には迷信なんて馬鹿らしくつて。寧ろ滑稽に思はれませうが。一通り常識のある者でも。失意の時代や。病氣の場合には思はず知らずそうなるのですよ。けれど又其迷信で病氣の直つた例や慰藉を受けた例は少くないのですもの。一概に排斥すべきものぢやないと思ひますわ。一寸申て見ますとある一の神經作用で以て口で申されない所の或者が。其人の心の奥の琴線にふれて眞暗黒の中からかすかに一縷の光明を認め出す即ちあの心理學でいふ一種の精神感應とでも申のでせうか。私共にはそんな六かしい學問上の事はよく別りませんが。兎に角今迄直らないと思ふて居つた重患も決して不治ぢやない治つた例はいくらもあるから或ものを信仰せよとか私を信じなさいといふ詞で以て不治の病が直つた。それが大家の醫師の言だと迷信とは申されませんが、名もない神様でも直る例があるのですもの。不思議ですわね。あのお佛壇でもそうでせう實際死んでしまつた人が生きて來たといふ例はあるでなし極樂とか地獄とか見て來た人もないのですが。一の宗敎で現世未來の因

緣を說き聞かせ。祖先を祭つた佛樣は金色燦爛として目もくらむ斗りに飾つてあります。其前で私共が一生懸命になつて恭しく禮拜しますと。恰も自分の前に亡き親も子も果は祖先の幾人も。一列に並んで自分等子孫を守つてゐてもくれてるような。何だか便りになる。而して何とも知れぬ崇高な氣が出て。自然に南無阿彌陀佛つて頭が下るぢやありませんか。クリストでも神樣でも皆それ〴〵方法はちがつてもつまる道理は同じ事でせうが。之によつて夫に別れた妻や子を失うた母は慥かに一種の慰安を得る事と信じます。だから迷信と一槪に申ますけれど私は此種の迷信は理學萬能の世界になつた此後でもある程度迄はやはり必要だと思ひますわ。つまり信心の過ぎるのを一つの迷信とも申のですからね。殊に世の中はめあき千人めくら千人と申す位で。あの無敎育の者など敎へますのは。六かしい理窟を說き聞かせるよりも。目の前に現はれる所の不可思議の現象即ある迷信を利用して早速其場に導き敎へる方より以上の効力は御座いますまいか。同じ迷信でも事によつて神佛の前に久しく供へた腐敗物を有難いとて飲食したり。名もない黒燒を萬病の藥だなんて高價を拂つて買求めたり。そんな害になる事や別りきつた損のする事はそりやあく迄も排斥せねばなりませんがね。まあ一通り常識のあるものはまさかそんな馬鹿らしい事は致しますまいよ。けれどね春さん。御自分は無頓着だからつて世間の事はよほど注意しませんと。とんだ恨を受けて終生思ひもよらぬ不幸を招く事もありますよ。

私共のお隣に居つた森本樣の御主人が御病氣で休んで居られた時に其親戚の若嫁樣が御見舞に來られましたの。所が其方も先に墓參をして歸途におよりになればいゝものを。途順でゝもあつたのでせう。お花を持たなりに見舞はれたのですね。すると其御病人が非常に機嫌を惡るくしてあゝけふは朝からおれを墓へ導く樣なものだ。おれの病氣は到底回復の見込がない辻うらだ。なんて仰つてね奥樣方がお慰めになるのに中々骨が折れましたの。所がまあそういふまはり合せであ

つたのでせうが。それからめつきり神經が高ぶつて衰弱もひどくなつて終におなくなりになりました。さあそうなると其嫁樣が親類中の攻擊の的となつて其後ほのかに聞けばお離緣になつたとやら。之等も迷信といへばいはれませうが病人は大抵そんなものですからね。丈夫な人はよほど注意しませんと。とんだ災難をうけますよ。けれど私いつ誰がなくなるといふのは神樣にはちやんと別つてるのぢやないかしらと思ひますわ。



△凶夢の前兆

丁度長男のなくなります時にも不思議な夢を見ましてね、どんな夢かつて、それはもうあり〱と今でも眼に見える樣に分つてますよ、暑中休暇で學校が休みなものですから二人を連れて上京しましたの、而して所々を見物させて靖國神社へもお參りをすませて、いざ歸らうと新橋にいつたのですよ、すると發車にはまだ間があつたので待合室に待つて居りますとね、あのいつとても澤山な人でせう子供等は珍らしさうにあちこちと歩いてました所がリンがなつて、さあ乘込うといふ時にどうしたものか長男丈が見えませんの、私まあの子を紛失しては亡き良人にも申譯はなし自

分も生きて居りたくないともう一生懸命に妹の手を引いてさがしましたの、けれど一向見當らないぢやありませんか、私丸で狂氣のようになつて身體をもがくと見るとふと眼がさめました、あゝ恐ろしい夢だつた、逆夢であつてくれゝばいゝがと無心に眠つて居る二人の子の幾久しく無事ならんことを祈りましたのです、それがね、あなたまだ何事もなく學校に通つて居る時そうですね丁度なくなる一週間前の事ですよ、いつか弟の戰死した時も、何だか其晩は家内中が眠られないで朝になつて誰も〳〵昨夜は苦しかつたと談して居ると號外が來て戰死と見た時の驚き、ほんに蟲が知らせるとは此事だらう、不思議な事もあるものと呆れましたがね。全くそういふ事はあるものと見えますよ、あの彗星が出ると不時の災があるとか申して支那人などさはぎますが今度のあの東海道の水害なんかの事を思ひ合せると昔からの傳說といふものもまだ〳〵研究する價はあると思ひますね、だから運の惡るい私共は出來る丈神樣や佛樣を信心して此上災難に逢はないようにつて祈るのです、雷のなる時には蚊帳もつりますし線香も立てます今年は北がふさがりだといへば北の方は注意します、毎日の事でもちやんと極つた樣に夜具をのべるのでも疊の目幾つと數へて致すのですよ、こんな若い年をして居つて人樣にはおかしいでせうがね、私の半世がまあ此通りなので、假令迷信家つて申されても、千代子の成長なります迄はやめられませんの、だから春さん御忠告は誠に有難くお受致しますがしばらくこの所はどうぞ笑はないでね、あはれな境遇に同情して下さい。

△名醫の名言

むかしある俗人、名醫の處ろへ尋れて行き、灸を据ゆるに惡日と惡所がありといふ事なるが、果して眞なるかと問ふ、名醫の曰く、あり、確かにあり、而かも惡日と惡所は一つづゝあり、即ち正月の元日が惡日、眼玉が惡所なりと答へしよし。

求婚主義のクリスチヤン

若葉

△其一

從姉のお安さんは今年廿四のオールドミッスは、ちと可哀相ですが未だ片附ずに居ります、極小あい時分兩親に死に別れて以來ズット宅に居ります、美人といふではありませんが愛くるしいそして氣だてのすなをな、廿歳以上の女は我が強いと申ますが全く珍しい位です、女子大學卒業以來は毎日母の手傳ひをして暇に教會に通ひます、なぜクリスチアンに成つたかと申ますと、幼い頃近所に教會がありました、田舍の事ですから未だチヨンマゲのおぢいさんお婆さん達が切支丹宗門だの、耶蘇だのとイヤがつて居た時分から、チヨイチヨイ遊に行つてはカードをもらつて、十枚たまると大きなのと更へてもらひ、又それが五枚たまると以上大きなのと更へてもらふ、其んな事の嬉しさに行つたのが今では大のクリスチアンごりで、一寸何かの話の序にも神様だの、信仰だのキリストがどふのこふのと申ますのが、宗教なんてトント頭にない、例令へば佛前に手を合はせても先祖代々のお墓にお參りしても、只祖先に御禮をする、死なれたお祖父さん、お祖母さんに御あいさつをするといふに過ぎない、私には異様に聞えまして、又かと思ふ位なのです、ちやうど佛家が二言目には釋尊だの、因果だの、未來だのといふのと同じ事でせう、三度〳〵の食事の前後や毎朝晩晩目を閉じて頭をおさへて天にまします我等の父よ：：アーメンとお祈りを致します、妹のふうチヤンは姉さんコンナ事して何あにと申ますのには、おかしいやらお氣の毒なやら。

今日はミタヘールの宅で祈禱會があります相で、お安サンのお友達の清原さんが誘ひに見えました、清原さんはお安さんと同い年だ相ですが、恐ろしいおめかしやで、丸たぼに巾廣のリボン、紫矢がすりのお召に

白地有職式の帶、虎の門風の花やかなおつくりですから、一寸見は十八か九位にしか見えません、バイブルなど小脇にかゝへて、氣障といへば氣障ですが、當世ハイカラの好モデルです、お安さんは逆境に人となりましたから、何處かこう淋しいのにジミナ立縞なのでせう、二人並ぶと面白いコントラストなのです、其れで不思議に能く氣が合ふと見えて、日曜日の教會通ひはキット二人一緒です、今も新約全書、舊約全書赤い表紙の馬太傳などつみ重ねた机のそばでお話をして居ます、お安さんは通りがゝりの私を呼んで。

「あなたも今日一緒に行かなくつて」

と申ますから、

「私などキリスト教の作法も知らないし、お斷りも讃美歌も出來ませんもの」

と申ますと、

「そんなこと、皆さんのなさるやうにして居らつしやればいゝのよ、賑やかな方がよいから一緒に行きませう、其れに歸りにはあなたに御相談して買物もしたいから」

と切に申ますので一つは米國婦人の家といふので好奇心から一緒について行きました、色々工夫をして和洋折衷の家に着きますと、八疊と六疊のブッ通しの部屋に、男女とりませ一つぱい、ズラリと並んで居ります私は思はずハッと致しまして、同時に内氣のお安さんが能くこんな處に始終來る事だと思ひました、テーブルの上にはキリスト上天の圖だの、降誕の圖だの、飾り美しい花環など程よく供へられて御座います、お安さんはミスヘールに私を紹介してくれますと、發音はまづいが日本語でハッキリと、

「能くお出で下さいましたサアどうぞ」

と椅子を進めて下さいました、優しい中に一種威嚴のある態度です。

やがてお斷りが始まります、皆が一時に椅子を離れひざまづいて頭をおさへて、

「天にまします我等の父よ……」

一生懸命ですが、私は何といつてよいか分りません

から困りました、次には讃美歌が始まりました、隅の方で三十餘りの婦人の彈くオルガンにつれ、一種形容の出來ない聲で

朝日は昇りて
世を照らせり
くらきに住む人
來りあほげ

螢の光と同じ調子の歌なのです、ヘールさんは直ぐ立つて讃美歌の本を持つて來て見せて下さいましたので、やつと皆さんについて唱ふ事だけは出來ました、其れから酒と道德だの色々なお說敎がありまして、漸く終りましたが、私はキマリが惡るくて始終冷汗を流して居りました、矢張りかういふ處に時々參つて居りますと、人に接する事が多ふ御座いますから、次漸交際が上手に成るでせう、局外者にはこんな事より感じませんでした。



△其二

翌日傳道師の松木さんが居らつしやいました昨日オルガンを彈かれたクリスチアン臭味の最もはげしい方です、奥の小座敷でお安さんの緣談のお話が始まつて居ります、聞いて居りますと、何でも縣

の事務官とやらで肩書もある人だ相です、松木さんが私共の宗教の方では一夫一婦の敎へて、愛情が非常に細やかで、妾ぐるひなどは神にちかつて出來ないと仰います、母樣は其れは此方でも願ふ處で、此上彼女に憂き目を見せ、空閨に泣かすやうな事があつては實に可哀相ですと申されました、松木さんも始の地位ある實業家に片づかれましたが、何分主人の身持ちが納まらず、自から離緣をされ、實家に歸られても思つた程面白くもなく、世の中をつくづく悲觀された末、クリスチアンになられた相です、其れから安心立命して當時某省の判任で有つた今の御主人と、甘んじて結婚され、昨日に變るミヂメな生活、それでも神樣をたよりに愉快に日を送つて居りますとやら。

此度のお安さんのお話の人も、無論クリスチアンなのです、昨日縞の洋服を着たハイカラが頻りにお安さんの動作斗りを見てましたつけ、あの人にちがひない、中々人品のよい方でした。

よく彼女の心も聞いて見ましてを最後に、松木さんはお歸りになりました。

緣は異なものとはいへ、何時も一緒のしかもお安さんよりは美人で、人をチャームする淸原さんに白羽の矢が當らないで、お安さんに當るとは、蓼食ふ蟲も好き好きです、然し淸原さんの樣な素敵なハイカラを奥さんになすつた方は、一生の不仕合せ頭の上る時はありますまい、イクラ御主人が俸給おとりに成つても、御自分の服裝に斗り入り上げ、未だ不足を仰り、子供でも出來やうものなら、お役所歸りの御主人が、洋服もぬがず、赤チャンのおしめのお世話まで遊ばさねばならぬでせふ、それに引かへお安さんなら、全で性質が違ひますから、花々しい交際社會に立つ事は出來ますまいが着實な家庭の世話女房としてはキツト成功致します、矢張り事務官とやら其人の要求がこうだつたのでせう。

お安さんにしてからが不足のあろふ筈もなく、松木さんが二三度あちこちした斗りで、結婚の日取りまで定まり、參列の友人一同に贈るべきお菓子の注文さへ

終りました。
お仕度と申ても大抵の物は持つて居りますし、御紋附一通りは三越の石持で間に合せました。
今まで洗ひ髪のひさしを今日文金に結ふ、フックリと出たびん長く、たぼが實に能く似合ふ、出來上つた時鏡に向つて今まで見た事のない春風のやうな笑をもらして、顔をポット赤うして少しく俯目に成つた風情は何とも云ません、世の荒波にすさんだ風も露ばかりも見えませんでした、之で當日厚化粧して黒縮緬のお振袖を着て、品やかに裾を引いたなら見かへす樣な美しい花嫁さんに成る事でせう、生れ落ちるとさんぐ\苦勞斗りして居るのですから、是から温かい家庭の人となれば今迄の不幸のとりかへしが出來るといふものお母様も一人の姪ですもの、身の納まりが附けば死んだ妹も嘸喜ぶだらう、お前の此姿を一目見せてやりたいと終にはお安さんと二人で泣いてしまいました、お安さんはこれまで成人致しましたのも伯母さんのお陰と手をついて申ます處は、平常のクリスチアン臭味も全くありませんでした。

△其　三

前にこりた私は結婚式當日には皆の進めを退けて終に參列致しませんでしたが、其後お安さんの指には所謂結婚指環なるものが一つふへました、中々よいマダムとなりました、夕方などよく二人づれで世帯道具の買出しに行つたと申しては寄ります、御主人は絽のお羽織、お安さんはセルの單衣に羽二重の帶〆で、後から從つて行く處は畫にもしたいやうです、其内國からお舅、お姑さんが居らつしやいましたが、お兩親共大の大の佛法ごりで、何でも娘御をなくされたのが動機だ相ですが、立つにも座るにもナムアミダ佛の出ない事はありません、朝晩のお勤行は勿論、一寸水を拾てるにしても長々と經文の樣な事を仰ります、お安さんに聞きますと、
「悉く流し捨つる處の水食を以て、皆一切の餓鬼道に施す」

と仰るのですと、眞面目に答へて居ますが、宅では宗敎上の衝突でもなければ能いと心配して居ますが、其んな風も見えません、或時私が庭になつた果物を持つて參りますと、驚くでは有りませんか、お安さんが先づ佛壇に上げ、お線香を立てゝ鉦までチーン〳〵とたゝきます、まさか天にましますとも、アーメンとも申したのでは御座いますまい、自分も宗敎に趣味を持つて居ますから、人にも同情するのでせふか、其れとも大悟したのでせうかあつぱれ高僧の善智識のといつても落つれば同じ谷川の水彌陀の流れを汲みながら他宗の惡口をいふ世の中ではありませんか、然し精神の修養とか名の下に日曜日には二人して敎會には參る相です、其りやあ結ぶの神の恩人ですもの。

　其後も松木さんは時々お出でに成り神樣の尊い事など話され暗に私にもお進めに成りますが母樣は未だ日本では宗敎のため緣談が破談に成つたといふ事も餘り聞かないが兎角女は夫の家風に從ふべきもの今まで南無妙法蓮華經を手を合せて居ても夫の家は天理王だか高まが原だか分りませんもの今の内宗敎などにこらない方がよいと仰います私もふチャンちやないが如をおさへてお斷をする風は好きませんもの。

・・・・・・・・

　洗禮までお受けに成つた淸原さんはお安さんの結婚後パタリと花やかな姿を敎會に見せなくなりました相です、何でも自分を捨てお安さんを先きにしたのがお氣に召さないのだらうといふ評判もあるし、又事務官夫人となりたさのクリスチアンだつたとも申しますが松木さんが行らしてもお會ひにもなりません相です。

△迷信打破

鰻は滋養品にあらず

世俗鰻を以て滋養品と心得、賞翫するものあり、是れ甚だしき間違なり、鰻は尤も不消化物にして胃に停滯し、其脂は腸にて腐敗し易きものなり、然るに衰弱したる人又病人等はこれを食して精力を補へんと土用中强ひて食ふの慣習なり、笑ふべし。

■國民的自覺を喚起すべき本書■

頽廢に瀕せんとする婦道を鼓舞振作すべき本書■

日本教育文庫 女訓篇

布製全一册
定價金二圓
郵稅金十二錢
紙數約八百頁

収容書目

婦女嘉言　乳母の文
めのとのさうし　身のかたみ
小夜のねざめ　北條幻庵覺書
東照宮御消息　ちよもと草
德川家光公御消息
女子訓（熊澤蕃山）
處女賦（井上通女）
女家訓
唐女訓九章　裝束抄
姿見　寫繪
錦古教訓　柳櫻集
あしの下根　女式目
女仁義物語　鐵漿訓
女五常訓　難波江
女訓（佐久間象山）
女訓（吉田松陰）

貞淑優美東西に比類なしと稱せらるゝ本邦古來の婦人の德性を涵養し來れるものは實に本書收むるもの二十一篇なり我が婦道の精華眞に此に盡く外來の不健全なる思想が或は本能主義或は自然主義の名の下に跋扈し青春の血に沸ける婦女子の思想を攪亂して輕浮の風滔々として俗を成し無頓着なりし父兄も漸く其の危險を感知するに至れる今日本書の公刊が如何に偉大の効果あるべきかは素より喋々を待たず一般婦人は勿論父兄の一讀を要す

東京神田表神保町　同文館　振替東京一三五番

女（中付の一）

西村醉夢君著

和歌ト俳句

袖珍洋裝美本 紙數三百五十頁 正價四拾五錢 郵税六錢

本書は和歌及び俳句に關する解說、歷史、批評、並びに修辭法を記載し、卷頭には『詩學梗概』と題し、それに就ての解說をしたもので一般家庭に讀まれる目的で編んだものであるから、極めて平易な、通俗なことのみを選び、修辭學、詩學の梗概が窺へ、また和歌と俳句との文學的價値をも分かるやうにしたものである

《內容》

【第一篇】詩學梗概＝●詩とは何ぞや●詩の內容●詩の律格●詩の種類●詩の用語●空想と寫生●詩の生命【第二篇】和歌＝●和歌とは何ぞや●和歌の種類●古歌の風格●現下の歌壇●和歌の書式【第三篇】俳句＝●俳句とは何ぞや●句の制約●俳句の特色●俳句の沿革●最近の俳壇【第四篇】修辭法＝●譬喩●對照●雜種の修辭

東京本町 振替口座東京二四〇 博文館

原胤昭君著 全二冊

母と子

何うしたら子供はよく躾けられるか

和裝菊判美本 前編(紙數二三六頁)正價五拾錢 郵税八錢 後編(紙數一八〇頁)正價四拾五錢 郵税六錢

人生の幸福は富か譽か將た壽命か、否な眞の幸福は子寶よ。然り、賢明良善忠孝の子にして子寶よ。其の寶子を得んとするには子の育て方躾け方を如何にせんとは世擧ての問題だ。今や之を解決するに最も有力なる實驗談は記された。世既に知る如く著者は出獄人を保護し不良少年を研究して二十有八年の經驗を積み、茲に此の解答を著はされたのだ。乞ふ速に繙讀して第二の人を賢明良善忠孝の民に造り一家のため國家の爲めにせられなば本書刊行の素願である。

目次

(前編)○家庭の感化○三歲兒の魂○繼〻子○名家の遺子○著者の實驗○犯罪の原因○兇賊山邊音槌の最後○山邊音槌の經歷○山邊音槌の爲人○犯罪原因の說明○山邊音槌の改悔時代○育兒の方針○結局如何したら可いか？

(後編)善と惡、母の兩面育て方躾け方の善惡實驗談六十一題

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替貯金東京二四〇

女(中付の二)

産科婦人科楠田病院長 楠田謙藏先生校閲
産科婦人科専門醫 稻生鑑次郎君纂著

實習產婆學

全二册

洋装菊判美本

上卷 通常產 紙數三五〇頁

下卷 異常產 紙數約三〇〇頁

◎上卷正價金七十錢 ◎下卷正價金八拾錢……▲郵税各一册十錢

上卷は通常產を講じ下卷は異常產を述ぶ通常產の異常產に於ける產科の兩輪双翼にして助產婦たるもの相共に精修練磨せざるべからず然るに其一を修めて其一を習はざれば到底開業者たる資格なく又產科實習の効用を得ざるべし上下完全して其本科を實修し得べし殊に行文の平易なる挿畫の精密なる世上未だ如此親切懇到のものあるなし開業者は素より本科の生徒諸嬢は早く此要書を得て研修の便を得らるべし

報知新聞家庭記者
天野誠齋君著

家庭寶典 臺所改良



(本書内容)

◎食物は如何なる臺所にて料理すべきか◎何を第一に改良すべきか◎清潔の應用法◎竈の構造◎臺所の位置◎食物と臺所の關係◎竈の動力◎瓦斯竈の動力◎富山式消毒蒸籠◎洗流しの水使ひ方◎完全濾水器◎竈の改良◎改良竈の便利◎料理ストーブの改良◎布巾の取扱方◎布巾掛の位置◎流し元の改良◎把箒の取扱方◎臺所日記の附方◎料理器の置き方◎臺所の掃除◎臺所の規律◎米櫃の實例

◎掃除の仕方◎塵拂の懸け方◎雑巾の掛け方◎床下掃除◎鼠不入の掃除◎鼠不入の改良◎台所の模範實例◎下水の掃除◎下水の改造◎下水の清潔◎流し元臭氣止◎下水と傳染病◎塵箱の改良◎厭の區分法◎飲料水の位置◎堀井戸の洗い方◎堀井戸の水と水魚類豆腐類◎女中の使ひ方◎女中部屋の整理◎台所の経濟◎改良の台所道具等其他數項

全一册 菊判和装美本 紙數約二百三十頁

定價四拾錢 郵税六錢

口繪 彩色石版畫壹枚 挿畫數十個

(中付の三)

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

幼年畫報 第五卷 第拾貳號 增刊

九月十五日發行



チュウ〳〵物語



正價拾錢 郵稅五厘

石版極彩色十六頁
活版二色刷十六頁
光澤寫眞版：四頁

菊判美麗畫本

雀はチウ〳〵鳴いて居る、鼠もチウ〳〵鳴いて居る。チウ〳〵チウ〳〵チチウのチウ、鳴子わガラ〳〵鳴つて居る。案山子わボンヤリ立つて居る、ガラ〳〵ボンヤリカアラカラ、田圃の稻わ眞黄色、やがて實つた其上わ、俵に入れて繩かけて、大黒樣えのおみやげに、引けやかつげやエンヤラサ、この面白いお噺に、幼年諸君の笑い顔、見るも矢張り豐年の、其喜びの一つなら、さアさ買いませチチウのチウ。



東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

（中付の四）

農學博士 稻垣乙丙君閲
工藤齋君著

新編 家庭の科學

抑も婦人の本務たる日常家事に於ける百般の事項は悉く科學の理に支配せられざるはなし然るに本邦婦人は概してその智識に乏しきが爲め往々妄説を信じ鑑別を過り識らず知らずの間に不經濟、不衞生の動作をなすことあるは痛歎に堪へざる所なり著者工藤齋君は高等女學校に敎鞭を執るの傍ら理科と家事科とに連絡を付し兩者共通の資料を採て本邦の主婦たる人にその智識を授け以て婦人の本務を完全圓滿に盡さしめんことを欲したるもの即ち本書なり。

全一冊洋裝菊判
美本紙數四百四十二頁
正價金八十五錢
郵税十錢

東京女子高等師範學校敎授文學士
下田次郎君著

女子の務

全一冊

菊版半截洋裝
美本紙數二百六十頁
正價金貳拾五錢
郵税金四錢

本書は女子敎育專攻家下田文學士が、婦人界の廣き見渡しと婦人に關する多年の研究とに基き、婦人が時代の進歩に後れず、世の弊風に染まずして、能く其任務を全うするの道を説かれたるものなり。其所說は多方面に亘りて、いづれも穩健中正に、文章は、豐富なる材料を、自由に驅使しつゝ、巧妙にして、しかも極めて平易に、何人もよく、理解し得るやう、物せられたり。されば一たび本書を手にせば、大なる感興の下に、强き刺激を受けつゝ、讀み畢りて、其早きを惜むや必せり。今や本書成る。切に一般婦人の愛讀を勸む。

販賣用電話 本局二六二〇番

東京 博文館 本町

振替貯金口座 東京二四〇番

女(中付の七)

門司病院長 醫學士 廣澤汀波君著

結核菌物語

世人結核病の恐るべきを知るも結核病の何物たるやを知る者尠し。其本體を知らずして之が豫防療法を講ぜんとするは、本末を誤れるの甚しきものといふべし。然れども專門の書は乾燥無味にして砂を嚙むが如く、一般讀者の趣味に適せず。本書は結核病に就き極めて通俗平易に記載したるものなれば、何人にも了解し易く、不知不識の間讀者をして結核病に關する知識を會得せしむること多大なるべきを信ず。

全一冊洋裝四六判
紙數約百三十頁
正價金貳拾錢
郵稅金四錢

與謝野寛君著

詩集 檞の葉（かしは）

全一冊
菊版半截上製紙數三百卅頁
正價四拾錢 郵稅六錢

詩壇の平靜を破つて一石を投ずるものは此集なり。小曲百六十篇、雜體四十二篇、短歌數十首を收む。詩の愛深き人人よ。ふと思ひつめたる刹那の『我』を彈じて高調を出だす著者の奇才を見給へ。

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

女（中付の八）



滑稽な友の噂

嵯峨野の露

今日は朝來の雨……でも嬉しいわ、昨日から用意してする筈であつた蟲干がお止めになつて、その手傳ひもせずに濟むんですもの、まあ本當に有がたい雨だこと、おかげ樣で終日私は書院に籠城と洒落れることが出來ますけれど、お氣の毒なのは父樣よ、昨日からかゝつて土藏の中から樟腦くさい本を澤山搬び出されたのは宜いが、このお天氣で全然消氣てお了ひになられましたの、老人なんてよくこんな面倒なことを精出してなさるものですわね。

あ！　私茫然して居てよ、こんな處にまご〳〵して居樣ものなら又あの小さい甥に見付かつて、負んぶ負んぶして梨採つて來ませうなんて言はれるから、裏緣傳ひにこそ〳〵書院に這入り込むで襖を閉め切つて了つた。

開け放した窓のもとに据ゑた文机の前にそと坐ると何だかもう無暗に恍惚として了ふ、何故かしら。

讀みさしのツルゲネーフ集を取りあげたが、餘り興も湧かない、これならいつそ書棚の整理でも始めやうと思つて、本を順次におろしますと、奥の方にふと大版の寫眞が見え出したぢやありませんか、一寸手に取るとまあなつかしい百人あまりの同窓生の面影……

卒業式の前日校庭に集つて明日を限りに別れゆく身と互ひの紀念をさて改て寫したのがこれ、

皆一樣に黑の紋附でいやに四角四面にすましては居るが、一々其の人の顔を眺めると今更のやうに共に學むだ女學校時代が美しい、追懷となつて胸にくり返されますわ。

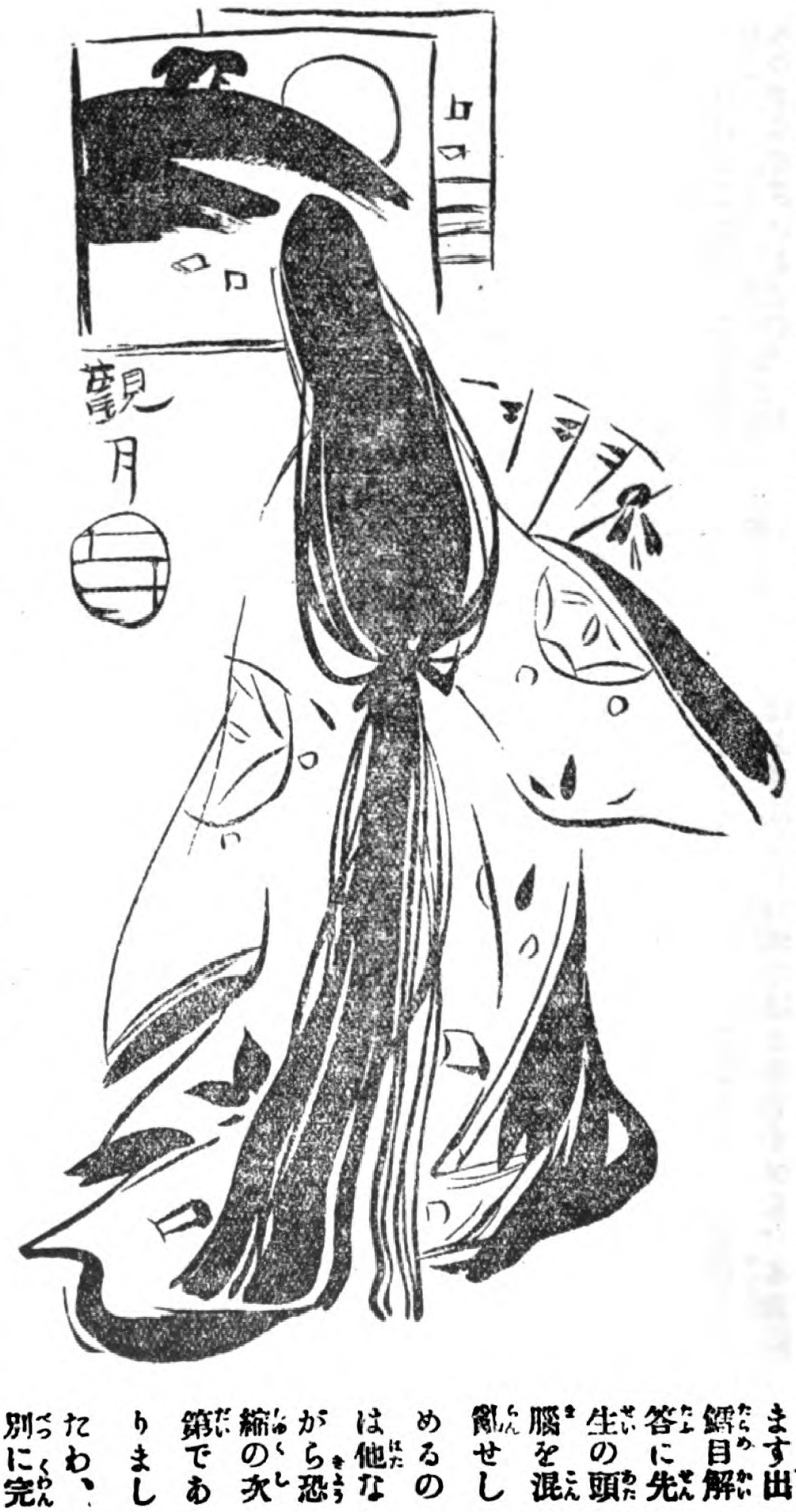
吁、あの時代がなつかしい！　何時まで經つても忘られませんの、いえもう仕方がない忘られぬ序でに思

ひ切つてこれから一つ友達の素破拔きでもして見やうか知ら、

その當時の私達の級にはそれは〳〵有名な意地惡が居りましたの、それで中には總司令官とでも云ひさうな主權者がございまして、常に級の進退を左右して居りましたから、凄まじいではありませんか、今この寫眞に寫つて居るその中の一人、蠻勇のたい子さんは目下尋常師範の二部生になつて居りますの、來年は天晴れ月給取の女先生になれるのですから偉いものですわ

私も友達の好みでかげながら、この未來の女敎員のために祝福を禱つて止まないのでございます、このたい子さんがいよ〳〵敎育界に乘り出すとなりますれば、さぞかし理想的な人物となつて世を益することが多からうと思はれます、まあ一寸のお話がもし新任の先生でも有らうものなら、第一番にその綽名をつけ奉るのはいつもこのたい子さんのお役目のやうなものですの、それで御自分は得意滿面、少しもはづるところがないには恐れ入りますわ、周圍の人達も面白半分におだてあげるものですから、いよ〳〵圖に乘つて小言を仰有られ先生と見ると、敎室内などでもいさゝかの御遠慮もなさらず、睡氣醒しなどゝ云つてをかしなポンチ畫を書いて其の說明には先生の臺灣坊主が氣になるの、誰先生の眼尻は垂れてるのと、甚い惡口ばかりそれを級中ぐる〳〵廻されるには私なども少なからず閉口いたしましたつけ、この方は小學校の敎員の令孃で品性はごく○○の部類でした、頭髮はいつも赤い猫毛を一束のぐる〳〵卷の束髮で、黃色い反齒を露骨してどんぐり眼をぎよろつかせながら、口角泡をとばす勢ひで長廣舌を振りまわすところはまさにこれ級中の一異彩、否、恐らく天下の一奇觀でございませう、いつも柿の葉のやうな短かい袂のお衣裳召して、頸のところを息のつまる程しめつけながらぐつと反り身になつて何か物言ひたげに口をもぐ〳〵させて歩くのがこの人の目立つ癖でした。そして學課のうちでも裁縫や修身、國語などは大嫌ひで、唯、幾何は自稱の大得意で、もう數學の時間にはたい子さんの氣取り方からし

て一變いたしますんですから、見て居りましても私などはなか〱肩が凝るやうでしたわ、先生が教壇に立たれて幾何の難問に皆を苦しめらるゝときこの方は、いつも我こそ顏に幾度も幾度も手をあげて答へ直し〱じますけれども先生の解答とは符合しないのか先生は一向に然との御返事をなさいません



が、たい子さん流石は級中の女傑を以て自ら任じ給ふお人、お顏の色一つ赤くもなさらず泰然と構へて、ますます出鱈目解答に先生の頭腦を混亂せしめるのは他ながら恐縮の次第でありましたわ、別に完全な答をなし得る方はございましても、このたい子さんの勢ひに辟易して言ひ合せたやうに何方も手をあげ

ませんから、先生も遂に我を折つて御自身に說明をするのです、するとやがて休みの點鐘と共に敎室の外に出るが最後、この人の近くに居る方こそとんだ迷惑です、今の幾何の解答の當違ひの無茶苦茶腹で四方八方の八つ當り、一騎當千とは實にこの勢ひを云ふのでせうが、大概のものは其の反齒の大口から吐き出す先生の惡口のみを聞かされたゞけでも、すでに怖毛をふるうて終ひますのに思ふ存分のへらず口を云ふと其の後では必とお定りの負け惜しみ。

先刻はあんな答へをするつもりではなかつたに、つい言ひそれて了うたの……などゝ負け惜しみの氣焔なかなかに當るべからずですの、其の「つい言ひそれてといふ辯解がいかにもたい子さんの日頃の心柄を表してよく振つて居ると感心されますわ、實際たい子さん位の御人物でなければこれだけのお言葉は、さうたやすくは出るものではございません。

それでこの方の特別念入りのお嫌ひな學課は敎育學でしたの、何時もこの科目のある日は蠻勇さんこそこそと書物包みを抱へて家路を指して一目散の御逃亡ですから自然先生の方でもこの方のことは大々的嫌ひの御様子でしたわ、それでもあまり續けて缺課するのも氣まり惡く思つたのでせうか、時折は厭々ながら敎育の講話の席に出ますけれど、そんな時に隣の席にでも腰を掛けやうものならそれこそ災難ですわ、先生にわざと聞えよがしにあくびをしつゞけたり、机をがたつかせるのはまだしも、二三間も先の方に居る人を聲高に呼びかけたりもうさん〳〵の不行儀、でも先生は見ぬ振りなされて理想がどうの、觀念の何のかのと、高尚な口調で心理を說かれるのに餘念もないのです、この先生でなければ到底これまでの堪忍はなし得られまいと、私はその都度思ひまして常にこの先生の御精神を崇拜して居りましたのでございます、一體このたい子さんは先天的に容貌からして小學校などの敎員にはふさはしく出來て居るのですから、本當に適當な職業を見つけたと思つてますわ、あの御様子で鼻たらし小僧達に綱引きでも敎へたならさぞかしお見事なこと

たらうと存せられまして一日も早くこのたい子さんの天晴れの女先生振りと、反齒を露骨しながらの御教授振りとが拜見したうムます。此方は九星の三碧ですと
今度はずつと寫眞の畑の方に目を移して……と、呉服店の娘、長子さんまあ氣障なこと〳〵、流石は始終男の方と交際して居るだけに、中學校などの內情には委しいもの……折々は御自分の戀人のお惚氣までさらけ出すといふ始末、もう〳〵あきれ蛙の頰冠りですわ、それでこの方大變な自稱美人で、獨りよがりなんですから、更に一驚を喫しますね、毎年の體格檢査にはあはれ脊柱彎曲てふあまり有がたからぬ異名を頂戴しておまけに厚綿でも二三枚抱へたやうな鳩胸突き出して大きなお尻をくる〳〵させて大氣取りに氣取りながら練り歩く御樣子は、いくら女學生のハイカラな型はこれと大道廣告のつもりで見せつけても、心ある人はその人をえらばず、浴びせかけるいやな秋波に吐息して當今の海老茶式部の心神の腐敗を大いに憤慨するでせう、いやしくも女學生といふ名前に對しても少しく御遠慮の程然るべしと思はれる程ですの、この方の額には得てこんな人にふき出しがちないやらしいニキビの累こげ……でも御當人は得意なものでこれはあの……想はれニキビなのよとは何處まで己惚れていらつしやるのか私などにはとてもその御心底の程が推察出來ませんわ、長子さんの大嫌なのは御自分より美くしい人と習字と學校の當番、一寸見てもすぐ判りますわ、在學中もこの長子さんと先に書いた、たい子さんとは習字嫌ひで有名な方でよく放課後、習字の先生に敎員室に呼ばれてお小言を頂いて居るところを見ましたつけそれでも一向平氣の平左ですましてますの、本當に呆れて終ひますわね、卒業間近のことよ、長子さんあまり筋肉を緩めてにい、い、ついてるから變だと思つて居たら……道理、ちやんともう立派に戀人が家に這入り込んで居るさうな、それも聞いて二度びつくり、自分の家に傭つておく番頭の弟だといふんですもの、これを聞かされた人は皆口あんぐり、例の滑稽家のはね子さん忽ち曰くですね、「この頃長子さんの額のニキビが大層

殖えたと思つたらはゝあ、なーるほど成る程」といやに節をつけて吐鳴り立てたには一同覺えず失笑して了ひましたの。

いつも高慢ちきなお顔に厚化粧こて〳〵とせい〳〵粧り立てゝ通學遊ばさる意味もこゝに於て至極明らかに氷解されました次第…お體は小さくともお年は十八ですもの、それに家庭の取締りも緩やかな呉服店などのお育ちですから萬更無理もございませんけれど、それで居て先生の前などに參りますと、いやに初心くまく擧動ふて友達の前での氣取り方はどこへやら、異なお口すばめの、顔も正面にあげ得ない意氣地なさ、殆ど御心中のほどが計りかねますわ、いづれこの手段で以て何方樣とやらをもお手なづけなさるのでございませう、まあお年に似合はぬ陰陽のやりくりのお上手なこと感々服々の至りでございますわ、この方妙に人と爭ふことがお好きで、よく毎日誰かを對手にして、あぐらかいたやうなお鼻をうごめかして居ましたつけ、長子さんの大好きなものそして名高かつたのは男子の學校の運動會、次はお汁粉に浪花節、芝居なんかは目の色まで變へて夢中になつて騒いだものですわ、運動會などには一世一代の晴れといふやうにめかし込んでそれこそ顔はうどん粉の箱から駈け出した鼠宜しくの見え、額にふりかぶる大前髪は丁度森のやうに鬢のあたりの後れ毛さながら昔の如しとでも形容しさうな御樣子で例の電氣仕掛の横目をしながら押し出すんですつて…

それで實際運動會の活潑な競技を見るのかと思ふと大當違ひ、大勢の見物人の間に入り込むでその頸から上だけの白首をこれ見よがしに突き出してまたゝきもせず或物を選擇するに御熱心なんですつて…はて、その或物とは何かつてお尋ねなさるの、まあこれは御挨拶ですことね、ほら…例の…ね、お判りになつたでせう、それあの長子さんのお氣に召した對象をですわね…ほゝ…この方は九星の四綠ですと。

いえもう一人だけでは足りないのださうですから候補者を幾人も見つけるのはどんなにかお骨折りなこと

でございませうよ、それから芝居などに行つた翌日はすぐに何とかいふ俳優は色が白いの、鼻が高かつたのと必とその品評、この人のは芝居のしぐさを見るのではなくて俳優の面を拜みにゆくやうなものよ、それで居てまた學校では馬鹿に氣位が高いのよ、教室なんかで先生に問をかけられて間違つた答をして皆樣に笑はれでもしやうものならいくら先生がもう一度と仰有つても指ではぢいた磯ぎんちやくのやうに口を閉ぢて了つてむつゝりして下ばかり向いて居りますのよ、常にあまり傲慢な



人ですから、いつもそんな時はわざと聲高く皆で笑つてやりましたわ、本當に痛快で面黒うござんしたこと。

とかくハイカラにかぶれたがつて紳士だわ、なんてごたくを並べながら手なんどばかり握り合つて居る星菫宗の崇拜家ですもの、この道はます／＼これから御發展のこと疑ひなしですわ、早く長子さんのローマンチックな、振つた自然主義の實現が見たいと思つてそればかり待ち渡つて居りますのほゝ……お次は虚榮心の權化……丸子さん、この方どうして隅には置けぬ物騒な人よ、コ

ンパスで書いたやうな眞圓い顏に擦で間違つて裂いたかと云ふやうな目いつも眠つて居るのか、醒めて居るのか見る人をして、とんとその判斷に苦しませるといふ次第、ちよつぼり鼻におちよこ口、ほんとに人を笑はせる御面相よ、おまけに何の因果か顏一面の大あばた、それをまた御大層にも白粉のこて塗りで辛くも當だしい凸凹を隱して、異うお口すぼめのすましやと來てますからどうも手が付けられませんの、その上田舍芝居に出る早野勘平式な、いやな突張つた引眉でぼやぼやの眉毛をお粧りなさるのですもの毎日お手入れのほど、さぞかしと推察いたされますわ、お氣の毒なことにはまだお年も寄らぬに小鼻のへりなどは白粉燒で黑い汚點が澤山出來てますのよ、お可哀さうに、一寸

私友達甲斐に忠告してあげてぁ宜いのですけれど、例のどら猫式の聲でしつぺい返しなど言はれましては大損いたしますからね、何とも申さずに差し控えて居りますの、この方も先の長子さんに劣らぬ屈指の星輩宗の信徒ですからどうもお多辯なこと〳〵上と下との唇の合はさり次第に口から出任せを何でもべら〳〵するんですもの傍の人などは耳ががん〳〵して眩暈でも引起しさうですわお家はお母さんに弟妹が三人、丸子さんは總領のアンダローで我がまゝをして居るのださうです、そしてこの方は愛の安賣とかをなさる、頗るつきの博愛家なものですから、諸方にお兄樣がお有りなさいますさうで、雨の降る日などは、わざと淋しいところをえらんで、合々傘の御散歩などゝ洒落れるさうな、こんなことはよほど老練なお腕前がなければ出來にくい事ですわね、それならいつそもう一息入れてもつと〳〵斬新な奇拔な何やらの新派の演劇にでもありさうなところをして、世間の人をあつと云はせれば宜いのに、丸子さんはまだ何をぐず〳〵して居るのだらう、今頻りにこれからお自分がなさる芝居の番付けでも考へて居るのか知ら……この方は八白です。

あら？　私の今の聲、丸子さんに聞えたらどうしよう、襟首位かゝれるかも知れないまあ怖いこと〳〵：

：

さて四人目の素破抜きには誰をかつぎ出さうか知ら！　そう／＼このでぶ／＼して中央に威張腐つて居るぶた子さんにしやう、本當にいつもお顔の赤い方でしたわ丁度熟し切つた汁のたれさうな桃のやうですの、でも私はぶた子さんの名譽を重んじて決して顔がいやにどく／＼しく赤いから、お猿のやうだなんて、獣になんかたとへやしないから大丈夫よ、お年は級中で第一でしたの、何と云つても滿四歳の時に始めて入籍なすつた位ですから、ゆめさら／＼無理とは思ひませんが、御自分では變に隠し立てなどなさるものですから人に憎がられましたのよ、それで當年十八歳だなんてとんでもないお若いことをお言ひなさいますの、そりあぶた子さんだつて今までに一度はそのやうな十八歳といふお若い時代もありましたでせうが、只今はどういたしまして、その十八歳に前に除いて置いた四歳をも加へなければ、なか／＼これまでぶた子さんをお照しになつたお日様が御承知あるまいと存じますわ、毎年の節分に臼を被つて豆蒔く音を聞かなければ年は取らぬものなど云ふお伶俐でない人はまだ世間にありますけれども、何も二十世紀の新教育を受けられたぶた子さんがそんな野暮なことを眞似られるにも當らないと思はれますわ、それともまた別に御持論があつての事ならば、せひ拜聽いたしたいものですこと‥‥ほゝ‥‥

一體このぶた子さんはごく素性の卑しい方ですの、一寸口前などばかりはお上手でも、天下に向つて憚りあるお妾さんの子ぢあ‥‥どうもね、あまり幅もきゝませんのさ、それでも學校に來て居るうちは、あの私の大嫌ひな、さい子さんのやうな癩病血統の家の娘でも、またこのぶた子さんのやうな方でも、不公平なく皆、平等に教育されますから、太平楽を語つて居ますが、今に御覧なさいよ、社會に出ると思はぬところでひけを取ることがございますから、その時になつて大べそかいて泣いても間に合ひませんからね、そこいらを宜しく考へて今のうちから愼んであまり出過ぎたことをなさらぬが專一ですわ。

この人のお話はいつも着物の柄や色合、髪の形、容貌の善惡、それも或程度までは宜しいでせうが、誰と話すにも他に何も用なしで、唯このやうなつまらぬ批評で持ち切りでは、いかに日永な時でも呆れ返りますわ、それで居て自分のことは全然棚にあげて置いて、他人ばかりの棚下しですもの、本當にもう片腹痛い次第で、聞くのも忌々しいやうな時が度々ございますんですよ、あれでよく唇が減りませんこと……つく〲感心して終ひますの、この方いくらか御自分の容貌に御座つて居るのか、折々呆れてぶた子さんの面を眺めるやうな己惚れをきかされますから堪りませんわ、それで先生の前などに行くと別あつらひの言葉に變りまでさせて萬事さもおとなしやかにふるまひますから内心を御存じない先生などは、ついだまされがちなのです、どうしても年の長けた方はお正月のお飾りの數を多く潜つて居るのですもの人前をつくることなどそれは〲お上手よ、龜の甲より年の功つて實際この事ですわね、程よく言ふ世辭なら誰も快よく受けもしませうが、この人のはまるで上滑りの空世辭なんですもの、好い氣になつて眞に受けて居たらとんだ間違ひですわ、ですから私いつもぶた子さんが世辭を並べ始めるときは、此方も負けずに防禦線を張つて一々茶化して手強くしつぺい返しと出るものですから、めつたに私には空世辭も申しませんの見んごと云ひまくつて、ぐうの音も出ぬやうにした時の痛快さつたらございませんよ、あら人が惡いつて……だつて人を見て法を説けつてことがありますもの……何によらず僞物は器具類などでも見てあまり宜い心地はいたしませんのに、而も假面かぶりの人間なんか目の前に動いて居られては無暗に癪にさわつて仕樣がございませんのよ、こんな人はお多辯の最中にその口のあたりをいやといふほどつねりあげて、こらしてやるといゝのよ、早くこゝへ氣がつかなくつてとう〲こらしてやらなかつたのが私返す〲も殘念だわ。

何だかこの人のこれからの活動ぶりが見たいわ、やつぱりお母樣と同じに卑しい世渡りをするつもりか知

ら……まさか普通教育受けたんだもの、そんなこともなからうとは思ふが、でも頗るつきのバニチイの強い人だから不義の富を挾んでどう首を傾けぬものでもないわ、ちと劍呑な道ゆきよ……

この方の大好物はお甘薯に唐茄子ですと、お道理で豚のやうにおふとりなされて居ると　ひました、また大嫌ひのもの　は巡査の戸籍調べと新聞記者ですつて、



成る程至極御尤もな話で合點が參りましたわ取りわけ巡査の戸籍調べは御身分柄一番お辛ひことであらうと同情の念禁ずる能はずですわ、おやいやに眞面目くさつたことを云つて終つたこと、ほゝ……こんなことぶた子さんに眞にうけられては大變よこれは私が、かつて受けた例の

空世辭に報ゆる返禮なのですもの今、私にこんなに噂されてゐた子さん定めし今頃は天上がきなくさいといふやうな鼻をひつくりかへして、くさめの連發でも遊ばして居るでせう、ほんまにちやんちやらをかしいこと、ほゝ…さあ今度は五人目…白羽の矢は誰に立てやうか知らむ…

急に寫眞版の人が尻込みするやうに見えて來た。

あゝさうこの人〳〵こんな好い材料があるのに一寸も氣がつかなんだわ、このおでこで馬鹿に顔のしやくれたあんばいなんか到底他に求められない珍種類ですわ、これこそ有名なヒステリー家、福野さんよ、年中目を白黒させて、先ごろ腸滿といふ不景氣な病氣を病つてから一向にへこまぬ大きなお腹をせり出して、おまけに後方に突出した重さうなお尻を引きづりながら肩で息をして人を睨みつけてあるくところは珍世界にでも引き出されさうな見ものですね、あれで毎日鏡と首引きなすつてよく愛想をつかしませんこといくら自分のお顔でも本當に感心ですわ、この方、人にすぐれて居るところはお腹の大きいのと大食なことゝ、おしやれなことよ年はかなり長けて居りますが體はまるで豆藏なんですもの。

毎日召しあがる滋養品はどこへ流れ込むのかわかりませんわ、こんなずんぐりむつくりの、ちんちくりんの癖にいやにしやれたがつてをかしい位ですの、いつも毎週土曜日の晩などにはこそ〳〵本箱の引出しから白粉を取りだしてその黑光るお面にこて〳〵と塗り立てますのよ、氣味の惡い牛蒡の白和、見ても胸が惡くなりますわ。

それで突飛なこと〳〵毎度呆れ返りますの…或日第一時間目が國語の日に、ふと前に並んで居る福野さんの耳のあたりを見るとひどく判然と黑白の差別が付いて居るぢやありませんか、これは少し怪しいと見て取りましたから猶よく眼を据ゑて眺めますと豈計らむやですね、このずんぐりむつくり樣、朝化粧と洒落れ込んですまして出て來て居るのではありませんか、いかに日頃御自分の容貌に力を落して嘆息してゐらる

る方でもまさかにこれほどまでのお氣のもみやうではなからうと思つて居りましたのに、はてさてお氣の毒な・・・私もあまりのことに失笑すこともできませず默つてじつと見つめて居りました！もう白粉なんて一切持つて居ませんわなんかつて口廣いことを云つておきながら今日の始末はどうしたわけと不思議に思つて居りましたところが、更に〳〵一驚三嘆の事實を發見しましたね、今日のお化粧ものは白粉ではなくて奴洗粉でしたつて、まあ・・・白粉のない



人がどうしてあんな顔をして居たのかと思つた不審もこゝで全然晴れましたわ、いかに眞黑い御面相がお氣にかゝるとても體を洗ふべき洗粉をお顔に塗り立てゝ意氣得々と教場に出て授業を受けらるゝ福野さんの度胸もまたどこまで太いのやら一寸推量しかねますわ。

　この方いかなる宿世の因果かお豆腐が三度の御飯より好きとは、さても〳〵風變りな・・・一年中お豆腐さへ食べて居れば外に望みはないなんて口もとの筋肉をゆめるて涎をたらしなが

ら眼を細くして言ふ面を見るとこれがまあ二十一にもなつた人の言葉かとをかしくもありまたあまり頭腦の單純なのが妙に哀れにも思はれたことがたび〳〵でしたつけ、本當にまあ、あのお豆腐を嬉しげに召しあがる顔を天下の皆様にお目にかけたうござんすと…からもうお豆腐と來ては二つ三つの小兒が乳に縋つたよりもより、以上他愛ないのですからね、私など見て居て氣まりが惡うございますの…

でもこの方なか〳〵鼻息が荒くつて一度は花のお江戸へ出て見たいなんて云つてますのよ、あれで東京中押しまはしたなら、それこそパックの好材料ですもの…

また寫眞を覗けば書きたい人は澤山ありますけれども今頻りに甥が小叔母樣何處つて探して居る可愛い聲が聞えますから、こゝらで一寸筆をとめていづれそのうち今度はお友達でなしに自分の告白やら棚下しやらを、どつさりお目にかけませう。

△干支の迷ひ（二）

△甲の年に生るゝ女は若きときは貧なり、二十歳後より福あり、恰も木の芽のさかゆるが如し。明星を祀るべし 七八歳にして神の祟あり、民神、荒神を祀るべし、しからすば十五六歳にて盗人に逢ふ事あり、十七八歳にて家を追はる、廿六七歳にて災難、卅八九歳にてわざわひ、四十八九にて火事、又福來る事もあり、五十六にて病あり、壽命は七十六か八十なり一代の内氏神ふげん、菩薩を信心ありて何事も願ふまゝなるべし

△乙の年に生るゝ女 は達者にて壽命長し若き時は短氣にて貧なり、若くて心賢く、合緣あり福を得る、六七歳にて大病にかゝり、十二三にて親の不興を得るか、親に離るゝか、十五六にて緣あり、十八九にて難産す、廿一二にてさいなんあり廿四五にてわざわい、四十二三より福來る壽命は七十三か八十にて死す、藥師を信心してよし。

△丙の年の生れの女 は浮氣の相あり、無欲なれば貴人に愛せらる、少し僞りを言ふ心あり、たしなみてよし色白きは大福あり、丈高きは位あり、若き時は苦勞あり、年寄りて富貴なり、十六七にて男につき災あり廿四五にて大病あり、氏神を祀りてよし、此の頃大福來る卅四五にてさいなん有、卅八九にて男と口說あり四十三にて病あり、ぬす人に逢ふ事あり、四十八にて病あり五十より大福來る、壽命は七十三なり、觀音を信心してよし。（三世相の妄說）

終局は滑稽

大原綾子

まぶしい、いり付ける樣な日が、階下の庇に照返して、窓から遠慮なしに流れ込む。暑い。暑い。まるで燒ける樣な裁縫室。それでもほんのお藥程、東向の窓から風が這入て來る。

「あゝ暑い。堪らないはね」

「せめて暑中休暇が、九月十五日位までだといゝのね。その代り七月はも少し遲れてもいいは。全く何時も殘暑の方が酷いのですもの。

窓に寄つたSさんとMさんの扇がよく動く。

まだ始まるには間のある十二時半。

「さうよ、私も大贊成よ。そらこの汗」

たつた今まで御苦勞樣に、この炎天をラケット振り廻して來た罰で、脊中までグッショリになつたので、私も大急ぎお兩方のお仲間入をした。

「この暑さにチエクッテ被仕たの、まあ、道理で酸漿灯提が醉拂た樣よ」

「エヽ、どうせさうよ。」

「まあ酷いこと云ふはね」

「オホヽヽヽ」

ほんとにSさんは口が惡い、けど罪のない方。

「だつてしなければ涼しい理ぢやないでせう。矢張り暑いぢやありませんか。それはさうと府立はつまらないのね、目白やお茶の水なんか、ほんとに羨しいは。六十日も休むんですもの。」

いまだに葉山から歸へらないお茶の水の從妹が、一寸憎らしくなる。

「ほんとにさうよ。小學校と同じぢや全く可哀さうだわ」

「そんな文句はおよしなさいよ。女醫學校なんか休暇なしだわ、よれよりや増しよ。」

廣い裁縫室にはもう彼方此方に次の時間の準備が始まる。割烹着の綻びを繕ひに、ミシンをトン／＼やつて居る方もある。

「一寸。今日の裁縫つて寫すの？　裁つの？　何方？
振り向くと川田さん、赤い絹糸を埋木の糸巻に巻きながら、白いお顔を一寸擡げてニッコリ
「そりや裁つのよ。直に。だつて貴方本裁の裁縫寫して如何なさるの？　オホヽヽヽ」
「さうね……だつて私今日は困るのよ。どうしても今日は困るは。」
「まあ綺麗ね、なんていゝ柄でせう」
思はず頓狂聲が飛び出した。
「白木ね、私どうしても三越より白木が好よ。ほんとにいゝは、何お召といふんでせう。貴方には乾度お似合ひになつてよ。あらこの御下着まあいゝこと。
風呂敷から現れたお召と友禪。此度の材料は女物重なので。まあなんていゝんだらう。ぼかし縞はほんとに高尚だこと。派出ないゝ柄。それに褪紅色地に白の七寶崩しに亂菊模樣、どんなによく反映るでせう。スラリとしたお肩のあたりから、膨らしたお胸に、ゆつたり重ねたお衿など。二尺の振からこぼれるお袖は矢張り赤かしら、白がいゝは。あゝ一つ憎らしい樣……
早口で話しながら心にこれ丈けを考へ、猶目は一生懸命二品を重ねたり、離したり、比べたり、眺めるにいそがしい。
「あら一寸拜見!!」
「お見せ遊ばせよ」
「あらいゝことね」
「綺麗ね」「いゝはね」
「一寸お袖にのせて御覽遊ばせ」
「まあ友禪がいゝは、私」
など贊詞雨の如しといひさう。
餘り彼方からも此方からも、劇賞が降て湧くので、聊と口惜しいは。そりや宜いには違ひないけれども、宜いたつて高が吳服屋へさへ行けばあるものを……變な所で例の負惜みが首を出した。
「川田さん、何故今日はいけなくつて？　寸法書お忘れなすつて？」
一寸贊詞の鼻先を折る。

「イヽエヽ、まさか、寸法は知つて居ますは。自分のですもの。さうぢやないんですけれども困るは。今日裁たないと二時間皆さんに逃れますはね。如何し樣かしら、又お笑ひになるでせうけれども、今日はほんとに日が惡いんですもの」

今年十八歳、花恥かしきお顏に、紅パツと散らしながら、流石面伏に額の遲毛自暴に拂つて。

お母樣に早く逝かれ、永くお祖母樣育ちのKさんは、何につけてもまづ老人直傳の御幣を擔ぎ出す。



「オヽヽヽ、嫌だ。また十八番が始まつたは」

「何かと思つたら又例の？　ぢや五年の人は皆變があるわけ？　一寸皆さん御要心遊ばせよ」

Tさんが混返し始めると

「成程今日は金曜ね。裁縫にもフライデーは祟つて居て」なんてMさんが皮肉る。

「アラ。裁縫が難破する　如何なるの？」

「エヽ。難破することよ。私のなんか其度に乘組員の鋏や針や糸卷なんか行方不明となるのよ」

「襤褸なら破れ難し。いゝぢやありませんか、最上よ、五年も十年も着たつて破れつこなしならフライデーに限るは。」

各々負けず劣らずへらず口を並べる。

「ホーラ有力なお味方が居らしつてよ川田さん。花岡さん大至急、急用出來よ、早く行らつしやいよ。」

これぞラブラッタの名にし負ふ髮のほつれの三筋四筋、白いお顔にはらりと亂れた緑の黑髮をウインナに卷き上げ、白薔薇のにほひも幽しう入口に表れた。Hさんを見るが早いかMさんの頓狂聲。

「月は陰星と申して決して佛體がお隱れになつて居るのぢやありません。この地球も早晩はあの樣な運命に立ち至るのです。」などゝ折角廿六夜樣を有がたがつて拜み奉つて居る善男善女の、膽を拔く樣なこと許りを云ふのが、廿世紀の新智識を得給ひし姫君とばかり心得給ふ、クラスメートの方々には、餘りに奮臭いので、迷信家と云へどあゝ五年のHさんと、下級の方も御存知とやら。

「花岡さんは毎朝太陽を拜まないと氣が濟まないのですつて」「まあ馬鹿らしい何の爲なのでせう」などよく人の口に載る方。

「ほんとよ。御自分のお歳の日にお裁ちになるのは大變いけないのよ。そんなにお笑ひになるものぢやなくつてよ。だつて歳を斷つのですものどうせ惡いぢやありませんか」

有力な味方は名に恥ぢず同情が厚い。

「歳を斷つて何？ 半分若くなるの？」

「それなら私いつでも辰の日に裁つて萬年娘で暮らすわ」

「園田さんの萬年娘？ 丁度いゝわその凄いお顏が。何處かさよりに似て居てよ」

「オヤ貴方萬年娘のさより御存知？」

川田さんと花岡さんとは思案投首で、ひそ〴〵話して居らしつたが、黑み勝の大きな目を見張たHさんのお聲の大きさに、流石元氣の皆さんも驚愕。

「あゝさうよ〳〵。いゝことがあつてよ。衿肩さへお

あけにならなければいゝんですは。今日お裁ちになつても。さうでしたは。私うつかりしてゐたわ。さうなるいな。乾度さうよ。」

愈々有力なる味方を發揮したので、川田さん大滿足。カチンと鋏を入れるとするすると解けたお召の上着、机の上を餘つて穢い床に引きさう。迷つて居た川田さんは心の雲も晴れた樣、氣もさえざえと有尺はかる。

如何しても迷信は女のするもの、優しい女のするものと思つた。

△

迷信に囚はれた婦人？　さうさう、君子さんのお母樣は全くそれよ。まあお聞き遊ばせよ。君子さんお名前お取變へなすつたの御存じ？　あらまだ？　イヽエあの御病氣の爲なのよ。ほら石龍子とか云ふのがあるでせう。ね。あれが君子さんの御病氣はお名が祟つて居る爲なので淑子か倉子とかに換えなければ直らないつて申すんですつて。倉子なんて質屋の子見たいぢやありませんかねえ。淑子と改名なすつたのよ。イヽエ公では矢張り君子と被仰るのですけれども、今迄のお知合ひには皆さう呼で頂くのですつて。先日お母樣が御披露にお出で遊ばしたのよ。あのお母樣？　青山學院出身のペラ〳〵なん



ですの英語は。隨分不思議でせう。これが下町のお妻さんなら迷信も御幣もいゝんですけれどもね。
其時も被仰るんですのよ。何でも石龍子に限りますことね、お醫者が何程開けたと申してもとても名の祟つて居りますのまでは見拔くことが出來ませんもの。入院したり手術したり致しても直りません筈でございます。まるでお砂糖屋へお醤油買ひに參つたやうなものなんですものねなんてお醫者樣も眼色なしですわね、斯う云はれては。エ、エ、大眞面目なんですもの、をかしいたつてありやしないのよ。
ほら貴力君子さんのお玄關の柱の上に大きな紙が張てあるの御存じでせう。オホヽヽヽ貴力あれ何だと思召して？ まあいゝからあてゝ御覧遊ばせよ。エ？イヽエオホヽヽヽ泥棒よけのお札なんですつて。その御利益がまた大したものなんですの。あのお札さへあれば這入らうとしたのでも先づ止めて餘所へ行くのですつて。馬鹿らしくつてお話も出出ない樣でせう。あらほんとに左樣思つて被在るのですとも。お女中まで笑つて居ますのよ。だつて毎晩ね、お長火鉢の火箸はXの形にさして置くんですしお臺所へはお草履を片片並いて、其上に金盥を伏せ、其上に又お草履を載せてお臥せりになるのですつて。まさかちやなくつてよ。エ？ 私も聞いた時はをかしくてをかしくて吹き出しましたわ。矢張泥棒よけのおまじないだつて云ふんですもの。エ、エ、それは臆病な方。つまり臆病で被在るからそんな事にまで手頼る氣におなり遊んでせう。
あゝさう〳〵。それでをかしなお話があつたのよ。オホヽヽヽ云はない先から可笑しくつてオホヽヽ、ホ君子さんの叔父樣御存知でせう？ お父樣の弟御樣で。あの方がねよく土曜日には寮からお泊りがけで御歸り遊ばすの。
まだ金盥の一件をお初めになつた許りの時だつたのでせう。成程々々で感心して聞いて被在たさうですの。翌朝になつて女中が起きて見ると晩にちやんと何時もの樣にして置いた筈の金盥が、中には水が一杯入れてあつて、おまけに釘だの草履だのが水の中に浸つて居

るんですつて。其上お臺所口が漸く人の出入る位開いて居るといふ話でせう。驚愕したのしないのつて直に奥様をお起し申すと、奥様青くなつてお寢間からお出になる、お次の間にはお簞笥の引出が一つ明て居る。さあテツキリ泥棒だとお思ひになつてお茶の間に坐つたきり、震へながら一生懸命在天の父にお祈り遊ばしたんですつて。イ、クリスチヤンねー、其處へ叔父様がハモニカで寮歌を吹きながら、開いてゐる裏口から突然歸へつて居らしつて、いきなり「やあかゝつたかゝつたつ」て手を打つての大笑。まあ何んて思ひ切つた惡戯遊ばしたものでせう。まさか怒るわけにも行きませんものね。君子さんも仲々のお母様似よやれ卯の日の裁物は運が開るの、申の日に髪洗ふと毛が赤くなるのつて。尤もその精でお毛がよくつて被在るのかもしれないのねオホ、、、ホ」をはり



△安産の呪

産の輕ろきを欲するはすべての人情であるが、或る地方では、湯屋から人知れず輕石を盗んで來てそれを産婦に持たせると必らず産が輕いといふのでよく輕石を盗まれるそうである。

死人の口を寄せて見た記

月見草

私の母は私が十一歳の時最愛の子三人を殘して永久の眠に就きました間もなく今の繼母を第二の母と仰ぐ身となりましたが、どうしても亡き母樣の事は忘れかねて、涙に袖をぬらさぬ日とてはありません、其中學校を卒業し、高等女學校入學の希望も繼母の反對で沙汰止となつて、織物屋へ通ふ事になつた時の悔しさは今でも忘れません、つまり繼母は女に學問は入りません女學校へ行つてをぼへるのは生意氣ばかりで、仕樣のない女になると被仰るのです、繼母がそう被仰るのにたつて行きたひと云つて、よし父樣が許して下すつても、ますます母樣の御機嫌を損じるばかりですから思ひ切つて織物屋へ行きました、何が一番羨やましかつたと被仰いますの、そりやあお友達が御兩親共そろうて居られて母樣がこんなに被仰つた等と御慈愛深いお話しを承はる時ほど、羨やましく思ふた事はありません、お花見に誘ふて下すつても五度に一度程もお一緒に行きませず、浮いたお話等はゆめにも申しませんから、皆樣はほんとに貴孃は陰氣だわね、も少し快濶におなりなさいよつて、いつも云はれましたけれど、ハキハキする事が出來ません、繼母は又至つて陽氣な方ですからちつとも御氣に入りませず、なほ〳〵御機嫌を損じるばかりで、一日お言葉交さぬ日がたくさんありました、或る日近藤さんと云ふ大變私に同情して下すつた方が、こんな事を教へて下さいましたの、みどりさんあなた一度巫女よせて御覽、亡母樣とおはなしが出きますの大そうよく合ふと云ふ事ですから、だまされたと思つて行つてみなさい、と被仰いましたから私もまさかとは思ひましたが、翌日行きました、むろん繼母には内密で、そこの宅は小ぎれいな家で六十位のお婆さんと、十七八の娘さんとが居りまして、巫女よせて頂けますかて云ひますと、お上りなさいと云つ

て、通つたのが六疊敷位の間で、正面には立派な何のおやしろか知りませんが神殿が立派にまつつてありました、するとそのお婆さんは、いつ死んだのか、女か男か、目上ですかと尋ねて、其おやしろに向つて、あやしげな呪文を唱へ出しました、私一生懸命にお婆さんの顔を見てると、お婆さんの顔が、變に凄ごくなりました、そして花ちやんよくきてくれたね、と云ふ聲がお亡母樣其まゝの聲ぢやありませんか、私うれしくつてね母樣と云はうと思つても何だか恐ろしい樣で云へませんでしたよ、すると「あたしはね、お情深い神樣のおそばで、樂しく暮してるから、安心して下さいや、おまへさん大そうやせたね、今度の母樣は可愛がつてくれますか、私が弱かつたばかりに、苦勞をかけるね、可哀相にこれも前世の約束事とあきらめて、繼母を大切にするのですよ、不斷無理な事を被仰つても決して口答へ等してはなりませんよ、健ちやんも大きくなつたらうね、健の事はをまへにきつと賴みますよ、ずゐぶん目をかけてやつておくれよ　と被仰る、最う悲しくなつて何か私も云はう、と思つても聲がつまつて出ない、すると「アーお迎ひがきたから、名殘惜しいが歸ります、あまり長くなると神樣に叱られるから、花ちやんさようなら、何より身體を大切にするのですよ、じやあ歸ります」

私思はずアレ母樣といつてそのお婆さんを見ると、うつむひてウンウンうなつてる、そこの娘さんが水をのますと、目を開いて如何でした、お母樣はおこし遊ばしたでせう、有りがたう、お言葉は聞えましたけれど、私に話が出來まんでしたと、云ふと、エー今は出來ませんが、何度もおよせなさつたら出來る樣になります、佛樣も貴嬢がこうして寄せて御あげなさつたらざぞ喜んで居られるでございませう、又お出でなさいと云ふのを後に、祈禱料を渡して歸る途中も、不思議で不思議で仕方がないの、けれど、母樣のお聲を聞いたからうれしくつてね、あのお婆さんの顔もお母樣の顔になつたらいゝのに、明日も行かうか知ら、そんなに每日行くと母樣うるさくお思ひなさるだらうか、け

れど母様だつた私に逢るんだから、うれしく御思ひなさるとも、うるさいなんどとお思ひなさるもんか、お婆さんも何度もよせたらお話が出來ると云つたから、明日も行かう、早く明日がくれば好いに、などと考へて家に歸つても、そは／＼として何にも手につきませんので、今日は姉様どうかしてるつて弟等に笑はれました、



それからはすつかりお婆さんに迷はされて、繼母様のお目を掠めては、ずゐぶんよく行きました、今思ふとほんとに馬鹿でしたね、けれど其時は最う一生懸命でした、五度目位から私もお話が出來てね、色々のお話をしました、それが中々よく合ひますの、例へば親族の誰様はお嫁入りしたとか、近所の方が死なれたのや、又遠い所へ行

かれたとか、皆知つて居られましたのですよ、又七度ばかし生前お好きであつた風月の栗饅頭や、佐野半の厚焼等を持つていつた事がありました、机の上へ置いてぢつと見て居るのに、マあ好いもの持つてきてくれたね、有りがたうて被仰ると今まで据ゑてあつた御菓子がもういつの間にか机の上にはありませんの、ほんとにこればかしは不思議でした、こんな事は父様にだつて秘密でした、知れたらそれこそ大目玉ですもの、一度次の弟を連れて行かうと思ひましたが、それも止めにしました、若しか知れたら大變ですから私もそれからは少しは快活になりましたので、繼母様の御機嫌も少しはよろしいやうになりました、又お友達の方でもあなたは此頃別人の様になつたねつてよく被仰しやいました、恰度初めて巫女よせてから二た月程たつた或る日の事、風を引いたのが原因で床に就きました、病名は肋膜炎でね、長らく苦しみました、肋膜と云へば肺の初期も同じ事ですし、亡母様は肺病でお亡くなりなさつたのですし、今年が七年ですから、迎ひにきて下さるだらう、生きて苦勞をするよりも、死んで天國とやらで亡母様と樂しく暮す方がどの位の幸福だらう、亡母様早くお迎ひにきて頂戴、花は毎日今か今かつて待つて居りますから、けれど壽命があつたのか、二月ほどして快くなりました、あんなに亡母様に頼んでたのに何故迎ひにはきて下さらなかつたて思切りお恨み申そうと思ふて、早速お婆さんの家へ行きますと違ふ人が居りますの、近所の人に聞きますとまあどうでせう、愚民を迷はした罪とやらで、裁判所へ引ずられたのですつて、ほんとに驚きましたが、私も其中の一人かと思ふと馬鹿らしゆう思ひましたが、うそにもせよ、亡母様のお聲を最う聞かれんと思ふと、いつそ法律といふものがうらめしく思ひました、今でも私はあざむかれたとは信ずる事が出來ませんと云つて、死んだ人がお婆さんにのりうつつて談話すると云ふものあるべき事ではなし、ほんとにどうしたのかわかりません、賢明なる記者様に伺ひます。

迷信奇談

松の葉

△ひのえ午の子

ひのえ午年に生れた子は生涯不幸に泣くか又は大悪人になるなど〻昔から云ひ傳へて居るそうですが、お花さんのお姑さんは分けてもこういう事を信じる質ですのに、運悪くも此の前のひのえ午年にお花さんは、玉の様な男の兒を生みました。まあ大變、ひのえ午の年、お姑さんはまるで狂氣の様になつて騒ぎなさる。どうすればよいかこんな子の仕末にこまる〳〵て。はては生んだが悪いとお花さんに食つてかゝると云ふ調子で、傍の者がいくらなだめたって聞かばこそ。可愛そうに産後で只でさへ神經が過敏になつてるお花さんはこのさわぎで到頭氣が違つてしまつて。それからは毎日泣いたり笑つたりそれは見るに堪へないお氣の毒な有様で三月程も居ましたが、ある雨の夕家人のすきを伺つて、川へ飛んで死んでしまいました。赤ちやんも一緒にあゝ何と云ふ悲惨な事で御座いませう、真に花子さんはお姑様の迷信の犠牲になつたのです。

そこで姑様の其後の態度ですれ、どんなに悲しまれるかと思ひの外、晴々した顔で「あれでやつと嫁も孫も浮ばれるでせう」とはまあ……………。



△未女に申男

未女に申男、どちらも嫌ひますけれど、殊に女の方が甚だしひのです。未女は軒にも立たすな、と云ふ程で縁組のまたげになる事は實におびたゞしい。で、此の年の女にはオールドミスが多う御さいます誠に馬鹿らしい事だと思ひまして、何故未女はいけないのかと近所の人達に聞いて見ましたけれど少しも要領を得ません。只々これも昔からの云ひ傳へだとか。私の友達に、それは氣だても優しい美人で何一ツ點の打ち所のない女が有りますが、悲しい事にその年なので二十八にもなつていまだに獨身で世をはかなんで居ります。

大きい聲では申されませんが、實は私の妹も今年十六で所謂軒にも立たれぬ未女なのです。母は氣の毒な程これを苦にして人には妹の年をかくす事ばかり考へて居ります。さりとは罪なろかな頭なるかな。

△お神水

お恥かしく御ざいますが私の伯母は非常な御幣かつぎで、病氣の時には決して藥を飲まずに何神様とかのお水だと云つて得體の知れない水を小瓶へ頂いて來てそれを毎日少しづゝ飲

むのです。先日もお腹を病みましたら早速お神明様の水を貰つて來て枕元に置いては有難さうに呑んで居ります。冬なら宜しう御座いますが只今の時候では二日もたてばもう腐つてしまいますのに、伯母はそんな事には一向頓着なしですから危險でなりません。そこで從妹は一ツ頓智を出して、伯母の眠つて居る間に水をすつかり捨てゝ替りに煉れて用意の水藥を入れて置きました。目がさめてお水を云ふ度びに其水藥をやりますと、しさいらしく頸をひれつて「どうも有難たいもんだん／＼立つうちにまるで錆のやうな味になつた、是れだから お神明様はあらたかなんだよ」なんて云ふものですから傍の者は情ないやら可笑しいやら。

よい藥を呑んだので病氣はぢきに全治しました。伯母は全く神水のおかげたと思つて御禮參りに毎日行きます。おまゐりするのは運動にもなるし家も別にとめませんが、例のお水の功能を紙嘩とふりまはして「自分はかりなら前の方法にしてもよいですが」他人におすゝめするには困りきつて居ります。

△裸まゐり

いつか私がお觀音樣の木蔭に休んで居りますと、道の方で人聲がしますから何むなくすかして見ますとまあ、赤裸々の女が二人口々に念佛をとなへながらお堂をまして來るのでした。



驚いたのおどろかないのつて、まるで私は失神したやうにポカンとなつて其等の女のなす樣を見て居りますと、やがてお堂の前に跪づいて熱心に三四十分間も頭を上げずに何事をか祈つて、又しづ／＼と歸つて行きました。

餘りの不思議さに私は一寸坊さんに聞きましたらあれは何か大した願事のある時、たとへば親だとか夫だとかゞ病氣に掛つた折などによくやる事で、初じめ觀音樣に何卒誰々の病氣をおなほし下さい、是れから幾日の間裸まゐりを致しますから、と願を掛けて置いて、さてこそ今の樣な狂態を演じるんださうです。元來このお觀音樣は女の裸まゐりを非常に好まれるとの坊さんの話ですが、何と云ふあさましい方でせう、私は亡國の活人畫でも見る樣に慄まじう覺えました。私はこんな言語道断な日參りなどをするよりも名醫のもとへ一日お參りした方が、どれ程きゝ目があるか知れないと思ひますのに……

△天理敎

「……助け給へ天理敎の命……ヤアナイ／＼／＼……」

そうら又はじまつた。これはお隣の小母さんが天理敎を念じる聲なんです。

後家で餘りはで／＼しくやる人も有りませんが、此の小母と來たら又番外の仕末屋、吝い事／＼とてもお話になりません。

それが爲め良人歿後まだ長くもなりませんのに、少なからぬ財産も出來内々は高利貸をして居られるとかだけれども非常の子煩惱で、十三になる一人の息子を可愛がる事と申たら、とても世の常の母親にはまねが出來ません。

その大事の／＼の息子が二月程前から重い胃腸病にかゝつたのです。サア小母さんの驚き悲しみ、夜晝枕邊につき添つて泣き通しと云ふ有樣。

そこへつけ込んで出はいりしはじめたのか、例の天理教の行者です。

まあどうまくたぶらしたものですか、小母さんは僅かの間に熱心な天理信者になつてしまひまして病でる息子のためにあの樣に毎日、助け給へと祈るので御ざいます。醫藥は一切ならないと云ふので、たま／＼行者が來ては祈禱したり、怪しい護符をのませて行きます。

これだけならまだよいですがおかしい事に天理樣と云ふ方は慾の深い方だそうで、田地やお金を奉納しなければ願をかなへて下さらないのですつて。

お隣の小母さんは信者になつてからすつかり性質が變つて「無論天理樣に對してだけですが」伜の病氣をなほして下さる事ならばと云ふので、行者の來る度びは二十圓三十圓とやるんださうです。



ところが一向其しるしも見えず、可愛そうに息子は日々に衰弱するばかり、餘りの事に見兼れて他人が、そんな馬鹿な事に迷つて居ずに早くお醫者に見て頂いた方がよいでしやう、と忠告しましても、耳に掛ければこそ、伜のよくならんのは、まだ奉納の薄いためだとて、あれ程身を削く樣にして溜めたお金を惜げもなく出して、行者の腹をさかんに肥やして居られます。

私はこうも變つた小母さんの行爲を見て、天理教と云ふものの魔力の偉大なるに感心しました。ホヽヽヽこんな事思ふ私も一種の迷信家でせうか?。

兎に角、近所の人々は可哀そうにあの財産の終る時が息子の命のつきる時だらうと噂しあつて居ります。

◎旅れ道に迷ふた時は唾を左の掌に置き右の掌にて打ち其多くはれた方へ行けば迷はぬ

◎シヤツクリが出たらばその者を不意に驚かせば直ぐ直る

◎夜分三人伴で便所へ行けば狐にだまされる

迷信を喰物にする
淫祠實見記

秋　風

▲箒一本で病氣を癒す
御嶽樣の行者

自分が十五歲の時隨分と難症の病氣に罹つて、辛つと生命だけは取り止めたものゝ、如何しても全快と云ふ譯には行かなかつた、明暮、佐々木病院の藥餌を呑んだことも幾十日、自分の家が神道を奉じてるので、產土神さまの神田明神にお願を掛けて見たけれども、如何も捗々しく全快しさうにも見えなかつた、さア斯うなると自分よりも母親の方が餘程心配して與れて、出入の者や、昵懇の者に逢ふ度、話する度、何處かに子供の病氣が全治りますやうな靈驗な行者さんは居ますまいかと、始終聞いて居た、自分は之を聞く度に、染々と母親の恩に感じて泣かぬことは無かつた。

すると恰度、夏も是れから暑くなりかゝる時分、淺草の橋場に御嶽さまの行者がゐて、何んな危篤の病人でも決して治らないことは無いとのことで自分は母親に伴れられて、暑い日盛りを人力車に搖れ〳〵、遙々と行つて見た、上野の山にジイ〳〵蟬が單調な聲で鳴いてゐたことを、今でも記憶してゐる、吾妻橋の少し手前を左に折れて大分ゆくと、小な横道があつて、御嶽樣の行者の家は一寸奧行のある玄關構へであつた、入口の兩側には紫色の幔幕を張り、高提灯さへ立てゝ何さま仰々しい風情だ、最早信徒が雲霞の如く詰めかけてゐたが、何れも血色の惡い、元氣の無い人達で、中年の婦人が七八分通り占めてゐた。

行者と云ふのは五十格好のデップリ肥滿た赭面の男後で聞けばお酒が大好きなさうだ、麻の衣服に黑の袴を穿いて、髮を琉球人のやうに束ねてゐる、先づ衆人を神前に集めて、嚴かな調子で呪文を誦しながら、頻りに榊の枝を左右に振る、これが約二十分間許り、御祈禱が濟むと一同を一先次の室に退散させて、改めて

一人々々別室に呼んで、能く病態を聞くのであるが、その有樣は下手な代診じみて可笑しかつた。

扨て其の行者の病人を全癒す法と云ふのが頗る振つてゐる、行者の傍に可愛らしい坊主頭の給仕がゐて、一生懸命になつて、大きな硯に墨を磨つてゐる、行者は精しく病人から容態を聽いた後、變な禁厭を口中に誦しながら、大きな筆を例の硯に浸しては病人の局部に塗りつける、自分は脚部を病んでゐたのだから、僅かに脚部だけ眞黒に塗られたゞけに止まつたが、直ぐ次に來た三歳位の小兒は、何處が病かつたのか、身體中殘らず眞黑に塗れて了つた、何のことは無い、烏の化物か、地獄の牛を牽き出したやうであつた。

行者は、斯うして一月も通へば、乾度全癒ると云つた、他に來てゐた信徒達も、口を合せて必ず癒ると請合つて呉れた、中には此處へ通ふこと僅か十日許りに胸部の痛疼がケロリと全癒たとやらで、正午頃近所の辨當屋から料理を取寄せて、お酒をチビリ／＼飲んでゐた者もあつた。

家に歸つて、片脚墨で眞黑に塗られたことを話すと父親は流石に悦ばなかつた、其後續いて橋場へ通ふ筈であつた。けれど母親が些し病かつたので終に其れ限りになつて了つた。

▲我儘な神樣に仕へる面妖な女行者

白粉の花が眞盛りだつたから、多分九月の初旬頃だと思ふ、小石川白山神社の直ぐ下の所に細かな構へをしてゐる女行者があつた、年齢の頃四十三四、小體軀で、愛嬌のある顔立であつた、室數は僅かに三間、一番廣い六疊の間に、高さ五尺許りのお宮が飾つてあつて、紫色のメリンスの幔幕、お燈明皿、御供物など總てお誂ひ通りであるが、唯だ一寸異つてゐるのは、お宮の下、女行者の傍にお三寶のやうな形した物があつた、女行者はそれで以て神樣に一々お伺ひを立てゝゐる。

そのお伺ひを立てゝゐる時の樣子が頗る珍である、

左手に珠數を爪繰り、小さな鴨脚返の頭を垂れ、口の内に何か呟きながら、件のお三寶を擡げるのであるが輕々と擡がる時と些とも擡がらない時とあるとやら、輕々と擡がる時は神樣が、「然り」と仰せらるる時、些とも擡がらない時は、神樣が「否な」と仰せらるゝ時であるさうな、如何にも其の手つきが尤もらしいので、其處に來てゐる有



難連中は、皆な片唾を吞んで、目ばたきも爲ずに眺めてゐる、自分も子供心に、如何かしてお伺ひが立てられるやうに成つて見度い、人の知らないことが一々自分だけ神樣から聽くことが出來るのだから、恁麼面白いことは無からうと思つた。

扨て自分の病氣は却々の難症だから、九週間絕物を

して信神しなければ不可ぬとのことだ、信神と云つて神様は一體何神様だと聞いたら、化石様と云つて、佛とも就かず、神とも就かず、實は其の合の子で、神様よりも、佛様よりも有難い靈驗があるとのことだ、だからお宮は神様のお宮のやうにし、其れかと云つて佛様にも近いから、珠數を斯うして爪繰るのですと、女行者は信誠らしく述べ立てた、其れを聞かされた者は母親ばかりか、他の者までも成程と感服した、其れでは絶物には何を絶つのですと聞いたら、第一が葱、辣韮、忍辱、其れから西洋砂糖、無花果、柘榴、其他餘り酸い物は何でも不可いとのことであつた。

葱、辣韮、蒜などは、何うせ自分は嫌ひだから如何でも好いとして、西洋砂糖には閉口せざるを得ない若し絶對的に西洋砂糖が不可いとすれば、一切お菓子は喰べられない譯になる、此は抑も如何したら可からうかと小さな胸を痛めてゐると、果して母親は默つてゐず、それでは子供にお菓子を遣ることが出來ませんが、如何致しませうと聞くと、女行者は如何にもと許り點頭いて、白山上の○○屋と言ふ菓子屋でお買ひなされば、彼店では一切西洋砂糖を使用ひませんから大丈夫ですと答へた、序でに自分は何故西洋砂糖は喰べて不可いのですかと聞くと、彼れは外國の物、化石様は外國が大お嫌ひですと、誠に理に中る御説御尤もである、そんなら葱や辣韮はと問へば、臭い物は大嫌ひ、そんなら是れから追々果物屋に出ますが、無花果や、柘榴は何故喰べては不可いのでせう、柘榴などは鬼子母神さまでさへ大お好きな物ですがと問へば、鬼子母神様とは違ひます、化石様は、彼の無花果や、柘榴の、口を開けた形が大お嫌ひだからですとの答へであつた、聞いて見れば一々道理のやうであるが、はて扨て、潔癖な六ケ敷い神様であると心に思つた。

愈よ九週間の間絶物をして白山下の化石様に通ふやうになつた、二十錢銀貨一つ白紙に包んで神前に供へると、女行者は百卷のお經をあげて呉れる、蓋し百卷のお經と云つても、決してお經を百卷あげる譯では無い、先づ自分を横に寢かして、線香が一本たつ間だ

け摩訶般若心經を幾度も〳〵繰返しながら、自分の患部を摩つて與れるのである、更に角小一時間も摩つて與れるのだから、神經でも幾干か好い心持がする、而し九週間經つたら果して全快するであらうか、最初から其れは疑はしく思はれた、此の御祈禱が濟むと、神前に供へてある大きな白鳥德利から御水を與れる、信者は各々小さな德利に其の御水を頂いて歸つて、朝晩患部に塗り、餘つたら之を頂いて飲むのであるが、若しや過つて零しでもしたら、必ず其れだけの神罰があるとやら。

　自分は斯うして九週間の間、化石様に通つた、毎日お水を頂いては飲んだ、或時女中が過つてお水を零した、如何かして女行者に知れないやうにと心に念じてゐたけれど、神様に對して隱すのであるから内心頗る恟々ものであつた、果して九週間目に至つて、全體如何して全快しないのでせうと、聽くと、彼の女行者は勿體らしくお伺ひを立てゝ云ふのに、若しや御水を零しは爲ませんでしたかと、此方を向いて屹と詰ねた、思はず自分は悸乎とした、母親も愕いた顏に紅潮さして、實は然々で御水を零しましたとおど〳〵白狀したあゝ、私の母は誠に正直な人であつた、女行者は眼を塞いで長歎息して、若しや御水を零さなかつたら、今頃は屹度全快してゐたでせうにと、力無く言つた。

　到頭お水を零した神罰に依つて、更に五週間だけ延期された、白山上の不味いお菓子で今三十五日間繼續けなければならないのかと、自分は甚く失望した。

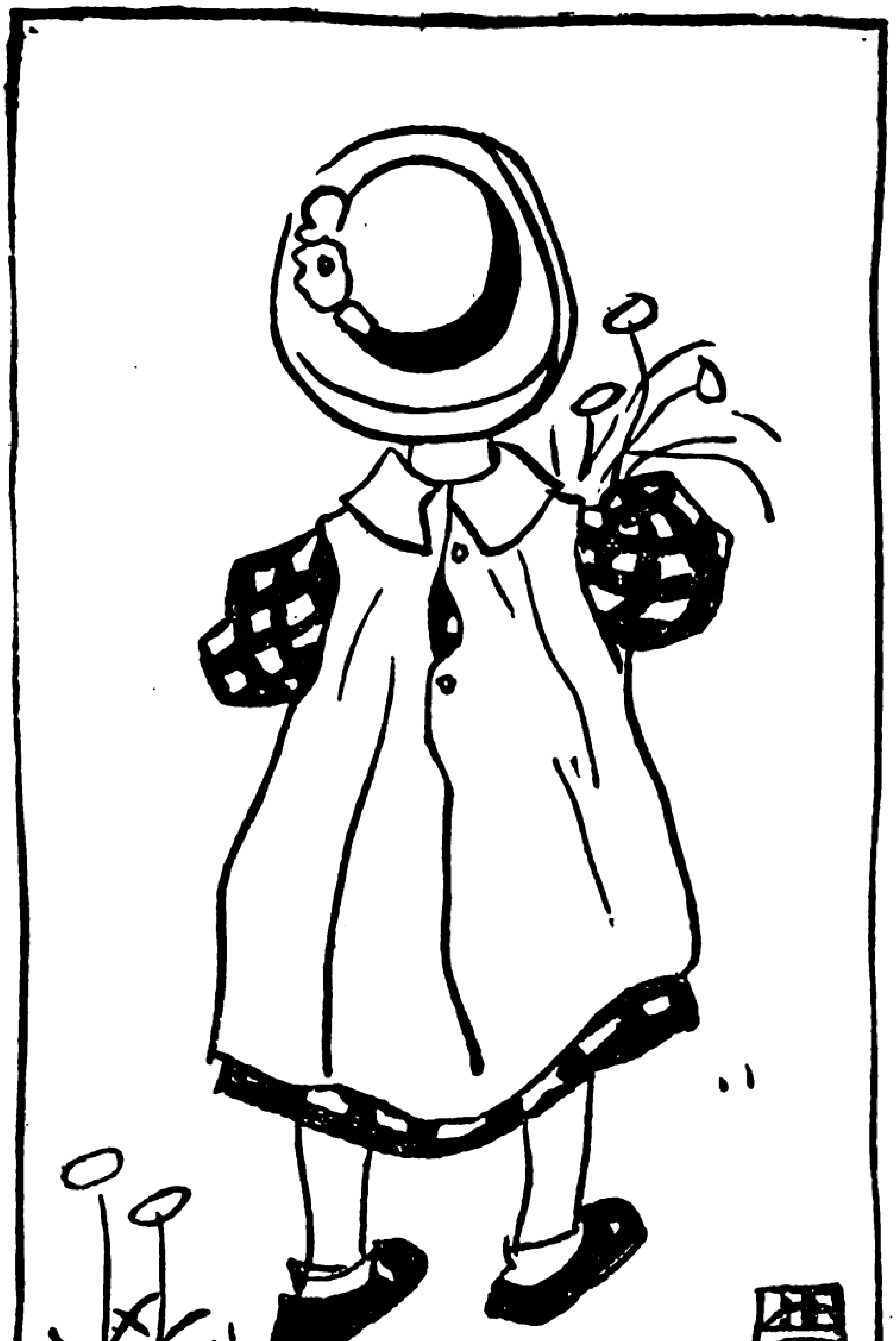
　雖然、女行者は懇々として化石様の靈驗なことを説いて聞かせた、近縣の人で、お腹の中に茸のやうな疑結が出來たのを、醫者が見捨てたにも拘らず、僅か七週間お水を頂いたばかりで全快したことや、或家のお内儀さんが、先妻の小兒を酷めた爲めに、先妻の幽靈が出たのを、僅か五百卷のお經で終に成佛せしめたことなど、新聞で讃めたい位だとまで說きつけられたので到頭今五週間、化石様へ通ふことにした、然しながら同じく毛ほどの效も無かつた。

▲内幕に呆れた不動樣の行者

本郷區春木町に『神道修成派協濟塾』と榜杭が立てゝあつた、その路次を這入ると、突當りに折曲つた家の構へがある、軒に注連繩を張り、靴脱を上ると取附に直ぐ厳しい神段があつて、白の幔幕に大きな紋を染め拔いて、お三寶の上に奏餞が澤山あがつてゐた。御神體は成田山の不動樣と同じださうだ、行者と云ふのは三十七八の未だ血氣盛んな男、髪を長く延し、鬚を生し、風采の頗る昂つた好男子であつた、常に珠數を持ち、如何なる難病の者でも、其の珠數で摩でれば、日を經るに從つて必ず全快すると言つてゐた。此の行者は由來漢學塾の出身と見えて、傍らの机の上に四書や五經や、算木まで置いてあつた、行者で喰へなくなつたら、周易で世を渡らうとの下心が有るらしく見受けられた、病人に對して非常に快活で親切な所から、行者さま〱と其德を慕つて朝から詰めかける者が隨分多く、唯た狹い六疊の間に、何時もぎつしり人が埋まつてゐた、此處は決して化石樣のやうに、お水だの、絶物だのと、そんな六ケ敷ことは無く、唯だ例の珠數で摩でゝる内には必ず全快すると云ふ、極めて呑氣な代りに、何時癒るやら、茫漠たるものであつて、珠數で摩でる時の誦文は『目に諸ろの不淨を見ず、耳に諸ろの不淨を聽かず……』と言ふやうな調子の物で、餘り有難くない代りに、頗る狎れやすい人であつた。

每月一日と十五日とは護摩を焚くと言ふので、夜る九時頃から信者が大勢集まつて來る、割合に婦人が多いのは、行者が快活な故であらうと思はれた、先づ神段に燈明を煌々と燈し、干菓子、水菓子を山のやうに供へ、座敷の眞中に三尺四方もある大きな護摩壇を設けて、其中に杉箸を積みあげ、火を點ずるのである、此時、例の行者は白衣に黑の袴を穿いて劍を捧げると、恰度炎々として燃えあがる猛火を挾さんで。其の向うに僧侶が珠數を揉みながら頻りに行者と問答を初める、何を云つてるのか、其問答が些とも判らぬ、稍々暫くすると、猛火は益々炎々と燃えあがり、行者

の面は愈々物凄じくなる、眉を昂げ、眼を怒し、口一文字に引結び、聲まで荒らかになる、成田山の不動様が乗移るのださうだ、信侶は終に畏れ入つて護摩壇の下に平伏する行者は劍を持つたまゝ威丈高に躍あがる女子供の信者達はキヤッと云つて面を蔽ふ、却々新派の俳優も及ばぬほどの科白である、恁んなことで、中には心から此の行者に歸依する者さへあつた。



或時、雨の降る夕方に行つたら、行者は奥の室にゐて急に出て來なかつた、勝手を知つてるので、奥の間へヅカ〳〵と這入つて見ると、近所の下宿屋の主人と菓子屋の主人とが何か大論判をしてゐたのを頻りに行者が兩方を慰めてゐた、先生なか〳〵口利と見える。

翌日、同じ時刻に行つて見たら、菓子屋の主人が來て、菓子折を置いて行つた暫時すると下宿屋の主人が來て、玉子折を置いて、頭

を下げて歸つた、自分は何となく有難味が減つたやうに思はれた。

其後、又行つて見ると、滅多に留守のことの無い行者が留守で、若い女が火鉢の前に針仕事してゐた、其中に八百屋が來たり、魚屋が來たりすると、一々要るとか、不要いとか、主婦じみた返辭をしてゐた、加之に此女は、ツイ先日まで頭痛がするとか、腰が疼むとか云つて通つて來てゐた女であつた。

何時まで經でも自分の病氣は全快せず、其れに次第に信者も減つてゆくので、何だか張合が拔けて了つて終に其れなりになつて了つた。

▲緋の袴に緋の扇の素晴しき女行者

小石川の大塚町、今の師範學校が建つてる附近に、一年三百六十五日、緋の袴に緋の扇、素晴しい女行者が棲んでゐた、奉ずる所の尊體は畏くも天照皇太神さればこそ近侍する女行者が此の扮裝であつた、弟子には三十五六の男子が兩人、十七八歳より廿一二歳までの少年が三四人、何れも白衣に黑の袴を穿いてゐた、場所が恰度東京の片端で、森や、林や、こんもりと茂つてる間に、堂々たる大きな茅葺屋根、一寸見たところ、如何しても神代の昔を茲に移し來つたとしか受取られぬ、素敵に太い門柱は、既に幾歳の風雨に曝され、玄關前の大楠樹には、蛇でも棲んでゐさうであつた、母屋の茅葺屋根も、既う餘程腐つてると見える、少し雨でも烈しく降ると、家内中ポタリ／＼と雨漏がする位であるが、女行者些かも頓着なく、夏は蠶を飼ひ、冬は機を織り、勿論弟子にも之を勵して手傳はせてゐた、時々信者が來ても、大概のことでは先生直接に會つて與れず、例の黑袴の弟子に祈禱させて、其れで追ひ歸してゐた、自分なども前後三個月通つて、主婦に逢つたのは唯つた一度限り、何時でも例の黑袴にばかり祈禱して貰つてゐた、誠に恐しい見識である、

その祈禱の有樣は、榊を以て拂ひ清めること、普通の神官と些しも違はないけれど、最後に背後に廻つて

腦天に拇指二本當て、凄じき大聲を立てながら力一杯腦天を押へつけるので、其時の痛さ苦しさ、頭の天邊から脚部の爪尖まで沁みわたるやうである。

斯う云ふやうに甚だ見識を取つてるだけあつて、普通ありふれの行者のやうに僅少ばかりの祈禱料には眼を掛けぬ代り、折々眼玉の飛び出るやうな高い寄附金を申しつけるのである。聞く所に依れば、隨分貴顯紳士の夫人達が此の女行者を信仰して、澤山寄附金を仰せつかつたさうである。が、と云つて別段金滿家になつたやうな風にも見え無かつた、今から考へて見れば、東京近くの山莊に引籠つて、多くの男子を弟子に使つてゐた怪物の裏面には、定めて種々の事件が伏在してゐたゞらうと思はれる。

未だ此他に、自分が怪しい淫祠に囚はれたことは隨分多いけれど、是れで一先づ筆を擱くとする、爾きは女なり、自分の母親なども、一通りの敎育はあつたけれど、私の不治の病を全快させ度いばかりに迷ひ迷つたのである、今も時々新聞紙などに惡行者の記事が記載てゐることがある、其度に自分は必ず往時を追懐して慄然とする。

●迷說三世相

▲丁の年に生れた女は眞き　人の妻となる、着物に縁あり若き時期は惡ふ樣になくとも、若て富貴なり、子は澤山あり十四五にてわざわいあり十七八に男てにつき苦勞あり、廿八九にて家を出る事あり卅一二にて福來る三十四五にて又病む、卅七八にてまいなんあり五十二三にて夫につき苦勞あり壽命は七十八也觀音を信じてよし。

▲戊の年に生るゝ女　は諸方より乞はれて貴人の妻となる、子女澤山あり、十二三にて災あり二十三にて家につき爭論あり二十五六にて人にうたがはるゝ事あり、愼みてよし廿八九にて福運來る、三十三命危し、四十二三にて大福來る壽命七十三藥師を信心してよし、

▲巳の年に生るゝ女は　正直にして命長し、偶然に他人の寶を得る事あり、されど子は育ち難し、八九歳にてやまひ、十八九歳にて縁付く廿二三にて福來る、廿八九にて難を被る可からず卅三四にて命危し、四十三四にて夫にうたがわる四十七八にて仕合せよし五十一にて大福、六十三にて愈々よし壽命は八十三也。

○日々の行爲を占示によって定むる婦人

月の雫

先日友達の兄様が亡くなられたので、お悔みに參りましたところが、そこの小母様が「これも前世の約束です、まあ病氣中は人様のよいと被仰る事は何なとでもいたしますから、何も心殘りはありません」と被仰つた。此言葉は時々耳にする事でしたけれども、其何んなことでもと云ふのが至つてあやしいもので、それが却つて害をせなかつたかと疑はれました。中には、

「何々様のお告げをきかなかつたから心殘りでならない」

と申される方をも見受けました。何れも迷信深いことが自ら言葉に表はれるのだと思ひました。

神社に詣ふでてよく目につくのは祈願文です。面白半分によんで見ますが、隨分馬鹿らしい事を眞面目に書き立ててあるので、可笑しいやら、氣の毒なやら、情なくなります。覺えてゐるのを書いて見ませう。

「午の年の女でございます、年中目がわるくてこまりますゆゑお直し下されたく、その替りに三年の間鹽物をたち申候　間どうぞ〳〵一日も早くお直し下されます様手を合せておがみます。」

こんな例は澤山あるだらうと思はれます。これが無學の人のなされ方かと思ふとさうばかりに限りませんから尚更妙です。外日私が歯が痛いので、顎をかゝへて醫者に行く途中、或奥様が「歯が痛むからつて醫者にいつたつてだめですよ」「なぜですか」と目をむくと、「醫者は一時止めの手術をするだけですもの、それよりか地藏様へ願をかけて御覧なさい、もう死ぬまで歯痛は起りませんよ」つて親切にも敎へて下さつた事がありました。

又私の友達の母様に至つて迷信深い方があります。先日も其友が「私の母程迷信深い人はないでせう、朝

起きるときつと夢判斷をして其日の吉凶を占ひますの……よく毎晩夢を見られるつて？……本當に不思議なんですよ」と話されたから、でも一人占ひが出來て樂しみでせう」と言つて共に笑つたのでございますが、一寸其のお話を記して見ませう。

「若し座敷を掃除したと夢見ますと、今日は來客があるからと云つて、常より一層叮嚀に掃除もし、身なりも整へて待つてゐるのです、……えゝきつと待ち甲斐があるのです、常より出入の少ない家ですのに、其都度來客があるので不思議だといつてゐます、然し時にはあてにはならぬのですよ、折わるく誰れも參りません時には乞食が門に立つても、來客の格にして今日も占ひが當つたと安心なさるのですもの、乞食こそ光榮の至りだと笑ふのですよ。」

「昨夜はお團子を食べた夢を見たから、今日は何か過ちをしでかすに違ひないと用心しながらも、何かありさうなものだと其實心で豫期して被入るのです。と果して、あゝ痛い早く何か持つてきておくれとお呼びなさる。何かつて何だらう、はい何ですかとあわただしく顔をだすと、これがわからないのか！とお目玉頂戴するのです。そして、もう一つすんだ、ある事三事だから、後二つになつたと被仰つては、大きな過ちもなく三度過ちがあると、まあ結構と大喜びなのです。いえ本當です、そして過ちをするとの約束も小さな過ちで濟んだのは神佛のお陰だ、それだから平常どなたさんをでも信仰するのだよつて說法なさるんです。」

「よい夢を見た時も、ある事三事といつて三度よい事があると申しました、お隣りでお萩餅を頂いて、親類から安產したといつてきて、今日は頭痛がせなかつたとかう三つ數へあげてよろこびます、この樣にすべて日々の小さい出來事は、夢判斷でおきめなさるのです。」

「其外一擧一動皆緣喜に關係するのです、やれ枕が横になつてゐるから失敗するの、怪我をするのとやかましく云ひたてなさる、夜具を入れる折誤つて枕を落す

と、やがて頭痛がしだしたとあてこすりなさるのですよ、水のある上へ湯を入れるのは死人のあつた時沐浴にする事だ、着物を乾すのに脊の方を太陽の方に向けるとはりつけになる形だから緣起がわるい……とくどくどとその理由を說明されますが、とても數へきれません。」

「よい事で申しませうなら朝釜の下がプウプウ云つてよく燃えますと、荒神樣のご機嫌がよいからうれしい今日は緣喜がよい、とほく〳〵顏です。又朝右夕左といつて朝右の耳が、痒いとその日はよい事をきくと樂しみ、夕に左の耳が痒いから今晚はうれしい事をきくといつて喜びます。其反對の事があると兄のところから病氣だといつてくるのかしらなんて、



つまらぬ心配まで致します。本人はそれでよいかも知れぬが傍できく身が何よりつらうございますわ。又或日、下り蜘蛛がゐたので、拂はふとしたら、イヤそれはふところに入れたが善事があると云はれました。よくまあ氣持ちがわるくないのかしらと可笑しくなります。かと思ふと夜蜘蛛を見ると、夜のくもは親と見ても殺せと云ふ事があるといつて、どこまでも逐ふて殺さねばならぬことにして被入る。殺して何になるのか本統に可笑しいものですよ殺生といふことは大嫌ひだといつて、少々の湯でも捨てやうものなら、おや可哀さうに幾何の小蟲が死んだであらうと被仰りながら、ご自分はどうでせう、ことに殺生するとこんどの世に

不具に生れると始終言つて被仰るくせに……。」

「母樣は眼が時々わるくなりますので、其度に近所にある藥師樣に參詣されますが一度お伴して其樣子を見て驚きました。小さい堂には處狹きまで繪馬やら、灯提やら飾りたてられてゐます。これは皆神に御禮として捧げたものです。其堂の正面の御神水といつて、ほこりで板の厚さが二分位も高くなつてゐる机の上に勿體らしく小瓶を置き、底に滯りのある見るから氣持のわるいのがあります。この御神水こそ多くの人を迷はしてゐるのです。いえ迷つてゐるのです。母樣も其一人で、平氣で有難さうに之を八分目位ついで、指先で目につけなさるのです。そして正體なげに念佛を唱へながら又其の濁水をお飲みなさるのです。呆れて物が云へませんわ。やがて私にはちがまはると思ひましたから逃げ出すと、一寸お前も頂きなさいよ、と斯うなんです。でも私どこもわるかあございませんからといふと、それなら猶よいよ、無事の間にお願ひして置けば……さあ早くお頂きなさいですつて。……絶體絶命、思ひきつて一思ひに飲んだ事がありましたが、思ひ出しても胸がわるくなります。あの潔癖な人が、眼にあの不潔な水をすり入れるとは、考へがないにも程がある、本當に氣印ぢやないかと思ひました。」

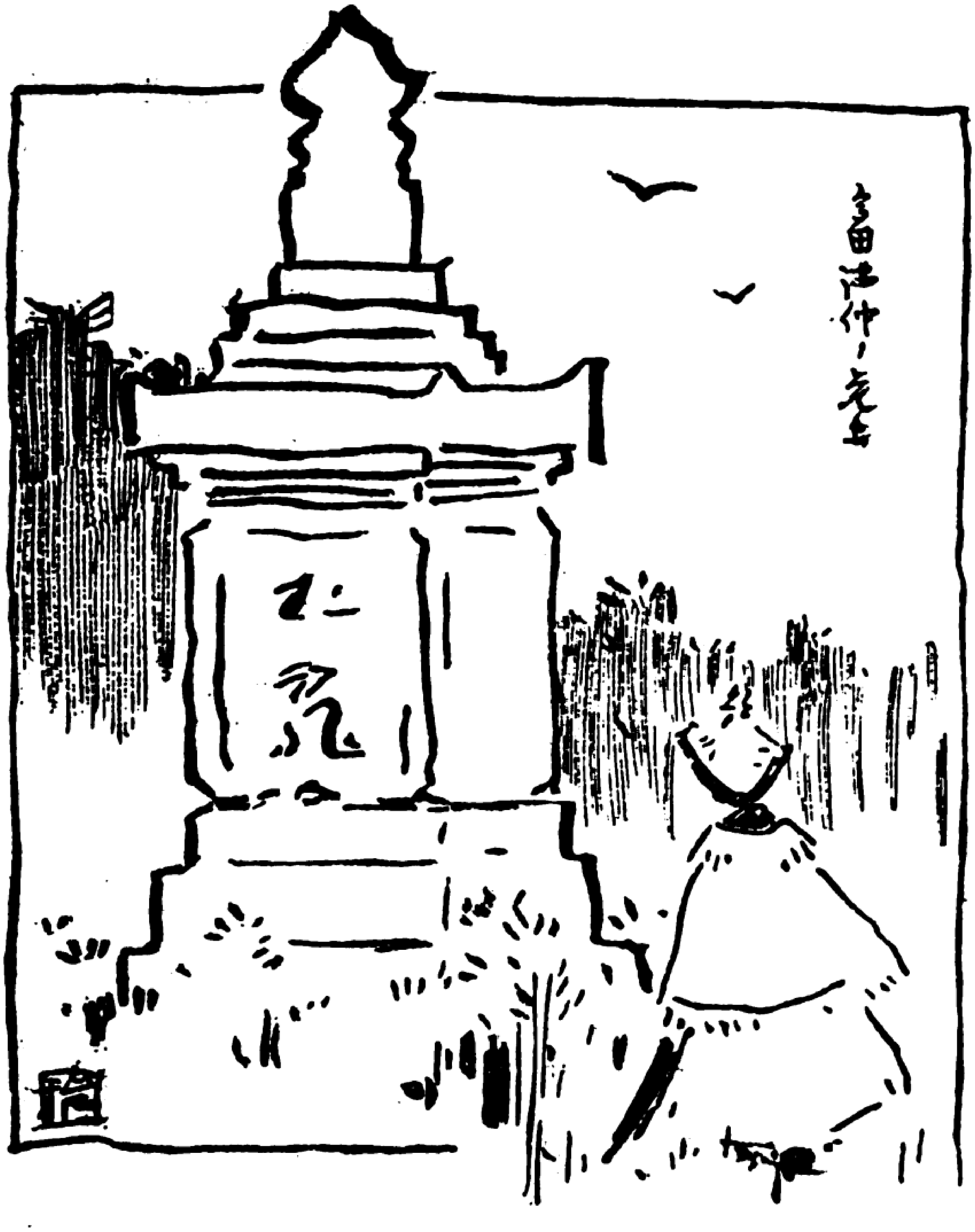
「一度も兄が大病の時、全快しかけて中々はか〴〵しく行かないので、さすがに母も堪へかねて、醫者だけではとてもだめだよ、矢張り神佛の御力を借らねばといつて、多くの人が我れも我れもと御藥のお差圖を乞ふ權現樣が三里在にあるので、母樣は三里の道も遠いとも思はずご自分が出かけて神藥のさしづを受けて歸られました。其藥が妙痴奇珍で、大工の使つた鉋のよく使ひ古して手垢のついたところの木を何匁やらを煎して飲めば必ず一週間後には靈驗があると云ふお告でした。そこで撰りによつて古い汚ないのを煎じて飲ませたのですが、御利益ですか何ですか病氣は段々快くなりました。なか〳〵奇妙ですよ。」

　あの壁に貼つてある紙は何んですかと私がきくと、

「はあれですか、云ふのも耻しいやうな事ですよ、

私の家はこんな處にありますので、蛇が時々座敷をゾロゾロはひますの、それで蛇の來ないまじないに歌をかいてあの通り家の周圍へはりつけてあるのです、：：いえ、でも矢張り折々は見つけますよ。」

「其外母は何にでも迷信を言ふのですよ。夜目遠目傘の内（四目十目かさのうち）といつて、男女の三つ違ひと九つ違ひとは不縁のもとだと申すでせう、で兄に義姉さんを貰ふ時でした、あの兄と相思の仲の美江子さんね、お氣の毒にも十八でしたでせう、兄は二十一といふ、どうしても三つ違ひですから、母が反對で頭で話にもしなかつたのですつて、兄も落膽して其後一年餘りはうつ〳〵で過しましたのを、とう〳〵勸めに勸めて今の義姉さんを貰つたのです。」



「又可笑しいのは兄の新婚旅行の折温泉めぐりときめたところが、母様が新婚の人が温泉へ行くと何時か不縁の悲しみを見るからといつて止めました。あまり不吉な言ですから快

く中止となりましたが、あなたも來らん日の蜜月旅行にはお氣をつけ遊ばせ」ですつてネ‥‥。

「これは偶然でせうけども、不如歸の浪子さんはあの通りの結果‥‥、其外實際例は澤山ありますよ。」

私の小首は傾いて。

「ホ‥‥妙に考へ込みなさるのね。」

それなら海水浴に〇〇海岸へ行きたいといへば、

「彼處は毎年三四人は溺死者があるからよせ」と被仰る。

人が死ぬからつて私等迄死ぬといふことはないですよといへば、

「だつて縁起がわるいわ、死人がひつぱるといふから‥‥。」

遂に樂しき旅行もお流れになつて仕舞ひました。

そして今年漸く温泉めぐりを致しました。出立の折にはもう晩婚旅行だから構はないだらうと母をも大笑ひさせました。

其他料理屋などの家人には、夕方でも、お休すみなさいませとか、お仕舞なさいませとかは云ふものでない、こんな商賣は夕方からがはなだから、そんな言葉を使ふと縁喜がわるいと被仰る何と言つたらよいでせうときけば、「お始じめなさいといふものだと教へて下さる。そのやうな、嘘のやうな事、信じられもしないですわねえ。

△眞珠の流行

昨年以來眞珠は金剛石や紅寶石と共に一般の婦人から非常に愛好されて來ました、殊に贅澤な向になると種類の異つたいろ〳〵の寶石を集めて装飾する事が好まれ指環、襟留、帶、帶留の裝飾は總て眞珠で造り然も眞珠は形の大きい色の美しい同じ粒の物を賞美するので天然眞珠の立派なものを得ようとするには餘程苦心を要します

眞珠の價値は何所にあるかと申しますと第一が格好の善惡、第二が光澤、其の次が色合で、之れは銀色若しくは白色の物より稍飴色に近い方のものが價値があります、天然の珠と養殖眞珠とは何所か相違して居ると云ひますと、珠の表側及び全體の光澤が餘程違ひます、表面から見ますと容易に素人には判別されませんが、裏から見ますと養殖眞珠は質も光澤も非常に劣等で、一見してそれと判ります。

愚俗迷信の禁厭

◎想ふ人の夢を見度いと思へば、衣服の袖を裏返して寢るのである。

◎遠く他郷に出で、故郷の戀しさを忘れるには自分の家の竈の土を持つてゆく。

◎可厭な客を早く歸らせるには、箒に頰冠りさせて立てかけて置くか、又は下駄の裏に灸を据ゑる。或は障子の桟へ煙管を掛けて置く法もある。

◎惡夢を避けるには、貘と云ふ獸類の形を紙に書いて、枕の下に敷いて寢ると、其貘が惡夢を喰つて仕舞ふと言ひ傳へられてゐる。

◎盗賊の這入らない法は、毎夜必ず手洗盥を伏せて置くのである。

◎鼠の出ぬ禁厭法は、床敷の下の土で鼠の穴を塞ぐのに限ると云ふ。

◎赤兒が生れた時、胞衣と一緒に筆墨や縫針を埋めれば、其兒が生長した後に、必ず筆蹟や裁縫が上手になる。

◎小兒の寢小便を止めるには、紅紙で鳥の形を剪つて、七夜の間、小兒の寢床の下に入れて寢させる。

◎産婦が難産で苦む時には、蓮の花一片に「人」と云ふ字を書いて呑ませれば効能がある。

◎産後には、産婦は決して合せ鏡をしては不可い、又決して高聲で話しては不可ない。

◎妊婦が小鏡を一面懐中に入れて置けば、孕兒は恙なく生れる。

◎樹木に蟲が附かない禁厭法は、其樹の根に蠶の蝶を埋めて置く。

◎若し樹木に蟲が附いて仕舞つたら、其樹の下で法螺貝を吹くのである。

◎果物を盗に喰はれないのには、果樹に人の髪を掛けて置く。

◎玉蟲を乾して蔵つて置けば、衣服が殖える。

◎暗夜に戸外へ出ると鬼に襲はれることがあるそれを除ぐには目籠を掲げて出るが可い。

◎人参を軒頭に釣して置けば、風邪を引かない呪法になる。

◎赤毛氈一尺許り截つて、枕の下に布いて寢れば、夜る夢に魘はれない。

◎嬰兒の枕頭に鋏を置くのも、又犬張子を置くのも、皆な魔物を攘ふ呪法である。

◎鼬が雞の巣を狙つて困る時は、瓢簞を雞の巣に釣して置くと宜い。

◎叢中に這入つて、蛇蝎に咬まれない法は「伊右衛門伊右衛門」と唱へるのである。

◎犬に咬まれない爲には「虎」と云ふ字を書いて兩手を擴げて見せるに限る。

◎猫が逃げた時には、暦の其日の所を墨で塗つて置けば、屹度歸つて來る。

◎待人を呼ぶには、節のある小楊枝三本を、一本は紅に、一本は墨に染め、一本は生地のまゝで、手紙の結の處に刺して贈るが宜い。

◎餅を長く貯蓄へて黴させぬ法は、餅を入れた桶に串柿を一本入れて置く。

◎酒席で惡醉のせぬ法は、酒宴の最初に口の中で「水々々」と三遍唱へながら、一盃を一口に飲干して他人に獻盃するのである。

◎紛失物があつた時は、紙を捻つて犬の足を括つて置けば、間もなく出て來る。

時世に取残された奥様

浮　雲

「奥様お魚屋が參りまして御座います。」

例によつて例のお化粧室に先程からお髪計り弄つて入被るお傍へ參つて斯う伺ふと。

「そうかえ今日は大變早いねえ何が在るの」と常に無い優しいお言葉何だか嬉しい樣な心持がする。

「色々在るそうでございます、今日は近頃に無い宜い漁だつたそうで御座いますから。」

「色々在るのは當り前さ、何でも宜いから買つてお置き。それから今日は土用の丑の日だから鰌も序に……」

「でも奥樣今日は鰌も鰻も大變お高價そうで御座います。」

「高價くたつて宜いよ、どうせお前にお金を出して貰ふんぢや無いから。まさか百圓も二百圓も爲るんぢやないんだらう？」と恐わい御目附で御覽に成る。今日こそは御小言無に過そうとあれ程心に決めて置いた甲斐も無く餘計な口出して朝から此の始末。實に縁喜でも無い。こんな處に長居は危險千萬……何時如何な爆裂彈が破裂するかも分らない。宜い加減に引拂つて臺所に退軍する。

「お魚屋さん何か在るの。」

「へエ毎度有難ふございます色々有りますがナ。鯛に鮪に鰹に鯖にエー海老に鮑に……」

何に爲たら宜いか知ら？　奥樣一寸御覽遊ばして下されは宜いものを、お魚屋などの前に出るは家の恥身の肩狹しの何時も〳〵私に計りお任せ。それもお氣に召せば宜いけれど、今の今迄たつた一度も御機嫌宜く召し喰つた事の試無し、ヤレ今日のは不味いの臭いのと一から十迄お小言づくめ、實にやり切れや仕ない……仕方が無いから、鯛五尾計りと鰻三十錢丈買て置く。一々丁寧に洗つて居ると先程のお化粧室から奥樣の疳高いお聲で

「花？　花？　花は居ないかッ？」

あゝ如何仕やう此の儘行けばお魚は皆猫の御馳走に成つて失ふ。と言つて遲緩して居てお小言頂くは猶恐い、早速お伺い致さずばと何もかも一緒に掴んで戸棚の中に投げ込んだ時又しても荒々しいお聲で

「ほんとに花は何して居るんだろッ？」

「ハイ只今‥‥」も口の内恐々お室に伺ふと嫣然とも遊ばさず一生懸命鏡と睨みつ見して入被るまあ長いお髮結だこと、一體何時迄懸るのか知ら？　私なんかの三人前長くお結び遊はす

「何か御用で？」

「用が在るから呼びました。花、昨日私が言付けて置いた事もう爲ましたか！」何の御用だつたつけと一寸躊躇つて居るうちに

「實に困るよあれ程言付けて置いたのに。ホラ紫陽花の事、紫陽花の事。御前の忘れ屋にも呆れてしまふよ、此度からもつと氣を付けておくれ？」

「‥‥斷然失念致して居りました相濟みません直樣致しますんで‥‥」と立ち上る私を爲渡御止め遊ばして、

「花、今日の私の髮は常よりも宜く出來たらう」とそはこの御自慢話與高々と仰せらる、兎角煽動に乘るお性なれば早速御承諾申上げて、

「實に宜くお出來遊ばしました丁度繪に見る樣で御座います、お黑ひお髮に今日の蒔繪のお髱櫛は又特別で御座います。」

「まあいやな花だこと、如何して此の頃はそんなにお世辭上手の剽輕者に成つたろうねえオホヽヽ、それから今の紫陽花は半分丈取つて置いて後はお隣の山本樣に差し上げてお出で。昨夜言つた樣に今日は土用の丑の日でございますから今朝八時半迄に軒に倒にお釣しに成ると決して流行病にお罹りに成りませんつて。分つたか？　八時半ですよ」今のお髮の一件で御機嫌も稍々快復した樣子早速御用畏つて庭に出る。

さまで廣いと言うのでも無いがお手入の足らぬ故か何處もかしこも草だらけ、何だか氣味の惡い程だ、先達て旦那樣の御友人が被任して

『此の草茫々たる處が大に氣に入つた、實際町端に限るね』なんて言つて彼在したのも無理は無い。澄み渡る空青々として一點の雲も無い心地よさ朝微風纔に庭の面に戰ぎ百千の草の香に滿てる中を足元輕く露蹴散らして行く。マア綺麗だこと、頭重げの紫陽花のはなー。一本二本と手折つた花を露落さじと手元大事に引返す。花の半を束にして檐の荵に程近く掛けて置く、ヤレヽヽこれで一安心、斯ふして置けは流行病の襲ひ來る氣遣も無し。無病健全此の上なしだ、毎年缺かさず斯う遊ばすのを昨年は初とか言う女中の時間を間違へた過失でお嬢様が



赤痢にお罹り遊ばしたとか、奥様のお怒斜ならず遂に初さんはお暇使はされて今では田舎に歸つて百姓仕て居ると小さい坊様のお話だつた、まあ何と言ふ御幣擔の奥様だらう毎日々々今日は何も爲さぬ日、言はぬ日、と朝から晩迄ならぬ〳〵の一天張、それにお可哀そうなのは旦那様、何事もそうか〳〵と奥様のお尻の下に計り立つて入被る。さぞ御不自由な事だらう。元々御兩人は相思の間で被在して遂に御兩親の許可をも得ず御婚儀遊ばしたとか、今では旦那様も後悔して被在る御様子、何とかして奥様の迷信を解いて差し上げ度く……オヤ〳〵私とした事が、まだ〳〵こんな入らぬ心配、早く山本様に花を持つて參らなければ初様の二代目爲るかも分らない、そうなれば今迄の苦勞も水の泡危險！　危險！

………………戰ぐ朝風に　　御胸を開き
夕榮の御空に　　望みをよせて
神の御姿　　見るうれしさ。

一斷。一續。風にもれ來く讃美歌の聲。未だ朝の禮拜が終らぬらしい。當代のクリスチャン界に時めき給ふ山本様の御夫婦この紫陽花御覧じたらさぞかしお笑ひ遊ばす事だらう。いつそ思ひ切つて……抛擲て失ふ……否々其れでは折角の御心を無にして了ふと言ふもの。そつと臺所に廻つて御飯焚のお竹どんに渡して歸る。

△

思へば戀し故郷の空！　父母如何にお在します？　數ふれば已に七ケ月の昔で在る。初霜漸く野に置め初めて吹く風稍々肌に覺ゆる去年神無月の末つかた、十有七年住み馴れし家を棄て山を棄て友に別れて人の情の紙よりも薄しと聞く此處都會の土地を踏む身となりしは。

村一番の金滿家と呼ばれて總ての人の羨望の的と成つたさしもの財在りし我が家も榮枯盛衰まゝならぬ世の、一朝嵐に吹き覆されて佗家田畑は申すに及ばず、

有りとあらゆる物品は人手に渡り、果ては荒き風にも當てじと育てられし此の私さへも、幾百里と隔つる此處に自活の道を求めなければならぬ事と成つた。

住み馴るれば異國も故郷に勝るとか、昨日今日は漸々水道の水にも馴れ、外を廻る下駄齒入屋の鼓の音にも村の祭のそれかと疑はぬ様に成つた。然し思はいつも故郷に走せて夜な夜な聞ゆ鐘の音、夢見ぬ晩も幾日在つたか計り知れぬ、定まる緣と諦め乍らも、昔は幾多の人の手を煩はした身が、百事萬端一身に引受けて、五人の御家族お世話申す今の



辛苦一通りでは無い、奥様とては何の定まる御用もなく朝な夕なのお化粧に時を費し給ひ時には文机に向はせらるゝも彼の三十一字等言ふ事は夢更遊ばさず、雜誌の口繪、演藝便りの記事、文句を少し計り御覽遊ばす丈それも三十分と立たぬ間に止して御しまいになる、先づ御用と申せば毎日御召換して、穴守稲荷に御日參遊ばすのがお仕事、其都度稲荷のお水を〳〵と後生大事と頂いて入被る。先達て私が日參の御代運を勤めた時、頂いて來た水は新しいから効が無いと大層な御立腹早速御自分で取り換へて入被した。あゝ

何たる迷信ぞ。腐敗した水に何の効が在る？　心に泣いて驚いた。

夕方寂しく雨降り出す。今年は如何した事か土用に入つてもまるで梅雨のころの様だ。折角糊した御召を濡してはと急いで取り入れて居ると。

「花、お豆腐を買つてお出で。」と投げ出し給ふ二錢銅貨、又々御使？　今やつと御夕飯の用意も出來上つた處なのに又豆腐も拵しらへるのか知ら？　宜い加減に我慢して下されば宜いけれど……何時迄ぐずぐずして居たつて仕方がない、さつさとお召を袖だゝみにして朴木歯の下駄引かけて外に出る。

入相告ぐる鐘の音遠く聞ゆる五時半過、町は何となく騒うしい。往き來ふ人のさゞめきも語り合ふ子供の笑ひ聲も氷持つ我右の手に集る？　心地して立並ぶ軒の下を身も細ふ――今更乍ら五尺の體恨めしい――傳ひ行く此の様御両親の御覽じたら何と思召すだらう、我身乍ら荒び行く様悲しますに居られないものぞ。然しこの世の榮華は時の夢！　消え失せては何の役にも立たぬ。花に百日の香は無しとか、いつかは實を結ぶ時も來るだらうと遠き未來に望を寄て恥づる心を押し靜めつゝ豆腐屋の暖簾くゞれば迎ふるお内儀の聲も勇ましう、

『入被いましッ。』

何時の間に止んで了つたかもう雨の氣も無い、白い浮雲の間々から美しいブリユーの空が窺いて居る計り。然し思に矢張元來し如く縺れ縺れて湧いて來る。勝手口近く歸り付いた時美しいマガレットの令孃三四人にはたと出合した。あゝあの人達が羨しい！　それより我身が恥しい一時に起る感じのこもごも、引く手も遲しと明くる戸ガラリ、ほつと一息ついて井戸端近く來て見ればこは如何に不思議！　不思議！　たつた今乾いた計りのお召が盥の中に行水して居る。長火鉢の傍に卷煙草薰らして被在る奥様に仔細伺ふと

『そうさ彼の着物は洗ひ直して貰ひませう。あんなことして困りますよ……袖だゝみなんか。殊にこれから出世仕やうと言う子供の着物ぢや在りませんが花が咲

いて實を結ばうとするのを壓潰すのと同然ですよ。』

『以後はきつと注意致しますで御座います。』

『お前の言譯は何時でも以後は〲だ。』ふいと奥に御這入りに成る。

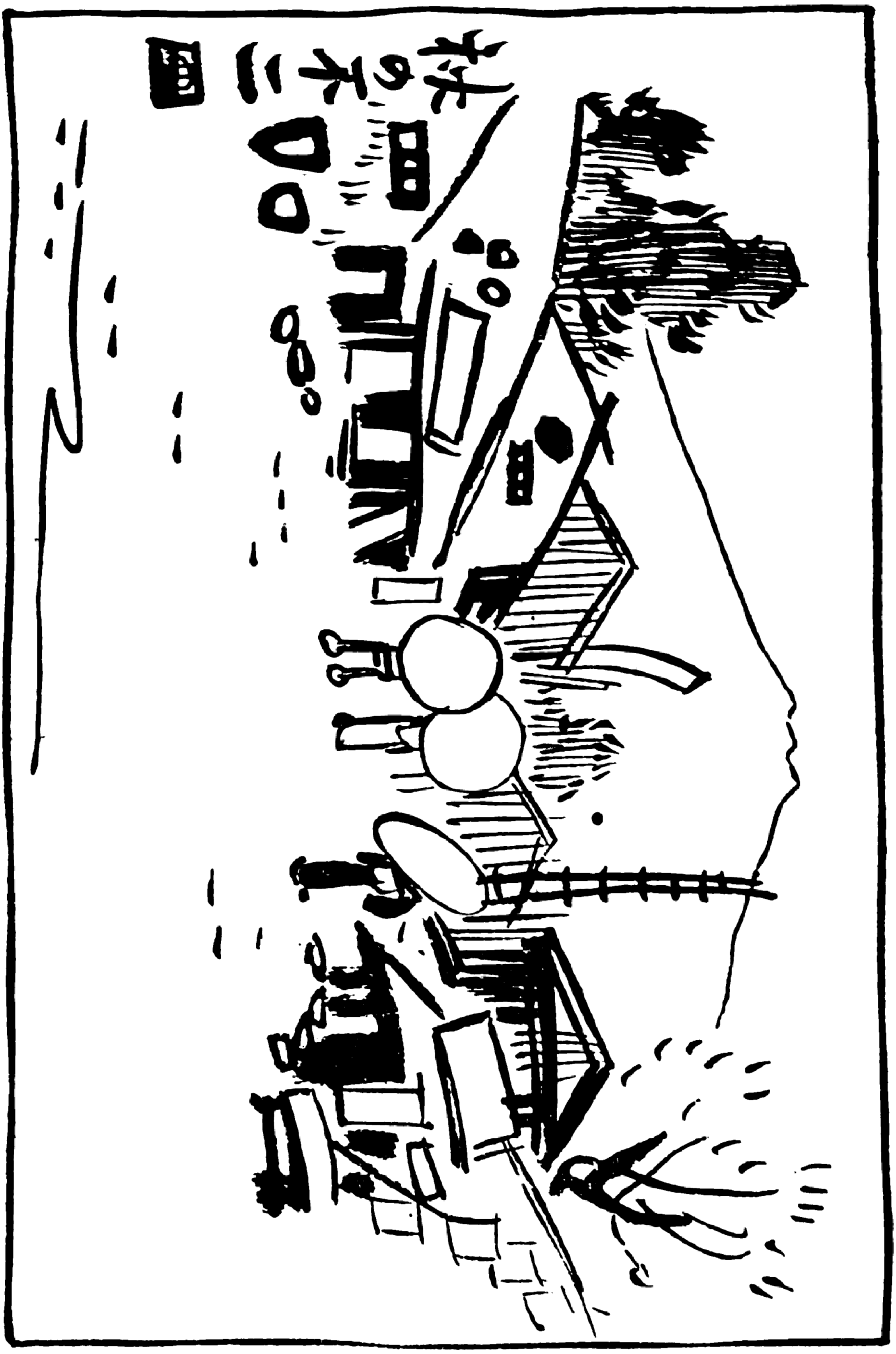
『…………。』衆々着物を袖疊にすれば出世が出來ぬからとお言付が在つたのをつい一寸の間と思つてあんな事をして、これも身の錆、御小言頂いても致し方がない。夜に入つてから御召を洗ひ直す。九時過皆様は御一緒に御床にお這入りに成つた、私は今夜もとても眠れそうも無い、十一時――十二時、時計のセコンドは徒に廻つて居る。雨戸を一寸繰つて月の光にバイブル讀んでみる。

『…哀しむ者は幸なり、其人は慰を得べければなり貧しきものは幸なり、義しき事の爲に責めらるゝ者は幸なり、天國は即ち其人の者なればなり…。』稍々解し得たる様に思ふ。

今日も斯くして終つて了つた、無趣味なる生活哉、嗚呼!。俄然夜の寂寞を破つて鐘の音ゴーンと一渡り鳴り響く。何處の寺? 其の鐘守も未た眠に付かぬだらうか。今宵一夜其の人と語つて見たい…?

△火に關する迷信

◎二人で火を吹ながら起すと口が突出て鹽吹口のやうになる
◎柿の木の薪で煮焼するとその者は癩病になる
◎竈の火がブツ〱音のするのは荒神様がよろこぶので福が來る
◎火を燃やしながら吹くと客が來る。
◎夜火を弄ぶと寝小便をする
◎大根をやくと爐の様がくづれる。
◎正月の飾海老を吊して置くと火事に合はぬ
◎午の日に火事が起ると大火になる
◎夜中鷄が鳴くと近事に火事がある
◎刀豆を糠味噌につけて置くと火事を除ける
◎火事に鴎が來ると大火になる



愚俗傳說 迷信雜俎

自然の暗示

以下記する處の傳說は古來各地に言ひ傳へられ専ら愚俗の迷信を誘ひ來れるものにて牽强附會の甚だしきものなり。苟くも二十世紀の敎育を受けたる諸孃はこの俗說を一笑に附するに止まらず、進んで斯る迷信を打破するの擧に出でざるべからず、これには、以下の傳說に反抗したる行爲をなして以て大に愚俗の迷夢を覺破するを要す。

▲鶴の聲を聞けば其聞く人の身に悦事がある。

▲雁の聲を聞けば遠國から音信がある。

▲鵲が故なきに飛去れば其家に禍がある。

▲鷄か家の前で鬩合をすれば其家に口論或は紛爭がある。

▲鼠が每夜疊の間の塵埃を掻き上げる時は家内に悦事がある。

眞理と俗說

近時流行の催眠術

△催眠術は昔からある

催眠術は今より百四五十年前に墺太利のメスメル氏が發明したもので、其の名を取つてメスメリズムと稱してゐるが、これと同じ性質のものは、尙ほ其の以前よりあつたものである。埃及、巴比倫等に行はれた降神術、或は東洋諸國に行はれた色々の魔術や幻術、乃至は魔女や巫女の爲た事などは、皆な催眠術の一種である。たゞ古い時代に於ては、其の原因が知れなかつたから、何人も神佛或は惡魔の所爲だと思ふて居たのである。それがメスメル氏の時代に及んでは、施術者の身體に有する一種の電氣が被術者の身體に感通して此の作用を起すものと解するやうになつて來た。然るに其後學者の研究に依つて此の思想が又一變して、此頃では、此の現象は施術者が加へる力に由るものでなくして、全く被術者自身の神經作用に依つて生ずるものと分つて來た。

▲鼬が多く集まつて鳴く時は其家に必らず不祥の事がある。

▲他人の許に往く時に鼬が道を横切つて走れば先方の人は不在である。

▲鼠が梁を渡る時に落つる事があれば必ず家業の事に過失がある。

▲病人のある家に鼠が水桶などに落ちる事があれば病氣は必ず全快する。

▲耳の痒ゆいのは吉事を聞く兆。

▲眉根が痒ゆいのは戀人に逢へる前兆。

▲嚔をするのは人から惡口をされて居る。

▲吃逆をすれば人に物を呑まれて居る。

▲元結が自然に解けるのは戀人に逢へる前兆

▲朝の中障子に鳥影が映れば其日に珍客が來る。

▲蜘蛛が垂下れば戀人の來る前兆衣通姫の歌にも「我が背子が來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の行ひ今宵しるしも」とある。

▲螢が家へ飛入れば明日來客がある。

▲河堤が破損れたのを見れば家に不祥の事

△催眠術の仕方

催眠術の普通の仕方は、先づ被術者をして安樂な椅子に凭らしめ術者は之れに向つて坐り、兩人の間は殆んど相接して互に手を執ることができる程に位置を占め、次に術者は自分の姿勢を莊重にする事に注意し、それより被術者の手を自己の拇指と他の指との間に挾み、兩眼を以つて相手の顏全體を凝視め、同時に被術者にも矢張り術者の顏の咽喉部、胸部の或る一點を定めて凝視めしめて兩人の手の溫度が平均するのを待つ。溫度が平均したらば、術者は其手を被術者の肩の上に加へ、それより徐々に手を移して、腕に沿うて指尖に至る迄、極めて接近して其の皮膚を離れず着かざるやうにして輕く撫で下す。五六回位此のやうにして、次に顏面から胸部へかけて矢張り同じやうにする。此時には、兩手は並行密接せしめ、皮膚より一二分位離して上より下に撫で下すのである。

右の方法を行へば、其人は遂に催眠狀態に入るのであるが、此の方法は強ち一定したものではない。メスメル氏などは、被術者に或る一點を凝視させて、其の目前で手を上下してゐる丈で、能く其人を催眠狀態に導いたといふ事である。又或は一本の樹を立てゝ置いて、其の樹の下に入る時は必ず眠ると告げる丈でも、其人がそれを信じて此處に到れば必ず眠りを催

が起る。

▲燈火を三度吹いても消えない時は其儘捨てゝ置くがよい吉事が來る。

▲爪に白い斑紋が出來れば衣服を得る前兆

▲帯が空解すれば悦事がある。

▲帯が自然に結ぼれば悦事がある。

▲鏡に汚斑が出來れば女子に凶事がある。

▲盃に虫が這入れば吉。

▲優曇華の花が咲けば吉兆。

▲夕方子供が噪げば翌日は雨。

▲家棟に鳩が鳴けば不幸の前兆。

▲樹木の枝が交つて密着すれば家運隆盛

▲小指の爪が折れゝば不祥の前兆。

▲竹に實を結べば飢饉の前兆。

▲甲子の日に雨が降れば長雨續く。

▲雀の歩るくのを見れば吉事がある。

▲煙管が折れゝば吉事來る。

▲人の許に相談に往て不在だつたら二度往ても纏まらぬ。

▲床柱が破れゝば悪事が起る。

▲燐寸の首が脱ければ家に病人が出來る。

すのである。

△自己の催眠術

人が催眠狀態に入る時は、心動や脈搏も少しく變り、手足もやゝ強直を呈する等、生理的狀態が變動する上に、其の思想、感覺及び擧動等が著しく變つて、全く施術者の命令通りになるのである。これは甚だ不思議な現象ではあるが、無論神佛の所爲ではない。又一時は一種の電氣作用だと言はれたけれども、先の樹を立てゝ行ふ例に於て、それを信じて樹の下へ行けば効驗あるが、さもなければ効驗がないといふ所を見れば、電氣作用ではなくして、却つて自身の信仰によつて生ずる一種の作用だらうと思はしめるのである。他人の手を假らずに自分で或る一物を凝視める時は又同じ結果を生ずるのを見ても、原因の被術者自分にある事が分る。一物を凝視めてなすのを自己催眠術と稱してゐる。其の方法は、光ある或る金屬をとりて左手の指の間に置き、之を自分の眼より一尺ほどを隔てゝ、且つ其の額よりやゝ高き位置に据ゑ、兩眼を以て之を凝視めて十分筋力を要する様になし、其の全心を此の一點に聚注して暫時凝視するときは、やがて催眠の境に入るのである。此の方法も必ずしも一定しては居らない。或は鏡を用ゐても、或は時計を用ゐても、其他樂器によつても、又は摩擦によつて

▲鯉が跳れば雨が降る。
▲鶏が行水すれば三日の間に雨が降る。
▲朝鳩が鳴けば雨が降る。
▲拝殿の鈴が空鳴りすれば天變地異がある。
▲灰神楽をすれば吉事がある。
▲燕が巣を造れば其家が繁盛する、
▲葦切が高く巣を造れば大水がある。
▲小鳥が低く巣を造れば大風が吹く。
▲家へ歸る路で杜鵑を聞けば幸福がある。
▲宵の明星を見附れば悦事がある。
▲烟草の烟が輪になれば悦事がある。
▲筆の穂が抜ければ待人來らず。
▲風無きに燈火が消えれば家が衰微する前兆である。
▲鼠が居なくなれば其家に火事がある。
▲櫛を落せば苦勞を去る。
▲指輪を落せば夫に別れる。
▲正月元日に曇れば飢饉である。
▲冬雪が多ければ豊年。雪が少なければ凶年の兆。
▲朝虹が立てば雨が續く、夕方虹が立てば も行はれる。

△眠中の變體擧動

催眠状態を委しく述べて見ると、最初には感覺も思想もまだ格別變化を現はさないが、たゞ手足が少しく遲鈍になつて來る、次には半睡の状態を現はして、視覺がやゝ疲勞を覺え、眼瞼が重くて、意の如くならなくなるが、それでも他の感覺はまだ依然としてゐる。それが尚ほ進むと今度は催眠の境に入つて、意思の働きは止み、不覺無識の状態を現はしてくる。それより進むといよ〳〵全く催眠の状態に達して、此時には不覺が一變して却つて一種の知覺があるやうになり眠とも覺とも附かない中間の状態を現はしてくる。それが更に進むと眼中の知覺が一層判明となつて、所謂神通眼を開き、普通人には到底分らない事柄を明瞭に悟るやうになるのである。

或人が一人の農夫に就て實驗したところに依るに、催眠状態に入ると、始終囈語ばかりを吐き、眼は閉ぢないけれども殆んど眠つてゐるやうになり之れに水を與へてこれは泡盛の上酒だといへば、一口飲んで辛い〳〵と叫びながら口をゆがめ、又極く冷たい物でも之れは熱い物だと告げて與へれば、矢張り熱い〳〵と叫ぶなど、なか〳〵奇妙な現象を現はす。又他の實驗によれば、被術者に向つて或る事柄を問ふ時は、假令それが其者の知ら

旱が續く。
▲尺取虫に體を這はれると夭死する。
▲魚が躍って舟へ這入れば吉事がある。
▲蛸が卵を擁へば大雨が來る。
▲夜の空が赤く見えると大地震がある。
▲葬式に逢へば吉事がある。
▲蜂が軒下に巣をつくれば吉事がある。
▲芭蕉が枯れゝば家が斷絶する。
▲家を出る時履物の鼻緒が切れゝば不吉。
▲箸が折れゝば貧困に陷る。
▲婚禮の日に雨が降れば死ぬ日に雨が降る
▲障子が鳴れば貧乏する。
▲枇杷の木が庭に生れば病人か絶えぬ。
▲燈火に華を生じたら吉事がある。
▲鷄が夜中に鳴けば病人が出來る。
▲蜘蛛が朝の中に垂下れば金が這入る。
▲鴉に糞をかけられゝば出世をする。
▲家の中を蜻蛉が突切れば吉事がある。
▲家の中に蝶が舞込めば悦事がある。
▶蓑蟲が軒から垂れ下ば病人が出來る。
▲梅干が腐れば凶事が起る。

ない事も能く問ひに應じて答へるのである。けれども物の名稱を言はしむる事は甚だ困難のやうで、例へば、被術者に向つて「橋が見ゆるか」と問へば「見ゆる」と答へるけれども、「その橋は何といふ橋か」と問ふても「初めて見たから知らない」と答へるのである。又被術者は催眠狀態にある中は、少しも身體の位置形狀を變じないが、施術者が特更に之を變せしめやうとするのは極めて容易である。例へば「お前の手を動かぬ樣にしたどうだ動くまい」といへば、「動かない」と答へるが、更に「それでは動くやうにしてやらう」と言つて其の手を取り、少しく搖り動かして後、「今度は動くから試めして見よ」と言へば、被術者は自分で手を振つて見て、「動く」と答へるのである。但し此時も被術者に告げずして只術者の意思ばかりで動かさうとするのは又困難である。

△被術者自身の實驗

更に催眠に入りたる者自身の實驗を調べて見るに、或人は、「施術の當初と命令を與へられる時の外は、全く無意識で、自分の身體のある事さへも分らない、そして催眠中に命令のある時は、其の聲は天外より落るやうで何人の聲であるか、又何の爲めに言はれるのかもわからず、從つて是非善惡等を考へる事もできない、そしてお前の手は動かないと言はれゝば、動

▲雨天が厠の軒を舐せば病人が絶えない

▲蝶が群り飛べば天下亂る。

▲蛙の合戦があれば洪水の兆。

▲蟻が穴を塞ぐのは雨天の兆。

▲厠で杜鵑の聲を聞けば不祥の兆。

日常生活に多少の教訓を含める禁厭法

是れは前の「自然の暗示」よりは多少の道理あつて然かも教訓を含む故に、强ひて打破するの必要なきのみならず、大いに翫味すべきものありて中には格言と結び付くべき價値あるものも少からずとす。

△飯櫃を洗はずに置けば出産の時長く腹に痛を感ず（清潔、整頓の人育兒にも心得ある教なり）

△勝手の水洗ひを清潔にするとよき子を持つ（同上の理由）

△臺所を竹箒で掃けば氣狂になる（作法に叶はざるを戒む）

△夜中座敷を掃けば嫁入の時にせわしき思をする。

かさうと思ふても動かず、又動くと言はれゝば、何時の間にか動いてゐると言ひ、又或人は、「自分の身體は全く無いやうに感せらるゝが、全く無意識でもない、而かも只だ意識があるといふ丈で、恰度自分の魂魄が身體から離れて虚空に游んでゐるやうに感せられる」と言ひ、又或人は、「種々の物も見え、種々の音響も聞えるが、只だ之を見聞きする丈で、其の孰れを見、孰れを聞かうといふ思想が起らない」と言つてゐる。

△感覺は術者に支配さる

要するに、人が催眠狀態に入るときは、先つ觸覺は其の作用を止めて、身體の一部を指して蚊がとまつてゐると言へば、手で其の部分を掻き、或は火箸を當てゝ熱からうといへば、縱ひ冷やかなものでも熱く感ずるやうな擧動を呈する。次に視覺も其作用を止めて、色なきに色を見、物なきに物を見、或は不透明のものでも透明と見るやうに、謂ゆる視妄覺の狀態を現はしてくる。彼の千里眼の婦人などは恐らく此種のものであらうと思はれる。又臭覺や味覺も幻妄の狀態に入つて、味なきものに味を感じ、或は水を與へて酒だといへば酒と信ずる事は先に述べた通りである。又聽覺も音なきに音を聴かしめ、或物の音を他物の音と聽き誤らしむるなど自由に左右する事ができる。其他被術者自身を小兒のやうにも、大人のやうにも

△人の旅出して門を出るまでは決して座敷を掃くな。
△元日に家内を掃けば福を去る。
△月経の時に髪を洗へば火の病を患ふ。(衛生思想の喪失を戒む)
△入浴して湯を飲めば風邪に罹らぬ。
△初産の湯を棄てると土龍に變ずる。
△入浴中小兒に乳を呑せば乳汁が血に變ずる。
△焼酎を呑みて直ぐに煙草を喫すれば燃へて口中より火を發する(大に道理あり)
△鼠の喰ひ殘りを喰へば腫物が出來る。(有害を戒む)。
△佛前へ備へた飯を喰へば出世をせぬ。
△箸と箸とで挾み合ひして食事すると喧嘩が起る。(不作法を戒しむ)
△井戸に棲む魚を食ると盲目になる。
△生米をかぢるものは出世をせぬ。
△身無しの味噌汁は切腹の時の汁とて大に嫌ふ。
△他人の食缺を食ふと萬事不成就。

或は學者のやうにも、軍人のやうにも想はせる事ができるし、又普通は催眠中の事は醒覺後には大抵忘れて了ふけれども、覺えて居よと命ずれば催眠を終りし後までも決して忘れず、凡て施術者の命令通りになるのである。七十幾歳かのお婆さんが半身不隨症に罹つて、自分で身體を支へて居る事さへも容易でなかつたものが、催眠術を施して歩いて見よと命ぜられて忽ち歩き出し、手を擧げよといへば擧げ、眞直に伸びよ、指を開け、手を拍つて見よなど命じて一々命令通りにしたといふ事實もある。

△感じ易き種々の條件

催眠術は以上の如き狀態を示すが、然し何人でも必ず感ずるものとは限らない。多くの人の中には全く感じない者もある。年齢からいへば七歳より二十歳位までの人が最も容易く感ずるのである。男女を比ぶれば、男子よりも婦人の方が感じ易い。又一般に周圍が靜肅なるときは感じ易く、擾しい時には反對の結果を示す、其他術者の容貌や、室内の裝飾等も大關係があつて、術者の風采が人を威服するやうで、室内の裝飾も莊嚴なるほど結果が宜しいのである。更に被術者自身の精神狀態に就て言へば、術前に精神が激動してゐるとか、疲勞してゐるとか、或は睡氣を催してゐるときは、却て催眠の妨げとなる、又被術者が心に斯の術を信仰すると否とは

△雨天の日に三味線を弾くとその皮がはがれる。

△夜分笛を吹くと蛇が來る。(蛇は物の音に誘はるゝものなり)

△夜中鬼灯を鳴すと蛇か來る。

△三味線を弾きそむる時には男子に跨へで貰へば吉。

△妊娠中生姜を食すればその形狀の手足の子を生む(是は刺激性の食物を避ぐべしとの意か)

△缺けたる茶碗にて飲食すれば滿足な事は出來ぬ(人の美的思想の欠乏を諷するものか)。

△強飯に汁をかけて喰ふと他所にて恥を受くる。(その所爲の無趣味、殺風景なるを戒しむもの歟)。

△茄子の香物を食し、その殘片を食せば不和になる。

△紫陽花を陰干にして呑むと瘧が治る)

△近隣の葬式に魚を喰へ。

△法螺貝にて酒を呑めば中風にならぬ。

最も重大なる關係がある即ち神經質の人又は宗教信者の如き信仰心を起し易きものか、或は山間僻地に住して思想の純朴な者が最も感じ易いのである。

△不思議な擧動を現はす理由

人が催眠術にかゝつて色々不思議な擧動を示す理由を考へるに、總て人の意思的の作用は、種々の知覺觀念が相協同して働らくのであるが、若しや或る一事に精神を集中する時は、たゞ其の一點のみを感じて他の感覺を止め、所謂無意識の狀態に歸する。從つて、之れに外部より刺戟を與ふときは知覺觀念は意思の制裁を受けずして、たゞ外部の命令のまゝに從ふのである、催眠狀態は即ち此の境に入つたもので、前に述べた色々の仕方は被術者を之れに導く方法に過ぎないのである。又前段の如き事情の下に於て最も感じ易いといふのは、畢竟被術者に信仰心を起さしめて思想を一點に集中するに最も都合がよいからである。其の結果施術者の命令のまゝに水を酒なりといへば酒なりと信じ、冷たいものも熱しといへば熱しと信ずるやうになるのである。同じく無意識の狀態でも、普通の睡眠の場合に於て斯かる現象を示さないのは、普通の睡眠の場合に於ては、總ての感覺を中止して無意識の狀態に入るのであるが、催眠の場合に於ては、一點に精

△山に登る時汁かけ飯を喰ふな（不消化を戒しむるか）

△墓へ供へし團子を食へば頭痛せぬ　何かの迷信なるべし）。

△鍋の釣手越に飯を盛るな（よき作法にあらず）

△魚類の眼玉を喰べれば勢が強くなる

△寒三十日間水を呑めば夏季になつて水あたりをせぬ。（寒水は清冽なるものなりとの迷信か）。

△桃の葉を混じた湯に入浴すると汗疹が治る。

△菖蒲の湯に入れば邪氣を拂ふ。

△熱湯に入浴する人は長命せぬ（衛生說）

△度々入浴すると皺が多くなる（生理上必無の說にあらず）。

△他人の家に至りて大戸の敷居を踏むことを大に忌む。

△夫婦連にて辨天樣に參ると夫婦別をする（辨天の嫉妬の祟りといふ傳說）。

△岐路に迷ひたる時杖を倒して其倒れた方

神を聚注した結果他の感覺を止め從つて無意識の狀態を示すので、全く無感覺には至らないからである。即ち催眠の場合は眠中一部分丈け醒覺してゐるのである。斯かる狀態は我々の平生に於ても往々見るのであるが、ただ其の時間が短かい爲に格別感じないのである。彼の狐狸に誑惑せられたとか、天狗にさらはれたとかいふのは、多くは之れと同一の狀態で、一時催眠の境に入つたものと見てよいのである。

△催眠術の利用

此術を治療上に用ゐれば多少效驗があることは經驗上證明されてゐる。特に神經系に屬する病氣に效能があつて、ヒステリー、頭痛、不眠症等は七八分迄は全快するのである。けれどもこれは催眠術其ものゝ力ではなくして、彼の神佛に祈つて病氣が平癒すると同じく、被術者自身の信仰の力である。又此術を麻醉藥に代用して外科手術を施す際に應用しやうとした者もあるが、餘り好結果を得なかつたやうである。或は敎育上記憶力を增す爲に用ゐても多少効能があると言ふ人もある。即ち醒覺時の記憶よりも催眠時の記憶が一層確かだといふのであるが、これはたゞ學者の研究の結果がさうであるといふ迄の事で、まだ實用的とまでは進んでは居らない。其他罪人を訊問して罪業を白狀さする爲に用ゐても効驗があるといふ說もあ

へ行けば路に迷はぬ。

△熱の落ちた後河邊へ行くと再發する（熱病のバチルスは濕氣の中にあるを戒む）。

△墓の傍を通ると餓鬼につかれて瘧を患ふ（墓地には沼氣あり故に然がいふ）。

△小便を耐へてゐると淋病になる。

△障子の紙で尻を拭くと痔疾にかゝる（是等は衞生思想の一端を心得たるものゝよく知る所ろ）。

△雪隱の中へ唾を吐けば下の病を患ふ。

△掌の厚き人は不自由をせぬ。

△火中に爪を投ずれば狂人になる。

△盜賊の足跡へ灸を點ずれば盜賊の足が痛む。

△足の毛を剃ると火事の際足立ゝれぬ。

△爪の中へ白點が現はれると著物がふへる

△夜中爪を切ると親の死目に逢はぬ。

△足の裏がかゆければ憎まれる。

吉凶夢判斷

夢を以て吉凶を判斷すること、其淵源

るが、催眠術もこゝに至つては隨分危險なものといはねばならぬ。且つ催眠術に以上の如き効驗があるとするも、之を屢々施す時は、當人の心身上に恐るべき危害を殘すといふから、之を行ふ人は十分注意すべきである。要するに此術が直接世間を益する迄には尚一段の研究を要する事と思はれる。

不思議な狐狗狸の說明

△吉凶禍福何でも敎へる

世間には色々不思議な事のある中に、コックリ（狐狗狸）なども、隨分不思議なものである、一時盛に行はれた際には、之を試みれば吉凶禍福其他何事をでもトふ事ができると信ぜられた程で、從つて弊害をも生じ、爲に或る警察署などでは、之を行ふ事を嚴禁した事もあるさうである。其の當時の話に、或人が自分の妻に情夫があるかないかをコックリに向つて尋ねたところが、あるといふ答を得たから、直に妻を離縁したといふ事がある。かういふ例は固より一二に止まらなかつたのである。將來の事は暫々判斷を誤るけれども、既往の事は大概は適中するので、甚だ奇妙なもので

甚だ遠し、周の世すでに夢占官ありて、專ら六夢を占ひしと云ふからには、其風引いて我が國にも來りしこと疑ひを容れず去れど茲には單だ後世言ひ傳はれる夢の吉凶判斷を記載す、元より荒唐無稽の甚だしきものなり、吉凶といふよりは寧ろ一種の遊戯として見るべし。

（○印は吉夢、●印は凶夢）

▲天象に關するもの

○天に昇ると見れば立身す。
○天晴るゝと見れば希望生ずる兆なり。
○旭日を見れば立身す。
●夕日を見れば前途に災禍あり。
○月明かなりと見れば立身すべし。
●月に雲かゝると見れば他人の讒言を受く
○星を見れば幸福來る。
○雨降ると見れば酒食の喜びあり。
○雨に濡るゝと見れば貴人の助けを得。
○雪降ると見れば慶事あり。
●霧の降る山路に彷徨ふと見れば苦勞生ず

ある。

△コツクリの仕方

其の仕方は色々あつて、一定しては居らない。或人の實驗せる處によれば、生竹の長さ一尺四寸五分のものを三本造り、緒を以て中央にて三叉に結び、其の上に飯櫃の蓋を載せ、（之れに風呂敷を覆へば猶宜し。）三人の者が三方から相向て坐り、各々雙手或は兩手を以て櫃の蓋を緩く押へて行ふのである。で最初に其の內の一人が、「狐狗狸樣〳〵、お移り下され〳〵、さあ〳〵お移り下され」と頻りに反覆祈念し、凡そ十分間も祈念したとき「お移りになりましたらば何卒甲某の方へお傾き下され」と言へば、コツクリは竹足を擧げて、蓋を載せた儘其の方向へ傾くのである。但信仰の薄い者はたとへ三十分間抑へて居ても移らない。そして男女三人ならば最も能く來るのである。此の樣にしてコツクリが乘り移つた事を確めて後は、三人の內誰れでも種々樣々の事を問ふことができるのである。

即ち文子さんの年齡は何歲であるか、一傾を十年として、乙某の方へお傾き下されと言へば、文子さんが二十代なれば二度、三十代なれば三度希望する方向へ傾く。端數を知らうとするには一年を一傾として同じ方法で問ふことができる。又あなたは甚句踊はお好かお嫌ひか、お好ならば左

●黒雲が起ると見れば病氣になる憂ひなり
○雷鳴りはためくと見れば名譽を受く。
○虹が立つと見れば萬事勇みて爲すに利あり。
●大風吹くと見れば爭論事起る憂ひあり萬事速かに決斷して着手すべし。

▲山岳田野に關するもの

○高山に登ると見れば幸福來る。
●山崩るゝと見れば諸事壞る。
●崖を歩むと見れば不安のこと生ず。
○洞穴より出づると見れば苦勞を去りて幸福來る。
○山道にて人に敎はりて道を出づると見れば繁榮す。
●高き處から落つると見れば損失あり。
●暗き道を歩むと見れば苦勞生ず。
○田植耕作を見れば幸福多く、縁談調ひ子女を擧く。
●種蒔を見れば萬事用心せざれば損失事あ

回りをお願ひ申しますといへば、好きなれば左へ回り、嫌ひなればぢつとしてゐる。其他何の數を問ふでも、何事を尋ねても、知つてゐる事なら必ず答へがある。或は甚句踊カッポレ踊等好きなものなら藝人の調子に合せて面白く踊りもする。もし傍觀者が伺ひたい事があれば、三人の内へ申出でて問ふて貰ふのである。

△斯の如くしても効驗あり

或は竹を九寸三分か七寸三分の長さに切つて、三本共に節を中央に置き其の點を麻にて七卷半卷きつけ、其の上に竹輪の飯櫃の蓋を載せ、其の蓋の内には狐狗狸の三字を書し、其の蓋の上に奇數の手を載せて行ふた人もある。其際いとも鄭重な言葉で「コックリ樣お寄りになりましたら早くお回りを願ひます」と言つて、先づ移つたか何うかを試み、それより色々の事を尋ねたのであるが、矢張前と同じ結果を得たといふ。或は竹の長さを一尺二寸、又は一尺五寸宛にして結果を得た人もある。載せるものは盆でもよい、又之を行ふ前に燈火などをする者もある。

△十中の八九は事實に合ふ

以上の事實によれば、仕方には一定の規則はなく、竹の寸法、繩の卷き

り。

▲河海舟筏に關するもの

○海を渡ると見れば幸福來る。
○河を渉ると見れば吉事生ず。
○船の夢は概れ吉なり。出船は中吉、入船は吉、寶船は最も吉なり。
○大船に乘ると見れば幸運來り、遊船に乘ると見れば諸事に急ぐべく、渡船に乘ると見れば油斷すべからず。
●海にて風波暴るゝを見れば家内に不和生ぜん。
●洪水の夢は他人と不和の懼れあり。
○筏に乘ると見れば末吉なり。
○溢水滴つると見れば一家和合して繁昌すべし。
●獨り遠島へゆくと見れば親しき人に離れん。

▲神社佛閣に關するもの

方、飯櫃蓋、風呂敷の装置等は適宜に取り行ふてよいやうである。たゞコックリは言語を有つて居ないから、問を發するときは、豫め其の答の方向を定めなければならぬ。即ち明日の天氣を尋ねんとする時は、天氣が好ければ是を擧げよとか、或ば左に廻れといふ風に命ずるのであるが、斯の如くして其の告ぐる所の答を見ると、十中の八九迄は事實に適合するのである。尤も例へば一の書籍を取つて、此の紙數は幾枚ありやと問ふやうな綿密なる事には確答を得る事は頗る困難である。

△元祖は亞米利加人

此の法が初めて日本に行はれたのは明治十八年頃のことで、伊豆の下田港が其の濫觴地だといはれてゐる。明治十七年頃の事とか、亞米利加の帆走船が下田近傍へ來て破損した事がある。其の爲に亞米利加人で久しく同地に滯在せる者があつて、それが土地の者に傳へたので、其時亞米利加人は英語を以て其の名を敎へたけれども、土地の者は英語を解せずして其の名の呼び難い所から、コックリ〳〵と傾くのを取つて、ついコックリと呼ぶやうになつたものだといふ事である。西洋にはテイブル、トルニング(机轉術)と言つて、略コックリと同じものがあるが、多分それが傳へられたのであらうといふ。

○神社に參詣すと見れば災害を拂ひ子孫繁昌すべし。
○社殿、鳥居等を建するると見れば他人の家督を續ぎ繁榮し、又遠き親類に慶事あり。
○神樂を見れば病氣を拂ひ、慶事あり。
○祭靈を見れば諸事急にして吉あり。
○神輿を舁ぐと見れば吉祥あり。
●花車、家臺に乗りて囃子すると見れば病氣起らん。

▲家屋庭園に關するもの

○家屋を普請すと見れば萬事を成すに宜し。
○門の扉破るゝと見れば幸運來る。
○煤拂ひすと見れば諸事苦勞を去りて幸運來る。
○屋根の上に登ると見れば吉運來る。
○移轉の夢は末吉なり。
○井戸を掘ると見れば一旦苦勞あれども末吉あり。
●井戸の水塞くると見れば親類に不和あり

△狐狸の所爲か鬼神の所爲か

兎に角コックリは不思議なものである。其の原因に就て、或人は狐か狸の所爲だと信じ、又は鬼神の所爲なりと唱へ、稍々智識ある者は電氣の作用なりと解し、或は實は動かないのだけれども動くやうに見えるのだらうといふ者もあるけれども、動く事は事實であつて、盛に動く時には之を止めやうとしても一寸止められないやうな事がある。又今日進歩した電氣學上から見ても、決して電氣の作用ではない。それでは狐狸の所爲かといふに、固より狐狸がこんな働きを有してゐる道理がない。又鬼神といふものもあるかないか。又何んなものかも分らぬ以上、之れに原因を歸する譯にもゆかぬ。殊に鬼神の所爲だとすれば、智識學問のある者に驗がなくて、無智不學の者、或は婦人の如き信仰心の厚いものに著しく驗があるといふ事や、其の答が往々事實に適中しない事があつたり、或は過去の事は多く事實に合するも、未來の事は多くは事實に合はないといふ事などは甚だ解し難い事である。其他鬼神の所爲だとすれば、細密な事は答へられないといふ事も分らないし、人が手を觸れなければならぬといふのもおかしな譯で此等は孰れも他に原因のある事を示してゐるのである。

○井戸の水湧出づると見れば萬事思ふ通りになり。
●井戸へ物を落すと見れば萬事手違ひあり
○泉水、築山、庭などの夢は喜びごと來る兆なり。
○草木竹麻等の庭に生ずと見れば大吉なり。
○大木を擔ぐと見れば吉なり。

▲植物に關するもの

●桑の木の夢は小兒に病あり。
○樹木の紅葉したるを見れば徐ろに幸運來るべし。
○木に實を結びたるを見れば財寶を得。
●若木の枝を折ると見れば親しき人に離る
●木の葉の散ると見れば不幸來らん。
○瓜類及び蔓物の夢は立身すべし。

▲動物に關するもの

○獸類の夢は一般に吉なり諸事急ぐに利あり。

△裝置自體が第一原因

其の原因の一つは、コックリの裝置が旣に極めて回轉し易く出來てゐる事である。即ち三本足に飯櫃の蓋をかぶせた組立は、蓋が左右に回轉するにも、上下に動くにも最も都合がよい。わけて細い竹を組んで重い蓋を載せるのだから、僅かに觸れても忽ち動搖するわけである。竹の長さを限るとか、紐の結び目を定めるなども、亦此の勢ひを助けるのである。

△手の動くも一原因

次にコックリの裝置と人の手と相觸れる處に又一つの原因がある。蓋し何人でも多少の時間手を空中に浮べて或物を支へる時には手は必ず動搖する。コックリの場合に於ても、幾人かの中縱ひ一人位は靜止する事ができるとしても、皆の者が悉く同時に靜止するといふ事はむづかしい。で其の内の一人が一寸手を動かせば、直に動勢をコックリに傳へて、其の裝置の事情上茲に二寸も動くといふ結果になる。此際他の人々の力が同時に加はるときは、更に動搖を增すわけである。斯くして一たび回轉を初むれば、習慣性の規則に從ふて、永く回轉せんとする勢ひが出てくる。そして人々の力が再三加はるときは、回轉が段々大きくなつてくる。甚だしくなると

○白馬の夢は大吉なり。
●獸類に追はるゝ夢は身心苦勞の兆なれば大に養生すべし。
○鳥類の夢は一般に吉兆なり。
●鳥啼くと見れば他人の誹謗を受く。群りて啼き喚ぐと見れば近親の中に憂愁あり。
●小鳥の啼き喚ぐと見れば人に讒謗せらるべし。
○龍天に昇ると見れば幸運開け立身出世すべし。
○魚が水に躍ると見れば物事に勝利あり。

▲家具調度に關するもの

○新らしき衣服を着たりと見れば新たなる幸運來り艱難苦勞去るべし。
●衣服器具などを買ひたりと見れば盗難の懼れあり。
●屏風を疊むと見れば縱食具し。
○錦を織つと見れば喜びの兆あり。
●糸を繰ると見れば諸事障り多く愼むべし

之を止めやうとしても殆んど止められない程の勢ひのあるのは亦自然の道理である。斯くして手も身體も共に動搖する習慣ができれば、之を無意無心に任しても知らず識らず動搖する。其の已に動搖する際には、手の端に僅かに微力を加へても直に回轉し、又容易く足を擧げる、又其の回轉が盛んな時には、各手を放つて之を自然の勢ひに任するも、習慣性の永續によつて、室の中を歩き廻つて踏舞のやうな狀を呈するのである。

△信仰心が最大原因

けれども以上の原因だけではまだ十分にコックリは分らない。これは何人が行ふても驗があるのでなくして、生來信仰心の篤いものか、智力に乏しいものか、又は婦人のやうな感動し易い性質のものが之に加はる時は容易く回轉を見、智力の長け、信仰心の弱い者は何程試驗して見ても回轉を示さないのであるから、右の外に尙ほ原因として考ふべき事情がなければならぬ。それは精神作用から來るもので、其の第一は豫め斯くあるべしと豫期する意向即ち信仰と、其の意向ある時は覺えず筋肉が動く作用があるからである。之れが最も大なる原因である。即ちコックリを試むる人は大底皆豫め其の回轉する事を信じ、又其の回轉によつて人の問に應答する事を知つてゐる。そして問を發する時はそれに對して必ず回轉すると信じ

●凶器類を手に取ると見れば過失多からんとす。

○枡、量、尺などの夢は真事調ふ兆あり

●刀剣、槍、鉄砲などを見れば過失起らんとす、用心すべし。

○刀剣を研ぐと見れば善勢を去りて立身すべし。

○婦人が刀を差すと見れば吉兆なり。

○弓の弦を張ると見れば家内繁昌すべし。

○鍬を貰ひ又拾ふと見れば良縁あり。

●鞍乗ると見れば他人の誹謗を受く。

○蓑笠を着ると見れば家内繁昌すべし。

▲年中行事に関するもの

○門松、飾などの夢を見れば子孫繁昌し百事次第に調ふべし。

○七種の粥を食ひたりと見れば無病息災にして運勢大に昇るものと知るべし。

○節分の豆蒔を見れば立身の端緒を得、久しからずして諸事成功す。

てゐるから、其の思想が知らず識らず現はれて手の上に動作を起し、従つて其の回轉を見るのみならず、其の回轉がよく人の問に答へて事實を告ぐる結果を示すのである。

△コックリで夫婦喧嘩をした珍談

嘗て勇公とかいふ男がお辰といふ女房を貰つて、丁度盛んにコックリの流行する時であつたから、早速之を試みて、勇公が「若しコックリ様、お辰には是れまで好い人がありましたら、有つたなら足を上げて下さい」といふと、ひよつくりと足を上げた。そこでお辰も負けぬ氣で「勇さんには今でも何かありませう、あるなら此方の足を」といふと、又其の通りにした、之れが因で二人が喧嘩を仕出したので、母は見兼て「今のは串談に仕たのだ、コックリ様、串談に違ひないなら右へ廻つて下さい」といふと、又々其の通りにしたので、一同大笑ひとなつて事は済んだといふ事であるが、これはつまり其の心に思ふ意向に應じて筋動を起したものである。

△自力で動かして居ながら自ら覺らず

我々は音樂を聴かうとする時には自然に耳を傾け、歩行せんとする時には自然に足を出して、決して音樂を聴かう、歩行しようと思ふて動作する

○雛祭の夢は吉兆なり、殊に女子は貴女に引立てられて立身す。

○五月幟を立つると見れば男は百事幸運に向ひ、又好き男兒を擧げ、女にても小吉なり

○餅搗の夢は家内に慶事ある兆なり。

▲日常生活に關するもの

○髮を結ふと見れば吉兆あり。

○顏を剃ると見れば幸運來る。

○白髮生えたりと見れば吉兆なり。

○齒拔けたりと見れば壽命長し。

○湯に浴する夢は吉兆なれども風邪を引くことあるべし。

○泣く夢は吉なり。

●立身したる夢は凶事なり、思はぬ人に嫉みを受くることあるべし。

●勝負事に勝ちたる夢は思はざる損失を招く。

●金錢を儲けたる夢は凶兆なり親しき者より無心を言はれて苦勞することあり。

のではない。或人は之を不覺筋動と稱してゐる。コックリの場合も之れと同じ事で、それを動かさうとは思はないけれども、動くものと信じてゐるから、その信仰の力によつて、知らず識らず筋肉が働らくのである。即ち左右に回轉すると思へば左右に力を加へ、足の上下するを思へば其の上下に力を加へて自然に動くのであるが、自分では全く識らずに居るのであるそして音樂を聽かうとして足を出す者なく、歩行せんとして耳を傾くる者がないと等しく、右に回轉する事を信じながら左に向つて力を加ふる者なく、甲の方へ傾くものと信じ乍ら乙の方へ傾くやうに力を加へる者がないから、恰度期する所の結果を示すのである。

△未知の事將來の事を答へる理由

それ故例へば或人の年齡を知つて居て、之をコックリに問ふて適中するのは當然の話であるが、こゝに明かに其の年齡を知らないに拘らず、之をコックリに尋ねて知る事ができるのは何故かといふに、これも右と同じ筋肉の作用があるからである。右の作用はたゞ明かに知つてゐる事柄に就て起るのみならず、想像、或は推察からでも起るのである。例へば明かに或る人の年齡を知らぬとしても、其の人の外貌や擧動によつて多少は察知する事ができるから、その察知した所に從ふて自然に作用を起すのである。

110　迷信に囚はれたる婦人

○乞食又は貧乏になりたりと見れば　貴人の助けを受け幸福を招くべし。
○牢屋へ入ると見れば　災を除く。
○旅行の夢は故　郷より音信あり。
○車、船舶、轎などに乘ると見れば　吉事なれど、時に心　配の起ることあるべし。
●人が多く集まると見れば病　人出づる兆あり。
○名所　見　物の夢は故郷の音　信を得又久振にて友　人に逢ふことあるべし。
○盗　賊入りて物を盗むと見れば財寶を得又思はぬ好き音　信あり。

▲宴會遊戯に關するもの

●酒　宴して遊興すると見れば物事間違ひ多し。
○親子　親類など相寄りて酒宴を開くと見れば遠方より　好き音信あり、又親　類　中に慶事あるなり。
○男　女相寄りて酒宴を開くと見れば家内又

店に幾人の店員があるかを知らずしてコックリに尋ねて其の實を知り、戸外に幾人の子供が遊んでゐるかを知らずしてコックリに問ふて其の數を知るなどは、皆な想像推察に基くのである。從つて其の應答が往々事實に合はない事のあるのは誠に止むを得ない結果である。コックリに向つて過去の事又は自ら經驗した事を問ふときは大抵事實に適中するも、將來の事或は未經驗の事を問ふときは事實に適合しない事が多いといふのは、即ち同じく想像に基くからである。

斯の如くコックリが未來の事を答へるのは、皆な關係者の想像の結果であるから、何人にも想像し得るやうな事柄に就て事實に適合する答を得たとて、別段鬼神の所爲など〻言つて驚くには足らないのである。複雜な事を尋ねては應答を得られないといふのも當然の話である。明日は雨か晴かを尋ぬれば大抵答を得るも、何時何分より雨が降つて何時何分に風が起るかと稍細密な事を尋ねては決して應答は得られないといふのは、鬼神の所爲としては甚だ解せられない事である。

△婦人を加へれば効驗ある理由

斯の如く、コックリが應答するのは、之を行ふ者が豫め斯なるものだと信ずる意向即ち信仰と、之に從ふて知らず識らず働く筋肉の作用とによる

は親類に縁談あり。

●茶屋に遊ぶと見れば諸事間違ひ多く困窮成就せす。

●芝居見物すると見れば貴人の勘氣を受け他人の誹謗を招くことあり。

●骨牌、其他勝負事の夢を見れば病氣に罹る兆あり。

△結婚死亡に關するもの

●結婚の夢は多く親類朋友の間に憂へごとある兆なり。

●婚姻の酒宴に招かるゝと見れば凶兆なり

○死人を始末すると見れば萬事好都合に調ふべし。

○親類中に不幸ありと見れば吉事あり。

○葬式の夢は吉兆にして諸事速かに調ひ、商賣繁昌、緣談好く運ぶと知るべし。

●墓場の夢を見れば佛事に苦勞あり。

から、智力に富みたる者や虚心平氣の者は何程試みても効驗を見られないのは、尤もの話である。けれども之を試むる者盡くが其の作用を起さねばならぬわけではない。其の内の一人が作用を起して裝置の運動に微力を與へる時は、他の者の力は自然に之に加はつて、次第に大運動を現はすのである。仲間に婦人か信仰者を加ふれば速かに運動を始めるといふのは、孰れも信じ易くして其の事に專心注意し、覺えず筋動を起して他の者の力を働かしめる動機を與へるからである。

△尚ほ一つ運轉を助ける原因

尚ほコックリを試むる際に、種々の儀式を設け、種々の規則を定め、種種の裝飾をなして鄭重嚴肅に之を行ふなども、大に其の運轉を助けるのである。例へば竹の中に狐狗狸と書いた札を入れるとか、或は竹を結べる繩の中に婦人の髮毛を入れるとか、乃至は風呂敷を上へ被せたり、蓋を火に暖めたりするのは、孰れも行ふ者の信仰を增して、コックリを働かす上に一層の力を添へるのである。殊に酒肴等の供物をそなへ、音曲舞踏を爲し、其の仲間の一人が肅然として「コックリ樣お移り下され」と祈願するなどは、最も効驗がある。

以上の如く解すれば、不思議なりとするコックリも決して不思議とする

女大學思想と
姙産衞生

女大學が女子の倫理思想を支配せし時代は科學的智識皆無の時代にして婦人の動作日々の行爲は旅れ迷信より割出され迷信全盛時代ともいふべき有樣にして一般生活上に教訓上に奇々怪々不思議の事のみ行はれ抱腹絶倒の事のみなりしが中に就て婦人の大厄と唱へし姙産の如き隨分無茶苦茶なる衞生法も行はれし事ならんと考へらるゝに、こゝに記する教訓の如きは其中にありてやゝ分別あるものゝ一つなるべし。今代の眼に珍らしきまゝこゝに掲ぐ。

△女子の大節は懷姙にして胎育の道にあり胎敎とて懷胎に係らば聖賢の道を知れる人にきゝ目にあしき事を見ず、よこしまなる妖怪なく人を憐れみ、慈悲を專らとし心を靜かに身をいそがしく遣ふべし。

には足らない。總て物理上心理上の理由によつて當然さうならなければならぬ道理があるといふ事が分るのである。

翫味すべく而して信憑すべからざる　九星術

人間一代の運命の開闔、歸結は元より其人天賦の本能と、人事百般の潮勢、遭遇の如何に依るものにして哲學上これを不可解の事象とするを至當とす、故に濫りに干支、九星、易筮等の如き牽强附會の說を許さず、然りといへども、東洋古來の先哲、殊に道家、仙家、陰陽家の如き夙に天地自然の現象に覲染し、考究、觀察頗る努力を致し、以て微玄を啓き、機密を發明し、これを人事百般に應用附會して運命禍福を指示すること往々神妙の域に入り、所謂神明感通して觀象の力時に人をして驚異感嘆せしむるものなきにあらず、元より文明科學の智識を以てこれを見れば神明感通の說も唯、荒唐無稽の妄說として一笑に價すべきも、心意の變化、事象の運行は元來不可解にして科學の力を以て說明し能はざる事多く、爲めに荒唐無稽の說も時に驚ろくべき眞理を齎らし來る事あり、故にこれを侮り、これを信ぜざれば、人間萬事奇變なく、眼中坦々として一物なきも、これを迎へ、これを信ずれば一々據るところあり、徹するところありて。以て一生の

數言の内、妊婦衛生の大要を曲盡す、殊に靜心、安意、適度の働作をすゝむるところ理に叶へり、迷信時代の教訓なりとて侮るべからず。

△正しき道を行ふ時は胎内にてあやかり生るゝ子幸あり。命長く孝行にして仁愛深く富さかへて貴く名前を四海にあらはすとなり。

無智單純なる時代の婦女子を戒しむるの善巧方便此の外になし、智慧ある教訓といふべし。

△女子を轉じて男子となす法あり、その夫他の人に知らせず、東南にさしたる桃の枝を折り取りあら打の斧の柄となし、其懷姙の婦人の臥す床の下に刄を上にむけておくべし、則ち生るゝ子男子となるなり、試に鷄の巣の下にて斯くするに卵子悉く雄鳥なり、弓の弦を百日帶とすれば、男子を生むと醫書に見えり。

牽强附會の言也。讀者徒らに俗に習ひてその言を設く、蓋し世俗女子を塵む

運命就て聽くべく、稽ふべきがごとし、これを以て古來此の說の人心に浸潤すること極めて深く、只に市井の俗人のみならず、讀書明智の人も又往往にして快心求望し、感悟、自得するに至れり。本章說くところの九星術は即ち這般道家發明考究の一部、乃ち九星に分布せる性情氣質と五行相生相尅の說にして其起源は古代中央亞細亞の地方に專ら行はれし河圖洛書に基きたるものなりといふ。

九星はこれを年、月、日に配し各々其生尅を判別す。(洛書の圖に九星の位置及びその本體を明記しあるも煩はしければ省く、又本命的殺の事、暗劍殺の事等あれどこれも徒らに思想の煩雜を招くを以て略す)本命の繰やうは左圖に就き各人其本命星を求むべし、而して九星の基因は大陰曆に據れるが故に、月日はすべて舊曆に從ふべし。

◎一白星に當る人の性情と運氣

此の星に當る人は內剛毅にして外は和順、寬大なり、急に臨んで周章せず、危きに遇ふて恐れず、時としては落葉の下に潛み流るゝも末遂に大海に入るの期あるを待つべきなり、されど又陰の氣克ちて、小智黠才あり、心中人を侮り易く、性稍や鄙吝、されど萬事心に秘して表面に現はさゞるを以て外柔和なるも心中は常に苦勞絕えざるなり。平素よく働らきよく辛

を慰むの風習　盛なるの致すところ歎ずべし。

△經水は毎〻同じころに有るを順といひて病なき女子は毎月日も違へずあるなり　たとへば正　月五日、二月六日、七日、三月八日九日と少しづゝちかひて　あるなり、又正月十日、二月末又は三月にありて、月越になると逆とてあしきなり。

是れ實驗上の説なり、人により體質により時の生理狀態によつて多少の差違はあれど概れ一致するものなるは婦人衛生の説くところなり。

△また夫を持ちたる女の二三ヶ月もさはりなくば、懐胎か、然らざるかを試るべし其法　川芎を細末にして艾の葉の煎汁にて一匙のむべし、懐胎ならば腹中少し動くべし然らざれば動かず。

生理衛生の智識普からざりし時代の按要法誠に笑ふべし。

さて懐胎と極らば醫師をたのみ養生しいよいよ大事に身をたもつべし、五月にいたり

抱する故非常の困難に遭ふことなきも、時に險陷の象によつて意外の災厄に遇ふ事あり、元來の性は恰も水のごとく常の形なきを以てこれを容るゝ器の如何によつて樣々に形造らるゝ意あり、故に萬事時勢、人情に隨ひ、順境に立つときは、恰も江流の舟を浮べて下るがごとく、又滋雨の枯葉を潤ふすに似たる利運に向ふべし、即ち資力なき人はよく長上の意見に從ひ勤め怠らざれば後日の榮達あるべし、唯徒らに大望を抱き急速に事を成さんとすれば或は失敗すべし、故によく己れの本業を守り漸を以て積み成すべし。

△此の星の人若し縁組或は共同にて事を爲さんとならば、六白、七赤の人を選ぶをよしとす、三碧四綠の人も又惡しからず、但し二黑、八白、五黃の人はなるべく避くるをよしとす。

△又事業を新たに企つて場合には土に屬するもの、又火に屬するものは避くべし、但し從來の職業ならば改むるに及ばず。

◎二黑星に當る人の性と運氣

この星の人は概して柔順、和易の性にして、決斷力乏しく、又自己の一分の力を以て萬事を成し遂げ難き意あり、されど智慮あり德望ある有力家に從ひて事を謀り、事を爲す時は幸福多く利達すべし、同時に又邪曲、遊惰

て帶をすべし右袵には生絹八尺を四つに疊みその夫の左の手より女の右の袖へ渡すなり、安産ありてその帶をれりて生衣とするなり。

腹帶の事は異說異論あれども習慣によりて取捨すべし。

△さて懐姙の内に身をつかふべし、いたづらに居臥せず、あまり氣をつめ縫ひはりなせず、高きところへ手をのばさず、いかり悲しむ事つゝしむべし、夫婦の道遠ざかるべし。

この數言懐姙中の衛生を盡して遺憾なし、千萬言の叙說も此の數言をよくまもるの宜しきに如かず。

△懐姙の時よろしき食物

大むぎ　大根　ごぼう
にんじん　黑まめ　山のいも
うごき　うど　麩
芹　くらげ　いか
唐菜物
もゝ　あんず　むめ

の人と事を共にし交はるを避くべし、兎角柔順にして決斷の力乏しきを以て稍もすれば斯る人の誘惑を斥くること能はずして擒となり損害を蒙りて身を破る場合なきにあらず、愼むべきなり、故に柔順にして、つとめて剛正の德を保有すれば、榮達すべし、又この星の人は怜悧にして實意あれど小膽にして邪推深く、内心人を侮り、表に顯はさゞるの我儘なる心底あつて人に從ひ交はるも本心より出でざるを以て人の信頼を受けず、爲めに諸事成就せざる象あり、これ尤も愼むべし。

△縁組又は交際するには九紫の人尤も吉なり、三碧四綠の人は凶。

△職業は火に屬するを吉とし水又は木に屬するものは新たに企つを避くべし。

◎三碧星に當る人の性

この星に當る人は春の日に草の芽の張るがごとく、天眞爛漫として正直廉潔にして又温順であるされど根が正直であるだけに、自分の意に逆ふことあれば雷の性たる怒りを發し、聲高に叱り罵しることがある、それが爲めに、人の感情を損ひ、萬事些少の事から破れて仕舞ふことがあるから深く愼まねばならぬ。これ自己の爲めには甚だ損である、一旦の腹立から物の思ひ遣り等を顧みず、口論誹謗して、後に至つて悔ゆることがあつても

125 迷信に囚はれたる婦人

梨　　くわゐ　　まめ
はじかみ　くさひら　こんにやく
えび　すゞめ　ひともじ
にはとり　うさぎ　かに
その外常に食なれざるものをいむべし

△産の時むかひてよき方角
子、午、卯、酉の日は南に向ふべし
寅、申、巳、亥の日は西北の間に向ふべし
戌、丑、未の日は東南の間に向ふべし

△産後の食物はひともし、粥、飛魚、牡蠣、海鰻はよし、芋、蕪、瓜の類、蕃藷、胡椒、小豆、こんにやく、めんるゐ、酒、生の物時ならざるものはあし。
以上の方角は何かの妄説を信じたるものなるべし食禁にもいはれなし。

△産の氣つきだる時は心をしづめ、うきうきとしてたやすからんと思ひ、心をつよく持つを第一とす、あまり大事とおもひ氣をおちいらすべからず、腹少しいたむとも腰へまはらざるは未だしきと心得家内たそろ

再び頭を下げて謝罪するわけに行かず、遂に益友又は親厚の人と絶交して大に困難することが多い。又人の長上となつて目下の者を使ふのにも、前同樣に短氣と怒りを愼まねば損が多し、若しよく忍耐し、溫和を主とし、自然の發達を期したならば、二葉の苗も遂には雲を凌ぐの大木となる如くに成長して榮達する、要するに短氣の性であるから、急いで事を成そうとして仕損ずる、これを大いに謹まねばならぬ。物事率先して陽氣に勇み、進んでするけれども末を遂げない、また遂げても格別大した益はない、故に上の人に從つて下の人と和し、溫順と忍耐を失はぬ樣にすれば幸福は求めずして來る、假令久しく困窮して居ても晩年に至り安樂の身となる、一體に心は臆病で萬事につけて驚き易く、又些少の事に落膽して仕事が手につかぬ樣であるが、これは大いに愼み避けねばならぬ。

△緣組又は交際をするには一白の人を選んでよし次では九紫、四綠の人たるべし二黒と五黄八白はなるべく避け、六白七赤は凶とある。

△職業を新規に起し又從事せんとならば、水に關する事物、火に關する事物はよし、金屬類は凶とある。

◎四綠星に當る性と氣

この星に當る人は才能があつて、萬事機敏で、又溫和であるから、交際

そろとあゆむべし、かくすれば腹中くつろぎ子がへりしやすし、腰腹しきりにいたむとてうつむきまわげば、子かへりしがたし少しあを向く心持しかるべし。

△子がへりせざる先きに強くいきむべからず、難産のうれひあり、いきむときは口をつまへ鼻より息をなすべし、口を開けば動ぬけてあしく産の時はその夫内に居、おりおり見舞たるが力になるものなり、世俗その夫初産の時内にゐざる時は安産すといふは大なる誤りなり。

出産の時は産婦非常の努力を要す俗に骨盤の骨の開くは青竹を握り破る力ありとさいいふほどなれば其心得を致したるものなり。

△子の生れ落ちたる時早く口中の穢物を拭ふべし、指に綿を巻いてぬぐひとるべし。其後黄連甘艸を煎じて綿にひたしてしきりに飲ますべし、臍の緒のおさまらざる内湯をあびせるときは臍の緒の口をよくよくつつみ濡いらざるやうにすべし。さいふう、さ

に長じ、表面には愛嬌があるけれども、内心は聊か卑屈であるが、然らざるも困難の餘り、氣位が低くなつた形がある、是は始めに自分の才智を恃み、人を輕蔑し、其の極遂に人の親愛を失つて、孤立の地位に居り、困窮して志を枉け爲めに聊か便佞の徒となつた趣きがある。一體この星の人は木材の諸器具に供せられて世用を爲すが如く温和にして世才あり、百事物の役に立つから、分に安んじて居れば中等以上の人として立つ事が出來るけれども、分不相應の事を望み又は諸事彼是と手出をして遂には虻蜂取らずになつて困苦することがある。かへすがへすも過分の望みを抱かないのがこの星の人の立身する運命である、又一代の間には浮沈榮枯が度々來る意があるのは、畢竟この人の性質は氣が度々變るからである。吝嗇と無益の苦勞性とを愼み、誠心實意を以て長上に從ひ事をなし一旦利益を得るか立身したらばこれを取り逃さぬやうに大事に勤めねばならぬ、又色情の難を愼み防ぐべし。

△緣組又は交際、共同して事を爲すには九紫一白の人ならば大吉、六白七赤の人は尅性なれば凶、二黑、五黃、八白もなるべく避くるべし。

△營業又は職務は新たに從事せんとならば火又は水に屬する部類よし、金屬は不可。

つこうの病おこるなり。當ぐきに粟つぶほどのもの出來て乳を呑まぬものなり、其時は指に絹を卷て湯に浸しそろ〳〵とすりやぶれば、そのあとには白礬を少し炒粉にし、蜜にて煉りつけなくべし。

以上の妊産說元より、幼稚單純、不完全、妄信を免かれずといへども、古來二千五百年の間、日本國民數億千萬の人斯の如くして母の胎内より出で斯の如くして養はれたるをおもへば自然の力の偉大なること唯驚ろくの外なし、無智蒙昧なること斯のごとくして英雄豪傑雲の如く生れたり自然の大方則の前には學問も智識も無用の長物なるがごとし、今日より見れば昔時の産は殆んど奇蹟のごとし。

面白き樣々の判斷法

○喜び事の前兆

額の眞中に麗しく光澤を潮すは、喜びごと

◎五黃星に當る人の性と運氣

この星に當る人は概して器局寬大にして首領となるの品位がある。少しく遲鈍なれども情に厚く、又沈着にして物に動じない、膽力も威嚴も自然に備はつて人に長たるの廣量がある。好んで人の世話をなし、又目下に憐れみが深いから人にも又尊敬される、けれども一體が陰氣で意地が強く、容易に人の意見を用ひないから往々頑固に陥る嫌がつて人に忌まるゝ處がある。それだけ又萬事に辛抱強く、大事を成し遂ぐる氣象がある、又自身は頗る質素で儉約を守るけれども、人の難義を救ひ人の爲めこ財を失ふことがある。故に、此人は萬事我意、我儘を愼み、不正の行爲を避ける時は大に立身出世をする、併し一度榮達すれば、二度と運が來ないから、其上の慾念を去つて富貴を大切に保存せねばならぬ、兎に角人の長となる天命を有するだけに、晩年の油斷を愼むが專一である。

△緣談又は交際を結ぶには九紫、六白、七赤の人大に吉、三碧、四綠、一白は凶。

◎六白星に當る人

この星に當る人は譬へば未だ淘汰せざる黃金の如く、光輝を放たず、土

の前兆にして。職を得、金錢手に入る等必す吉き事あり、眞中の黑ずむは目上の者と仲惡しきか、無實の難に逢ふか、運氣甚だ惡るし。

○鼻の格好の良否

鼻筋の中程の小高き者は身代を潰すことあり。或は目的を變じて不運を招く事あり。鼻は肉附よく麗はしくして勢ひあるがよろし。かゝる者は將來必ず人の上に立ちて身代を造るものなり。

○手の指の占ひ

中差指と人差指との間の隙きたる者は人德厚し、故に力めて慈善を行ふべし、中指と紅指との間のすきたる者は夫婦仲わろし故に力めて他力を愛すべし。男は左の手女は右の手の小指と紅指との間のすきたる者は子の緣薄し。

○子寶なき人相

石と外觀を等しうするを以て性質も極めて質朴にして飾りがない、されど人によつては才智俊ぐれ、德望高く、一時衆人に傑出するものあれど、多くは外面の素朴で終るものである。この人實直にしてよく人の世話を好み兎角氣位高くして過分の大望を抱き、吝嗇にはあらざるも欲心深く、氣隨我儘の氣風がある、すべて萬事に手を出して損をする事が多い、思ふ事は成就すべき道理ありながら成就せず、遂には自分一個の進退にも困難するものである、又位高くして身卑しきが如き意あつて世事に對し不安の念が絕えない、又若年より中年までは富み榮へて晚年に衰微の兆があるから若い内に老後の安樂の心掛をして置くがよい、けれど、この星に當る人は全體の位置身分高く、福德廣大なるが故に、心掛次第では隨分利運を得て富貴の人となる事が出來る。

△緣組又は交際を結ぶには二黑、五黃、八白及び一白の人は吉、九紫、三碧、四綠の人は凶。

△職務又は營業を新規にするには土及び水に屬する事柄はよし火に關する事柄は惡し。

◎七赤星に當る人

七赤の星の人は譬へば精錬したる金屬のごときものにて、容姿、辯說、

鼻の下に横筋あるは子なきの相なり。よしあるとも其の子は便りにならず、中年以後に於て却つて子の為に苦勞すべし。

○將來出世する人相

顎の邊の横にひろがりて肉滿ち勢ひある者は一代の内に多くの財産を作るべし。又耳の肉厚く且つ長く勢ひありて耳たぶ脹れたる者は、文武官、實業家等何になりても將來大名を擧ぐ。

○生れ年と守本尊

各人一代の守本尊は子年なれば觀世音、丑年は虚空藏、卯年の者は文殊、寅年は毘沙門天、辰と巳の年の者は普賢菩薩、午年は勢至、未と申の年は大日如來、酉年の者は不動明王、戌と亥の年の者は八幡大菩薩がよし。

○胎兒の見分け方

母親の年齢が二四六八の數の年に宿りて明

應對、擧動も立ち勝りて見ゆるのみならず、外面柔和なるを以て人に交際することが尤も巧みで、且つ愛嬌あり、見掛は親切、悧怜なれば一時人の信用を買ひ、他の敬愛を受けるけれどもやゝもすれば輕薄、狐疑の心があつて、定見なく爲めに事を成すに締めくゝりなく物事成就せぬ傾ちがある。元來が惰弱便辟の性質で、庶人を喜はすには獨得の妙所を有して居る、併し馳せかゝりは勇ましくも辛抱の續かないのは此人の病所である、これを慎まねばならぬ。要するに剛柔を程よくして中正の德に近ければ立身榮達して安樂の身となるべし。

△縁組又は共同するには二黒、五黄、八白及び一白の人大によし、九紫三碧、四緑の人は凶。

△營業又は職務は六白星の人に同じ。

◎八白星に當る人

八白星の人は氣位高き所があるけれども外面は温順に見え、實直にして人を惠み、育つる心がある、けれども積陰の氣が未だ去らないから、時々心中に小智奸謀なる所あつて、諸事自分一己の存念を通さんとする根性を生じ、人に嫌はるゝ事がある、常に勉强して物事を成し遂げんとする氣風があつてどこまでも辛抱する意がある。又百事に器用で、家事も行届くけ

る年五月の節句前が産月ならば男子なり。産月が節句後ならば女子なり、又母親の年齢が一三五七九の數の年に當りて明る年の節句前が産月ならば女子なり。産月が節句後ならば男子なり。即ち母親の年齢の奇數偶數の相異に依つて別あるなり。

○金錢の溜る人

手を正しく擴げたる時指と指との間の隙く者は金錢溜らず、たとへ入る事あるも脱ち出づるものなり。之に反して其のよく合ひて隙間なき者は金錢溜るものなり。

○子供の似る所

男の子の顔形は多く母親に似る。もし然らざる時は心や行ひが母に似るものなり。其の反對に女の子は多く父親に似る。もし然らざる時は心や行ひが父に似るものなり。

○夫婦仲の判斷法

男女に限らず、目の下が黒ずみて艶なき時

れども慾心深くて氣が迷い易く、或は一時に大利益を得んとして失敗する或は時として一旦傳來の資産を失ふことあれども儉約と勉強を以て取り直すことも出來る、すべて儉約勉强は此星の人に備はつてゐるから、大抵は晩年に至つて安樂の身となるべし、止まる時はよろしく止り、移る時はよろしく移るとあるから資産に富み、又は名望ある人は貯蓄漸進を主として他の事には手出しせざるをよしとす。

△縁組並びに共同すべきは九紫、六白、七赤を吉とし三碧、四緑、一白を凶とす。

◎九紫星に當る人

九紫の星の人は物について燃ゆる象があるから獨立して事を爲すは損失ありて益はない、故に人と共に事を成すがよい、そうして事宜に叶へば烈火のごとく燃えあがつて盛大となる、この星の人は心中が潔白で又機敏である、又氣位が高く、鋭く立ち昇る氣象あれば忽ち消え失せることもあるすべて氣移り心變ること多くして事を成し遂げ難い、怜悧であるけれども中心に鄙吝の心あり、又見掛は磊落鷹揚なれども内心は頗る苦勞性で、細心、俗に氣を揉む性である。故に外見は怠慢の如く見ゆれど事に臨めば勉强刻苦もする、人に從ふて事を爲せば發達する、己れの才智を恃み獨立に

131　迷信に囚はれたる婦人

は、夫婦の間に苦情絶えざるか、或は離別せんとする悲境にあるなり、其の光澤ありて美しきは、夫婦仲よく暮す徴にして近く喜び事あり。

○女子が懐姙する月

婦人の年齢が十六、十九、二十二、二十五、二十八、三十一、三十四、三十七、四十歳なる時は、一月、四月、七月、十月が懐姙月なり。

又年齢が十七、二十、二十三、二十六、二十九、三十二、三十五、三十八、四十一歳なる時は、二月、五月、八月、十一月が懐姙月なり。

又十八、二十一、二十四、二十七、三十、三十三、三十六、三十九、四十二歳なる時は、三月、六月、九月、十二月が懐姙月なり。

夢の吉凶占ひ

●大吉の部

事を成さんとすれば事を破る恐がある、又離別の意あれば親しき中又は居所に離るゝか、在來の業を更ふるかも知れない。此星の人は運氣強く、榮華富昌の利運あるが故に自負心を去り、貴人識者に圖り誠實寛厚なれば始め凶なるも末には吉運を得る。

△縁組又は共同するは、三碧、四緑の人、又二黒、五黄、八白の人は大吉、又一白、六白、七赤の人は凶。

△營業又は職務としては木に屬するものよし水又は金に屬するものは在來のものなれば兎に角新規には營なまぬがよし。

天理教の經文を讀む

△信徒の多き宗教

人が何と言つても天理教は偉いものでございます。日本全國に四百萬の信徒と三千の教會と四萬人の教師を以てゐる大宗門で、耶蘇教などがいくらさわいだつても、とてもそばへも寄りつくことはできません。其の經文はどんなものであらう、一度讀んで見たいと以前から心掛けて居たのです

△天に昇ると見れば大に尊き身となるべし

△日月星などを呑むとみれば大に尊き兒を設く。

△雷に打たるゝと見れば大によし。

△貴人に逢ふと見れば大によし。

△巖に登るとみれば大によし。

△髪白くなるとみれば大によし。

△女が刀さすをみれば大に吉事あり。

△海を渡るとみれば大によし。

△貴人の前に出づると見れば大によし。

△身より光り出づるとみれば大によし。

△冠を被ぶると見れば大によし。

△幣をみれば大によし。

△刀を磨ぐとみれば大によし。

△米俵をみれば大によし。

△斬らるるとみれば大によし。

●吉の部

△夜あけるとみれば病本復すべし。

△雲四方に起ると見れば商法に利あり。

△雨に逢ふとみれば人に酒食をふるまはれ

が、此頃計らずも讀んで見て驚きました。教祖の中山みき子といふお婆さんが、神から授かつたといふ教義を、非常に熱心に說いてゐるのですが、私のやうな俗人にはなか〳〵解るものではありません。これがどうして多くの人に安心を與へ、人を救つてゆくか、世間も隨分廣いものだとつくづく感じました。

△開宗の動機は黑痘瘡

先づ其の創始から言つて見ますと、總て宗教の其の創始に於て必ず不思議な歴史を有つものですが、天理教に於ては特にそれは著しいやうに思はれます。みき子は大和國山邊郡麻和村中山善兵衞の妻で、其の言ふ所によれば、三十二歳の時に、子供三人あつた處へ、同じ村の安達某から、乳が無いから世話を頼むと言つて又二歳になる子供を一人托されました。ところが預かつた子供は間もなく重い黑疱瘡に罹つて、どうも癒りません。もう生命も覺束ないといふ事になりました。するとみき子は自分が世話をしてゐる中に死亡されては親達に申譯がない、どうかして全快させたいといふので、氏神へ日々跣足參りをするやら、奈良の三月堂の觀音へ月參するやら、其他所々方々の神々へ願がけをしました。我子三人の中二人の命を差上げますから、どうか此の子をおなほし下さい、それで足りなければ私

る。

△雪ふるとみれば翌日よろこび事あり。

△雷を聞くとみれば立身すべし。

△大なる石を見れば寳を得べし。

△米をかむとみれば幸ひを得る事あり。

△冠笠を着るとみればよろこび事あり。

△頭痛するとみれば出世すべし。

△孫をみればよき子を設くべし。

△書を讀むとみればよし。

△橋の上に坐するとみればよし。

△琵琶をひくとみれば他人より幸を得べし

△泣くとみればよし。

●凶の部

△月日を遊るとみれば父母に離るゝ事あり。

△霜ふるとみれば凶し。

△座敷に木が生えるとみればわるし。

△桑の木をみれば小兒の病難す。

△柿を食ふとみれば病を生ずべし。

△歯ぬけるとみれば憂ひ事あり。

の命も差上げますと一心不亂に願ひました。自分の子供を亡くしてもとはちと可哀さうなわけですが、兎に角熱心に願つたのです。で一年餘りも願をかけますと、とう〳〵それが成就して、預つた子供はすつかり癒りました。と共に、不思議にも、我子は矢張り願つた通りに兩年中に娘二人が亡くなりました。こんな次第で、みき子は今更神の驗の嚴かなのに感じて、これより益々神を信ずるやうになりました。しかし是丈位の事實は珍らしくはありません。神様に願はなくともよくあるやうな事ですが、これからが面白いのです。

△國常立尊天下りたまふ

それより五六年經つて、みき子の四十歳の時に、不思議な事が起りました。或時殘つてゐる一人の息子が農業中に足を傷めて色々治療したけれども癒らないので、又々山伏に祈禱をさせるやら、願がけをするやら、大騷ぎをやりました。その中に、或日みき子が自分で幣を以て祈禱を初めると、どうしたものか、みき子は忽ち正氣を失つて、それより三日間といふものは、まるで夢中で居りました。その間に荒神が音高く天下りたまふてみき子に告げらるゝには、我は天の將軍國常立尊である、此度は其の方の身體を神の社に貰ひ受けたい、と言ひすてゝ元の如く天へ昇りました。する

△汗出づるとみればわるし。

△山がくづるゝとみれば大にわるし。

△黒雲下るとみれば病を生ず。

△獣を食すとみれば夫婦離別すべし。

△刀を人に與へるとみれば甚だわるし。

△鏡割れるとみれば大に凶なり。

△門の戸破れるとみれば下人家出す。

△疊の上に蟻が這ふとみれば悪し。

天候を豫知する法

○丑の時(午前一時)にふる雨は照りとなる。

○寅の時にふり出す雨はばら〳〵雨なり。

○卯の時(朝の四時)にふり出す雨は半日降る。

○丙と丁との日に降り出す雨は早く止む　丙丁は火なればなり。

○壬と癸との日に降り出す雨は長く降る。壬癸は水なればなり。

○一年の一日ごとに五つの水(壬か癸か)あるときは、其年は雨繁くありと知るべし。

○黒雲は災をなす。即ち雷雨洪水暴風あり。

と暫時して又別の神が下りたまふて、恐しい大音聲で仰せらるゝには、我は面足尊で十二の頭を有する大蛇である、今より其の方の親子屋敷諸共に神の社に與れいと申されました。みき子は吃驚して、神様どうぞ退きたまへいふと、神はひどく怒りたまふて、何を申すか、それを與れるのは三千大千世界を救けるわけだ、若し與れられないとあらば屋敷も人も斷絶せしめるとの恐しい見幕。で據ろなく良人と相談して差上げる事にしましたそこで神はみき子の天の理に叶ふた事を嘉みしたまふて、みき子に天輪王尊といふ名を給ひ、生きながら神の位に昇せられたといふのです。

△十一二歳から大信神家

何だか夢のやうな話です。けれどもみき子がこんな事があつたと思ふたのは虚言ではありますまい。聞けばみき子は妻として母としても誠によく出來てゐた女で、村でも評判であつたらしいし、又夜盗賊が這入ればお錢を與へて逃してやり、乞食の子供に自分の乳を與へるなど憐憫の心にも富み、また我家の下婢が良人を奪ひ本妻にならうといふ惡心を起してみき子に毒藥を飲ませたのに、それと知つて一層可愛がり、終に懺悔せしめるなど、徳もなか〳〵高く、それで居て十一二歳頃から既に經文や和讃を諳誦しはじめた程の大信神家であつたのですから、寢ても醒めても神様とい

○引雲は雨となる。
○浮雲の久しく消えざるは大風となり、亦早く消ゆるときは風弱し。
○虹の後前と中の消えてあるときは大風大雨の來ることあり。
○虹の西に現はれたるときは明日雨なり。
○東に現はれたるときは日和にて風となる。
○虹の西南の間に現はれたる時は明日日和なり、
○西北の間に現はれたる時は明日雨となる。
○日暮に虹が東南の間に現はれたる時は大風なり。
○虹の色が亂れて閃くときは雨晴れて風なしとなる。
○一月頃朝夕少しづゝ雲やけて雲黒きは北の方度々時雨れ居るなり。
○朝やけして西の方に黒雲つかゆるは風吹くと知るべし。
○夕やけが西の空に大に見ゆれば必ず日和となる。
○五月頃雲が山を包みて厚く綿の如く見ゆ

ふ事はみき子の念頭を去らなかつたでせう。從つて熱心こめて祈禱する時には、氣持一つで、夢でなくても之れ程の現象は起り得ることゝ思はれます。しかもこんな事實が幾百萬人の信仰をつないでゐるのには驚きます。

△天理教の創世記

それより世界の由來を說いてあるのを見ると、實に奇妙な事が書いてあります。神の古記の項の始めに、

「此の世界は元人間も世界もなく泥海也。其中に神と云は月日兩神居た計也。此月様は國常立尊と云神也。日様は面足の命と云神也。其中より月様は先に出て國床を見定めて日様と御相談被成候得は、泥海に月日兩神居た計では神と云て敬ふ者無、何の樂もなく、人間を拵へ其上世界拵へ、其人間に入込て自由用（?）敬てさせは、人間は重寶なる者で、陽氣遊樂其他何事も見られる事と相談定り、（天理教でドンチャン騷ぐのは此の神意に從ふものか）此人間を拵へるには種苗代に道具雛形見出す事と見すませば、儀魚と云魚が居る、又人魚とも云、此魚は今の人間の類で鱗無。肌は人間の肌。又見すませばみいと云白蛇が居る。此者も今の人間の肌にて鱗無、二物共心は眞直で正直なり。此姿心見て是を引寄せ貰受、此姿を以て人間拵へ、種苗代に貰受よ

れば雨繁しと知るべし。
○五月頃の夕やけは雨となることあり。
○夏の土用前後に東南の間より風吹けば、秋に至りて大風の起るものと知るべし。
○七月頃東南の間より西北の間へ飛入るは大風の表象なり。
○其頃夕暮に北の方に當りて赤き雲の立つも大風のある表象なり。

迷信時代の婦人の喜憂

婦人の迷信に乘じて道俗ともに種々の愚説をいひ觸らして何かの力便に利用したるも多かりしがこれ等は何の根據もなく、理窟もなき無稽の妄説にして俗惡極るものなり、斯るものに從つて一喜一憂せし時代の婦人こそ氣の毒のものなりしぞかし。

十二刻出生の吉凶

△子の刻に生るゝ女は命長し父に早く離るゝ事あり、兄弟仲睦ましからず、常に

ふと仰なされ候へば、二人共夫を忌やがつて斷申上候故、人間拵へ世界拵へ其上は此世の一の神に授け人間の親神と拜せさす也と云て無理に承知をさして貰受被遊、然らば人間姿五體の道具雛形見出すと見ませば、泥海中に泥鰌計居る。此者を貰受、食て此味に心を見て人間の魂とす。又見すせまば戌亥の方に鯱が居る。此者を承知させて貰受、食て心味を見るに、鯱と云魚は勢ひ強く信しやくばる者で有る故に——云々」とありました。

此の樣にして其他龜だの鰻だのを用ゐて人間の五體を造り上げることにし、それから呼吸を司らせるのには鰈が身薄で扇げば風が出るものだからと言つて其れを使ふことにし。かくて國常立尊と面足尊とが、大和のみき子の屋敷になつてゐる地に會せられて、三日三夜の中に九萬九千九百九十九人の男女を造られました。そして先の色々の魚は忌がるのを無理につれて來たのだからと言つて皆神樣に昇せられたのです。

△唱へられる神樣

此の神々には夫々立派なお名前があつて、一々面白い話がありますが、こゝに人間の元の其の元の神といはるゝ二神に就て見ますと、こんな事が書いてあります。

寂しき所を好む、鬼神を信心し、慈悲の心有りて、下々を憫み、夫によく仕へて家はんじやうすべし。

▲丑の刻に生るゝ女　は智慧賢く學問諸能を好む、息災にて幸福よし、宮仕への女は主人よりよき夫を世話さるべし。夫婦仲よく子に縁あり、神佛を信心して、いよ〱子孫繁昌なるべし。

▲寅の刻に生るゝ女　は彼方此方より繁實の罪を受け苦勞あるべし、而かれども、神佛を信心すれば仕合よし、夫婦仲睦じく繁昌すべし、宮仕へなどしては夫によき縁あるべし。

▲卯の刻に生るゝ女　は心だて賤しからず而れども縁は思ふ樣にあるまじ、しかしはやく有り付いてよし、父母の家に久しく居ては災事あり、早く夫の家に行けばよし、子は多く繁昌すべし。

▲辰の刻に生るゝ女　は心賢し、大事に運ふとも小事と變じ、惡事も吉事と成る、しかれども夫との縁變るべし、心を正直にして夫

「國常立尊は天にて月樣なり。此神樣男神にて、頭一つ、尾一筋の大龍也。此世界國常を見定玉ふ。此理を以て國常立尊と云。又宿仕込玉ふ時（人間を造らるゝ時）に天より徳を玉ふ故に、此理にて月樣と云也、月樣が先に立る故に日月とは不云月日と云、又三十日を一月と云。又佛法にては釋迦如來は顯れ佛法を授玉ふ。又先に出て法を始め玉ふにて先生樣と云ふ。人間の身の内眼にうるをい（潤澤）の守護の神、眼にうるをいは此神樣の借者也。面足尊は天にては日輪樣也此神樣は女神にて、御姿は頭十二、尾三筋に三つの劍ある大蛇也。此神樣は人間を宿仕込給ふ後日々に身が重く成故に面足尊と云、日環に理を廻す、故に日輪樣と云也。又尾に三つの劍ある故に此理を以て惡き女は蛇劍と云。今にても此通り。又頭十二有る。一日の頭にて十二月の間と一月づゝ頭廻りて守護す。又十二時も一時づゝ頭廻り限りを一時とす、守護ある故に一ケ年を十二ケ月と定め、一日を十二時と云ふ。又十二支の方に頭を取卷廻りて守護有故に此理を以て十二支と云ふ、又佛法にて三尊彌陀如來又心の濟切たる理を以て誓師と云。又大きさ見る故に寛大と云。又觀音と云も同じ理也。人間の身の內ぬくみ守護の神、又ぬくみは此神樣の借物也。此二柱の神は此世の人間實の親樣也。人間には此世の御照しの如く入込守護も被下故に自由用に

を敬ひ、主君の如く思ひ仕へば金銀集り繁昌すべし。

▲巳の刻に生るゝ女は心騒がしく短氣なり、しかれども心を愼み、夫を大切に敬ひ、夫婦仲睦じき時は四方に名を擧ぐる程の事あり、しかれども平生諸事にじやけんなれば我身に災あり、末よろしからず。

▲午の刻に生るゝ女は智惠才覺あり、諸藝に器用なり、而れども親兄弟に縁薄し、心を正直にして柔和なれば直き夫をもつべし、着る物食ひ分多し、不信心なれば常に災あり。

▲未の刻に生るゝ女は若き時は苦勞する事多し、年よる程仕合せ多し、我より位高き夫を持つべし、心柔和ならざれば夫に離れ身上浮沈あり、慈悲の心持ちて榮耀あるべし。

▲申の刻に生るゝ女は智惠ある夫を持つべし、初めの間は氣苦勞多く、わづらひあり、物事ひかいめにして信心なれば末繁昌し榮華あるべし、子にも縁あるなり。

叶ふ事。後なる神樣は此二柱の守護にして御働き有事也。——云々」

恐らく珍無類の名文でせう。他の神々に就てもほゞこんな調子で說いてゐますが、言はゞ在來の譯の分らぬ傳說とみき子婆さんの新考案とをごつちやにして書いたもので、まことに滑稽な神樣です。そして迚も普通では解せられない理窟を附けて日常の天文、人事、習慣等の神に由來する事をいかにも實らしく說いて居ますが、此の邊が却つて多くの人の氣にいる所かも知れません。

△天輪王尊の教辭

みき子が天輪王尊としての教辭は又一段と奇妙なもので、讀んでもなかなか分りませんが、お慰みに少しくお目にかけませう。

「萬世の世界一列見はらせど、胸の別つた物は無いから、其筈や解て聞した事はない、何も知らんがむりでないぞや、此度は神が表へ見はれて何か委細を解き聞す、此所は大和の地場の神方と云て居れども本は知ろまい。此本を委敷聞た事ならば、如何な物でも皆戀敷なる、聞度ば尋ね來るなら云て聞かす、萬委細を解ならば世界一列心勇むる、一列に早く助けを急ぐから世界の心勇み掛りて、段々と心勇んで來るならば、世界の中所はんじよ、此先は神樂勤の手を付て皆揃て助め祭

▲酉の刻に生るゝ女は着る物食ふ物餘りあり、金銀おほく、諸人に敬まはる、夫に縁あるべし、しかれども、驕ぶる心ありて夫を蔑しろにすれば終に追ひ出され、親兄弟に恥を與ふ、よく〳〵愼むべし。

▲戌の刻に生るゝ女は身上はんじようにて位高き人を夫とすべし、宮仕への女は主人より寵ありて仕合せよし、生れ付き慈悲心ある故、末に榮華あるべし、不信心なれば吉事も惡事となる。

▲亥の刻に生るゝ女は身上、位高く諸人あがめ敬ふ夫をもつべし、而れども驕り心ありて侮り、氣まゝに身を持てば祟りて災あるべし、老人を敬ひ、幼を憐れめば大いによし。

生れ歳吉凶の三迷信(三)

○庚の午に生れし女は短氣なる故、よき事も惡くなる故に萬事堪忍して愼めばよし、子にも縁あり、十六七にて命危し、廿四五にて災難、廿三にて夫に縁はる、廿四より福

也。皆揃て早く勤をするならば、そちが勇めば神も勇むる、一列に神の心が勇むなら物に惣家皆勇む也、惣家が勇出よと思ふなら神樂勤や手踊をせよ…」

「此世界は理でせめる世界なり、何も萬の歌の理で責るとて手出しするでは無い程に、口でも云んでさきでせめ、何もかも違かはん事は克けれども、違ふ者なら歌で知らする、知らしたら見はれ出ば氣の毒や如何な病も心から迚て、病とて世界なしでは無い程に、神の立ぶりいそぐ見はす、今迄も神の云事聞んから是非なく表へ見はした也、是程の神の殘念出るから、醫者も藥も是からは適はん、是計り人並やとは思ふなよ、何でも是は歌で責めきる、此度は屋敷の掃除すゝやかに立て見せる、是を見てくれ掃除さへすゝやか仕立る事なら知りて話して噺する也、是迄の殘念何の事、足のちんばが一の殘念、此兄は病と云て居るけれど、病ではなく神の立腹、立腹も一寸の事では無程に、積重なる神の事なり、立腹も何故なると云ならば無事が退かん故の事にては此惡事速か退ん事にては普請の邪魔に成と恐ろ敷、此惡事なんぼしぶとい者やとて神が責きり退て見せるで、是惡事速退た事ならば、足のちんばも速になほる…」

すべて此の調子です。何かしら說いてはあるが、よくは分りません。而し

來り中續く、壽命は七十六か八十三なり

△辛の年に生るゝ女、は合縁ありて衣食滿足なり、心正直なれば他人の言ふ事な用ひず、七八歳にて少々災難あり命殆んど危し、十三四にて病む、廿廿一にて夫に付き一寸心配あり、三十二三にて少しく病む、三十五六にて福分來る、四十二三にて夫婦間に少碍あり五十二三にて下人に付き苦勞あり、五十六七にて大幸あり壽命は長し。

△壬の年に生るゝ女は廿四五にて災難あり廿八九にて福來る廿二三にて疾病、四十二にて幸あり、四十五にてわづらひあり、五十一にて福來る、命は七十五。

△癸の年に生るゝ女は衣食に縁あり又容色ありて人に嫉まるゝ事あり、十三四にて疾病十八九にて命危し、よく愼むべし、三十一二にて人のわづらいを受く、廿七八にて夫婦離別する事あれば艱難してよし四十二三にて夫に付き苦勞あり、四十七八にて福來る命は七十三

かも之れが倫敦まで布教に出かけた日本一の大宗教の聖典だから驚きます

△信徒の唱へる神樂歌

○

一ッ正月こへの授けハャレ珍らしい二ッニッこり授け貰ろたらやれ賴母しや三ッさんざいこゝろをさだめ四ッ世の中五ッ利をふくう六ッむしようにでけまはす七ッなにかにつくりとるなら八ッやまとはほうねんや九ッこゝまでついてこい十ドとりめがさだまりた

○

一ッ人が何を云ふとも、神が見て居る氣を靜め
二ッふたりの心をおさめいよ、何かの事をも見はれる
三ッ皆見て居よ側な者、神のする事なす事を
四ッ夜晝どんちやん勤する、側もやかましうたてかろ
五ッいつも助がせくからに、早く陽氣になりてこい
六ッ村方早くに助けたい、なれどこゝろがわからいで
七ッ何か萬の助けあい、胸の中より思案せよ
八ッ病のすきりねはぬける、心は段々勇みくる
九ッこゝは此世の極樂や。われも早々登度い
十ド此度胸の內、すつきりましたがありがたい

（終）

趣味観上より見たる骨相學

骨相の學術上の價値幷に其觀相

骨相學は天機なり、俗人の濫りに說くを許さず、佛國近代の大家ジョアン、カスパー氏、フランス、ジョセフ氏の如き又現代の日本にあつて石龍子の如き、共に斯道の大家にして學術深淵考證嚴密、加ふるに直覺力頗る靈活、百發百中殆んど誤らず、眞に一派の宗師と稱すべし、然れども其說深邃にして俗耳に遠く骨相の全般を說明して要領を得るは數年の歲月を重ねるも猶容易ならず、故に濫りに說くべからず、本章揭ぐるところの人相學は即ち近世科學と何等の交渉なき東洋古來の傳說にして元より學問上の價値なきものなるは勿論間々俗間の僻說を交へたるものなれば、時に荒唐無稽の言なきにあらず、眞疑混交概ね牽强附會の說少からず、然れども人間心意の趣くところに據つて迎へてこれを見る時は理自から其中にあり悉く無稽として排すべからざるがごとし況んや人事の活動は專ら俗耳俗眼を標準とするものなるを以て俗眼俗說に於て定めたる標準は學問上に何等の價値なしといへどもこれを處世觀上より若しくは一般趣味識上より見て頗る興味と暗示を與ふるものたるを知る、即ち荒唐の傳說も亦大に顧省するの價ありといふべし。

說に曰く。人相は腦髓の靈居を列ね、五臟の神路に通じ、一身の得失を定むるものにして面部の相觀及び音聲尤も重きを成す、故に人々の富貴、貧賤、壽夭、窮達、健病、成敗を察し、壽命の長短、事業の成敗、子の有無、家の興廢をも考ふるは皆面部と音調とに據るを要す。四支、腹背は面部音聲の補足としてこれを考ふるを相學の規定とすとあるを見て一考すべし。

その顏面全部に就て相するに、面色淡紅にして豐滿色澤潤ひて油のごとくなるは富貴の相とす、又額の格好釣合よく肉豐厚にして常に血色潤はしきものは初年より大に運氣强く發達しこれに反して若し額肉薄く

尖りて格好惡しく陷缺あれば幼にして親に別れ辛苦窮困なりとあり、又面色赤くして火の如くなるは命短かし、面傾き、側ち、缺け陷りたるが如きは窮苦貧賤の相なり、色青くして藍の如くなるは心に毒ありて人を害ふ、身肥えて面の瘦せたるは性靜かにして命長く身瘦せて面肥えたるは性急にして命短かし是れ其の大樣なり、猶仔細に說かば、身白くして面黑きは貴く、面少し青くして瓜實の如くなるは怜悧にして面長く、上下尖りたるは卑貧なり、又頤の骨やゝ開きたるは福德あり、窄くして尖りたるは貧窮苦惱の相なり、頤の骨大きく開きて耳の後に見ゆるは心に毒あるの相なり要するに人の面は腦髓の神路に通ずるが故に思內にあれば色外に顯はる、故に心內の善惡ともに相貌に露はるゝものなればよくその變化を察して吉凶を說くべし又富貴にありても心卑しく貧賤の人にても志貴きものあれば、當時の境遇に迷はずよく根本の性情をさとりて將來を考ふるを肝要とすとあり、以下顏面支體の各部に就し相觀の一般方則として定めたるもの左のごとし。

◎第一　眼相

それ眼は精神、福祿のところ、相中第一の標識とする處ろ、故に人身の榮枯は主として眼目の善惡を以て定む、然れば他の相吉といへども眼相惡しき時は吉とすべからず、眸神に勢を含み黑白分明なるは貴人の相なり、眸子金碧の光を放ち晃々として人を射るは大貴の相なり。

△眼は細くして長きは上根の相、仁慈にして才藝足る尖り出づるは凶惡短慮の相なり、癇癪強し。

△眼中常に戀愛の色あり、目想して人の心を動かすものは利慾に耽り淫奔の相なり。

△神氣薄く、うつとりとしたる人は貧にして夭す。

△赤脉眸を貫くものは凶惡の相にして、往々災害を招く。

△眼中かゝりものあるを紗薄と號し、破敗の相なり。

△眼青くして光なきは癇癪多し。

△眼中曇り多きものは大酒、淫亂にして徳を破る。

△光浮みてきらづく眼を流光眼とし、短命の人に多し常に病に惱む、思慮薄く始終うろづくなり。

△坐する事久ふして眼神衰へるものは薄相とす、萬事思ふ事遂げ難く、皆間違ひ滯るのみなり。

△俯して涙を流すものは精氣薄く、疳亢ぶる。

△偸視するものは心測り難く、邪氣多し、斜視に見るも又同じ。

△人に對し俯き下を見るは思ひ多く憂ひの相なり。

△上視するは高慢の相、物事敗破のがれ難し。

△眼神裡に溜ち、光底に隠れ、濫りに動かず、其勢ひ深淵なるものは必らず富を得ること人に超ゆ。

△うつむきて物言ひ人を見るものは佞人、淫亂又は盗心を抱く。

△眼彩人を射るがごときは軍人、官吏の人は大に發達をなす、俗人に斯くの如きあれば却つて家を破り生命を縮む。

△眼は睟神靜かにして光ゆたかなるを尊とし、妙とす眼神動きて靜ならざるは貴賤男女に限らずよろしからず。

△眼は睟のよく締りたるを吉とす、浮き開くごときは立身を妨げ、中年に大病か破敗を招く、譬へ盛んなりとも遂には衰ふ。

△婦人の眼は隨分ゆたかに、勢なきをよしとす、眼の晄としたる女は皆夫を剋す。

△眼の中に露を含みたるが如く、或は水を灑ぎたるが如き女は往々にして色難ある者なればつゝしむべし。

△婦人の眼に白多きは必らず夫を剋す、男女共に短氣なり。

△眼濁りて締りなきは物事とゝのへ難し、或は無益に心を勞す。

△眼尻の下るものは物事埒明かず眼尻上るは短氣、女は夫變る。

△眼に赤筋かゝりてあるは心惡しく思ひ寄らざる事にて死す。

△眼の中赤く黄なるは一生災禍絶へずして人に氣違ひ

あり。

△眼に黒子又は疵あるものは父母を尅し早く親に離るるの愁あり、されど後に幸慶あるべし。

◎第二　眉相

△眉は眼より長きをよしとす、眼より短きは凶相

△眉毛薄くして無きが如きは狡猾なり

△眉中缺所あるものは奸者なり。

△眉骨の高きは剛氣なり女は夫を尅す氣短くして終に獨身となる。

△眉毛に潤ひ枯れ毛並亂れ濟しからざるは辛勞の相。

△薄れて眉の淡きは多難又は散財の相。

△眉太くして眼を過ぐるは福德ありて長命なり。

◎第三　鼻相

鼻は顔面の中心に位し全體の形貌を引立つるところなれば、その形の整否は直ちに運命を左右するの力あるものなり、まづその山根より準頭に至る豐隆にして竈門露はれず、肉豐かにして潤澤なるは富貴の相なり又山根起りて凸なるは貴相、山根平かにして凹あるものは貧賤の相なり。

△鼻に肉なく竈門仰ぎ横より現はるゝは貧寒の相なり

△鼻の鋭く高きはよろしからず、人の長上となりても腹心の人なく、妻を娶れば離別すること再三常に高慢にして人の惡みを受く、破敗の相なり。

△婦人の鼻痩せて細きは其夫なるもの必らず不仕合を受く。

△鼻の孔の内赤きものは心鋭くして殘忍刻薄也。

△婦人の鼻尖るか又は痩せて高く、又天にして目立つ如きは皆夫を尅す。

△鼻に缺陷あるは大に惡し、中年に家を破るか又は危窮の艱難に遭ふ。

△鼻の孔は丸く小さなるを貴しとす廣くして大なるは放心散亂の相なり。

△鼻梁肉痩せて薄く、細くして尖りたるは好みて奸計を企つるの相なり。

△鼻の偏曲なるは大に凶し、中道にして業を破り、運命開かず。

△鼻隆大にして四方低きは目下に縁なし。

△鼻に光澤あるは吉相なり。

△四方高くして鼻の低く小きは自然物に困窮す。

△鼻に潤澤なく枯れて黒く垢づきし如きはよろしからず、物事延引して發達なく、金錢貨財に困乏あるべし

△鷲鼻は決心すること強きも目下に縁薄し。

△山根低く陷りたるが如きは臆病なり、女は縁變はる

△山根摘みあげたる如く鼻骨の露出るゝは大に妻を尅す。

◎第四　耳相

耳は大小を論せず只厚薄を主とす、面に對して耳を見ざるは大貴の相なり。

△耳は常に淸く紅白の色を兼ねて潤ひあるを吉とす、是れ運勢強く必らず功成り名顯はれ富貴を致す、これに反して、物の染みたるが如く或は垢づきし如くにて勢なく、汚るしきは物事滯りて運氣凶く薄命にして功我らず。

△耳垂珠浮かず、離れず厚くして圓き樣に格好よろしきは大いに發達を主どる、垂珠あるも水珠のごときは下賤孤貧の相にして一生人の下に居る、辛勞にして堪へ難し。

△垂珠前に向ひて厚く廣く、米粒を載するは富貴の相なり。

△耳の輪ありて廓なきは肉親を尅し、財産を破り孤獨となる、廓ありて輪なきか或は薄くして開く如きは氣象薄弱にして病身なるか、又は貧寒にして居住定まらず、家内に辛勞多し。

△耳は大小を論せずといへども大なるを好とす。小なるものは諸事物に不自由す、又耳の勝れて大なるは賤しき妻を娶る。

△耳薄黑くして力なき樣に見ゆるは心中に苦勞あるべし。

△耳の孔廣く大にして大指を入るは智深くして長壽な

り、殊に垂珠豐滿なるは福壽にして缺くることなし。
△輪廓缺け損ずるは家產破れ妻子離散す。
△耳の高く引つけし如くなるは才智ありて名を揚ぐ、低く垂たる如きは不幸にして窮苦失敗を招く。

◎第五　口相

口の至つて小なるは衣食住に不足して困窮の相なりされど程よく小さきは婦人にしては吉相なり、男子は大なるをよしとす。
△口の角上に向ふは高貴の相なり、下に垂るゝは貧賤とす又色よくして清潔なるは吉相。
△口唇の色うるはしくして厚豐なるは富貴の相、薄くして色なきは孤寡なり。
△面大にして口小なるは才能藝術あるも運大いに開かず。
△面廣くして口濶きは祿多くして數百の人を養ふ、
△唇薄く尖る如きは貧窮孤獨又は僞をいふ。
△上唇の出づるは疎忽の相なり、下唇の出づるは物に理窟ばる。
△口の偏曲なるは大に凶し、晩年に難あり。
△唇の色紅潤なるは吉なれども高慢の癖あり。
△唇の色黑くして潤ひなく枯れたるは產を破る。
△女の齒齦あらはれ或は語る時沫ふくは淫亂にして夫を尅す。
△物言ふて口角上るは大に貴相なり。
△口の小さきは身分賤く產も亦小なり。
△齒の形大にして玉の如く潤ほしきは福壽の相。
△齒並正しからざるものは虛言多し。
△前齒二枚の間すくものは親を尅す、虛言多し。
△齒の細かにして白らず、黑からず光澤あるは人に勝つ。
△齒の整ふて長きは貴相なり、壯年にして落つるは壽促まる。
△物語するに齒露はるゝは富貴を主どる、齒反るは事を破る。
△齒の短小なるは命短かし、圓くして小なるは貧苦痛

心の相なり。
△歯の色白く枯骨の如きは孤貧辛勞のがれ難し。
△歯の偏亂なるは家產を破る。
△歯の色焦れ或は黃靑なるは大病又は壯年にして斃るるの兆あり。
△出歯は放心の相財寶保ち難し。

○第六　聲相

聲の臍底より出づるはよき相なり、富貴の人、又は定壽ある人は自然と音聲爽亮にして言語應對明晰なるものなり、又貧賤下劣の人、或は零落、破產の人は聲舌端より出づるがごとし。
△聲の放散して霧のごとくなるは不可なり、又浮くが如く漂ふがごとく、或は濁りて小なるも不可なり、これに反して聲冴えて凛々、遠く響きあるは人格高邁の相なり、又聲大にして破鐘のごときは蠻勇人の特性なり、總じて聲に潤ひなく濁りて爽亮ならざるものは貴賤ともに皆困苦敗殘の相なり。
△又聲に潤ひなく乾燥して餘韻なく、耳立ちて聞苦しきは發達を阻害し、又は祖業を廢する人なり、藝能あるも其の成功甚だ遲々たり。
△語勢緩急節を同ふせざるは心底定まらず、物に驚動するの徵なり。
△語聲鼻の先より出づるが如きは思慮淺薄なる愚痴の人なり。
△凡て富貴權勢の人、又は發達進步の人は聲皆丹田より出づ、其音力强くして無限勢あり、彼の一音一語を發すれば音韻遠く響きて山谷の谺のごとく透徹するは頗る高邁の人にして世に重せられ、又淸きこと淸泉のごとく、細きこと琴瑟のごときは是れ淸貴の相にして斯のごときは天壽無量萬人に超越す。
△彼の蚯蚓の鳴くが如く又靑蠅の躁くに似たるごとき聲は貧賤薄命の人若しくは孤獨寒貧の相なり。
△語聲徒らに繁多にして明亮を缺ぐは心中の混亂思想の一致を缺ぐものにして胸襟狹く、穩かならず、思ふ事叶ひ難く常に志望あるも成就せず。

△聲に力あるも語尾の小にして且つ明亮を缺ぐは破敗の相なり。
△思慮ある人は沈默にして語希なり、言語多く喧噪にして一定せざるは正直誠信を缺くの相なり。
△身分高き人は譬へ當時困窮すとも言語穩やかにして其聲腹底より出づ、又卑賤の者は金錢家財に不足なくとも自然に其聲濁るか、いづれ舌端より出づ。
△語進んで喋がしきは下賤の人なり、語爽潔に過ぎ潤ひなきは人和なく孤獨の相なり。
△聲爽凉にして言語靜正なるは皆發達榮昌を主どる。
△物言ふ中にて途切れる如きは短命又は心身に病あるべし。
△啼き聲又は悲しむ聲のごとく聞ゆるものは短命にして祖業を破す。
△人大にして小聲を發するは貧賤孤獨の相なり。人小にして大聲を發するは富壽兼備の相なり。
△女の聲何となく耳に徹するが如きは夫を尅す其身不正なり。
△男の言語の終りに其聲外へ洩るがごときはよろしからず、又女の物言ひ終ひ早く刎るがごときは窮苦の相

◎第七　髪相

△髪は黒く細潤なるは大に發達す、枯燥して髪に潤なく赤黄黒に見ゆるは貧賤にして多病。
△髪赤きものは貴上に背く不正なれば度々災難にかゝる。
△髪自然に香しき匂あるは大によし貴人の妻となる。
△毛髪は剛柔を以て其心性を知る、髪細くして柔きは緻密を好む。
△髪多くねばるものは物を妬む。
△髪繁多にして臭あるものは貧賤を主る。
△縮髪の人は近親、朋友と不和なり。

◎第八支體腹部各相

△頭小く短かくして項の太く短かきは中年に命を失ふ。

△首短く其身の丸き様なるは僻心あり。

△肥たる人の項長きは短命なり。

△瘦せたる人の項長きは富貴の相、短かきはよろしからず。

△肥瘦によらず項太きものは邪智深し。

△項の偏曲なるはよろしからず、男女肥瘦によからず端正なるをよしとす。

△手の甲丸くむつくりと肉あるは貴相にして骨のあらはるゝは孤貧にして奸毒なり。

△手首より甲へかけて十文字あるは發達の相なり。

△手小く肉厚きは壽福の相、大にして薄きは貧窮なり

△手の細くして長きを淸貴とし、薄くして短かきは愚鈍の相。

△手は指節の粗硬なるを嫌ふ、手指ともに軟細にして長きを吉とす。

△掌中の肉は厚く軟かにして常に血色紅潤なるは一生歡樂にして子孫繁榮す。

△掌中肉薄く粗硬なるは奴僕貧賤の相なり。

△手の甲の肉厚く高圓なるは一生に家に起し名を揚く

△掌中に肉なく大にして粗硬なるは無慈悲にして物に窮す。

△掌中に横筋多きは災厄疾病に罹り易く又貧賤にして愚鈍なり。

△爪硬くして缺け易きか又薄くして偏み或は爪に斑多きは其身發達せずして自然と下賤の事をなす。

△爪は常に紅潤にして艶のあるは大によろし精力滿ちたるものは指爪共に色澤潤ひて光あり。

△爪の薄く平らに角の樣に見ゆるは運氣惡しく貧賤なり。

△足の小なるは吉、大なるは賤し。

△足の底平かに豐滿なるは貴相なり。甚だしく凹めるは下賤なり。

△足指の長きは上相、短かきは下相なり。

△大人に足踵なきは貧賤なり、足の土踏まずの肉軟かきは貴人の相なり。

△腹は大にして垂れて嚢のごとくなるは富貴豐滿の相

小さくして薄きは糧なくして辛苦多し。
△腹大なりといへども力なく垂れ下るは卑賤の相。
△腹は皮寬厚にして艶なきを好とす。
△臍は深くして大なるを富貴の相とす、淺くして露はるゝは貧夭なり、臍の上に位するは上智の相にして身貴くよく萬事に通ず、下に位するは愚俗の相なり。
△臍の小さきは男女共に一生辛勞絕えず貧寒の相なり。
△婦人の臍上に位するは無病にして產輕し。下に近きは難病あるべし。
△腰は厚くして廣きを上相とす、丸きは福壽圓滿にして細く長きは貧にして孤なり。夭折す。
△腰に肉なく、骨出づる如きは窮乏の相。
△腰は肥人は濶きを欲し、瘦人は圓きを欲す、男女に限らず腰の薄くして折れ、短かくして削れ、偏みたるは困窮にして夭死の相。

容色と年齡

婦人の容色と年齡は一生の中に五度かはる。即ち第一期は生れてから婚期に至る迄の間で、花ならば蕾の時代で、愛くるしいが身體發育の最も旺盛な期であるから肉體の輪廓が未だ完全して居ない許りか、婦色人を魅するといふ樣な力は無い、第二期は結婚期から三十歳前後の間を謂ふので、其の初期の女子は種々な原因で身體に異狀を呈する、例へば首筋が肥滿して要色が變り、血色が鮮明になり、輪廓の美も完成して來る、第三期に入るのは三十歳前後から四十二三歳頃までゝ、この間に、人情を解し社會に十分經驗を有し應接對話などの修養も圓熟して、物質的の美と精神的の美とを兼れ備へ、容色美の絕頂に達するのである、併し概して此の時期に入ると慾を擅まにし、快樂を貪り、徒らに希望が大きくなり、人生の波瀾の最も甚だしい時代であるから神身が疲勞して、天然の美色を未熟に終らしめる事がある、されば人生の大厄(三十七八から四十二三)時代は此の期である、第四期は四十二三歳から五十四五歳迄で、思想が最も圓熟し、地位も漸く固つて、第三期のやうな野心はなくなり、着實平和となつて、皮下には十分脂肪を生じ身體が肥滿し、皮膚が緊張して、恰も人生の夕映期で、智力のみ發達して情慾は却て缺欠する事がある、第五期は五十四五歳以後で瀟洒にして風格のある老境を樂しむ時代に入るのである。

淘宮術と幹枝學

△其の起源

運勢判斷或は治心の方術として廣く行はれてゐるものに、天源術、淘宮術、幹枝學などいふものがある。此等は皆な同じ系統のもので、從來は秘訣として多く口傳に依つて師より弟子に傳へて居たから、其の内容を知るのはなか／＼困難であつた。今日では之れに關する著述もあり、略々其の何たるかは知れてゐるが、それでも其の道の人に聞くと、まだ／＼なか／＼秘密にしてゐる。從つて到底奧意を知ることはできぬが、たゞ大體のところを述べて見る。

天源術の起原に就ては色々說もあるが、支那の禹王が始めたといふのが眞實らしい。それを加茂康成といふ者が日本に傳へたので、後には安倍晴明、楠公父子武田信玄などが之を研究して屢々應用したと言ふことである。其の說く所に依れば、人が始めて天から受けるものを氣といふ。氣が凝つて身體が出來る。其の氣に、或は命に厚きもの、薄きもの、或は才の賢なるもの、愚なるもの、或は性の善なるもの、惡なるもの等種々あつて、其の如何に依つて人の疾病、健康、貧富、禍福等が岐れると言つてゐる。人生の本源たる此の氣に遡つて人の天運命數等を究めるものを天源術といふのである。

次に淘宮術の起原を考ふるに、これは天源術家奧野南北の門人横山三之助なる者の發明にかゝり、全く天源術より出たるものである。横山は或時自分はどうも惡氣が強くて、薄命で、又官祿も保たれない、壽命も五十歲を越ゆる事はむづかしいと思ひ、それより專心福法を究めて、遂に此の術を發見したといふ。即ち天源術を本とし、專ら十二支と生年月日の關係を見て人の資性運命を判斷するのである。

又幹枝學も同じく天源術から出たもので、木島文六なる者が、從來の天源陶宮の諸術が直に十二支を說いて十干を說かないのを見て、其の應用法を發明して斯

く名けたのである。

△重要なる三輪の規則

此等の諸術を知るに就て先づ心得ふべき事は三輪の規則である。前にも一言した如く、此等の術は人生の本源に遡つて其の運勢等を判斷するものなれば、人が母の胎内に宿つた年月日は非常に重く見られてゐる。其の胎内に宿つた日は人々が生れた日より二百六十五日後へ算へて其の最終の日を當日とするのであるが、其の胎内に宿つた日を小輪と稱し、其の宿つた月を中輪と稱し、其の年を大輪と稱し、之を三輪といふ。

其の應用を例示すれば、その胎内に宿つた日が寅の日なれば寅の小輪である。其の月が丑なれば丑の中輪である。其の年が子なれば子の大輪である。これは十二支に就ての例であるが、更に十干に就て言へば、胎内に宿つた日が甲なれば甲の小輪である。其の月が癸なれば癸の中輪である。其の年が壬なれば壬の大輪である。そして其の十二支十干の一つ〳〵に就て斯道獨特の運氣鑑定法があつて、それに照し合せて小、中、大輪の運氣を判斷するのであるが、之を爲すに就て尚心得ふべき事は、小輪の運勢は二十歲前後、中輪の運勢は四十歲前後、大輪の運勢は六十歲前後に働らくことである。故に小輪は凶でも、中輪が吉ならば、其の人は青年の頃は不幸でも壯年に至れば幸福が回つて來る譯である。

△運勢鑑定法

左に其の鑑定法の一般を示す。但斯道に於ては十二支は子、丑、寅等の名稱を用ゐずして、滋、結、演、豐、盆、止、合、老、緩、墮、煉、實の術語を用ゐてゐる。其の十二支のものを擧げて見ると先づこんな風。

〇滋(子)

形小さく、色薄黑し。心至つて吝嗇にして、恥多し、去れど之れに當る者は大抵福相なるを常とす。官祿薄しといへども、福祿充滿の氣なり。子は滋とす、滋はしげるなり。例へば一本の小木の如し。初め其の枝葉

微々として繁茂せずと雖も、一年は一年毎に成長發達して、遂に一個の大木となり、仰ぎ見る程に至るなり。諸願成就す。婚禮、轉宅、旅行等皆吉なり。性怜悧にして萬事に氣を配り、よく物事に細かく氣附きて取締よし、去れど、其の募る時は終に人の誹りを受くる事あり、又爪にて拾ふが如く諸事至つて儉約なるも、又時に觸れては俄然心一轉して箕にて打ちこぼすが如きことあり。去れど多くは貨殖を樂む故、常に望み事ありて心勞絶えず。病氣は下部に起る。去れど早く治す。

○結(丑)

形大きく、色黒し。心を守ること至つて堅固なり。腸症、痔毒、其他胸にたゝる病深し、又身體濕氣多く、隨て水腫、脚氣等あり。福祿薄し。此氣は萬物中道に滯り、上へ發せず下へ通せず、然れども破るゝ事なし。婚禮吉なり。軍人、農業、銀行員等身に適す。故に此の方針を取りて進むときは中年前は苦勞して意の如くならずと雖も、中年以後に至つて富裕となるべし美術家、學者等總て精思を要する職業は不適當なり。平素は至つて氣長く靜かにして言葉の少なきも一朝怒る時は勢ひ過ぎて言ひ張る性質を有す。故に毀譽褒貶一定せず。水邊宜しからず、乘船つゝしむべし。病氣は永けれど治す。

○演(寅)

形頭小さく、丈高く、色黒し。心猛く、且つ威す氣あり。寅は演なり。物を引き伸ばすの意なり。故に人に屈せず絶えず其の意を貫かんとする心あり。福祿は出入最も多しと雖も、常に昇ることを好めば、財の溜ること少なくして散ずること多し。諸願成就し、至つて好運なり。故に貴人には大吉なれども、平人には吉ならず。殊に婦人にては夫を凌ぎ且つ粗漏勝ちの氣あれば凶なり。天へも通ずるの勢ひあれば、物事進んでよし。去れど婚姻、金談等は凶なり。病氣は逆上、其他腰より上の病ひあれども早く治す。

○豊(卯)

形大きくして肉滿つ。色青白く、心ゆたかにして又

靜かなり。物事ゆるみ勝ちなれば、末遂げがたし。されど注意して進めば諸願成就し、福祿大に備はる。事は急ぐがよし。婚禮、移轉、新築等吉なり。又如才なくして物に器用なれども、少しく邪智あれば、やゝもすれば運氣を破る事あり。水邊、乘船宜しからず。足重く水氣あるを常とす。中風は治し難し。其他の病氣は永けれども治す。

○奄(辰)

形大きく、肉少なくして筋骨高し。色青く、睫毛剛くして長し。心外へ發して怒る氣強し。目上なりとも屈せず、目下の教を用ゐず、我意を押し通さんとする氣あり。故にまゝ藝能に秀づる者あるも、慢心強くして其の極意に達すること難し。又萬事爭ひを生じ易くして、諸願成就し難し。其の成就するに當りては甚だ急なれども、却つて災のもとゐとなる。されど之を破る事に用ゐる時は、對談等に動の氣ありて吉なり。病は癪強く、眼病、逆上、亂心等あれど、長命なり。天災劍難の氣あり。他行等愼むべし。

○止(巳)

形小さくして至て美麗なり。色白くして少しく黄を帶ぶ。性質温和にして靜かなれども、嫉妬心深し。官祿福祿共に大に備はりて萬事大吉なり。諸願成就す。轉宅、旅行、掛合事等すべてよろし。但し婚禮は凶なり。其他は何事も好運なれども、鬱氣ある故に其運を破る事あり。乘船愼むべし。病氣永けれども治す。

○合(午)

形大きく、肉滿ちて、色赤し、心は愛情に富めども、人と離れ易し。又賑かなる事を好む故に、人望あれども眞の友は少し。多辯にして腹中熱する故に多くは湯茶を好む。隨て留飲、眼病、熱病等の氣あり。氣が散漫にして外面を飾る僻ある故福祿來れども保たず。一日に就て言へば午前十一時迄は大吉なれども、それより後は凶なり。旅行、乘船吉なり。婚禮人を召抱へる事凶なり。熱病、眼病は治し難けれども、其他の病氣は早く治す。

○老(未)

形小さく、色白し、心は丁寧にして曲る事を好ます。又一藝に達するの氣あり。されど慮り遠く苦勞性にして內氣なり。例へば人の出入應對にも憚るといふ風なり。親孝行にして美麗を好み、何事にも器用なれども、福祿薄し。故に常に心を賑かにすることに力め、萬事遠慮せざるやうにすれば後には好運を開くべし。婚禮、旅行等よし。又密々にて人と談ずる事も和合して吉なり。住所に勞する事あり。轉宅は凶なり、乘船に風氣あり。注意すべし。病氣は永けれども治す。

○緩（申）

形大きく、肉ありて、色薄赤し。多く世話事を好んで辛苦絕えず。又衆人と和せず。病氣は眼病、逆上、耳聾、難產等あり。官祿あり。此氣は萬事出來易きやうにして終に遂げず。一時的の事は成就すれども、長引く事は宜しからず。轉宅、店開、旅行、乘船吉なり。されど婚禮、人を召抱る事などは凶なり。此氣の人は亂心、眼病になりては治し難し。其外の病氣は早く治す。

○墮（酉）

形小さく、色白し。智慧深くして人をはかり、貴き事大なる事を好んで身を破るべし。然れども諸藝に達して器用なり。音聲淸し。逆上、惡血、腫物、眼病、難產等の徵あり。官有で福祿薄し。事を治むるに義なれば後に好運に向ふべし。轉宅はよし。新築、店開、乘船は凶なり。又密々にて事を謀るは凶なり。病氣永けれども治す。

○煉（戌）

形小さく、色つやなくして白し。怒る氣強くして意地惡し。然れども義をたもつ。自分勝手なり。但し長命なり。せむし、眼病、惡血、又亂心等の病氣多し。官祿乏し。且つ此氣は家內に爭事生ずる兆あれば、早朝より心をはれやかにもつべし。他出等外に身を置く事總て凶なり。病氣發する時は容易に治せず。

○實（亥）

形大きく、中肉なり。色黃なり。心はわきひら見ず一途なり。腰より以下に水氣をたくはふ。故に腰冷へ、

足痛み、引つる事等あり。官祿福祿共に中分に備はる。婚禮、人を召抱る事吉なり。諸願成就して中年より富貴に至るべし。乘船、新築凶なり。病氣早く治す。

△

十干に就ても略ゝ同じやうな鑑定法がある。又木、火、土、金、水の五行を色々に配して判斷する方法もある。或は斯法獨得の人相法もある。其他述ぶべき事は澤山あるが、要するに干支五行の理に基いたものである。主旨とする所は、自己の運氣を研究して之れに處する方法を豫知するにあるので、誠に結構な事ではあるが、今日の世の中へ、頗る根據の薄弱な斯かる骨董品を持ち出して之れに依つて人事の吉凶禍福を知らうとするのは、飛んでもないことである。多く述べるには及ばないと思ふ。

御幣擔ぎ

◎御幣擔ぎの家庭に育つた學生があるとする。それが試驗を受けやうとする場合に、家の者から今日は日が惡いなどゝ云はれる。けれども日に限りがあるから受けぬ譯には行かぬ。餘儀なく受ける事は受けたけれども、其結果が非常に惡い。何故かといふに、今日は試驗を受けるのに日が惡いと云ふ事が頭に這入つて居るので、初めから意氣沮喪して、平日は何んでもない問題でも容易に解し兼れる樣になる。例へば爰に算術の問題があつて、敎師からお前には多分出來まいと思ふがマア遣つて見なさいと云はれるのと、ナニ少し考へさへすれば十分解答が出來る筈だと云はれるのとは、初めから生徒の意氣込が大分違ひ、叉骨の折り方も非常に違ふ。だからお前にはチト六ヶ敷しいなどゝ云はれると出來る問題でも出來ない事が往々ある。腦の働きから云へば、最初から此問題は出來得ない、今日は試驗を受くるには日が惡いと云ふ事が頭に染みて居ると、腦の働きが散漫になつて、一つの問題にその働きを集注する事が出來ないのである。歲が九星とやらいふものから割出して、今日は何歲の者には良い日だとか、惡い日だとか愚にもつかない事が社會の先導者たるべき人々の間にさへ現はれて居るのは誠に困つたものである。

◎世の中には骨相學者などゝ云ふ者が隨分あつて、人の顏さへ見ればヤレ女難の相があるとか、飢餓の相があるとか、ヤレ二十歲になると死んで了ふとか、頼まれもせぬ事を口走るのが少なくない。或る高等の學問を授ける學校の長で、骨相學を研究した人がある此人が或る高等敎育を受けた紳士の骨相を見て、いろ〳〵お談義めいた事を饒舌り立て、結局お前さんは短命であると云つたので、此紳士之を非常に氣にした爲めに、とう〳〵病氣になつた事がある。實に御幣擔ぎほど馬鹿々々しくて而かも怖ろしいものはない。要するに害あつて益のないものであるから、何んとかして一日も早く此迷信を家庭から放逐するやうにして了ひたいと思ふ。

古人の翫味せし手相術

△手相術の由來

希臘古哲アリストートル曰く手は人間の諸機關中最も大切の機關なりと、蓋し世界開闢以來今日に至るまで人間の日常生活を始め、世間各種の事業、悉く手を以て成されざるはなし、試に見よ、人間三度の食事をなすを始めとして生活一切の行事乃至百般の製造、手なくして將た何物をかよくなさん、手の重要機關たる一々いふまでもなし、而してこの手相學なるものは人相及び骨相學と共に希臘の古代より研究され其應用最も廣く、適中正確なるものとして哲人の耽弄を價したるものゝ如し。

西洋に於て手に關する傳說及び種々なる習慣は頗る汎く第一彼の日常の禮式として行ふ、握手の禮の如きは其起原頗る古く、希臘の神話にも敵と味方が和睦の際に手に兇器を持ち居らざることを示す爲めに兩者互ひに手を出して握り合ふことをなしたり、古代は勿論、現今の野蠻國にも又これに似たる慣習行はれ、居るがごとし、東洋諸國に於ても又尊長者の前に出づる時には手先を組み合せて禮するが如きも其一例なり。又近代の歐洲各國にて軍人が擧手の禮を行ふも同じ道理より出でたるが如し、其他宗敎の禮式又裁判の宣誓式に手を用ひて表情する場合頗る多し。

△手指の感覺と作用

人間の諸機關中、筋骨、神經の配合頗る完全にして、その運動又、敏活を極め、頭腦と密接の關係を有して感覺の鋭敏なること人體諸機關中第一に居るものは手即ち指頭なり、是の次に指の相觀によつて人間全體の性質如何を知るは頗る興味ある事柄なりとす。

人間の手には關節相和し、相助けて働らくの妙あり、五本の指は各々其骨組、大小、働らきを異にし、各々特種の作用をなす、たとへば今物を握るに拇指なけれ

ば他の指は其用を成さざるのみならず、全身も又力を入るゝ張合を失ふがごとし然るに拇指がその支柱となりて働らく時は手に驚くべき握力を生じ、こゝに、始めて身體の各部に尤も力の強き抵抗力を生ずるに至るがごとし人間の手が漸次發達する順序を生理學上より見るは頗る面白き事なり、小兒が母の胎内にあるや、其身體未だ形を成さゞるも單純なる手は既に判然見分くることを得べく、而して月滿ちて生るゝや五本の指は既に備はれり、稍々長じて年齡十五歳に達すれば、重なる骨は十分發達するを以て指と掌との釣合を整ひ、完全なる形成りて其性質顯はる、故に手相家がこれを見れば其性質を讀むことを得べし。

手相學はこれを分類して二樣となす、一は即ち手形觀相學にして專ら手の殊りたる形を見て其性質を知る學問なり、一は掌線觀相學にして掌の山及び線を見て其人の性質と運命を知る學問なり、いづれも太古より傳はれるものなれども、近世に至つて始めて學理的に說明さるゝに至れり。

△手形の觀相術

五十年前手形觀象を學理的に攻究したる佛國の大家アルペンチグニー氏の實驗に依れば。

第一　掌長くして肉瘦せたる人は臆病にして德義薄く、才智少し

第二　掌厚くして其肉肥えたる人は智識の程度低く、性質殘忍なり。

第三　掌深く窪みたるは其人不幸にして物事に失敗多し

第四指の關節低くして平滑なるは物に感じ易く、早呑込に事をなし、又本性强きを示す、本性とは何物かが突然眼の前に來る時忽ち眼を閉ぢ、或は何物か我前に落ち來らんとする時思はず手に受留めんとするがごとき自然に有する性をいふ、此の天性强ければ其人は輕快にして、且つ如才なく人前を繕ふことなどは上手なり

第五指の關節高くして人目に立ては其人は理窟心强

く勘定事に長じ、秩序を好み、物事を整理する事を好む、

第六指長ければ其人は細密の事を好み、萬事に周到なり、故に約束を違ふ事なし、されど斯る人は大事を成すに考慮多くして實行を避け、小事にのみ力を盡し、疑心深く、又臆病、詐僞及び粉飾をなすは斯る人の持前なり

第七指短かければ其人は活潑にして血氣にはやり、はづみに乘り易く、小事を嫌ひ大事を喜び、決斷早く熟慮せずして實行を急ぎ、計畫の呑込早く、心に書けば忽ちこれに着手せんとす、指の短きこと甚だしければ以上の性質いよ〳〵甚し、要するに指の長き者は細密の事を好み、精細完全の物を愛す、短きものは粗大を好む、この性質は書風にも顯はれ前者は細字を得意とし後者は大字を書す

第八以上七種の内いづれにも屬せざる者は指の大きもの、指の捩れて其爪の短きもの手の軟かなるもの硬きもの、諸指が密接するもの、指の綺麗なるもの指と指との間に間隙あるもの等なり、左にこの性質を略記すべし。

△指の太きもの、就中指の根の太きものは其性質奢侈に耽り易し、太きこと甚だしきものは慾に溺る

△指の捩れて其爪の短きものは其性怒り易し、且つ殘忍にして壓制を好む。

△諸指が密に合ふものは我慾強し

指の綺麗にして透きとほるほどなるは多言にして行ひ邪まなり

△指と指との間に著るしき間隙あるものは同情心深きに過ぎて人の世話等を燒き過ぐるものなり

△指の先の尖りたるものは、事に感じ易し

△指の硬きものは頑固にして慾深し

△指の軟かきものは謙遜にして穿鑿を好み、又寛仁の德ありて溫順なり、

更に手の組織に就て相するものあり曰く

△手の軟かきものは、性質沈重なれども或は怠慢に流れ、或は因循姑息に陷いる

△手の硬きものは、沈着に居ること出來ざれど、働らかんとの心熾んにして激しき運動及び手先を使ふ仕事を好む

手の軟かきものと硬きものとは其性質に於て尚ほ左のごとき差異あり。

△手の柔かきものは

一驚くべきこと、不思議の事を好む、是はその性質沈重にして靜かに物を考ふることを好む故なり

一心柔弱にして愛情に溺る、されど眞誠の愛なし

一手軟かき上に其肉締りあれば優美の心あり

一手軟かき上に皺あれば感じ易く、且つ正直なり

△手の硬きものは

一迷ひ易し、これは其性質靜かに事を考ふこと出來ざるが故なり

一眞誠の愛情を有す、されど猥りに戀せず

一手硬き上に膏氣なく、乾きてザラ〳〵すれば其人感覺鈍くして愚鈍なり

一手硬き上に皺あれば其人は怒り易く、爭ひを好むなり

△掌線の觀相術

掌を見れば五本の指の根に小高き部分あるべし、是は筋肉の節瘤より出來たるものにして、掌相術に所謂山と稱するものなり、其數七つあり、其拇指の根にあるを金曜山と言ひ、指人指の根にあるを木曜山と云ひ、中指の根を土曜山、藥指の根を日曜山、小指の根を水曜山と云ふ、又水曜山の下部にあるを火曜山といひ、火曜山の下にあるを月曜山といひ、掌の中央の窪みたる所を火曜ケ原といふ。

右七個の山が皆揃ひて高ければ其人の性質いづれも偏せず釣合よく發達せる證據なり、若し掌に山一つもなければ愚鈍なり。

△木曜山高ければ其人活潑なれど自尊心ありて虚威張をなす

△土曜山高ければ其人用心深く、感情強く、物事に綿

密なれど臆病憂鬱にして閑居を好む
△日曜山高ければ、氣短く、奢侈にして又貪欲なり
△水曜山高ければ頭腦明晰にして辯舌あり、されど狡猾にして人を欺く性質あり
△火曜山高ければ沈勇にして困難を恐れず、寛大にして仁心深し
△月曜山高ければ心に不平ありて怒り易く氣嗇にして忍耐力なし
△金曜山高ければ放蕩にして廉恥心なく、又情慾熾んにして愛情深し
更に掌線に就て說明せんに其線六個あり
△長壽線といふは拇指の根を擁する線にして人の壽を司どる線なり、疾病の際には此の線に切れ目を生じ又は消滅することあり
△頭腦線といふは長壽線と同一の所に起り掌の中央を貫く筋なり。專ら意志、智覺を司る線なり。愚鈍の人、又は志意薄弱の人はこの筋錯亂して明亮ならず
△心情線といふは、頭腦線の上部に位する線にして、情緒を司どる、この線眞直にして明らかに且つ正しければ、其人愛情厚く同情に富む
△次に手首より出で掌を貫き、中指の根本に達する線を幸運線といふ、專ら運命盛衰を司どる、この線正しく明亮なれば其人幸運榮達すべし、若然らずして錯亂するものは敗滅若しくは貧賤なるべし
△次に藥指の根本より出でゝ掌に入るものは技術線と稱し專ら藝術を司る、この線判明にして正しければ其人器用にして技藝に秀づ、若し錯亂して湮滅すれば諸藝に見込なし
△次に長壽線の根本より起りて火曜山若しくは水曜山に入る線を健康線と稱す、この線正しく判然として明亮なれば其人精神活潑且つ無病なれど、若し混亂して紛錯すれば健康甚だ惡しく、氣鬱病にかゝり易し
右は掌線觀象術の大要なり、詳しくは專門の書籍に就いて翫味自得すべし。

迷信問答

睡蓮女史

糸さん。迷信に就て貴女は什麼お考へをお持ちです。

清子。別に之れと言ふ考へならば持つて居ません。迷信と言ふ言葉すらもよく了解致しては居ません。ですから其意義範圍などを知らう筈はございません。

糸さん。もつと平たいお話で。

清子。平面的に迷信を觀察せよと仰しやいますが。或博士のお言葉でしたが、西洋東洋に限らず、文明國でも野蠻國でも、國民として迷信を持たない國民はないさうで、迷信を持つのが人の持前でせうと仰しやつたのを聽きましたが、同じ國、同じ地方の人でも、男の方よりも女の方が何うも迷信を澤山持つて居る樣でございます。

糸さん。差當り貴女はお持ちですが。

清子。えゝ持つて居ます。

糸さん。伺ひたうございますが。

清子。何れお話し致しませう。人によりますと占ひの樣な者迄も迷信だと仰しやいますが、私は面白い遊戲だと思ひます。二十四のアルハベットを目隱しで探つて、探り當てた字が將來の夫の頭字であるとか、鉛を沸かして水に落し、其形が兜に似て居るから軍人の妻にならう鉋の形に似て居るから大工の妻になどゝ言ふのや、鏡の前に立つて意中の人の名を三遍唱へると、忽ちに其人の影が鏡に寫ると言ふのなどは。

糸さん。一寸、夫れは何國のお話です。

清子。獨逸だと覺えて居ます。彼の學問の最も進んだ國のお孃さん達が、大晦日の晩に皆其麽事をなさるんださうです。迷信と言へば迷信でせうが、私はいい遊戲だと思ひます。

糸さん。迷信を遊戲と見るのも面白い見方では御座いますが、夫れはほんの一部分のお話で御座いませう。つい此間の事です。私の近所に住まつて居らつしや

いますで方で、心臓病と脳病をわずらつて居らつしやる方がございます。其方の奥さんが大層な御幣擔ぎでして、此頃も狐が憑いて居るらしいから試して見るつて、油揚を四五十枚も御病人の枕許へ積みなすつた相で御座います。旦那様が御立腹なすつて、「ウン食つてやらう。」つて見て居る間に、二三十枚もお食りになりましたつて、其時の旦那様のお心持ちは什麼で御座いましたらう。其晩から熱が出て囈言などを仰しやる相で、愈夫れに相違ないと奥さんは獨りで極めて、見舞にいらした醫師のお言葉も訊かず一心に眞情を籠めて御信心だそうでございます。同じ眞情、同じ親切でもねえ。之等などは貴女の迷信は遊戯なりとの説とは違ひますね。

清　子。「ウン。食つてやらう。」まあ何と言ふ悲痛な、夫して深刻な聲でせう、「頼みに思ふお前迄が其麽氣で私を取扱ふなら。おゝよし。死んでやらう。後はどうとも勝手にせよ。」と言ふと同じですわね。其奥様などは迷信に囚はれたる女のいゝ材料ですね。一體狐とか狸とか天狗などに關係した迷信は概して害がある樣です。私が先刻申しました占ひは遊戯なりの中にも、純粹な迷信もございます、縁談などは別と致しまして、旅立方角病人などは害はございません。

糸さん。新らしい教育を受けた方達に迷信を持つて居らつしやる方がございませうか。

清　子。ございます。何事もない時には他人の事は迷信だ、とけなして居ますが、御自身がいざと言つた場合になりますと、神も頼めず、佛にも頼めず、人も頼めないとなつて參りますと、さあもう迷信に獅嚙み付いて終ひます。

糸さん。獅嚙み付くと迄は酷な言ひ方です　。實際然うで御座いませう。私などにも思ひ當る事がございますもの。

清　子。其思ひ當る事とやらが伺ひ度い者ですね。

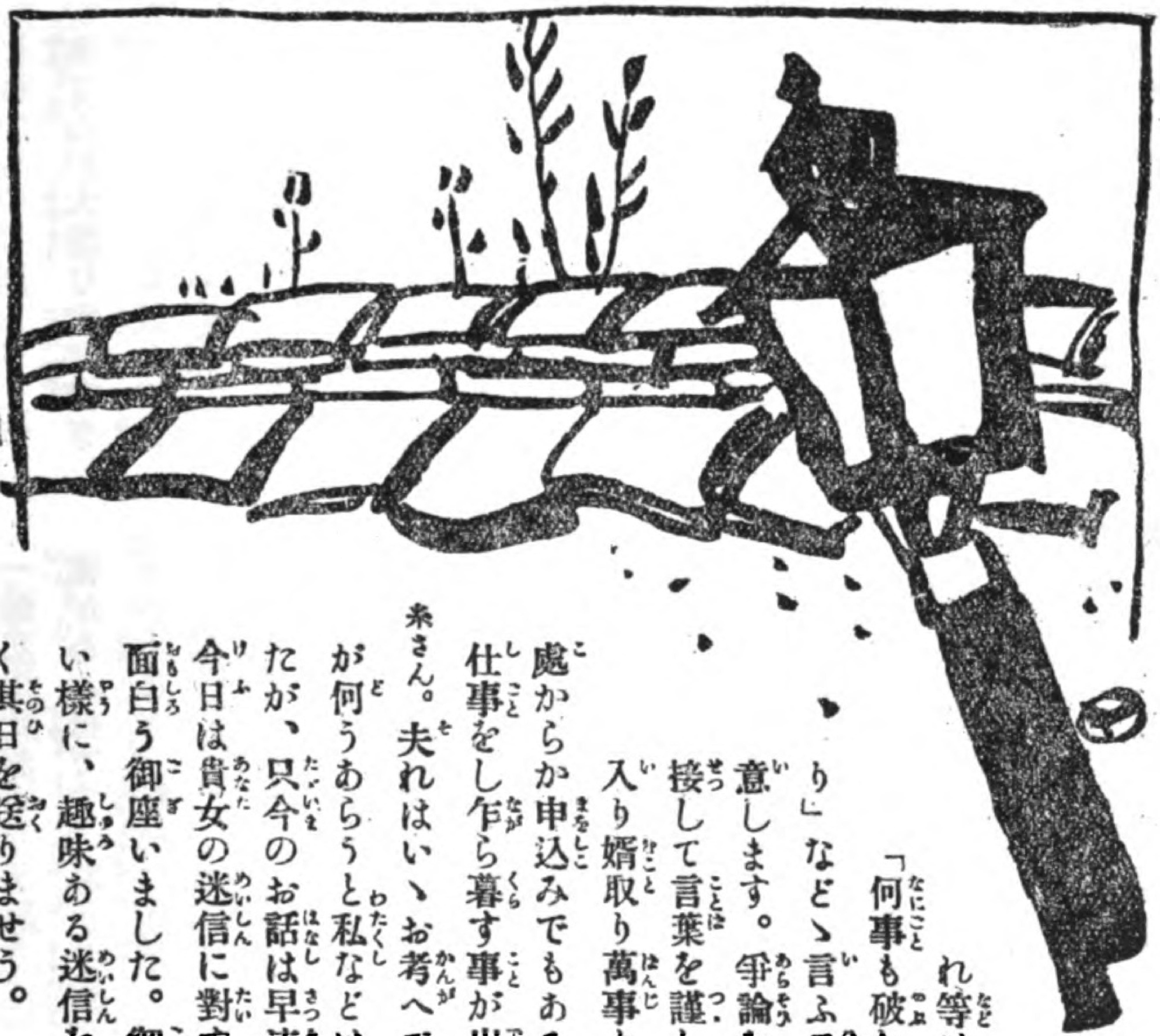
糸さん。なんつて材料にする惡い腹なんでせう。

清　子。いゝえ。何う致しまして、惡い腹などゝ申す者

は私にはございません。藝者などがやつて居る迷信、占ひの中かも知れませんが、調べて見ますると隨分面白いのがございます。興味があつて害にならない者が多い樣ですね。けれども御婆さん達のは困ります。折々一家の處世上に迄も害毒を及ぼしますから。

糸さん。本當ですよ。之れからの女、差當り私達ちは迷信を持たないがい丶でせうね。

清子。大いに持つべきです。然し害がないのに



限ります。よく新聞に載つて居ませう。明日の運勢と言ふのが、彼れ等はい丶教訓だと思ます。「何事も破れ易し」「病氣に罹る事あり」など丶言ふ日には、衛生や諸事に注意します。爭論を謹めと言ふ日には人に接して言葉を謹しみます。大吉日縁談嫁入り婿取り萬事よし等と言ふ日には、何處からか申込みでもあるかと一日樂しく愉快に仕事をし乍ら暮す事が出來ます。

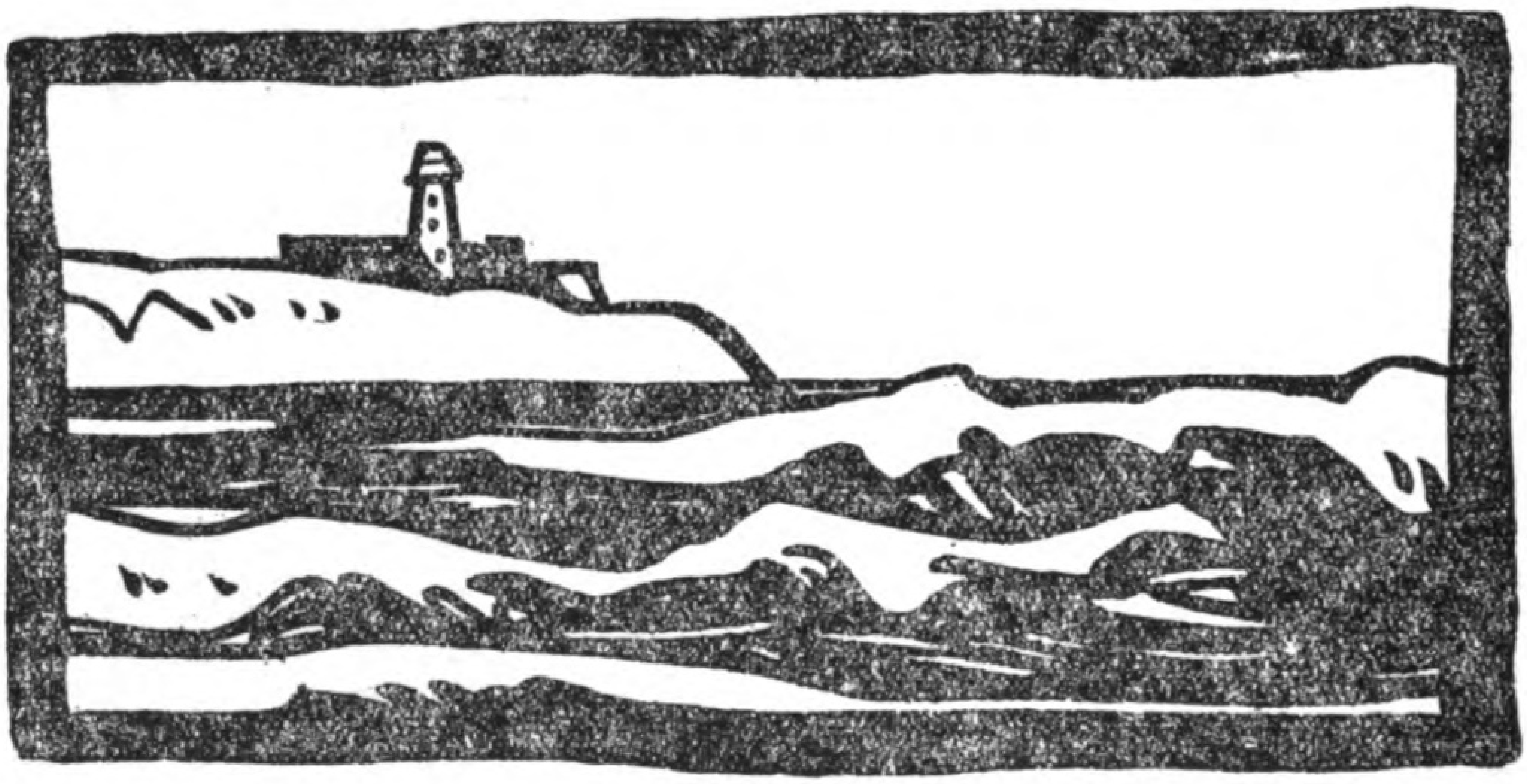
糸さん。夫れはい丶お考へで御座います。明日の日が何うあらうと私などは今日迄無頓着で居ましたが、只今のお話は早速私も實行致ませう。今日は貴女の迷信に對する遊戯觀を伺つて大層面白う御座いました。御同樣に迷信に囚はれない樣に、趣味ある迷信を遊戯的に取扱つて面白く其日を送りませう。

清　子。よく私の愚論をお聴き下さいました。未だお話致さなかつた事が澤山御座います。幽靈であるとか、聞いた許りでも身の毛のよだつ丑の時參り、神木に呪ひの釘を打つのなどは、心理學者のお說の定まるのを待ちませず。私達には用のないお話ですから。然し幽靈は見度うございます。

糸さん。幽靈を。

清　子。亡くなつた父や、親しかつたお友達のお死になすつたのなんかせめて幽靈にでもなつて出て居らつしやればいゝと思ひますわ、御寫眞は殘つて居ましても、年々色が薄くなる許り、思ひはつかぬ許りでせう。

糸さん。其麼お怪けなら私にも逢たい



見たいのが澤山御座いますよ。

清　子。私が若し死にましたら。

糸さん。おゝ厭だ。

清　子。お厭でも化けて參りますよ。

糸さん。えゝ澤山怪けて來て頂戴。

清　子。黑髮を振り亂して、青い顏で、目をむき出して、恨めしいなんて言ふ氣のきかない妖怪なんぞになりはしませんよ。牡丹燈籠のお露さんの樣に、振袖に高島田、綺麗にお化粧して——

糸さん。もう澤山。お暇を——

清　子。おほゝゝゝほ。弱蟲ね。あれもうお歸り。お怪けのお話で逃げ出すとは御卑怯でございますね。

糸さん。否え、貴女の樣なお優しいのではない。髯むぢやの生きた

お俤けがもう役所から歸る頃で御座いますから。圖らずも久し振りでお邪魔さして頂だきまして、有難うございました。

清子。左樣。生憎私方へもお出掛け下さいな。籠の鳥ですものめつたには出られません。

糸さん。些と私方へもお出掛け下さいな。生意氣にお喋舌り許り致しまして失禮。

清子。えゝ有難う。先刻の油揚を旦那樣に食べさせた奧さんを見せて頂だき乍ら伺ひませう。

糸さん。是非に――

清子は糸さんを送つて門口に立つた。蓮田には未だ紅白の蓮の花が咲いて居て其處から言ひ知れぬ懷かしい匂ひが流れて來る。糸さんが押切りの停留所から電車に乘る迄、其電車が菊井町の家並に隱れて見えなくなる迄も、見送つて其處に立つて居た。

座敷へ歸ると生溫くなつたコーヒーをすゝつて机に向つた。原稿紙をのべると使ひ馴れたペンで、初めの行へ次の樣に書いた。

「迷信に囚はれたる女に與ふる手紙」

銀杏の樹で幾色かの蟬の鳴聲がする。早咲きの白萩が風もないのにほろ〳〵と散る。草深い里は秋が早い。晝でももう鈴蟲やすいとが鳴いて居る。空が何時の間にか曇つた。

清子は稍暫らく考へに沈んで居たが、やがて心地よくすら〳〵とペンを走らした。

時勢に遅れし妻の苦心

夕ばえ

日進月歩の今の世の中、心靜かに我身の價値を考へましたなら、花とむらがり、星とかゞやく奥様達の中に立交つて、迚も平然としては居られないのですが、そうかといつて夫の現時の職柄上、引込んで斗りも居られない有様、まゝよ龜の甲より年の功、たとへ高等の教育受けぬとて、自然が敎へし經驗といふ自信がある。

今こそ生存に倦勞した敗殘者てふ、額にきざむ烙印あはれげなれど、是でも十八年前の十六の年、まだ地方では高等女學校が物識の中に微々たるものなりし頃先見の明に富ませらるゝ父上と、女普通の母上と幾度もお說衝突の末、當時大學に居た從兄が冬休暇で歸鄕しての仲裁に父上の勝利、其翌春入學をしたが漸く一年經ちし、十七の春ともなれば降る程の緣談に、娘を片付けるも凡そ潮合のあるもの、殊更大柄なあの子が毎日包みかゝへて學校通ひも人目を引くから、兎角の噂のない内にと、昔氣質の母上の主唱に、今度は父上の降參で、とう〱首席で二年に及第したまゝ、前途有望だの、秀才だのと惜しがられて、退いて間もなく當家へ輿入れした私なのです。夫れでも其頃は女學校出のお嫁さんと、大した評判今で申せばハイカラだつたのでしやうよ。全く驚嘆かした春もあつたのですが何しろ卒業もしないで緣付いて、十八の暮にはもうかあさんとなつてより、次ぎ〱との子持ち　何の修業が出來ましやう、我ながら學びの海の夫ならで、淺澤水の底知れてどんな恥をかゝないものでもないと、是で人知れぬ胸を苦しめるのですよ。今假りに妾が御交際してゐる御方々の中で、殊に異彩を放ちたまふ、俗方面の奥様四五を評して見ませうならば……

○○局長　夫人

お年は廿七八？　お顔は別に特徴なき十人なみなれど、漆黑の房々とせしおぐしはいつも廂の桃割れなるが一寸風變り、でもよくおうつり遊ばすが不思議ぞ、やせ柄のお小作りなるより、廿三四でも通用する至つてお俗なたち、跡見を卒業遊ばしたとやらで書畫のおたしなみは大したもので、お宅の床の掛軸花州女史とは奥さんの御雅號とか、元より妾は繪の巧拙は鑑別し得ないけれども、中々お立派なものだと某奥樣の御感服。お子樣が居らつしやらぬからでもあらうが、十代の娘に着せてもよい樣な大柄な米琉に八丈のお被布、どこやら古代振つたお姿が何んとなうお品がよく見える、隨分御交際好きで何のお集りにもいち早く入らしつて、中々お働きになるが其割に人望のないのはどういふものか？。旦那樣は法學士と承るにも似まさず至つて武骨一片無口な蠻カラで、打見にはおそろしい樣なれどお氣立は實に無邪氣で、時々罪なき失錯し玉ひては奥樣のお小言きびしけれども、只哄笑される斗りとか從つて女王の御權式いとも高しとかや。

某大佐夫人

でつぷりと太り肉のお年頃も四十格好と申さば貫目に不足はなし、御長男は士官學校の生徒さん、お次の令孃がつい先日御緣付きで、今は高女に通はるゝお孃さんど、お十二の坊つちやんの御教育に一生懸命、自然公會には是といふ御活動も見ないけれども、夫れで中々潜勢力がおありになるとでも申しやうか、御自宅への御訪問は旦那樣のよりは、むしろ奥樣の方がお廣いのでも御人望の程が窺はれます、少しも御權式をお振ひになるではなし、流石上級軍人の御家庭丈けありて、階級の秩序は御家庭内にも美しき御ならはし、御體面はいと高尚に構へて入らつしても、一度お近づきして見れば誠に淡泊なお慈悲深く、お下の者の陰口申など更になしとはことわりぞ。實に威あつて猛からぬ軍人の御主意にかなつて入らつしやる御家風、元より四十路も越えさせ玉へば、お若い時の御教育としては、妾等と大差もないかしらないが、一體にお心懸け

のよいのと、軍人のお留守勝なのでお宅稽古など遊ばし安いせいか、今でも御熱心に篆刻をお學びとは妙なお風流と思へど、是も挿花茶の湯琴に和歌、とありふれしおたしなみより、漢籍英語に至るまで、子供の爲めに學んでおくと、おちいさいの抱へてお學び遊ばした末の御風雅、さればお子達の御不審は大概お母さんで事足りるとはさても〳〵。すべて仰の事が理にはまつてゐて、何角お念に解決付き兼る事のあつた時御相談して、感服するお説の出るのは此奥様一人と顧問の方のお話し。



事務官夫人

旦那様は歐洲歸りのチヤキ〳〵のハイカラさん、奥さんは學習院出の飛切りハイカラたるべき筈が、却つて反對の日本式至つて奥床しいお丸髷にいつも紅のお手柄もゆる樣、拔ける程お白い御頸すじ、心持ちかしげてお話し遊ばすが此御方のお癖、お身なりの御立派な事が何んとしても追付くものなし、夫も其筈聞けば

關西に名だゝる富豪の令孃とか、成程どこか鷹揚なお物ごし、でも少しもお鼻にぶら下る樣子なく、誰にでも御愛相のよい才氣にあふれた御方、御きりやうに申分はなし、嘗て御在學中は伯爵世嗣夫人にと御所望もありし由なれど、釣合はぬは不緣の因、平民は矢張り平民同志と强ひて此玉の輿しりぞけて、同じ近縣の多額納稅者の御次男たる、今の旦那樣と御伉儷いと美しとかや、まづ才色兩全社交界の花でしやうお年も廿二三といへば今が眞盛り。

實業家夫人

洋館のコツクから、今日世に知れし舶來雜貨商と迄成功されし、御主人公の內助者たる其糟糠の妻君、いかで平々凡々妾等如き時勢遲れの意氣地なき婦人でしやう、失禮ながら學問の深淺は保證は出來ませんが、自然御修業の英佛獨清。露も片言はお間に合ふとか、今は若御夫婦に商店を委ね、御夫婦とも御鄕里なる此地に閑居して、事ある每に御主人は御上京、平素重に地方後進の誘導を計つて入らつしやるとは、何んとお羨しい御晩年、されば折角の奥さんの博辨も、今は屠龍の事となつては居れど、元來の御氣性の堅忍不拔婦人に珍らしい意志の强固には、大體の男子は一歩を讓ると申されます。强ひて難を申せば……元より五十路に近き御年輩、娑婆氣のおありになる筈もないのですが……。大の皮肉家で思つた事は誰の前でもどんな時でも、お構ひなしに言つてのけるといふ風、此奥さんの眼中には人生一切平等視されてゐますから、六ケ敷交涉事件などは此お方に限るのです。仰しやる事が一々肯綮にあたつて居るものですから、一時は變に思つても能く考へて見ると一言ないのです、實に現代虛榮にあこがるゝ若い人達にはよい活模範ですが、御自分には一寸も自分を吹聽なさるお心なく、たまに御苦心談を向ふても、エ、只働きさへすればよいのですよとのみ、輕く笑つてゐらつしやいます。

此外いづれも皆當世の敎育受けられしお方々のみ、斯く觀じ來れば、大膽に此樣な月旦など書列らねるのは生意氣なのです……

秋の七草

七草の名稱　秋の七草とは萩、薄、葛、なでしこ、女郎花、藤袴、桔梗の七種である。

◎萩

さてまづ萩は宮城野、白萩、更紗萩、筑波萩、其他數十の種類あり、宮城野は他の種類と異り、花の形圓からずして尖り、花は薄色にて五尺より一丈二三尺までに延び、白萩は名の如く花白く、更紗萩は紅白の更紗、筑波萩は一名めど萩ともいふ、白の細かき花さき芽あまた出づるが、其數あだかも筮竹の數と同じきを以て此芽の成長するを待ちて筮竹に用ふるもの多し。又薩摩はぎといふあり、白紅源平の咲分にて中々風情あり、木萩といふは夏萩の一種にして夏期中更紗の花を開くものにて、葉の形圓く、丈延びざるを以て亦盆栽に適すといふ。萩の葉は、いづれも夜間は合歡木の如く相合して眠るを常とすれども筑波萩、更紗萩、木萩等は眠ることなしと。

一村の萩の盛りに埋もれて
　垣根の井戸は汲れざりけり　　景樹

高まどの宮の秋萩咲にけり
　をのへの鹿をしろ人にして　　水好

紫は一本だにもゆかしきを
　野をせはしともにほふ萩かな　　千濱

苔とも見えず露あり庭の萩　　其角

世の秋を我物顔や庭のはぎ　　亀龍



◎すゝき

薄は夏すゝきの外秋のものとしては縞すゝき絲すゝき、矢羽根すゝき、ますほの薄、鬼すゝき、濱すゝき等あり、いづれも名に示すごとく縞すゝきは、柳條をなし、矢羽根は鷹の羽ともいひ、矢絣の模樣ありと、絲すゝきは細くして絲のごとく、ますほのすゝきは穗先しげれるもの、鬼すゝきは幅廣くして剛く且つ葉は刄のごとく、鋭利にして　延るも屈む事なく直立し居れり。

秋風の松をしらぶる度每に
　岡べの尾ばな袖かへすなり　　春滿

花すゝき今宵ほに出て照月の
　ひかりの上にやどる露かな　　景樹

花すゝきまれく交野をわけくて
　天の川原に秋は來にけり　　有功

花すゝき戶にはさまれし夜風かな　　北枝

山は暮て野は黃昏の芒かな　　蕪村

◎葛

葛は實生の草にて每秋九月頃には實を結ぶ、花よりも實をとり

實用的の草なり、されば其の實を採り直に播種すれば翌春に至りて發芽す、發芽すれば或はこれを根分して鉢め適れるごみ土に植つけ、肥料には油糟を施すべし、斯くして五六月頃には一尺位にも延びざれど、七月に入れば一日一尺位づゝ成長して忽ちはへまつはり彼の夕顔の棚よりも大なるに至るを常とす、葛の葉は刀豆の葉よりも大きく、花は薄桃色の中に紫がゝりたる色入りて花形は藤豆に似てしほらしきものなり、されど葛花は葉裏に咲くを以て氣付かぬもの多し、但し自然の發生に任かせれば花咲かぬものと覺し。

神ならぬ御室の山の葛かつら
うら吹きかへて秋は來にけり　家持

武藏野のつゝきの岡の眞葛原
秋ふく風の果はみえけり　千蔭

◎撫子

撫子は春季開花するものと夏季の開花するものと、秋季開花するものと種々あれども秋季のものに就ていへば、これは大和撫子又河原撫子とも稱して一尺内外より二尺位延びるを常とす、花は重に朱鷺色なり、種子を翌春まで持越して下せば其秋の末に開花すべし、總じて撫子は七草中最も手輕なるものなり、尤も日光にあてること十分なれば次第に花の色冴ゆれど、日蔭におくときは色惡しくなるなり、女郎花は七草中最も手入に至難なるものとぞ。培養法の中に挿木は入梅の時、三四寸に延びたる葉を葉のわきより摘み、眞土を少々加へたるごみ土に挿入れなばやがて根の付きたる時は丈高からずして盆栽などに適し、又其あとは二番芽を出して其年は開花せざるも、翌年は開花すべし。



夕日かげ向ふ堤の撫子は
こゝに見るより色濃かりけり　景樹

折人の心々のいつまでも
一くさならぬ撫子の花　永好

◎藤はかま

さて又藤袴は葉に匂ありて臭氣を攘び、花は紫がゝりたる中に白の葉あり、形袴に似て面白く霜除のごときものなくしてよきものなれば培養至つて簡略なり、又根分は春彼岸頃をよしとす、肥料は人糞若しくは水を等分にしたる油糟等もよく、植付けてより花期までに三四回も施せば十分なり。

あまり見ぬ花で忘れず藤袴　紋山

名の知れぬ風の吹なり藤袴　吳城

植てから花を定めけり藤袴　玉芝

又七草を盆栽に仕立るものあれど、七種を一鉢に集め植ゆる事は到底出來ざるを以て七種の盆栽といふは實は桔梗、女郎花に他の花を取合せたるに過ぎざるなり。

九月の園藝

三澤糸子

◎カーネーションの美點

カーネーションは八九月頃種を播きます、又は三四月頃も種を播きますが、此頃は春播の分が今を盛りと咲き揃ひ、其の艶麗なる花の姿と其の馥郁たる花の香は、容易に得難いものですから、古代の希臘人は「神の花」といふ名前をつけた位でございます。

羅馬人ばかりでは無い。英國などではエリザベス女王の時代には非常に珍重されたもので、上流社會では卓上を飾るのに一枝のカーネーションを一ポンドの高價を投じて購つたもので、デボンシイヤ公爵夫人はカーネーションで花環を造る爲に、千ポンド即ち一萬圓づゝ掛けたと云ふ事であります。

又獨逸人は、此の花の容易に凋まない所を愛して、これを「友情の紀念」と讃へて居ます

それから、佛蘭西のルイ九世が十字軍を率ゐて亞弗利加に渡つた時には、野生のカーネーションを採つて傷病兵を慰めると、幾百人の病兵どもは、恰も蘇つた如くに喜び、勇み立つて進軍の途に就いたといふ程です。

◎花の姿

それも其筈で、此の花には、一重もあれば八重もあり、一季咲もあれば四季咲もあり、淡紅色もあれば濃紅色もあり、紫紅色もあり黄色もあり、白色もあるといふ次第で、變化の妙を極めて居るし、一花一色のものもあれば一花二三色のものもある、白色若くは黄色の地に淡紅色の縞があつたり、濃紅色の絞があつたり、紫紅色の縞があつたり、さうして香が強烈で、花の姿が氣高いので、誰でも褒めずには居られないです。

カーネーションは石竹科に屬する植物で、撫子の一種ですが、香が高いので、從來「麝香撫子」といはれて居ります。

◎栽培法

この草花を繁殖させるのには、實播と、壓條と、挿木の三つの方法の中で、どれでもよいのですが、種は一袋五錢位の價で、苗は一本で十五錢位です。

春播にするには、三四月頃がよいのですが、秋播にするのには、八九月頃がよいのです。先づ苗床か鉢に種を播きまして、葉が四五枚も出たならば、一たび外へ移ゑ替へます。さうして一寸餘になつたら、一本づゝ鉢か畠に移ゑるのですが、秋播の分は苗床のまゝにして置いて、霜除をして冬を越させ、春になつてから定植させます。その定植に先つて、施すべき元肥はよく腐熟した厩肥がよいのです。それから花を開く迄に、二三回油粕の水肥を與へるならば

結構でせう。

この實播の外に行ふ所の繁殖法は、壓條と挿木との二つですが、壓條は七八月の頃に枝を幹から折り曲げて、そうして地に着いた所に土を掛けて置くと、其處から根が生えて參りますから、よき程合ひを見計らつて、枝を母樹から切り離して、他に鉢植へるのです。

又挿木をしようと思はゞ、花の咲いた後、枝を四五寸の長さに切つて、鉢か畠に挿して置けば容易に根が生へて活着ます。勿論、枝を挿してから、只放棄つて置いたばかりではいけません。根の生えるまでは適當の濕りを與へねばならないのですが、土は、砂と普通土とを等分に混ぜたものがよいのです。

○九月の草花園藝

この九月中に開くべきものは、カーネーシヨンの外に、桔梗がある、刈萱がある、薄がある、蓮がある、女郎花がある、木犀がある、秋海棠がある、カンナも咲けば、オキザリスも咲きますが、咲いた花を賞翫するだけの事ではいけますまい。園藝の趣味は、只單に花を賞翫するので無くて、花を咲かせる所にあるのでそれには、先づ種を播く事から始めねばなりません。

幸にして、この九月は秋の彼岸前後に播る種播きの季節に相當するので、來年の春の草花を賞翫しようと思召す方は、この秋種を播いて置かねばなりません。

○來春に咲く花のいろ〳〵

然らば、どういふ草花が來年の春咲くかと申しますと、先づ

一月にはプリムラが咲き、シネラリアも咲き始める。

三月になると、ヴイオレツトが咲き、パンジーが咲く。

四月になるとスヰートピーやロベリアが咲き。

五月になると、カーネーシヨンやアナキメリスが咲くのですが、斯ういふものは、悉く今年の秋種を播いて置かねばなりませぬので、草花園藝の上から言ふと、秋種程忙しいものは無いのです。

此の外に、尙この九月種を播かねばならぬものには、金蓮花がある、虞美人草がある、蝦夷菊がある、美女櫻がある、月見草に、矢車草に、金盞花に、罌子粟に、苧環に、石竹に、錢葵、立葵、水仙草、小町草、雛菊、飛燕草など種類がなか〳〵多いのですが、園藝に志ある人々の爲めに、今、東京種苗株式會社の草花類の種の價を掲げて見ませう。但し、これはいづれも一袋の代價であつて、尙郵税も其中に含んで居るのですから、その御積りで。

カーネーシヨン	五錢	雛菊	五錢
パンジー	二錢	翠菊	三錢
金盞花	五錢	八重撫子	五錢
虞美人草	二錢	グラヂオラス	五錢
シクラメン	五錢	美女櫻	五錢
水仙草	二錢	フロツクス	二錢
木犀	二錢	飛燕草	二錢
石竹	二錢	スヰートピー	二錢
小町草	二錢	金蓮花	二錢

矢車草　五個　カンナ　三錢

斯ういふ草花は、前床をこしらへて之に種を播くのもよし、又は底の浅い鉢に種を播くのもよいが、床播にすると手数がかゝるので、鉢播にして置いて、寒中室内培養の出来る様にして置いた方が便利でせう。

ところで、前に掲げて置いた草花は、種を播いて繁殖させることが出来るのですが、ヒアシンスとかバイオレツトとか謂ふものは、種を播かずに根分けをして其繁殖を図るのです。福寿草も、牡丹も、花菖蒲も、皆この九月に根分けをしますが、斯ういふものゝ一二の種を求めて、家庭園芸を試る人達の参考にしませう。

ヒアシンス(一重咲)　十五錢
同　(八重咲)　二十錢
バイオレツト　十五錢
福寿草(一株)　三錢
同　(十株)　十五錢
牡丹　四十五錢
花菖蒲　十錢
あやめ　十五錢
ぎぼし　十錢
雛菊　十錢

根分の法に據らず、又實播の法にも據らずに繁殖させるには、接木と、挿木との方法ですが、この九月にすべき接木は、桃、梨、牡丹、海棠、辛夷で、挿木はダーリア、牡丹、カーネーションの類です。

この草花園芸の外には蔬菜園芸といふものがあつて、殊に九月といふ月は、三ツ葉、甘藍、漬菜、萵苣、芥子菜、油菜、水菜、白菜、葱、秋大根、山東菜、牛蒡、蕪菁、菠薐草、芹、其菜等の種を播く時でありますが、實利實益の上から謂へば、草花よりは蔬菜栽培の方が大切ですから、家庭生活の主脳者は此の方面にも注意しなければなりますまい。

譬へば、農夫が一年間の労力を費して、米を作るとした所で、一段歩から得るところは、五俵か七俵に過ぎませぬ。この一俵の卸値段を五圓とすれば、一段歩の収穫は二十五圓か三十五圓に過ぎませんが、若し都會の附近で蔬菜園芸をなして甘藍を栽培するとして、うまく行けば一段歩から二百圓内外の収穫をなし得るは決して六ケ敷いことではないです。

勿論これは家庭の仕事としてではなく専門の園芸家の仕事であると御承知下さい。

△現代 児童教訓實話　下田次郎著

各地の女学校生徒に就て、其の生れて今日まで最も感心せる實地見聞の話を求め、其の自筆に成れる感話数百篇を得、その中特に感ずべきもの百五十篇を選びて輯録したるものなりといふ、教訓談といへば兎角陳腐にして現代と没交渉なるが多き此の際、かゝる活きたる實話を世に供せられたる著者の労は多とすべし。定價金七拾錢、神田区表神保町同文館發行。

▲詩歌 春の葉　與謝野寛著

著者の明治三十五年以後最近に到る八年間の製作中より、小曲百六十篇、長詩四十三篇、短歌五千首を選びて一冊となしたるものなり、歌風はますます圓熟して、[illegible]、興趣いよいよ盡きざるものあり、定價金四拾錢、[illegible]發行。

晶子の君へ

吉川せい子

見もしらぬ君にあつかましけれど一筆申上候もそゞろ御慕はしさの禁めがたくてと御許被下度候。くもり居勝の梅雨の頃を朝に夕に詩趣湧きて御筆せわしく雑記帳に書きとめられ候事と御羨やましう存じ候。申すも御恥かしき極みなれど私も筆とる事が大好きにて暇あれば鉛筆とりて無駄がきするが面白く何かしら書き続け候へば苦しみも悲しみも大方は拂ひ去られ候。程に候へども読み返し候ては己が不才の恥ましさに斷片々々末まではつゞかず雑記帳一冊位とるものもなくかきつぶされ果ては我身に悲しうなりて、よしや少々の常識は缺きても天才の人に生れざりしを悔ひ御前様を心から羨み候折もこれあり候、されど世帯を持ちて己が世界を臺所と定め候て後はまさかに詩を思ひてのみも居られず、むしろ天才ならざりし身を喜び只人様の御作拝する位此上もなきたのしみと致し居候。

短歌や御感想や時折拝する毎に凡ならぬ御方と驚き候と共に男子も及ばぬ程御自信固く世や人を怖れ給はぬ御氣性と存じ候、婦人にて文學に親しみ候者、多くは情の方面にのみ



囚はれて、數學的頭腦に乏しき様思はれ候にあなた様は整然たる御思考秩序たる御説、和歌に彼程の鬼才を現はし給ふ御方とも思はれず候、されば今の文學者の明日は自然派今日は懐疑派と定見なく自信なく世の風潮に進み行き候中に、あなた様の御立様の晴々しさいつも嬉しく存じ居候うら若き御身に赤き色の物着けませし事もなく、白粉さへもつけさせられぬ程のきびしき母様の許に御育ちなされ候は、あなた様の御幸福と存じ候然ればぞ明瞭なる御頭腦も出來雄々しき御氣性も養成されし御事に候はん。

日本女子の過渡時代に御生れなされ錆びたる習慣の鎖を脱して自己の運命を自ら開拓遊ばされしあなた様の首途の勇ましさ眞と勝利者に在はし候よ。

切なる情思と舊き道徳の矛盾に随分悲しき思ひも遊ばせし事ならんも、遂に自ら進みて、舊き頭を自己の犠牲になされ候點より見候へば、情の子として胸の炎に身をも燒きつくさん程の熱ある御方と思はれ候へども、その熱の中に冷静石の如き點も見られ候然ればにや、岡田様や時雨様の人の噂や悪罵雑話にとやかくと噂され給ふ中にまだお前様の悪評耳に致さず候。

やわ肌のあつき血汐にふれもせで寂しからずや道を説く君等との御歌を拝し候へば、多情淫奔の方とも思はれ候に、さはなく眞に幽かしく女らしく優しき中に犯しがたき威儀と定

見ある御方らしく、役者よ芝居よと騒がるゝ御方に比べて、なんぼ嬉しく尊敬の心起り候、この節女學世界に御掲載の雑記帳、君にとりては時折の御かき捨てに過ぎまじけれど、脱俗したる御筆堂々たる御説、いつも之あるが爲に發刊の日の待たれ候も、ひいき目のみにはあるまじと存じ候。

私の心に畫かれたる晶子様は足袋の綻ひさへも人には任せ給はぬ優しき主婦、子女教育に細かき注意を拂ひ給ふ賢き母「女まづ自ら修めよ」との御言葉通り情操固く智あると共に涙も情もあり餘る御方と是等の點を相合して晶子様てふ理想の人を造り候、如何に御慕はしければとて、御交りをとは願はず候、恐れながら近よりて、己が理想に異る點を認め候時の失望を恐ひ候へば、いつ迄も〳〵遠くはなれてこのまゝの晶子様といたし置き度候。雑記帳はいつ迄も〳〵御掲載の程願ひ上候、政治、教育、文藝に亙れる立派なる御意見は固き自信と御素養なくてはと感じ候につけても他人の惡口や衣服の事につきてのほか話柄に乏しき婦女子と冷笑され居候日本婦人の中に君居ますを心強く存じ候。思ひおこし候へば、在學の折、同窓の友打よりて一週に一度、金曜の夜を朗讀會てふ名のもとに、小説、詩歌、評論等を一人が讀めば他は皆、編物や裁縫しながら聞き居るまどゐ、これあり候、ちやうど、梅雨の頃のしめやかなる夜、私朗讀の番にあたりてあなた様の舞扇を持參い



たし候處、戀歌などの御所感に一つ〳〵讀み進みて、一寸中休み致し候へば、誰やらの發言にてはしなくも晶子様の人物評にうつり候天才、鬼才、と云ふ點は皆々一致に候ひしも御性質は、やれ淫に過ぎたりとか、戀を歌ふに餘りに大膽なりとかきくに堪へで、一言二言己が考へを申候處、果ては品性論までかつぎ出され滴子様は戀に經驗が御有りと見えて、と散々冷笑いたされ候へども私は心ひそかに我が信のあたれるを思ひ居候。その御人は、御卒業の後餘り美くしからぬ風評ありて今は同窓會雑誌へ住所不明と記され候、之とても、ひれくれたる教育家の妙な定規内に無理におしこめられたる弊害かと存じ候。申上度き事様々有之候へども此度はこれにて筆止め申候。今朝花賣りが持てる、しやくなげの花餘りに幽かしくて、床の間に挿し候へばその氣高かさ、あはれ晶子様なりせばあざやかなる詩の題ならんことゝ口惜しく存じ候。御自愛の程祈り上候。



受賞目録

△御殿女中の面影　一等金参拾圓　飯田百合子

△愚子の死　二等金拾五圓　綾浪女史

△始終心に不安を抱く婦人　三等金拾圓　伊東紀美子

△滑稽なる友の噂　四等金七圓　嵯峨野の露

△淫祠實見記　四等金七圓　秋風

△死人の口を寄せて見た記　月見草

△時勢に取殘された奥様　夢露

△終局は滑稽　大原綾子

△時勢に後れし妻　夕ばえ

△迷信問答　藤室女史

△求婚主義のクリスチヤン　若葉

△日の行爲を占示つて定め行く婦人　月の雫

以上五等金五圓



東京印象記

植松晴子

△

私、東京にも久しゝ御無沙汰して了ひました。えゝ、去年の三月、墓參のため一寸上京ましたつきりよ、都の花も見ずに我が十八の春も暮れて了つた……と云ふわけなのでね、今度はわづかな用事を口實に……けれど私、ほんとに悲觀しちやつたのよ、だつて私、モスリンの外によそ行の單衣が一枚もないんですもの。今まで着物の事なんぞ一切無頓着で、女らしくもないと云はれて、またそれが得意であつた私もこの頭痛切に――欲しいんぢやない、入用を感じます。

帯は叔父さまに頂戴した羽二重を先日仕裁たんですけれど、どうしても締めて見る氣になれませんのよ、厭なんですもの、あんな色合！　エ、エ、左樣よ、私どうせお母樣のお讓り頂いてよろこんでるやうな方とは人間がちがひますわ、つまらぬものでも自分の趣味に合つたものでなければ、承知出來ませんの。ほら、この襦袢の袖御らん遊ばせ、私時々いたづらにこんな工風しときますとね、皆樣がめづらしがつて大さわぎなさるんですの。一體女學校の方なんか、應用智識に乏しくつて被居しやるのね、あら、これはつひ失禮――何でしたつけ、帯の話でしたね：で、母樣に唾を返してまで、その羽二重は願ひ下げました。そして淺黃繻子を締めました。

何しろ三日間の豫定。なるべく時間を活用しなけやならんと破天荒のくはだて、朝は一番汽車、上りかゝつた空氣草履引ずつてステーションへ駈けつけたのは六時の發車前十五分。切符を切らしてプラットホームへ出る、朝の汽車は比較的にこみます、大船のおべんたうのよく賣れる時間です。

ふと見ますと人中に横濱一中の制服つけた脊のひくい振つたスタイルの生徒が、黑の毛繻子の書物包抱へて立つて居る。私のお活花の先生の息子樣ですの、顔を合せて默つてるわけにも行かないから、「お早うございます」と云ひましたの、つひ御無沙汰いたしまして……先生もお變りはゐらつしやいませんか」、「え

え」と靴の先をみつめたまゝ身體ごと横を向く、馬鹿にしてゝよ。中學の五年生にもなつて何の事でせう、私も澄まして「失禮、先生によろしく。」つと放れると、始めて顏を上げて見送りました、その風……ほほ……。

乘りこんだまゝ横濱までは立往生でした。電車だと直ぐ席をゆづつて與ますけれど、汽車にはさう云ふ親切者も居ないと見えます。足が棒の樣に成つてしまつた。

新橋で下り立つた中に、ふと私の目を射たのは、花やかな參謀肩章つけた海軍大尉、おはづかしいわけ、私は短劍下げた人を初めて見る、思つた程のいゝ姿でもありませんでした。

淺草行にのる、「乘換？」と聞かれて「なし」と答へるのが、私ほんとに氣が引けて……。

叔母さまのお家は○○で降りますのよ、そして△△の横町はいつて行くんですか、朝な夕な高等工業の生徒がよく通りますこと。

「御免あそばせ」つと洋傘を傾げて酒屋の店へ入る、帳場に、、ちび筆耳にはさんで、帳面しらべの叔父さまがびつくりして。

「ヤア、これは入らつしやい、五尺二寸。」

「まア叔父さま、相變らずねえ」叔父さまは私のことを、五尺二寸、五尺二寸、とお弄かひになります。すつと奥へ。

「叔母さま。」と手をつく。

此家では叔母さま御夫婦に、店の者や女中ばかりで、從弟妹はないし、つまらない家庭、私は叔母樣をお氣の毒に思つてゐる。

母樣の御口上のべて、用件を切り出し、それで今度の役目はすんだのだ。何だか氣がせく。が、叔母さまにたのまれて裁物を二三枚した。お晝に鰻の丼を出され、嫌ひだと云つたら、田舍者だつて笑はれた。田舍者田舍者つて、田舍者が何恥でせう、いくら東京でも叔母さまなど、牛乳は臭い、牛肉は親の代から頂いたことがない、なんかあんまり御自慢にもならないぢやありませんか。

さア午後から何處へ出掛けませうか、うるさいから幸夫さんとこへは行かないわ。明日は綾さまと森川町‥‥。竹田夫人はどうしやうかしら、伺ひたいわ、上りたいわ、靜ちやまにお目にかゝりたいわ、あの竹田夫人はネ、お手紙に「晴子おばちやま」と書いてきて下さるのが、ほんとに嬉しくつてしやうがないの。姉樣や兄樣おありの方は、早くから叔母ちやまと云はれるけれど、私なんかほんとに年とらなければ伯母さんにはなれないんですもの。靜ちやま。いつまでもいつまでも小母ちやまと呼んで頂戴よ。ホヽヽヽヽいまに靜ちやまがお父ちやまのやうに、角帽かぶつて赤門通ひする時分は、小母ちやま達はよいお婆さんねえ、その時分はたんと冷かして上げることよ。エ、靜ちやまですか、今年生れたのよ、まだお寫眞頂きませんの。

上野を歩きに行つて、圖書館へ入る。男子の席は澤山居りましだけれど、婦人室はからあきの有樣、袴の女が二人、一心に何か書きうつして居る、私は小說を借りました。あの、こゝで咳嗽やくしやみすると、グワーンとひびきますのね、びつくりしてよ。それから、借出しに行く時、一同の中通つて行つて、しばらくあすこに立つて待つて居るのが、何だかきまりが惡くて仕方がないわ。よくすべる床！　こゝでスケートやつたら、どんなものだらうと思ひました。

電燈が頭上に輝き初めたのに驚かされて、てく〳〵歸つて來ると、あの石段の傍に客待ちしてる車夫が、姉さん御都合まで如何です、お安く參りませうとしつこくついて來る。一寸悲觀しちやつたわ、私、姉さん？お孃さんとは見えないのでせうか。

夜、叔母樣が、明神樣へ行かうかと有仰る、よろこんでお供する。

町の兩側には、往來をせばめて緣日の店がずらりと並んで居る、幾百の裸火の焰、見世物の囃子、賣藥の掛聲、油煙の巷、人はぞろ〳〵。

叔母樣は御病氣で少し足がお惡い、それでお手をとつて上げると、人ごみの中におされ〳〵、呉服店の飾棚に食ひ入つて了つたり、おもちや屋の前に根が生え

て了つたり、活動寫眞の繪看板を見上げてらつしやる風たら……それが私の片腕にしつかり縋つて、おみ足を引ずりながらなのだから、たまらない、みんな人がふり返つて行く、「イロウ」なんてどなられる時のつらさ、つく／＼泣きたくなつた。

氷屋へ入つて休む、叔母樣は氷小豆を三杯召しあがりました。



△

綾さま、綾さまと、思ひつゝけて夢に入り、今朝はぱつちり目が開きました。うれしい、とひとり勇んで飛び起きる。ああこれからお訪ねするのだ、胸に浮ぶはあの眼……あの聲……。

私、例の高髷に結げたのですけれど、本郷あたりへ行くのに目に立つて仕方がない

から、髪結を呼んで貰つて桃割にかへました、ところが下町風の油べつたりもう氣持がわるくつて、思はずいやな〳〵顔して了つたけれど、我家でないのだから我慢しました。それから近所の小間物屋へ行つて、造花のかんざし買うとしますと、ちつともないんですの。

云ぐさが。

「當節は造花は流行ませんものですから‥‥へい」だつて。どうせこゝらの人間は話しにならない。叔母樣今年はじめてしぼりの洋傘御らんなすつたつて、感歎してゐらつしやるんですもの、冷汗が流れますわ。

「では叔母樣、また秋にでもなりましたら、御厄介に上りますわ、どうも有がたうございました。いろ〳〵失禮‥‥、さよなら。」

私のお叩頭は高いつてよく叱られますのよ。だが考へたつて足で歩く疊の上に口や鼻すりつけて、一山三錢のやうな大安賣、ばかな眞似は出來ませんものね。學生さん達の御挨拶は簡短でいゝわ、流石の私にでさへ二度も三度も繼足をなさる方がある、以て察すべしでせうホ、、、。

身は電車にゆられ乍ら、魂は飛んで天外、不意に驚かせて上げやうと、くだらぬ事を目論んで、わざとおしらせしなかつたが、もしや今日はお差つかへでも‥‥お留守ではないかしら、などゝ今更しきりに不安の念も湧く。

△△から三丁あまり、かねて承はつておいた道を行く。黒板塀に細葉樫の生垣、冠木門、雨にやつれし標札に上原とあつたのを見出した時のうれしさ。

打水のあと新しき石だゝみをそつと歩いて玄關に立つ。浪立つ胸を抱へて‥‥。

「あの、綾子樣お出あそばして?」

「御在宅でございます。」

「晴子ですと有仰つて下さい。」

「は」手をついた小間使ひが立上つて姿の消るや、

「まあ晴樣」襖おしあけて、なつかしの綾さま。

「おゝ。」

「うれしい。」

とばかり、私は和らかいお手にとられて、お座敷へ、

『嬢さま。』

『よく。』

共に、しきつめたカーペットの上に、ぴつたり手を揃へました。瞰きはまつてホロ／＼と涙流るる。

根上りのルイザ巻、書いたやうな襟足で、水色がかつた山繭入りのお召物、餘計お色が白く見える光澤美しき御頬のあたり、才はぢけた黒



いおん眼、今更ならず、まあ何と云ふお美麗な方なんでせう。お如才のない御應接ぶり、今日はお嬢様お留守、優子様は學校、お母様は一昨日から大磯の御別莊へお出掛あそばしたんですつて。

『けれど貴女とお話するには、人なんか居ない方がいゝわ、ねえ、晴さま、ほんとによく入らして下すつてねえ。』

またしてもルビー輝くそのお手を、私の上にお重ね

なすつて、美しの瞳をうつむかせて……。

綾さま！　あゝかつては高根の花とのみ、空に憧れまゐらせし花ちる里の君、その君よりの求婚状受取つた時の私は、うれしさに震へました。

君は有名な學校の御出身、地位あり名譽ある方の立派な御令嬢、とても私なんぞが同席で語られるやうな御身分ではないのですわ、けれど、けれど、綾さま、二人の間は、弓矢八幡、否××先生も照覧あれ、變へじかはらじの永久のむつみよ……。

櫻の青葉涼しげに、私の大好な〱くづ餅を美しう盛つた菓子鉢、立のぼる玉露の香りも床しう。ガラス戸開け放したお縁に立てば、花畑には、いまダリヤとひなげし、パンジーや、カーネション、いろ〱のものが咲いて居たけれど、私よくは名を知らない、お池には睡蓮が浮いて居る。松に掛つた凌霄の花、まだ朝の程の花やかな日を一ぱいにうけて、露のきらめく葡萄棚、黄金色に輝いてる枇杷の見事さ。あら、食べたかつたんぢやありませんわ。

折々お二階に咳嗽のお父さま、何處かへお出まし遊ばすので、綾さま、「一寸御免あそばせよ」と立つていらしたが、いそ〱お召替のお手傳ひの御樣子、おやさしいお父樣のにまじつて、ホヽヽヽと美しいお聲も起る。

嗚呼、御兩親おあり遊ばす方みると、嫉妬を起さずには居られません。

『まア晴さま、長いことお待せいたしました。失禮！……』輝くやうなおん笑顔、チラリ金歯の光りお可愛らしさつたら！

アルバムや寫眞ブック拜見する、まア揃ひも揃つて、お嫂樣、綾さま、優子樣、引ぞわづらふ花菖蒲、何てお美しい方ばかりなんでせう、ことにお嫂樣が、ルイザ巻で、黒の御紋附召したのは、何とも云へぬマダム振り、綾さまのお島田、云ふだけ野暮よ。お兄樣も御立派な方、軍人なんかにや勿體ない御縹緻、お生み遊ばしたお父樣お母樣、どんなお方でゐらつしやるんでせう。

私はピアノをお習ひした、かくれなき名手とは、誰云ふとなく耳に入つたものを……、笑つてはうけがひなかつたが、強ひておし返すと、

「では」と西洋室へ御案内下さる。

お廊下の突當り、カーテンなど程よくしぼられて中央には小形の卓、色うるはしい椅子が五六脚、金色爛爛たる置時計、袋に蔵められたお琴が二面、窓に對つた洋琴の上には美しい盛花が置いてある。



水色緞子の長椅子のはしに腰かけて、

「さ、綾さま、何か伺はせて頂戴な、ね、ね、お願ひでございますから――まアどうしてお厭それぢやあんまり。」

「だつて……」私の肩をおおさへ遊ばしたが「ではね」とにつこり、すらりと立つて楽器の前へ、風かほる青葉の窓に、繪のやうなおん姿、曲は名高いムーンライトソナタでした。楽譜にその鈴ばりのおん眼をやつては、キ

ーポールの上を走らす御手の冴、前後左右へなめらかに動くおん指目にもとまらずさながら、白魚の水を潜るやう。

一音ひゞいて一音つゞく、高くひくゝ清しの音は、庭の木立ちを搔い潜つて外へとひゞき渡る。

妙なる樂に醉はされて、恍惚となつて了つた私は、一曲終つて立上られた綾さまを、少し身を退つて迎へたばかり、感謝の言葉も口に出ません。

お晝餐には綾さまと一つ食卓で頂きました。お女中も下げて了つて、御手づからのお給仕。けれど先刻からうれしさに胸がつまつて、折角の御馳走も綾さまを滿足させる程には平げられませんでした。

食後はまたもお庭を散歩たり、唱歌うたつたり、語りつ問ひつ、話はつきぬ、名殘もつきぬ、歸りたくなかつた、厭だつた。綾さまがまた、一生懸命にお引とめ下さるんですもの。

とう／＼二時頃思ひ切つてお暇つげた。途中まで綾さまは送つて下さいました、雨の袂を胸に重ねて。

「晴さま、ぢやお氣をつけてね……」

と有仰つた、お聲なら、お姿なら、今でもあり／＼と浮びます。

森川町へは故あつて久しく打絶えて、今日五年ぶりの對面、從姉もよろこんでくれました。叔父樣は御出張中のお留守。叔母樣と呼んで居るのが從姉なのです、ふつくりと前髮を出した8卷にして、肉附ゆたかな、色白の、これで母樣とは一つちがひ、水のたるやうな奥樣ぶり、笑ひながら、

「まア晴ちやん、貴女は何故そんな髮に結つてるの、せめて夏だけ日本髮はお止しなさいよ。さぞまアどんなハイカラさんだらうと思つたに……かう前髮をたくさん出して水色リボンか何か——きつと似合わ、いくらお母さんがやかましいたつて、そんなに溫和しくして居るがものはないぢやありませんか。」

「でも……」

「でも何なの、ホヽヽヽ。」

「兄樣？」

『一雄ちやんがやつて來た。私をみて手をついて莞爾する、可愛い子、大切な一粒種で、尋常三年生だ。兄樣と云ふのは叔父樣の遠縁に當るとか、私は始めて遇つたのでした、滅法背の高い眼の涼やかな――だまつて高い、お辭儀！　も憎くはない。私はこの人に一高の帽子をかぶせてみたいと思ひました。



すゝめられたお風呂にはいつてさつと汗を流し、鏡臺貸して貰つて緣側へ持出して、髮を撫でつけてると

『ア、晴ちやん、晴ちやん、そんな手つきしちやかんじいの髱も何もだいなしになつて了ふだ……』

『だつて私、つひ後に眼がないもんだから。』

『蛙さんちやあるまいし、誰だつて後に目はついてない、ま、一

す……」

叔母さま櫛をとつて叮嚀にかき上げて、それから大きなポットに何とか云ふパりー製の粉白粉つけて、お化粧のみだれを直して下さる、ついでに帯も引ぱつて、一つポンとたゝいて、

「晴ちやん、あなたね、兄樣に案内して貰つてそこら見て來るといゝのよ。晩には私も若竹へでも行きませう、ね、兄樣、この人をつれてつてやつて下さいな。」

「えゝ、行きませう」もう立上つて下駄を穿きかけてる、

「すみませんのねえ、では叔母樣、」

襟をかき合せ乍ら

「一雄ちやんもいらつしやいな。」

「お止しなさいよ、足手まといだわ、それよりお二人でぐん／＼跋渉して行らつしやい、駈け足でも何でもして……」

「ホの、、、そんなら。」

二人は門外へ出た。

「何處へ行きますか、貴女」

「私、何處でもいゝんですけれど、あのね、一高の傍へ連れてつて頂戴、まだ見た事ないですの。」

「高等學校……だつて女は門内へ入れませんよ、」黒い眼でぢつと見返る。」

「エゝ門外からそつと見るだけでいゝの……」

パチンと開けた。パラソル肩に、お後に引そつて歩をはこぶ。

バンドをしめたお茶の水、美の字の徽章つけたのは幸子樣のお仲間、紫紺、お納戸、紺、海老茶、ねずみ、紫、さま／＼なお袴召して、ずろ／＼通る。振ひつきたいやうなスタイルのもある。インキを下げた若い角帽さん、サッサと歩いてゆく一高生、觀察も刺戟もあつたものでない、私の心は浮づつて了つた。口惜しい、妬ましいと思ふ念が胸一ぱい……」

「こゝが一高です、」と兄樣、我にかへつて見上げた。

そゝり立つ向ケ岡の自治の城、一きわ高く秀でたる時計臺、幾年の風雨に黒める門衣、もう／＼熱い／＼淚

が湧き上る。

昔、私がまだ十二三の頃、矢吹さんや磯野さんなんかは、一高の二部に居ました、その頃から女のお友達と飯事なんぞ大嫌ひでお轉婆の本領發揮、この人達が夏休みでやつて來た時などそれは大へん、かくれんぼ、鬼ごつこ、子を取ろ〳〵、まア夢中になつてさわぎましたづけ。その人達も學士になつて、かつてはかちりついた首つ玉に高いカラーつけて八の字髭ひねつて、ゴムバや賄征伐は誰がしたと云ふお顔、たゞ私、あの頃、肺を病んで、春をも待たずあへなくも散り失せて了つた田中樣だけは、今でもなつかしうございます嗚呼頂いたお國名產姫路皮の筆入れは始終つかつて居ますのに……

「君」どんと肩をゆすつて外國語學校の三人づれが、よろけ掛つてわざと二人の間を割つて通り、そして笑ひながらふり返つた。私はハツと氣がついて

「もうようございますのよ、兄樣。」

「いゝんですか、これだけで。ぢや……」

引返す道で兄樣のお友達らしい方と行遇つた。「ヤ、君」とか何とか立話が始まつた。しばらく後に待つて居たが甚だ手持無沙汰、先行つて了ふわけにもゆかず、仕方がないからはしへよつて、そこの唐物屋の飾窓を見たくもないのにながめてると

「晴子樣、晴子樣」兄樣はもう十間も先で手をたゝいてる、

「はア」びつくりして駈けて行く。

「大學の構內通つてみた事あるですか。」

「私？　否。」

「行きませうか。」

「どうぞ。」

「一雄ちやんをつれて來なくてよかつた、途中でもう歸うなんて云ひ出されると……」

「ほんとに御迷惑ねえ、飛んだ御案內願つて……」

「否、なか〳〵ハイカラな見物ですよ。こゝから池の端へ出ませう、そして上野を通つて歸途は電車で……

「はア。」

私は兄様に氣の毒でなりませんでした。成るべく放れて歩いて居たが、何か話しかけられると、つい〳〵肩を並べて了ふし……。

「貴女も一高の腕白坊ちやんお好きですか、」

「はア。」

「白二本筋、誰にでももてるんですね、どう云ふわけです。」

笑つて居る。まア隅にはおけない人、

「お人の惡い、知らないわ。」

「だけれど實際……男らしいんですね。僕ア二部が好きだ。」

「アラ左様。私もよ、一部は無論ですけれど二部の甲も好きなのよつ兄様、もし遊ばせ　なに？　當てゝみませうか、え、電氣？　造船？　採鑛冶金？　それとも、劇場の方？　私なら一部の政治が獨法……」

調子にのつてしやべつたが、あゝいくらこんな空想したつて……。羨しい、羨しい、果敢ないわ、人にふまれて捨てられて、さうして果てるのが女と云ふものの運命なんでせうか。もゝ何でもいゝ、思ふさき腕が振つてみたくつて……。

赤門からはいつて無縁坂口の鐵門へと出た、いつか沼川様つかまへて『私ねえ、赤門々々て夢にまで見たのですよ、そしたらまア實際ははげづちよろけてきたないのねえ』と云つて上げたら、『だつてあれはもう古いんですもの、そして正門ぢやないんです。』

「正門はなほきたないわ、オホヽヽヽ。」

「門はきたなくつても構内へはいれば立派ですよ」と有仰つたのまつたくね。

聳ゆる時計臺を見返り勝ちに池畔へと下りる。觀月橋の石の勾欄に身を凭せて、二人はしばらく足を休めました。

碧の蓮の葉、朱い辨天堂、折から夕榮の雲紅に水に浸して「あゝ美しい。」と思はず云つた。

袖ふりはへて遲々として歩み遊ぶ人達も少からぬ。

淸水堂へも上つてみました、黄昏れし朱の欄干に腰かけて物思はしげな小倉袴の學生、何處やら中山様に

似たやうな…。。Ｓ子様がそこらに見えはせぬかと見まはされた。

博品館へ入つてみませうかと云ふ、えゝと答へて足を向けた。

電氣の光りまばゆき館内大變な人出、ふと小間物屋の店などに立止つて、一寸人にへだてられると、直ぐ兄様は晴子様！ 晴子様！ て呼んでる、いくらオノボリサンだつて、迷子になつたら森川町へぐらゐ歸れますわ、何店もずん／＼素通りして出て了つた。

廣小路でひらり電車に乘る、ならんで腰を下したが。



「晴子様くたびれたでせう。」

「えゝ、兄様は。」

この問答を眞正面にかけてる二人づれの女學生が、笑ひたいやうな顔して居るので私はむつとして、うつり行く市街の方へと眼を向けた。

夕といろき、花やかな活動のちまた、軒並ガスや電氣で彩られて、いよ／＼學生の通行多き本郷通りを歩きながら、兄様はこんな事云つた。

「晴子様、貴女は何處の學校へ行つてるんですか。

「私？ 何こへも學校なんか行きません

のよ。」

「串談でせう、何處です、ほんとに。」

「いやアね、學校へなんか行つてやしないのよ。」

「ぢや、あの、小學校へでも出て居るんですか。」

「オヤ、オヤ、さう見えて？　まア、オホヽヽヽヽ」

ホヽヽヽ失笑して了つてよ。奇拔だ、まア私が女村夫子……。

家へかへると叔母樣は待かねてゐらして、これから若竹へつれて行きますよと有仰る。大急ぎで御飯いただいた。叔母樣錆納戸の夏羽織召して、白麻布のハンカチに香水をしませながら、私にも頭からふりかけて下すつた、兄樣は何時の間にか小倉袴つけて來たので、「まアいやだ、兄樣は、そんな窮屈袴穿いて行くんですか」と叔母樣が笑つても『えゝ』と澄ましたもの。後からついてく風は丁度書生と小間使ひの樣だらうと可笑しくなつた。

寄席と云ふとこ私は始めて見た。高座とかつて高いとこへ出てお叩頭して、羽織を脱いで扇子パチクリ。いくらパンの代だからつて落語家なんて厭な商賣もあつたものねえ、またどれも／＼人間らしい顏して居るのはありやしない「人八化二」ぐらゐなとこだ、見まはすと、お客は大概學生と廂髮、日本髮は丸髷婦人が二三人。なか／＼ウキンナ卷のハイカラ令孃も在します。あら、川島樣によく似た人が居る、特色のある八ツ頭みたいな頭、短かい三分刈にして、お近眼鏡かけて、横顏の口許などはそつくり、どう見ても／＼川島樣だ。あ、あの俯いて笑ふところ？　氣のついてか、向ふでも度々ふり返る。これが男同士なら、よし人違ひであらうとも、聲をかけてみるのだけれども……。氣になつて／＼たまらず、しまひまで眼をやつてばかり居たが、とう／＼かへりの木戸口の混雜にまぎれて了つた。

△

朝、叔母樣はまだおやすみ。早いやうだが起きて了つた。さつとお化粧して二階の窓に凭る、直ぐ眼の下

に下宿屋がある、下女がカンガールの餌をあさるやうな風して、縁側の雜布がけしてる。ローマに結つたハイカラ令孃が、アームチエーヤに腰かけて新聞を讀んで居る、あの家の止宿人なのかしら？

兄樣と一雄ちやん、學校へお出掛。高師の附屬へ行くのです。

私はお墓まゐりにと家を出ました。青葉若葉の谷中の里に眠ります、墓石の主は父さまにお兄樣、兄樣だつて私は三つで別れたのだから、チッとも兄樣のやうな氣はしない、お花とお線香手にして生雛の間を行く。



かへりに芋坂のお團子を買ふ。

さて今日の一日はどう云ふ風にして費やさうか、神田樣へも伺ひたいし、竹田夫人へは靜ちやま抱きに……午後は幸子樣と約束がある、私は永つ尻だから、どうも他家へ上るのがおつくうで仕方がない。いろ〳〵考へながら、乘換貰ふ時つひ『本郷三丁目』と答へて了つた。

午後は日比谷だ。時間早めに、公園で電車飛び下りて豫定の山の上、まア隨分ベンチに掛けてる人がある。噴水の水をながめ

て、ハンカチで襟に風を通し乍ら、しばらく木陰を歩いて居たが、てく／＼肥つた女學生の傍に腰を下す、色は白いがそら豆に目鼻つけたやうな顔で、ホヽヽ、ホ三枚櫛が二百三高地の壘壁をなして居るつてのはこの女のことよ、卷いた毛の中から、油じみた根の打ひもが顔を出し、大きな／＼髷櫛さして、折角のあみ上げ靴も何もあつたものでない。ヂンと澄まして何を待つて御座るのか。

もう何時かしらん？　私ほんとに時計が欲しいわ、先日綾樣のかけてらしたのあの可愛い銀の首かけが……。

「ヤ」と向ふから白つぽい小倉袴つけた白飛白の書生さんが美しい歯をみせて、立上つた。つか／＼近附いて帽子をとつて。

「しばらく。」

「あら、何誰でせう…何誰でゐらつしやいます。」

「え、晴子さん」と笑つて居る。

「まアほんとに、ほんとに何誰で被居しやいましたつけ、私、つひ。」

「僕は本田です。」

「あれ、まア、どうしたらいゝでせう、まア」私、袖を顔におし當て笑ひ出して了つて「いやだ、ほんとに本田樣でゐらつしやいましたつけねえ、まア。」

「ねえとはひどいぢやないですか。餘り冷淡だ。」

「ホヽヽヽヽ。」

「お母樣は御丈夫ですか。」

「有がたう……」

「いつ當地へお出になつたんです？」

「はア一昨日？　私、本田樣をお見外れ申すなんて、よつ程うかしてるのねえ、どうしませう、ホヽヽ、ホヽ。」

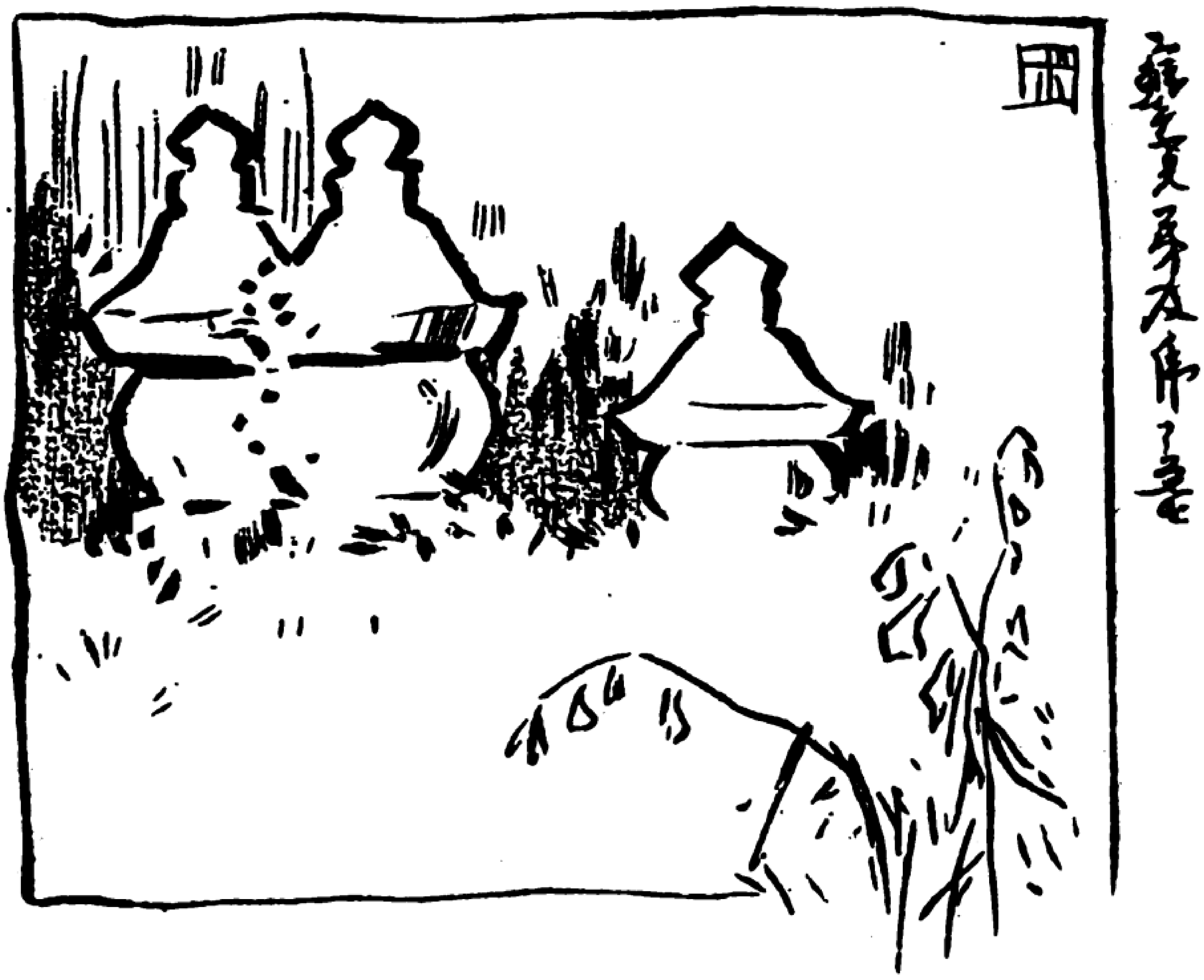
「お齢のせいかも知れません。」

「まつたく…オホヽヽ、でも決して忘れたんぢやございません、お見外れ申しましたのよ、ですから。」

「いつも御盛んですな。」

「知らないわ」少し座をゆづつて

「まアお掛遊ばせな。」
「よく氣がつきましたね。」
「あらずゐ分ねえ」肩をならべて袂を探つて富士とマツチをとり出しながら。
「晴子樣。」
「はア。」
「僕の友達でね、是非拜顔の榮を得たいと云ふ熱心家がある、水谷と云ひます、其奴貴女の土地へ避暑に行くかも知れませんよ、よろしく。」
「オヤ、左樣？　本田樣は何處へお出かけ。」
「僕、今年は故鄕へ歸省ます。試驗前に病氣しちやつたんで大へんです、これから獰猛に勉强だ。」



「あら、貴下も試驗延期ね、乾度さうでせうと思つてたのよ。」
「何故。」
「法科の方はみんなさうなんですもの、苦しい〳〵つて云ふのを、一種の虛榮にしてゐらつしやるのよね、ホヽヽヽ。」
「串談ぢやない。だつて貴女、實際ですもの、身體がたまらん、事實法科は苦しいんですからね。」
「筆記萬能大學、一名病人收容所！　ホヽヽ、本田樣はいつ御卒業！――」
「それや知れません。此さ

き何度落第するかわからないんですもの。」
「オヽ嫌だ、知つてヽよ、來年脱線？　ね、さうでせう。」
「これや猛烈だ。晴子樣、貴女はひどい、大分いろんな人がモデルに使はれるやうだが、何だつて僕の本名なんか出すんです、僕ア女達に冷かされてやり切れない。」
「あら、さう。」思はず熱くなつて。
「どうもすみませんでしたのね。」
「今日は何ですか、お一人ですか。」
「はア少し…あの、お友達を待ち合して居りますの。」
「さう、」とあたりを見ましたばかり、流石一緒に散歩しやうとも有仰いませんでした、私はホッとした。けれどこのまヽお別れして了ふのは、何だか意氣地がなくつて、こうした場合何とか彼とか、相手の胸にしみ入るやうな、痛烈な言でも云つてみたい！！　と氣が急く。

併し、
「ヤ、ではこれで失敬します、お母さんに宜敷。」
「まあさう…お大事に…」御勉強あそばせよと云ひたかつたが駄目でした、ぢつと目送して、俯くと、
「晴ちやん……」と桔梗色のパラソルたヽんで、駈けよつた幸子樣・無意識の中に握り合つた手は、二度三度つよく／＼打ち振られた、指環が痛い。
「まあよく。」お互に唇をついて出た言葉はこれでした。
　入學のため御上京の途次、立よられて泣いて別れを惜しんだは、つひ先日と思ふのに、もう立派な式部に成りすまして居る。紫紺のお袴ひくめに穿いて、銘仙にクリーム色の襦袢の袖を重ね、髪はわざとかミッシヨンスクールくさいまき方。今日はフランス形のお靴ではなかつた、鹽瀬表の重ね草履。
「少し歩きませうか、ねえ。」
　高くひくき二人はしづ／＼と花壇の方へ行く、光澤の強い桃色と紫の小さい草花を、ひし形や三角やいろ

いろに植られたのが、強烈な日光に輝いて居る。何しろ暑くてたまらない、汗をふき〱日比谷公園の御逍遥？　あら、女詩人は違つたもんだつて？　よくつてよ。小高い藤棚の下に休む。そこらはクローヴァで一面、私、クローヴァ大好き、御存じなくて？　一高百景、クローヴァの床、おゝなつかしい匂よ、白いその花を胸に挿す。

私達と對ひ合つたベンチに、稲の角帽さんが一人、相引の五寸もほころびてる袴つけて、一心にノートを読んで居たが、ふと立上つた。見ると足に大きな毛蟲がはつて居る、が、また腰かけて了つた。



「あら、幸子様、オホ、、、、、。」

「え、何。どうしたの。」

「だつて、だつて、ホホ、、、」

鉛筆出してカードの裏へ走りがきしてみせると、幸子様も笑ひ出した、今更のやうに上を見上げて、「厭ねえ、退きませうか、落ちて來ると大へんだわ。」

「えゝ、さ、行きませう。」

こゝを去ると二人は一時に失笑して了ひました。隨分無神經な人、自分の身體を歩かれてるのに氣がつかないなんてよつ程どうかしてる、氣になつて仕樣がないわ、あの毛蟲何處まで旅行をつゞけるでせうか？でも幸子樣は、

「何か一心になつてたんですよ、だからよ、だからよ、とたのまれもせぬ御辯護．感心してよ、ほんとに幸子樣は早稻田狂ひ、だまつてきいてればいゝ氣になつて、洋傘の先をツツツツと輪にくりながら

「此間ねえ、こゝで早稻田と一高とテニスやつたのよそして一高はね――、ホヽヽヽ可愛想に撰手はみんな泣いたのよ、學習院ともやつて、やつぱり一高が敗けたのよ」なんて美しく笑ふ。

「貴女どうして牛込派お氣に召さないの、彌生が岡の方がお好きなのねえ。」

あんまりだから、

「無論よ、比較問題ぢやないわ、」と云つてやつた。私の早稻田を嫌ひなのも一つはあのMさま、私が七月の誌上で富枝樣に、あの方によろしく、と一言云つたばかりで、大へんな事になつて了つた。

あれは如何なる御こゝろもてものせられ候ものにや、御親切はまこと有がたくは候へども……だの、生にとりてはまことにおだやかならざる文字……まこと世の口ほど恐ろしきものなく、いかなるうたがひの雲かゝるやもはかられず……、流石の小生も頭は漸次に下りて、散るや時ならぬ紅葉の雪よりも赤き黒き耳朶までも火の如くにして……なんて何だかまるで私がラブレターでも上げて、彈ぢかれたやうな體裁、晴子こそまことにもつて汗顔の至り、それこそ散るや紅葉の……で、ほんに耳朶までもあつくなりました。

今まで隨分、憧がるゝ式のものも書いたけど、こんな事云はれたのはこれが始めて。Mさま、貴君も運動界にはその人ありときこえたる選手、もちつと超然主義をおとり遊ばせな、何も何百人の早稻田にMさまて方は貴方お一人ではございますまいに、あまりお氣が小さくてゐらつしやる、お笑止にぞんじ上げますよ。

これだもんで、どうもね、柏葉宗の大信者は、早稲田の蛙さんはあまり好きませんの。

御一緒に寫眞でも撮りませうか、と云ふと、幸子様、それよりお願ひだから私の宿まで來て頂戴な、と手を握る、エ、何處へでも行きますわと相談一決。花やかなパラソル行きちがふ花園捨てゝ、電車で新宿へと向ふ。

赤坂見附から二人の御令孃がのりこんだ。幸子様がつと袖ひいて『ちよつと、學習院よ』『エヽ』とは目に云はせてうなづく。一人は分の厚い前髪でウヰンナ巻に海老茶のお袴、一人は白丈長の唐人まげ、大きなべつかふの前ざし深く挿しこんで、お納戸カシミヤの裙長う、斯う少しお襟をぬいて、お扇子手にして、えゝ雜誌向き……だか何だか、眞白くお化粧してね。ある家の塀の内に瑠璃色の大きな／＼紫陽花が咲いて居るのを見て、私、あの花大好よ、とつい口をすべらすと、左様でせうよ、熱烈な方は何でも濃厚いものをお好き遊ばすと、力一ぱい脊を打たれた。紅葉様の多情多恨の柳之助にすつかり同情しちやつたと云つたばかりで、みんなが冷かして仕様がないの。

幸子様のお宿は柏木だ。ギユツ／＼ときしむ階段を上りながら、これはまるで暗夜に蛙ふみつぶしたやうな音、と云つたら、それや貴女のめかたが重い故だわと幸子様、なか／＼敗けて居ない。まあ素敵なお室、奇抜ねえ、A様のお頭のやうなデコボコ畳、アラ随分よと笑ひ出して、ですから實はね私、今日此家を引はらふんですよ、それで貴女にも手傳させやうと思つてそれで來たのよ、だつて。まア驚くわ、それぢや私はペチンにかゝつたやうなものだ、わざと立腹た風でぷんぷんしてやる。

を轉宅たつて手輕なものだ。二人で着物はぐん／＼行李へおしつめ、布團や何かは宿の人に荷造りして貰つて、市内配達にたのみ、私は机の物やお化粧道具をとりあつめ、小わきには蛇の目の傘抱へてパンジーの鉢植を持ち、幸子様は大きな風呂敷包。新聞紙にくるんだ下駄を下げるやら、まだしも洋燈と紙屑籠ぶら下

げないのがめつけもの……笑ひくづれながら電車の一隅に席をしめる。中村屋――ホラ、パン屋の黒光女史の家ね、アラと思ふまに走り過ぎて了つた。夕方だから勞働者やら何やら、乘て〳〵、ギユー〳〵とすしづめ、丁度私等の前の釣皮につかまつた學生がある、上下動、左右動、なか〳〵はげしいので、故意か自然か、此方へばかりゆれ掛つて、うるさくてたまらない、白飛白の袂がヂラ〳〵と顏にふれる。無遠慮にぢつと見上げてやると、まはりへ黒麻をまいた丸帽子、マーキユツトだ。

オホヽヽヽ、可笑しいわ、可笑しくつて仕方がない、それからね××先生がね、晴子さんはかくしちや居ますが、あれは非常なお轉婆です、モウ眼中無人、箸にも棒にもかゝらない、覇氣の強い女ですつて有仰つたんですつて。ホヽヽヽ、非常なお轉婆が氣に入つた。流石先生はお目が高くつてゐらつしやるのよ、私、自分ではそれ程のお轉さんのつもりぢやないんですけれど隨分電車の中で暗號の惡口云つたり、男學生の品さだめしたり、長上の人には直ぐ仇名を奉つて了つたり……島田の手前もありますから、ブランコだけは止めましたし、それで電車の飛乘だけは、こはくつてどうしても出來ないんですけれど……。

だつてね、大學生のお友達一人ないやうぢや、友達に對して肩身がせまいんですもの。え、三田ですか、嫌ひぢやありません、秀人樣や三郎樣、慶應へ行つてますのよ、普通部四年……いま振つてる盛りでせう。

あゝこの天かける駒のやうに、自由な尊い、少女てふ時代を、空しく過して了ひたくないんです、出來るだけ花やかか、甘い追憶をつくつておきたいんです。

プラウドは貴女の生命だつて、罵られたこともありました。まつたく左樣かも知れません、プラウドが私の生命なら、うぬぼれは男子の弱點よ。ね、おほゝゝほゝ。

須田町の乘換、ちつとも三丁目行が來ないんでせう、焦れつたい、焦れつたい。二人はそこら飛んで居ました、シトロン、とサツポロ、が消えたり、ついたり、

乘客はだん／＼たまつて了ふ。灯に輝いた活動の町はほんとに美しい。



やつとの事で、おし返されつゝ乘つたはいゝが、兩手ふさがつて居るので、皮にぶら下がる事も出來ない、

でもやう〳〵傘と鉢植だけはわづかな透間へおいて貰つた。ところが三丁目について、ドヤ〳〵と總立ちになつたとたん、子供をしようつたお神さんが、よろけてその鉢植をころげ落して、けとばした。

「オヤオヤ、オヤ」幸子様が眉をひそめると、左側に居たペンの徽章の人も、氣の毒さうに苦笑しながら降りて行つた、仕方なく、そのまゝ捨てゝ來て了つたが、幸子様は殘り惜しさうに、

「あの學生がね、いつそ自分で持つてゝくれゝばいゝのに‥‥折角氣にして絶えずかばつてゝ呉れたのにねえ」だつて。あんまり蟲が好過ぎます。

幸子様の行く家は西片町だと云ふ。私、こんなもの持つてそこまでお供するのは厭だから、無理に森川町へ引ぱつて來た。

「まアいつまで何處を歩いてたのですよ、どんなに心配して、いまも兄様を見せにやらうと思つた‥‥」と頭からお小言頂戴、恐れ入つて幸子様を御紹介して、この方今夜一晩とめて上げて下さいなとおねがひする。御飯頂いてお風呂に入る。

九時頃叔母様、帯を締め直しながら、諸君は何がお好き？ とおきゝになる。私は無論、

「私、お汁粉！」

「兄様は。」

「僕も！」

「オヤ〳〵、これは情ない」と大笑ひ、けれど、多數決、多數決、とさわぎ立てて、三人ぞろ〳〵ついてお汁粉屋行きました。

あのね、兄様は六杯召上りました、私と幸子様は二人で六杯よ、叔母様はお雜煮を二つでした。男の癖にお汁粉屋へ入つてる人みると可笑しいのねえと云ひかけたら、兄様が失笑した。ほんとに惡かつた。

歸途に雨がふり出しました。

△

兩人ともぐつすり寢坊して了ひました。飛び起きるとうれしい。昨夜の雨は心地よくあがつて、青桐の葉

に名どりの欅がきら／＼と輝いて居る。

幸子様のお髪あげ、二人が念入のお化粧！　九時頃此家を辭した、幸子様の荷物は夕方まであつがつておいて貰ふことにする。

「兄様、さよなら」つて云ふと、「さ、おかへりですか」と手をつく。

二人は相談して、淺草ときめました。日曜だから電車の混雜こと／＼、雷門で下りる時、兵隊がよろけてあの一尺五寸もあるボチ靴で、いやと云ふ程私の足をふみつけた。

來てみれば面白いけれど、何だか淺草と云ふと厭で仕方がない。仲店をぬけて、觀世音菩薩のお堂へ上つて、それから池の端六區へ出る。活動寫眞見るつもりかつて？　そりやこれも社會觀察のためですもの、オペラ館へはいつたのよ、何しろ大へんねえ、電氣館、富士館、大勝館、三友館やら何とかダンス、キネオラマ、我劣らじと盛んに音樂を吹え合ひ、いさゝか遠い様な私の耳でさへ鼓膜に皺がよりさう。つんぼでものはこんな音でもきこえないてせうか。

二階へ上つて行くと、風船玉の化物みたいな改良(？)服着た束髪の若い女がいきなり人の腕を引つかんで案內する、覺悟はして居ながら面食つた。

まア、ハタ／＼とみんなの使つてる扇子が、大きな蝶々の飛び舞ふやう。どうも暑いことは／＼。

悲劇「人と人」と云ふのだつた。あの女學生が赤沼學士に大氣焔浴びせるところ「私、眼中には男子なんてないことよ」なんかすゐ分痛快ね。ホヽヽ盛んな拍手。そして私等の右に居た四十あまりの田舍風のお內儀さん、音樂部で獰猛なヴアイオリンこすり始めたのを見て、「ア、あんな大きい琵琶を持ち出した」だつて。「まア素敵よ、幸子様、大きな琵琶を持ち出した」と口眞似したら、どつとまはりの人がふき出しちやつたのよ。

歸途に梅園へよつて二人で二十七錢はらひました。

三時頃には三越の客でした、食堂へはいつてお鮨を注文し、アイスクリームを食べながら鏡の前の花を見

るふりして、衣紋などかき合す。こゝの給仕女、いゝのねえ、お揃ひの銘仙がすりの品のよいのに、まつ白な當胸、髪もルイザの令孃風、みんな可愛い顏してますこと。

束髪の白い花束を見立たり、鴇色メリンスの襦袢の袖を買つたり、ふと目についたのは札をみれば三圓なにがし、幸子様が、まア御一緒にこれが欲しいわ、と云ふ。私も同感、早速なけなしの底をはたいたので、二人の財嚢はカラッポになつてしまつた。汽車賃が足を出しやしないかと冷汗が出た。

無やみに心ぼそくなつて、妹のおみやげを買ふつもりだつたのも、それどころではありません。

つひに新橋のプラットホームを幸子様に送られて、五時半發國府津行の列車にのりこむ。

花の趣味

▲米國婦人は上中下各階級とも孰れも自ら野外に出て野菜を作るなど云ふ事は全然なく、又庭に草花を植ゑて賞翫する事も日本よりは餘程少い位で、田舎ならば男子が總て之を栽培し、都會ならば全然花屋から剪花を買ふのです、夫で如んな花か彼等の嗜好に投するかと云へば、色彩の好みは日本婦人と變りませんが、其形に至つては無暗に大きいのが好かれ、又日本での朝顏や野菊の如に淡白可憐など云ふのは全く顧みられず、何でも華麗で均齊式なものが好かれる、夫故菊なども可成り愛育されては居つても、日本の白菊や糸菊は駄目で、何所までも支那式のが歡迎されます、而して匂ひは必ず無くてはならない事になつて居る、

▲一番愛されて居るのは薔薇とカーネーション（殊に匂の深い麝香撫子）でありますが、是等の花は何に使ふかと云ふに、植ゑて樂しむと言ふ事は全く無く、多くは剪花にして宴會の卓や客室に盛花とし、神様に供へるのも日本の様に極り切つた少さな物でなく、其時時の花の大きなのを供へる、又宴會に行く時、散歩の時、其他諸種の祝祭の時には、必ず左りの胸の上に花を飾ります、夫れが婦人であると矢張り華麗な大きな物で、通例薔薇ならば可成り大きいのを三つ位挿し、人によつては直徑二三寸もありさうな牡丹を二つも並べて附けるのもあります、男子は極く淡白した小さいのを飾る、又婦人同士の訪問には、日本ならお菓子と云ふ所を、米國では美しい剪花とか花束とかを贈るのであります。

輕便な洗濯法

◎浴衣、麻布、ハンカチーフ其他、敷布、枕かけ、足袋等は一寸洗つた丈では容易に垢が落ちないから煮るに如くはない、併し普通の家庭では洗濯釜がないから、一寸不便であるが、これには亞鉛製の大形のものか、又は石油罐の空を、中から切つて其切口を内部に曲げ込んで置けば危險はない、これを臺所の隅で七輪にかけても直ぐに使用される、至極便利であるまづこの中へ石鹸と洗ひ曹達とを入れて沸騰せしめ、洗濯物を其中へ入れて煮る、次に釜から下して盥にうつし、少し冷えるのを待つてよく洗ふと垢や脂肪は浮いてゐるからさほど骨を折らずに清らかになる。これを水で三四回ゆすいで最後に青竹の粉を解いて盥の中へ薄青い水を造つて其中に一寸洗濯物を浸して後取あげて乾かすと白い物なら一層清潔になる、ハンカチーフは晒し粉、即ちカロキで洗へば容易に垢も除れ、眞白になる、足袋はハンカチフの洗ひ汁で洗つてもよろしい糊は生麩が普通である。

さて右青竹の粉の代りに藍を用ひてもよろしい。然し素人には青竹の粉の方が使ひよいやうである　藥店で一錢も買へば澤山ある、これを解くときは塊りや濃淡の出來ない樣注意せぬと洗濯物に青色のムラが出來て見苦しくなる、又洗濯石鹸と洗ひ曹達の分量は別に定まつては居ない、大抵　目分量でよい、まづ石鹸は湯に入れて攪拌ぜて泡の立つほどが適當である、普通の石鹸ならば小さく刻んで入れると容易に溶ける、洗ひソーダは石油罐の空ならば大匙一杯も入るれば澤山である。

◎メリヤス、セル、フランネル等は石鹸とソーダを溶かしたぬるま湯で強く揉まずに洗ふ、ぬるま湯の代りに水を用ゐる時は石鹸をつけて洗ふべし、熱い湯で洗ふと、色物ならば其色が褪せたり、縮んだりすることがある、白色の物は洗濯した後を濯いで亞硫酸ソーダで晒すと清潔になる、右のソーダは一瓶僅か九錢位にて藥店にあり、誠に廉價で輕便な品である、右亞硫酸ソーダ一合に水五升の割に合せて用ゆる、洗濯物をこの中に浸けて置けば眞白になる、取出して水で一寸濯いで陰にする。

◎洋服などの毛織物を水洗濯にする時は石鹸又はソーダ等を使用する爲め、品物に依つては地質を傷め、色が褪め、縫ひ目や格好を崩すのみならず寸法が縮まつて光澤が失せ糊氣を去つて仕舞つて、貴重の品を一回の洗濯で臺なしにする事がある、殊に皮類羽毛類、シホン、レースの類等は水洗濯では如何にもいけないのである、それはどうしても乾燥器械を要するのである、これは家庭では一寸出來ないから商賣屋に任せるがよい。

◎フロックコート又は脊廣は簞笥に蔵まつて置いても袷や袖口に皺を生ずる事がある、これを防ぐには袷は齒揚枝で揮發油つけて柔かに磨き袖口は同じく齒揚枝に石鹸をつけて磨するのである、かくすれば蟲の生ずる患ひなく長く保存する事が出來るのである。



才媛文壇 懸賞募集（十月十二日〆切）

▲美　　文（二十字詰十五行以內）

▲日　　記（二十字詰十五行以內）

▲書 簡 文（二十字詰十五行以內）

▲有益な實驗（十五行以內）

▲和　　歌（一人一首）

▲俳　　句（一人一句）

▲誌友俱樂部

△美文、日記、書簡文、有益な經驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、俱樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館內女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

△いろ〳〵の實驗（賞壹圓以下）

每月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ケ月分）	前金七十五錢
八册（半ケ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ケ年分）	前金二圓八十錢
定刊數	十二册

内 增刊四回 一、五、九、十一月價格同一

郵稅 一册 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る

●目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治四十三年九月十一日印刷納本　第拾卷第拾貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三千百三十八番・二千六百二十番・三千二百二十九番

實踐女學校々長
下田歌子女史著

家庭文庫

全部十二册

下田歌子女史學東西を究め一種超凡の新智識と新卓見とを以て現に子弟教育の道に從事せらる本書各編皆な精實を極む故に他の空論と異り上下を通じて一般社會の家庭上に適用するは勿論なり全部十二册皆是れ著者が多年の實驗上より出でたる者如何に在來の家庭書類と其趣を異にせるかを驗せられよと云爾……………

全部書目

- 第一編 女子書翰文
- 第二編 女子普通禮式
- 第三編 詠歌の栞
- 第四編 料理手引草
- 第五編 婦女家庭訓
- 第六編 母親の心得
- 第七編 家事要訣
- 第八編 女子手藝要訣
- 第九編 女子普通文典
- 第十編 女子作文の栞
- 第十一編 女子遊戲の栞
- 第十二編 家庭教育

毎編和裝上製美本
紙數各…三百餘頁
正價一册金參拾五錢
郵税一册金八錢宛

發兌元 東京本町 博文館

（後付の一）

家庭整理の指導

當代第一流の女子敎育家編著

家庭百科全書

全部五十册——每月一回發行

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

近時婦人敎育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生徒の爲にも如何に稗益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭敎師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人敎育の缺點を補はんと欲するなり。

- 第一編 **新家庭訓** 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 **四季料理** 宮中臣民御料理調進 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著
- 第三編 **裁縫指南** 女子高等師範學校敎授 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 **和洋菓子製法** 東京治庖會講師 龜井まき子女史著
- 第五編 **茶道と香道** 水原翠香女史著
- 第六編 **諸流生花指南** 琴松圓文雅君 松宇齋理常君 共著
- 第七編 **育兒の務** 醫學士 田村良鐵君 朝夷孤舟君 共著
- 第八編 **簡易治療法** 新潟縣高田高等女學校敎諭 藤井靜子女史著

- 第十三編 **敎育お伽噺** 少年世界記者 木村小舟君著
- 第十四編 **女德の養成** 前田長太君著
- 第十五編 **家屋と庭園** 內山正如君著
- 第十六編 **魚鳥家畜の飼養** 農業世界記者 鹿野化骨君著
- 第十七編 **女子作文法** 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
- 第十八編 **子女の敎養** 私立高等女學校長 棚橋絢子女史著
- 第十九編 **家庭の趣味** 文學士 大森兜山君著
- 第廿編 **家庭遊戲法** 高橋忠次郎君 松浦政泰君 共著

販賣用電話本局二六二〇

發兌元

東京日本橋

(女、後付の二)

婦女必讀の大全書

第九編 **禮式と作法** 女子高等師範學校教授 佐方鎭子女史著

第十編 **惣菜料理** 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著

第十一編 **編物指南** 女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十二編 **婦人の生理と衛生** 青山學院教授 牧野清子女史著

第廿一編 **書道手引** 歌道書道專攻大和會々長 井田秀生君著

第廿二編 **歌の手引** 大和田建樹君著

第廿三編 **刺繡術指南** 刺繡術專門 磯村大次郎君著

第廿四編 **摘み細工指南** 山田興松君著

第十五編 **新式化粧法** 藤波芙蓉君著

第十六編 **室内裝飾法** 近藤正一君著

【第一章】總論(室内裝飾の要旨●家屋の構造と室内裝飾の關係●裝飾の四季外十六項)【第二章】四季の座敷飾の一(春の室内裝法●初春の書院飾●初春の廣間飾外八項)【第三章】四季の座敷飾の二●夏の廣間飾(夏の室内裝飾●首夏の廣間飾の二外九項)【第四章】四季の座敷飾の三(秋の室内裝飾●初秋の書院飾●初秋の廣間飾外七項)【第五章】四季の座敷飾の四(冬の室内裝飾●初冬の書院飾●初冬の廣間飾外七項)【第六章】器具調度の配置とその飾り方(床の間の飾り方●床脇違ひ棚の裝飾●床脇地袋棚の裝飾外二十七項)第七章 各室特殊の裝飾法(日本式座敷飾●書院は如何に裝飾すべきか外三十一項)

第十七編 **衣服の調整** 石崎篁園君著

●緒言●衣服の目的及び効用●衣服の品別及び種類●衣服の沿革●衣服の原料●機織(織方の區別、機の種類、機の織方、織物四十八種、織物の産地)●染色(色合四十種、季節と色合、色の調和、綿糸の染方 織物の染方、染返色上艶出法、洋服色上法、模様紋所)●裁縫(衣服各部名稱、裁縫要具、運針法、積り方、裁ち方、縫ひ方、繼ぎ方 解き物及屑糸布取扱法、綿の入れ方)●洋小物裁縫(機械使用上の心得、附屬機械の種類及使用法)シヤツ、ヅボン下、ネクタイ、前掛、襷掛)●古代の衣服(闕腋の袍、半臂、下襲、和單大帷 表袴及大口、小直衣、衣及び出衣、奴袴、狩衣、半尻 水干、直垂、長絹、大口 素襖、大紋、唐衣、裳、袿 打衣、單、五汗衫、褰衣、衵、時服)●現代女裝(肌着 半襦袢、長襦袢、蹴出 半襟、下着、合着、上着、比翼、腰帶、下帶 帶止 帶揚、帶締、扱 浴衣、湯巻衣袴、小袿、細長、湯具、帷子、單衣 羽織 袴、袷、袖、布子、振袖、頭巾、前垂、足袋)●現代男子服裝(春の部、夏の部、秋及冬の部)●洋服(イブニングコート、フロックコート、モーニングコート、脊廣 外套)●流行 衣服の取合せ法(子供、衣服・親着、婦人向衣服、婦人羽織、帶、其の他●禮服(男子禮服同洋裝、女子禮服同洋裝、婚禮服、喪服●衣服と禮式●衣服と衛生●衣服の撰び方●衣服の着方附帶●衣服のたゝみ方●衣服整理法(着物入物、仕別、出納 整理)●衣服保存上(污點 濕氣、蟲蝕、破損、風通、蟲干、防蟲法 容器納、置場洋服保存法)●洗濯法 木綿物、毛織物、絹布 及麻布、一般の心得、簡易洗濯劑製法及火熨斗湯熨斗法)●西洋洗濯法●衣服汚拔法●結論

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

醫學博士井上通泰先生監修

全部完成

家庭衛生叢書

第一篇以下數版

全部十二冊洋裝菊判美本〇正價一冊貳拾錢郵稅六錢宛

第壹編

口繪　北里、長與、金杉、土肥の四博士（肖像）

▲傳染病の話…北里博士
▲胃の攝生法…長與博士
▲眼科衛生談（第一）…井上博士
▲血族結婚と聾啞との關係…金杉博士
▲淋疾と家庭…土肥博士
雜錄　患者を生じたる時の注意（第一）

第貳編

口繪　宮本學士、木下博士（肖像）

▲腸窒扶斯に就て…宮本學士
▲婦人の衛生一般…木下博士
▲婦人及小兒の眼の衛生…桐淵博士
▲眼科衛生談…井上博士
雜錄…七項

第參編

口繪　三輪、井上、緒方、富士川四博士（肖像）

▲室內空氣に就て…緒方博士
▲眼科衛生談…井上博士
▲小兒科一般…三輪博士
▲小兒の衛生に就て…弘田博士
▲遺尿症に就て…朝倉博士
雜錄…六項

第四編

口繪　博倉博士、井上博士（肖像）

▲腸胃の話…井上博士
▲[illegible]の攝生…岡田博士
▲乳兒の衛生に就て…緒方博士
▲狐憑とヒステリーとの關係…吳博士
▲鏡の話…井上博士
雜錄…六項

第五編

口繪　三輪博士、岡村博士（肖像）

▲創傷の話…三輪博士
▲神經の攝生に就て…吳博士
▲ヂフテリアの話…宮本學士
▲皮膚の衛生に就て…岡村博士
雜錄　肺結核豫防法…二件

第六編

口繪　大澤博士、三島博士（肖像）

▲ペストの話…宮本學士
▲身心の養生…大澤博士
▲家庭に於て注意すべき二三の學校衛生…三島博士
▲產時の創傷傳染…木下博士
雜錄　肺結核雜話…十五件

第七編

口繪　遠山博士、筒井博士（肖像）

▲黴毒に關する家庭の注意…筒井學士
▲家庭と黴菌…遠山博士
▲姙娠中の攝生…緒方博士
▲便秘の話…井上博士
雜錄　花柳病の雜話…十八件

第八編

口繪　木村博士、緒方博士（肖像）

▲婦人姙孕力の話…伊庭博士
▲肝臟の話…木村博士
▲分娩時の攝生…緒方博士
▲色盲の話…井上博士
▲小兒の身體上の監視井
に[illegible]の話…瀬川博士
雜錄　人工滋養品の話

第九編

口繪　瀬川博士、伊庭博士（肖像）

▲肺癆の話…井上博士
▲婦人姙孕力の話（第二）…伊庭學士
▲小兒の蟲及癇の話…瀬川博士
▲產後の攝生…緒方博士
雜錄…五項

第十編

口繪　林博士（肖像）

▲飲酒血族の退化…林博士
▲不姙症の話…伊庭博士
▲生殖の話…大澤博士
▲消毒法の大意…遠山博士
雜錄…三項

第十一編

口繪　吳博士、楠田謙藏先生（肖像）

▲癲狂村の話（上）…吳博士
▲最適當なる日本婦人の結婚年齡…楠田先生
▲消毒法…遠山博士
▲葡萄酒の話…林博士
雜錄…八項

第十二編

口繪　陸軍々醫監賀古醫學士（肖像）

▲聾啞の話…賀古學士
▲癲狂院村の話（下）…吳博士
▲慢性銅中毒の話…林學士
▲口內衛生に就て二三の注意…石原學士
雜錄　食鹽の話
終刊の辭

東京日本橋本町三丁目　**博文館**　振替口座東京二四〇番

現代の婦人は

斯の如き書を讀まざるべからず



鳩山春子女史序文　前田雪子女史著

巴里婦人の交際振　奥樣の顧問

全一冊三六判　紙數四百四頁　正價四十八錢　郵稅六錢

花園に下りて花の一枝を折らんとせば、先づ必ず其が中の精粋を取るならん、本書は歐米交際界に花の王と稱せらるゝ巴里婦人の輕妙なる應對振、訪問振、談話振、舞踏振を始めとし、宴會法、婚姻法、外出法等あらゆる禮法を網羅したれば、苟も文明の禮法を學ばんとする奥樣方、特に未來の外交官夫人となるゝ淑女令孃方は一本を購求し給はゞ、二十世紀の社交界に立ちて華々敷く活動することを得べし。

田村江東君著

活動せる　實業界の婦人

全一冊洋裝菊判紙數二百四十頁　名家實業家婦人寫眞版挿入　正價金三十八錢　郵稅八錢

(内容)

△勤勉力行の化身…三枝かれ子△文明の美化　菅川英子△發明家の妻・仁科終子△内顧の憂なき婦人　山崎ため子△獨立自尊の標本篠原よれ子△隱れたる偉勳…川合こう子△黒りボン…伊藤なか子△時計の針の挽みなき妻…服部まん子…△夫婦共勵の醫師　篠田せい子△白牡丹の姉妹…松田八十子大西琴子…△寧ろ襯衣を縫はん…秦利舞子△準備教育を受けし嫁…佐藤秋子△才德裝備の良妻　龜井まき子△商業教育の産物…富成梓子△福德圓滿の内儀　横田鐵子△商賣繁昌の秘訣…内田とめ子△松店の女書肆…片桐なか子△實踐躬行の才女…山崎きみ子△白美容…丸茂宗子△此母にして此嫁あり…大橋きよ子△妙齡の女書記…秋山德子△中洲の西大后…佐々木頼子△光榮ある襯衣の元祖　茂野蝶子△實業家の理想的婦人…雨宮信子、同てる子

福田琴月君著

當世奥樣氣質

再版

洋裝四六判紙數二百頁　正價卅錢　郵稅四錢

(目次)

◎奥樣十種　◎人の噂　◎結婚前の某孃に答ふ　◎大みそか　◎土産日記　◎奥樣となる事は易く　◎奥樣たる事は難し

◎あはれな誇り　◎會社員の奥樣　◎母よ　◎霜夜　◎奥樣の失望　▲餘興　◎滑稽殿の蒲燒

東京本町

博文館

振替口座番號　東京二四〇

医學士 石原喜久太郎君編

新編家庭衛生

本書前篇「緒論の部」は衛生に關する汎論にして、後篇「各論の部」は○住居の衛生○衣服と飲食物○季候と衛生○旅行と轉地○子供○姙娠と產褥○病氣の七章よりなり衛生上の諸題目を凡て是等各項内に網羅して最大漏さず殊に行文は平易通俗論旨は實地應用を主とし叙事明晰説明懇篤を極む之を家庭に備ふれば一家衛生の眞指針たり加ふるに又醫師醫學生の眞友諸學校衛生教科の參考書たるに適すべし

菊判洋裝總クロース
紙數五百五十頁
正價壹圓廿錢送料八錢

米國醫學博士 アイ、ビー、デーヴィス氏原著
海軍大軍醫 隱岐敬次郎君譯述

女子衛生學 附 結婚論

女子衛生學は米國の大醫アイ、ビー、デーヴィス氏の著にして譯者米國漫遊の砌特に著者の委囑に依て譯述を約せしの珍書なり其説く所世の年少婦人特に妙齡の女學生の爲に懇切叮嚀を極め、片言隻句皆な衛生の原則、人道の眞理ならざるなし、且つ米日素と國俗風習を異にし女尊男卑の淵源たる米人の所說なるにも拘はらず或點までは主張の頗る孔孟主義（實に女大學）に近く又た文明の粹華を訓ふるに拘はらず反つて東洋の教義に則とれるが如きは最も東西折衷主義を能く發揮して毫も餘蘊なしと謂ふべし尚附錄とする結婚論は文學家として有名なる英國のハーディー氏が世の青年男女の爲めに書かれたる趣味豐多の珍書にして着眼の奇警なる將た觀察の妥當なる讀者をして不覺通讀の妙を得せしむ。

洋裝袖珍總クロース
頗美本紙數約三百頁
正價三十錢郵稅六錢

千葉勝景君 鹿島櫻巷君共編

家庭衛生訓

健兒は健全なる家庭より造り出さるゝなり、我日本が有史以來未曾有の大捷を博したるも、その健全なる家庭に出でたる健兒が力に歸せざるべからず而して健兒の養成は戰捷國の急務なり、本書は著者が多年家庭に於て經驗したる衛生上の注意を記述したるものにして節々句々悉く健全なる家庭を造るべき要素を指示し其文頗る平明にして一讀誰人にも能く了解し得べき家庭必備の寶鑑なり

洋裝菊判半截
紙數四百〇八頁
正價卅五錢郵稅六錢

東京 博文館 本町

文學博士 坪內逍遙君序　　文學博士 上田萬年君序

文學士 佐々醒雪君著

俗曲評釋

近世三百年の歌謠、俗曲中の名篇は悉くこゝに網羅せられたり、著者は現代唯一の俗曲研究家にして且つ頗る近世の文藝に精し、況や各篇近代の風俗に精通せる諸方が百方考證を重ねたる艶麗なる挿畫あり乞ふ、世間の片々たる評釋書とは同一視せられざらんことを

第一編 江戸長唄 全一冊

四六判洋裝總布 美本挿畫十數葉 定價五拾五錢 郵稅金六錢

杵屋が一流は俗曲中の上品なるものとして今や中流以上の家庭にも入れり世人は道成寺といひ草摺引といひ勧進帳といふ名をのみ熟知すべししかもその構造、變遷や意義や總て茫乎として捕捉し得ざるにあらずやこれ等が「專ら專門家や通人側の專有に歸して新代とまるきり沒交渉となり行かんとすることは我國樂の前途の爲恐くは容易ならぬ損失らし」とは坪內博士が本書の爲めの一節なり新代の文藝に關與するもの亦一讀せざるべからず

第二編 箏唄 全一冊

四六判洋裝總布 美本挿畫十數葉 定價五拾五錢 郵稅金六錢 【新刊】

琴曲の註釋は古來屢々上梓せられたり然もよくその眞相の說明を盡して餘蘊なきものは獨り本書なるべし殊に平易通俗の文を以て組唄の全曲及び生田流山田流の名曲を丁寧親切に註解したれば婦女童幼にも難解の患なかるべく苟も箏唄を學ぶ者琴歌を聞くものは一本を備へざるべからず且つや箏の組歌は我邦の歌謠史中最も特色ある者にして中古の今樣より生れ出でゝ明治の新體詩の祖たりとすれば本書は亦蓋し新詩人の一顧に値するに足るべし

第三編 河東 全一冊

四六判洋裝總布 美本挿畫十數葉 定價五拾五錢 郵稅金六錢 【近刊】

江戸文藝を知る者は團十郎が助六の名を記憶せん、助六の名を知るものは河東節を忘るべからざるなり團十郎と助六と河東節と、これ江戸隨一の名物にして而して河東節は實に近世歌謠の粹として蜀山人の激賞せし所今著者は江戸時代に對する蘊蓄を傾倒して俗曲の至粹を評隲する者世間の讀書子豈等閑に附して可ならんや

【續刊】……▼第四編 上方唄　▼第五編 常磐津　▼第六編 端唄

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

女學世界
（毎月一回二十六日印刷納本）
（明治四十三年九月十一日印刷納本）第拾巻（増刊 迷信に囚はれたる婦人）第拾貳號（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）



定價金貳拾錢●郵稅貳錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑱
明治43年9月（第10巻第11号、第10巻第12号）

2010年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3856-2 C3321